九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—37—

甘木市所在　柿原Ⅰ縄文遺跡

1995

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—37—

甘木市所在　柿原Ⅰ縄文遺跡

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告は，甘木市所在の柿原古墳群Ⅰ地区における縄文・弥生時代の分についてのものであります。その内容は，縄文早期の貴重な土器・石器類と，縄文晩期の竪穴住居跡や豊富な出土遺物等であります。

本報告書を文化財愛護思想の普及，研究・教育等の資料としてご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり，地元の方々をはじめ，数々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

平成７年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安常喜

例　言

1　本書は，昭和58年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて，九州横断自動車道建設に伴う採土場となる丘陵部で発掘調査を実施した報告である。

2　本書に収録した遺跡は，柿原Ⅰ（かきばるアイ）縄文遺跡（福岡県甘木市大字柿原所在）である。柿原古墳群Ⅰ地区の古墳群・石棺群については，既に本シリーズ第6集（1986）にて報告済みであるが，今回は，同古墳群の下層から検出された縄文・弥生時代の遺構・遺物について報告する。

3　本書掲載の現場における遺構実測図は，高田一弘・平嶋文博・日高正幸・中間研志・新原正典が作成した。出土遺物の実測は，若松三枝子，岡由美子，田中典子，堀江圭子，中間が行った。更に，遺構・遺物の製図等には豊福弥生・原カヨ子があたった。

4　出土遺物の整理は，九州歴史資料館岩瀬正信氏の指導のもとに，県文化課甘木事務所及び九州歴史資料館にて行った。

5　遺構の写真撮影は各調査担当者が行い，出土遺物は九州歴史資料館にて，石丸洋氏の指導の下に北岡信一が撮影した。

6　本書で使用した方位は，すべて座標北である。

7　本書文章中で使用した略号を以下に示す。

（例）Ｄ５－Ｐ４──→縄文グリッドＤ５の中の第４号ピット

Ｅ３-56　──→縄文グリッドＥ３の中から出土したNo.56の遺物

8　本書の執筆・編集は，中間が担当した。

本 文 目 次

頁

I　調査の経過 …… 1
II　位置と環境 …… 4
III　縄文時代の遺構と遺物 …… 7
A　調査の概要 …… 7
B　集石遺構 …… 16
C　黄色土埋土土壙 …… 18
D　竪穴住居跡 …… 22
E　晩期土壙 …… 27
F　早期の土器 …… 31
G　晩期の土器 …… 48
H　石器 …… 84
IV　弥生時代の遺構と遺物 …… 109
A　土壙 …… 109
B　土器 …… 111
C　石器 …… 114
V　各　論 …… 115
A　縄文早期土器群について …… 115
B　縄文晩期土器群について …… 119

挿 図 目 次

頁

Fig. 1　九州横断自動車道路線図（約1/400,000）……2
Fig. 2　柿原遺跡の位置……5
Fig. 3　柿原古墳群地形図（1/4,000）……8
Fig. 4　柿原Ⅰ地区地形測量図（1/400）……9
Fig. 5　柿原Ⅰ地区地形測量図（古墳群調査後，縄文調査前）（1/400）……10
Fig. 6　柿原Ⅰ地区基本層序模式図……11
Fig. 7　縄文包含層各グリッド北壁土層実測図（1/200）……12
Fig. 8　縄文包含層各グリッド東壁土層実測図（1/200）……13
Fig. 9　縄文時代黄色土遺構・縄文早期土器出土分布図（1/300）……14
Fig. 10　ＳＸ１集石遺構実測図（1/60）……15
Fig. 11　第１号集石炉（ＳＸ１内）実測図（1/30）……16
Fig. 12　ＳＸ１集石遺構出土押型文土器実測図（1/3）……17
Fig. 13　ＳＸ１集石遺構出土晩期土器実測図（1/3）……18
Fig. 14　黄色土埋土土壙群実測図（その１）（1/40）……19
Fig. 15　黄色土埋土土壙群実測図（その２）（1/40）……20
Fig. 16　黄色土埋土土壙群実測図（その３）（1/40）……21
Fig. 17　黄色土埋土土壙群出土土器実測図（1/3）……21
Fig. 18　縄文晩期遺構（黒色土・暗褐色土埋土）全体図（1/300）……22
Fig. 19　第１・２号縄文住居跡実測図（1/60）……23
Fig. 20　第１号住居跡出土晩期土器実測図（1/3）……24
Fig. 21　第３号縄文住居跡実測図（1/60）……25
Fig. 22　第４号縄文住居跡実測図（1/60）……26
Fig. 23　縄文晩期土壙実測図（1/40）……27
Fig. 24　D5-P4土壙出土土器実測図（1/3）……28
Fig. 25　E3-P2土壙出土土器実測図（1/3）……29
Fig. 26　F4-P1 土壙出土土器実測図（1/3）……30
Fig. 27　第８号土壙出土土器実測図（1/3）……31
Fig. 28　刺突文・こぶ文・凸帯文土器実測図（1/3）……32
Fig. 29　厚手無文土器実測図（その１）（1/3）……34
Fig. 30　厚手無文土器実測図（その２）（1/3）……36

Fig. 31　厚手無文土器実測図（その３）(1/3) ……37
Fig. 32　条痕文土器・外面凹線文土器実測図 (1/3) ……38
Fig. 33　撚糸文(1•2)，撚糸文＋押型文(3)，格子目押型文(4•5)土器実測図 (1/3) ……40
Fig. 34　押型文土器１類実測図 (1/3) ……41
Fig. 35　押型文土器２類・３類実測図 (1/3) ……42
Fig. 36　押型文土器４類実測図（その１）(1/3) ……44
Fig. 37　押型文土器４類実測図（その２）(1/3) ……45
Fig. 38　押型文土器５類・６類実測図 (1/3) ……46
Fig. 39　早期尖底実測図 (1/3) ……48
Fig. 40　精製浅鉢実測図（その１）(1/3) ……49
Fig. 41　精製浅鉢実測図（その２）(1/3) ……50
Fig. 42　精製浅鉢実測図（その３）(1/3) ……52
Fig. 43　精製浅鉢実測図（その４）(1/3) ……54
Fig. 44　精製浅鉢実測図（その５）(1/3) ……56
Fig. 45　精製浅鉢実測図（その６）(1/3) ……57
Fig. 46　高杯・浅鉢実測図 (1/3) ……59
Fig. 47　マリ・精製鉢実測図 (1/3) ……60
Fig. 48　精製深鉢実測図（その１）(1/3) ……61
Fig. 49　精製深鉢実測図（その２）(1/3) ……62
Fig. 50　精製深鉢実測図（その３）(1/3) ……63
Fig. 51　刻目凸帯文土器実測図（その１）(1/3) ……65
Fig. 52　刻目凸帯文土器実測図（その２）(1/3) ……66
Fig. 53　刻目凸帯文土器実測図（その３）(1/3) ……68
Fig. 54　晩期壺・組織痕土器実測図 (1/3) ……69
Fig. 55　粗製深鉢実測図（その１）(1/3) ……70
Fig. 56　粗製深鉢実測図（その２）(1/3) ……71
Fig. 57　粗製深鉢実測図（その３）(1/3) ……72
Fig. 58　粗製深鉢実測図（その４）(1/3) ……74
Fig. 59　粗製深鉢実測図（その５）(1/3) ……75
Fig. 60　粗製深鉢実測図（その６）(1/3) ……76
Fig. 61　粗製深鉢実測図（その７）(1/3) ……77
Fig. 62　粗製深鉢実測図（その８）(1/3) ……78
Fig. 63　粗製深鉢実測図（その９）(1/3) ……80

Fig. 64　粗製深鉢実測図（その10）（1/3）……81
Fig. 65　晩期土器底部実測図（その１）（1/3）……82
Fig. 66　晩期土器底部実測図（その２）（1/3）……83
Fig. 67　縄文包含層石器類出土分布図（1/300）……85
Fig. 68　尖頭器状石器実測図（実大）……86
Fig. 69　打製石鏃実測図（その１）（実大）……88
Fig. 70　打製石鏃実測図（その２）（実大）……90
Fig. 71　打製石鏃実測図（その３）（実大）……91
Fig. 72　打製石鏃実測図（その４）（実大）……92
Fig. 73　打製石鏃実測図（その５）（実大）……93
Fig. 74　石錐実測図（実大）……95
Fig. 75　打製石器実測図（その１）（1/2）……96
Fig. 76　打製石器実測図（その２）（1/2）……98
Fig. 77　打製石器実測図（その３）（2/3）……99
Fig. 78　打製石器実測図（その４）（2/3）……100
Fig. 79　打製石器実測図（その５）（2/3）……102
Fig. 80　打製石器実測図（その６）（2/3）……103
Fig. 81　打製石器実測図（その７）（2/3）……104
Fig. 82　磨製・打製石斧実測図（1/2）……106
Fig. 83　石錘・凹石・磨石実測図（1/4）……107
Fig. 84　磨石・球礫・砥石・石皿実測図（1/4）……108
Fig. 85　弥生時代土壙実測図（1/40）……109
Fig. 86　弥生土器実測図（その１）（1/3）……110
Fig. 87　弥生土器実測図（その２）（1/3）……112
Fig. 88　弥生土器実測図（その３）（1/3）……113
Fig. 89　弥生時代石斧実測図（1/3）……114
Fig. 90　縄文晩期土器分類（その１）（1/6）……120
Fig. 91　縄文晩期土器分類（その２）（1/6）……121
Fig. 92　縄文晩期土器分類（その３）（1/6）……122

Ⅰ　調査の経過

九州横断自動車道建設に伴い，土採場となる福岡県甘木市大字柿原の柿原古墳群の発掘調査は，昭和55年4月～昭和60年11月の長きに及んだ。ここで報告するⅠ（アイ）地区縄文遺跡は，その間の昭和58年度に調査を実施した分である。

柿原古墳群の調査については，既に本シリーズの第4・6・12・19集でその経過を詳述しているのでここでは省略する。

Ⅰ地区については，昭和55年度に新池に接する谷間部の数基の円墳についての地形測量を実施し，昭和57年度に本格的な全面発掘調査を行った。昭和58年度も引き続き谷部の円墳や竪穴式石室群の調査を行い，7月末までにほぼ終了した。その間，谷間部の調査中，墳丘盛土中や周溝内・石室内埋土中から多量の縄文時代早期・晩期の土器，黒曜石・サヌカイト製石器等が出土した。よって，これらの古墳下に当該期の遺構の存在が予想されたため，昭和58年8月末から2カ月間，グリッド方式（4m方眼）で調査を行った。

その結果，縄文草創期の若干の土器，早期の押型文を中心とする多くの土器，晩期の竪穴住居跡4軒，土壙群などの集落跡，土器群などが多量に発見され，多くの成果を上げることができた。また，91点の打製石鏃を始めとする多種の石器類も目を見張るものがある。グリッド設定範囲の調査面積は約1,000㎡であるが，実際には黒色土と黄色土の2層以上に分けて掘り下げていったので，実質的面積はおよそその倍に及ぶであろう。

なお，発掘調査にあたり，柿原地権者協議会の山下利雄委員長には，作業員の方々の斡旋や，地元との調整など，調査に際しての種々の御協力をいただいた。また，終始作業員として参加された柿原・相窪・堤地区の皆様の援助に対し，厚く御礼申し上げます。

昭和58年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	今村　浩三
総務部長	落合　一彦
管理課長	梅田　道人

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	乗松　紀三
副所長	西田　功
庶務課長	松下　幸男

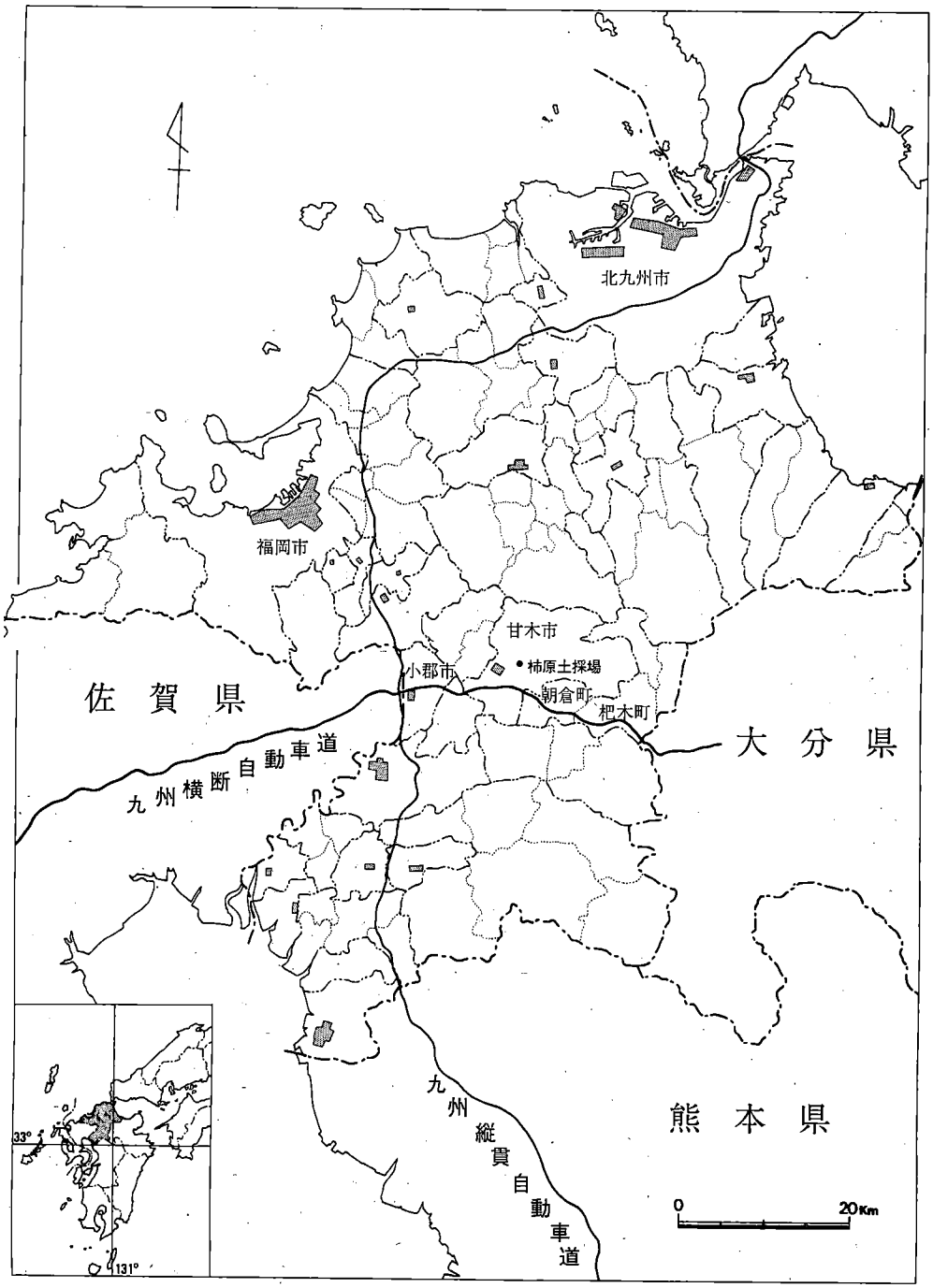


Fig. 1　九州横断自動車道路線図（約1/400,000）

用地課長	岩下　剛
工務課長	山口　宗雄
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄

福岡県教育委員会

総　括

教 育 長	友野　隆
教育次長	阿部　徹
管理部長	伊藤　博之
文化課長	藤井　功
〃　課長補佐	中村　一世

庶　務

文化課庶務係長	松尾　満
〃　主任主事	長谷川伸弘

調　査

文化課調査第二係長	栗原　和彦
主任技師	新原　正典
〃	中間　研志
調査補助員	高田　一弘
〃	日高　正幸
〃	平嶋　文博

なお，本報告書作成に係る，平成６年度の関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

総　括

教 育 長	光安　常喜
教育次長	松枝　功
理　事	田中　正行
指導第二部長	丸林　茂夫
文化課長	松尾　正俊
〃　参事	柳田　康雄
〃　課長補佐	清水　圭輔
〃　保護室長補佐	井上　裕弘

〃	調査班総括	橋口　達也
〃	調査班参事補佐	馬田　弘稔
〃	〃	池辺　元明

庶　務

文化課管理係長	杉光　　誠
〃 主任主事	高田　裕康

整　理

福岡教育事務所参事補佐	中間　研志（執筆担当）
整理指導員	岩瀬　正信（遺物整理担当）
〃	平田　春美（遺物実測担当）
〃	豊福　弥生（製図担当）
〃	北岡　伸一（写真担当）

II　位置と環境

柿原（かきばるアイ）Ⅰ縄文遺跡は，甘木市大字柿原字若山1304-2番地に位置する。

甘木市は，福岡県のほぼ中央に位置し，筑紫太郎の異名を持つ筑後川の北岸にあたる。現甘木市街地から東へ3km弱の丘陵部先端地帯に当遺跡は存在する。

今回調査を行ったⅠ遺跡は，秋月城下と現甘木市街とをへだてる大平山（標高315.1m）山塊の南麓に派生する小丘陵の谷間に位置する。周辺のすべての尾根が古墳群に占められており，Ⅰ地区では谷間にまで竪穴式石室群から複室の横穴式石室を有する大きめの円墳までが密集して営まれていた。この下層に，ここで報告する縄文遺跡が検出されたわけである。

当遺跡周辺の地質は，黒色片岩（泥質・千枚岩質・石墨質・雲母片岩等を一括した呼称）を基本とし，部分的に，地元で「柿原石」と親しまれてきた硬質の緑色片岩が採取される。よって，縄文遺跡の位置する谷間は，自ずから黒色片岩の風化土壌の二次堆積層となっており，下層へ掘り進むと，黒色片岩破砕小片そのものの堆積層となる。今回の調査時に最下層の無遺物層で所謂地山とした暗紫砂礫層（第4層）は，この片岩破砕小片のみで形成された層である。

九州横断自動車道路線内の調査で，甘木・朝倉地方の縄文時代の様相がかなり明らかになりつつある。特に，甘木市東部から朝倉町・杷木町に至るまでの調査地点では，必ずといってよい程，縄文土器が発見されており，中には大遺跡といってよい程の多量の遺構・遺物が得られ

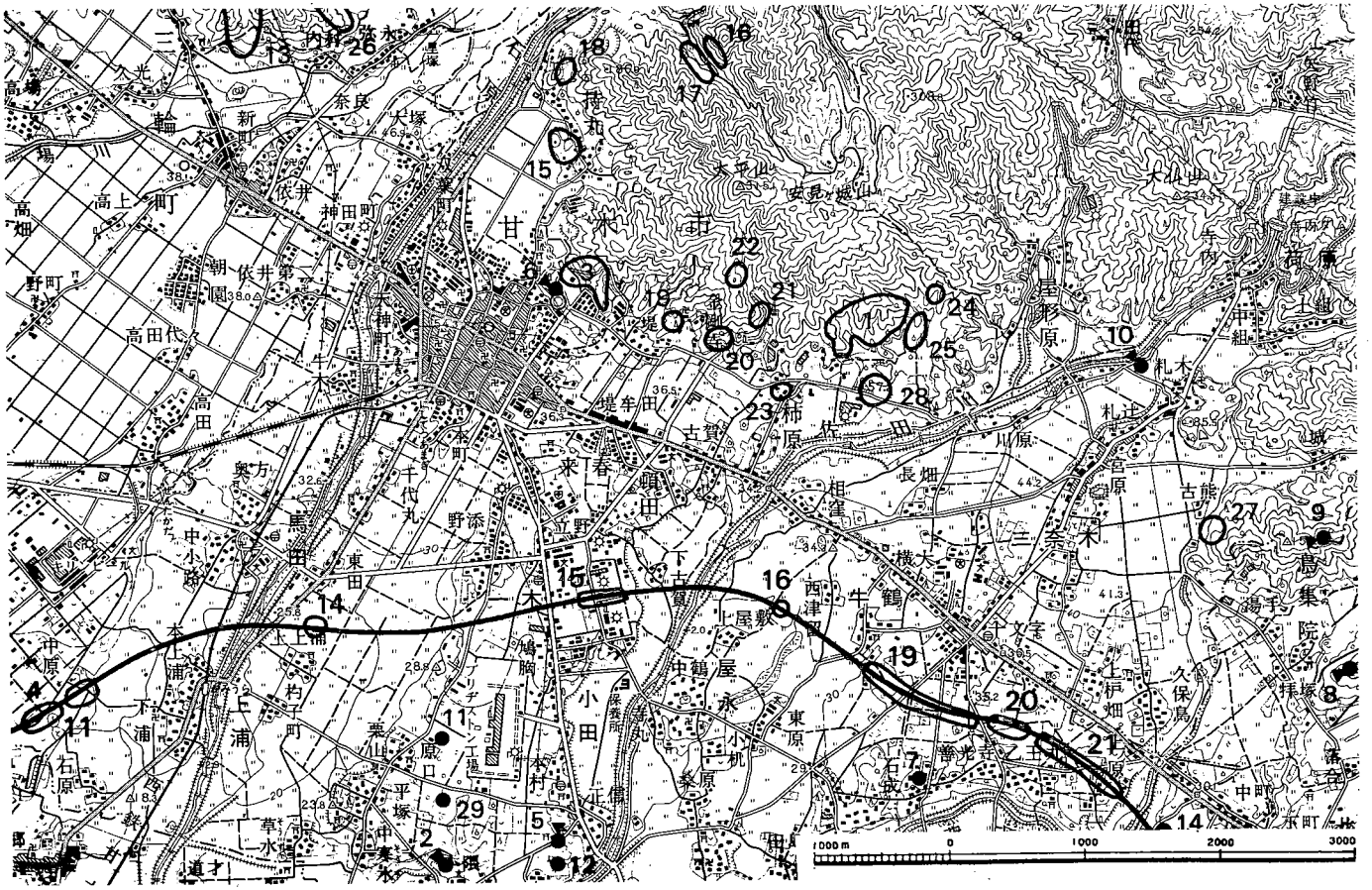


Fig. 2　柿原遺跡の位置

（黒線は横断道路線であり，路線上番号は遺跡地点番号である。）

1．**柿原古墳群**
2．神蔵古墳
3．池の上・古寺墳墓群
4．立野遺跡
5．小田茶臼塚古墳
6．鬼の枕古墳
7．石成古墳
8．宮地獄古墳
9．鳥集院古墳
10．ヤツエ古墳
11．平塚大観寺遺跡
12．小田小塚古墳
13．仙道古墳群
14．狐塚古墳
15．持丸古墳群
16．下渕宮の前古墳群
17．下渕名子古墳群
18．持丸中小路古墳群
19．大岩西部古墳群
20．大岩南部古墳群
21．大岩東部古墳群
22．大岩迫谷古墳群
23．柿原原古墳群
24．板屋城ノ下古墳群
25．柿原大谷古墳群
26．乃木松古墳群
27．古熊古墳群
28．野田東部古墳群
29．平塚小田道遺跡

ている遺跡もいくつかみられる。本シリーズ報告書が完結する際に，甘木・朝倉地方という視野で検討が可能となろう。

ここでは，甘木市を中心として，既知の縄文時代遺跡を概観してみたい。本遺跡近辺では，南方600mの柿原野田遺跡(註1)でジュース工場建設の際に，縄文前期轟B式・曽畑式土器を中心にまとまった量が出土しており，サヌカイト製スクレイパーが曽畑式土器に伴っている。

東方900mの板屋田中原C遺跡では縄文早期押型文土器と有舌尖頭器・尖頭器，縄文後期土器が採集されており，北東1.6kmの城原遺跡では，縄文晩期の土器と石器が発見されている。また，東南東2.5kmの大字三奈木の人埋塚遺跡では縄文早期の押型文土器と石器の出土が知られている。更に，東南3kmの古熊山ノ鼻遺跡では，縄文前期の土器が発見されている。

目を南方の平野部方面へ転ずると，西南西へ6kmの馬田中原(ひばりケ丘)遺跡(註2)で縄文早期押型文土器と無文土器が出土している。また，南西へ6.2kmの立野遺跡(註3)でも押型文土器が出土している。さらに，南南西5kmに位置する神蔵前方後円墳調査時(註4)に，早期後半～末段階の押型文土器と前期塞ノ神B式土器が出土している。また，西北西4.1kmの馬田上川原遺跡(註5)では，早期末の手向山I式とII式，横型石匙等が出土している。

さらに，甘木市南方を東西に横断する形となった横断道の調査では，南西2.5kmの西原遺跡A地点(註6)で夜臼式土器が採集されている。また，南方2.6kmの塔ノ上遺跡(註7)では，早水台段階の押型文土器と前期曽畑式土器片が出土している。

注目すべきは，柿原I遺跡から南へ2.1kmの位置にある高原遺跡(註8)で，縄文晩期の前半から刻目凸帯文土器に至るまで多量出土している。当柿原I縄文遺跡の晩期の土器群と密接に関連するものであり，重要な比較材料となっている。ただ，両者は遺跡の立地が異っており，この違いをどう解決するかは，今後の問題となろう。

以上の甘木市内の縄文遺跡は，大別して立地から2種類がみられる。つまり大平山山麓に貼り付くように分布する遺跡群と，筑後川による低位段丘上の平野部の遺跡群とである。後者は更に，段丘縁辺部直上の遺跡にわりとまとまったものが多く，段丘中央付近は大規模調査の場合でも数点出土するのみの散発的な遺跡で，まとまった集落等を形成しているような様子はみられない。しかし，押型文土器の採集が広く低位段丘上各地で見られる如く，往時の生活活動の広さは想像を超えるものがあったのではないかと思われる。この押型文土器の現象は，筑後川以北の小郡市域から杷木町に至るまで広く認められる。

前期・中期については，横断道の調査が終了している現時点でも，当地方の生活・活動の状況は詳らかにできないが，後・晩期，特に晩期については，朝倉山塊山麓一帯に大遺跡を見ることができる。晩期も後半段階(黒川式以降)になって急激な遺跡増がみられ，それも大規模な生活跡が判るものが増えている。今後，朝倉町・杷木町の発掘調査報告書を刊行する中で検討を進めてゆきたい。

註1）「柿原野田遺跡」柿原野田遺跡調査団　1976
2）「埋もれていた朝倉文化」福岡県立朝倉高等学校史学部　1969
3）「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第2集」福岡県教育委員会　1983
4）「神蔵古墳」甘木市教育委員会　1978
5）「上川原遺跡」甘木市教育委員会　1982
6）「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第1集」福岡県教育委員会　1982
7）「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第9集」福岡県教育委員会　1987
8）「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第31集」福岡県教育委員会　1994

III　縄文時代の遺構と遺物

A　調査の概要

柿原古墳群Ⅰ地区の調査中に，墳丘トレンチ内(盛土中)，周溝内，石室埋土中などから，無視できない程の縄文時代の土器・石器が出土し，古墳群の下の縄文遺跡の本調査の必要性が判断された。

グリッド設定　縄文土器等の出土する範囲で，当時工事道路等を除いた最大限の掘れる範囲に4m方眼のグリッドを設定した。東西方向に東端からA～J，南北方向に北端から1～11の番号を振ってグリッド名とした。出土遺物は，各グリッド毎に1から番号を付けて1/20実測図に位置と高さを記録した。ただし，各グリッドで検出した小ピット・土壙・住居跡等から出土した遺物については，各遺構番号名で一括して取り上げた。

地形現況　調査範囲は，北東端つまりB1グリッド付近が最も高く，そこから南と西へ傾斜している。Fig. 7・8の土層図に見る如く，B1グリッドと最西端のJ6・J7グリッドとでは4～5mほどの高低差がみられ，南北方向でも同程度の差がみられる。ただし、北半部分は広く平坦地をなしており，集落形成には何ら問題は無い。調査区西端のJラインの西側は急な崖となって，深さ2～3mの谷川筋に面している。この谷川の位置は往時から変化は無かったようで，調査時点でも，そうめん流しができた程の清冽な流れであった。東西両側は尾根からの急な斜面で，背後には木の実・果実等の食料採集・狩猟等にうってつけのうっそうとした丘陵の森をひかえ，南側の谷開口部からは筑後平野を見渡せる，絶好の地であったことがわかる。

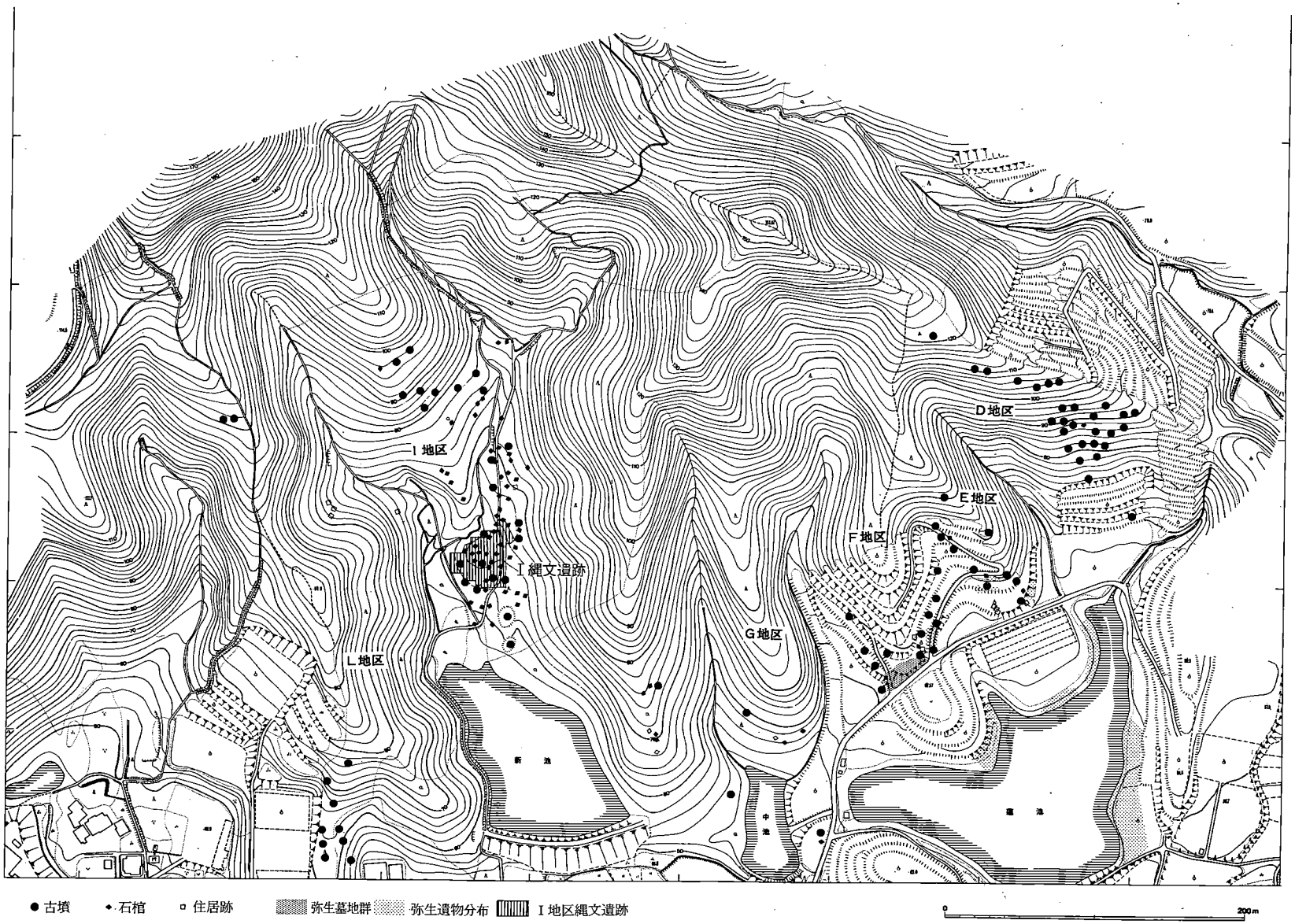


Fig. 3　柿原古墳群地形図 (1/4,000)

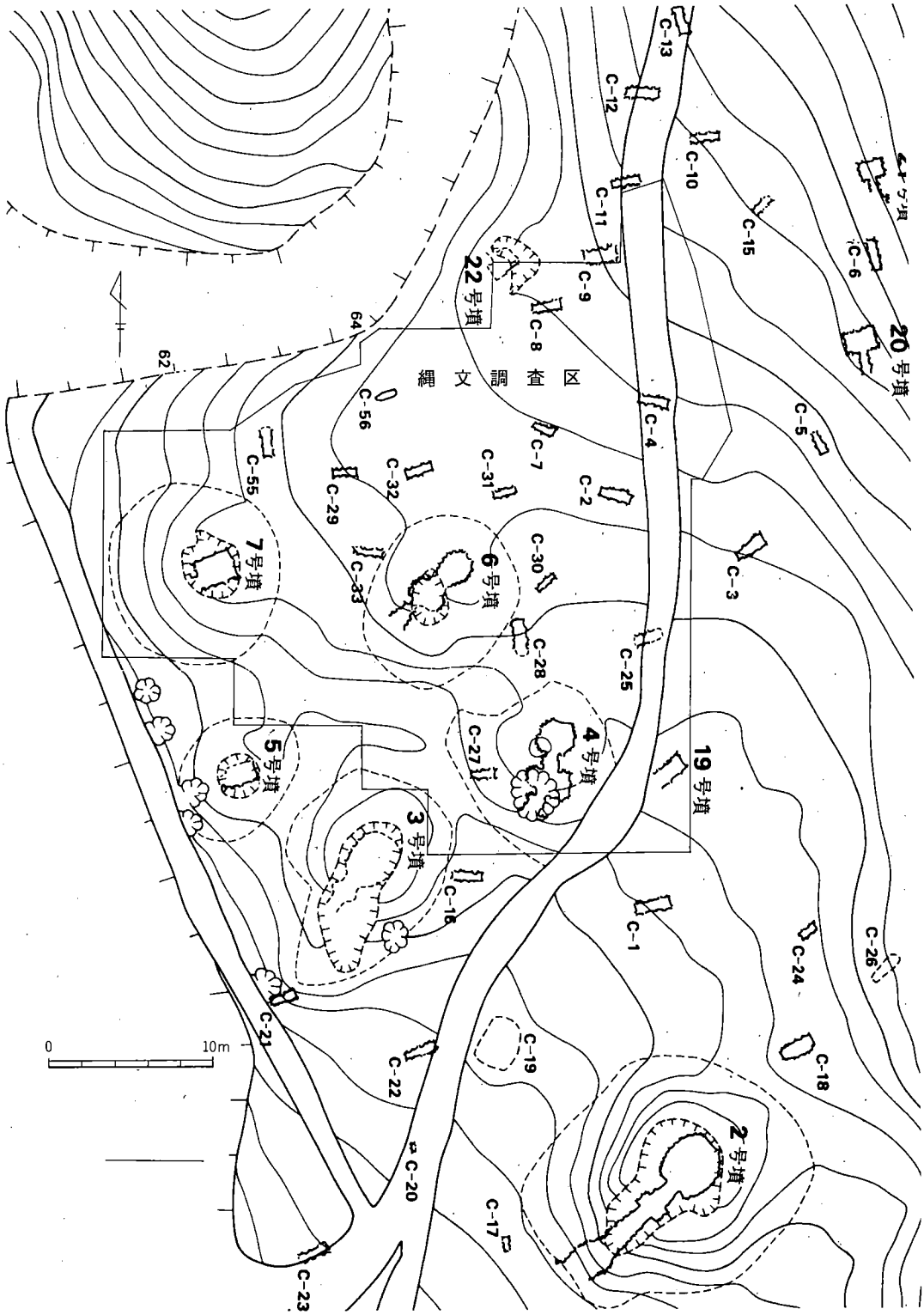


Fig. 4　柿原Ⅰ地区地形測量図（1/400）

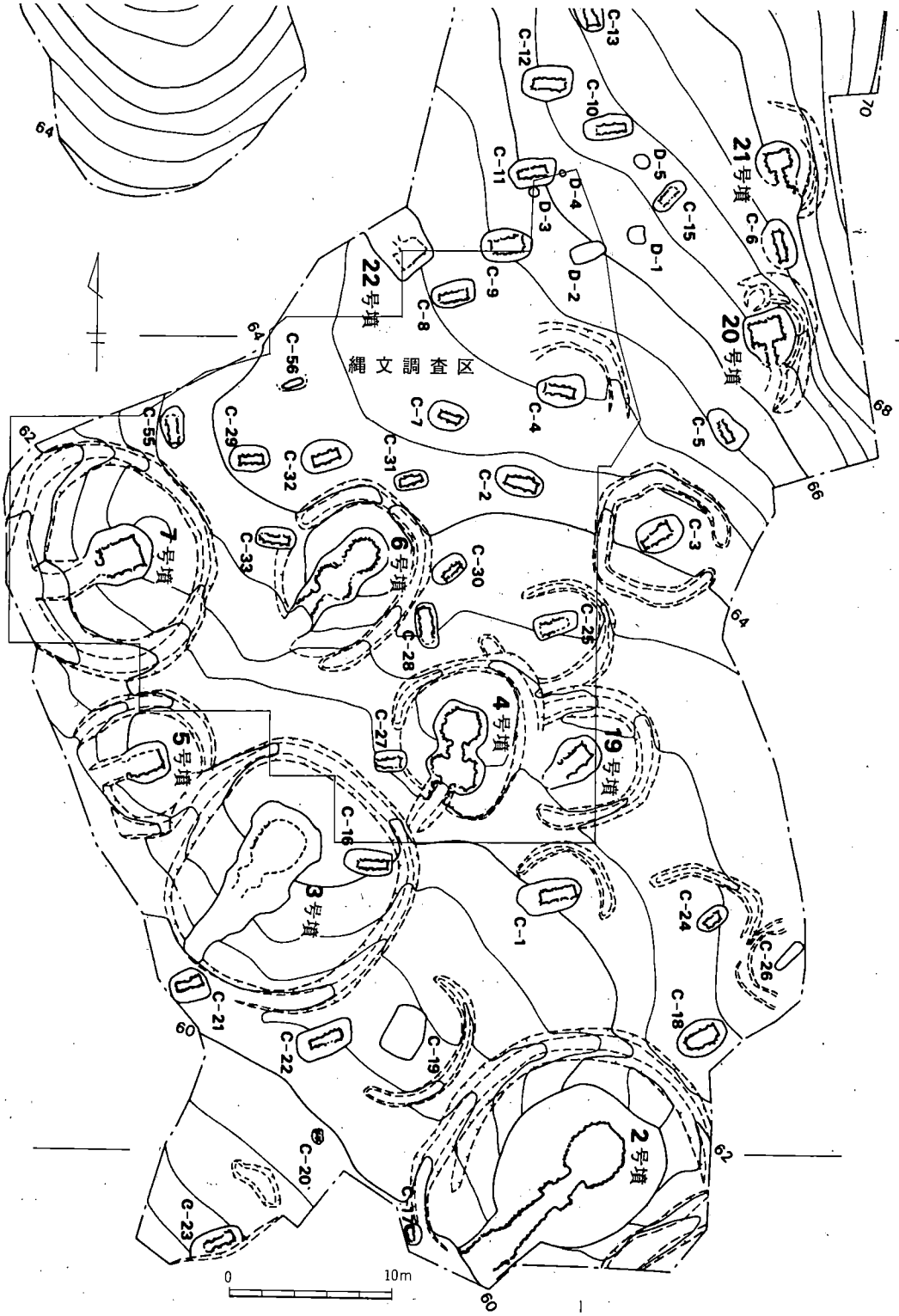
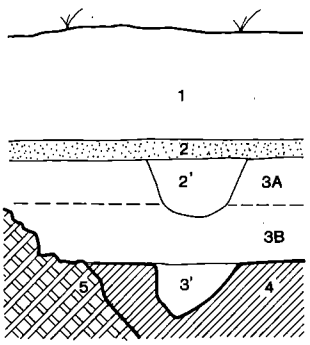


Fig. 5　柿原Ⅰ地区地形測量図（古墳群調査後，縄文調査前）(1/400)

こういう谷間でまとまった平坦地を得て，谷川もすぐ横にあるという立地が，縄文時代の定期的キャンプ地，或は季節的定住地として選択された主要因であろう。



1　表土・古墳盛土
2　旧表土（黒色土）
2′　縄文晩期・弥生遺構（黒色土・暗褐色土）
3A　縄文晩期＞早期包含層（暗黄褐色土）
3B　縄文早期＞晩期包含層（黄色土）
3′　縄文早期遺構（黄色土）
4　無遺物層（暗紫砂礫層）
5　岩盤（片岩）

Fig. 6　柿原Ⅰ地区基本層序模式図

基本層位　既述の如く，当調査範囲は，多くの古墳・竪穴式石室・石棺系竪穴式石室群の密集部にあたるため，土層図・遺構配置図にみる如く，実際にはそれらの墓壙やトレンチでずたずたになっていたと言える。よって，住居や土壙などの全容がつかめなかった面もある。Fig. 6の模式図によって説明しておこう。第1層は調査当初残っていた部分的な表土・古墳盛土等で，縄文遺跡としては撹乱部分である。2層目は古墳墳丘内の旧表土で，部分的に残るのみであるが，この下の掘り込みの黒色土・暗褐色土(2′層)は縄文晩期(一部で弥生期)の遺構となる。その下の第3層は黄褐色系の土で，上半がやや暗い軟質の黄褐色土(3A層)で，晩期土器もまだ多く包含している。下半(3B層)はやや粘質が強く固い黄色土で，部分的には40cmの厚さまで堆積している所もある。この層まで晩期の土器は残るが，概して早期押型文・厚手無文土器の出土量の方が多い。第4層は黒色片岩の細破砕砂礫層で暗紫色をなしている。何カ所かこの層を掘り下げてみたが，次第に破砕礫が大きくなってゆくだけで，完全な無遺物層であった。この層に掘りこまれた形の3′層は，所謂黄色土埋土の穴で，早期の遺構かと当初判断していた。しかし，後節で詳述する如く，晩期土器片も含まれていた。この穴の形状はその大部分が風倒木痕状をなしており，その為に晩期の遺物も流れ込んだものと考えられる。また，調査区の西寄りのHGの4～8グリッド付近は，黒色片岩の岩盤が露頭しており，縄文包含層は残存していなかった。以上のように，当遺跡では，縄文包含層の厚さが最大50cm前後と薄く，しかもその上下関係の中で各時期毎の層として明確に把え得なかったことを報告しておきたい。ただその中においても，A3～A4グリッド付近での厚手無文土器類が第4層の直上に貼り付くように出土したことは，本来の位置関係を知り得る僅かな事実として受けとめておきたい。

遺構の概要　本遺跡で検出した遺構は下記のとおりである。

縄文早期

集石炉　　2基

黄色土埋土土壙　　31基（うち風倒木痕と思われる5基は晩期の可能性あり）

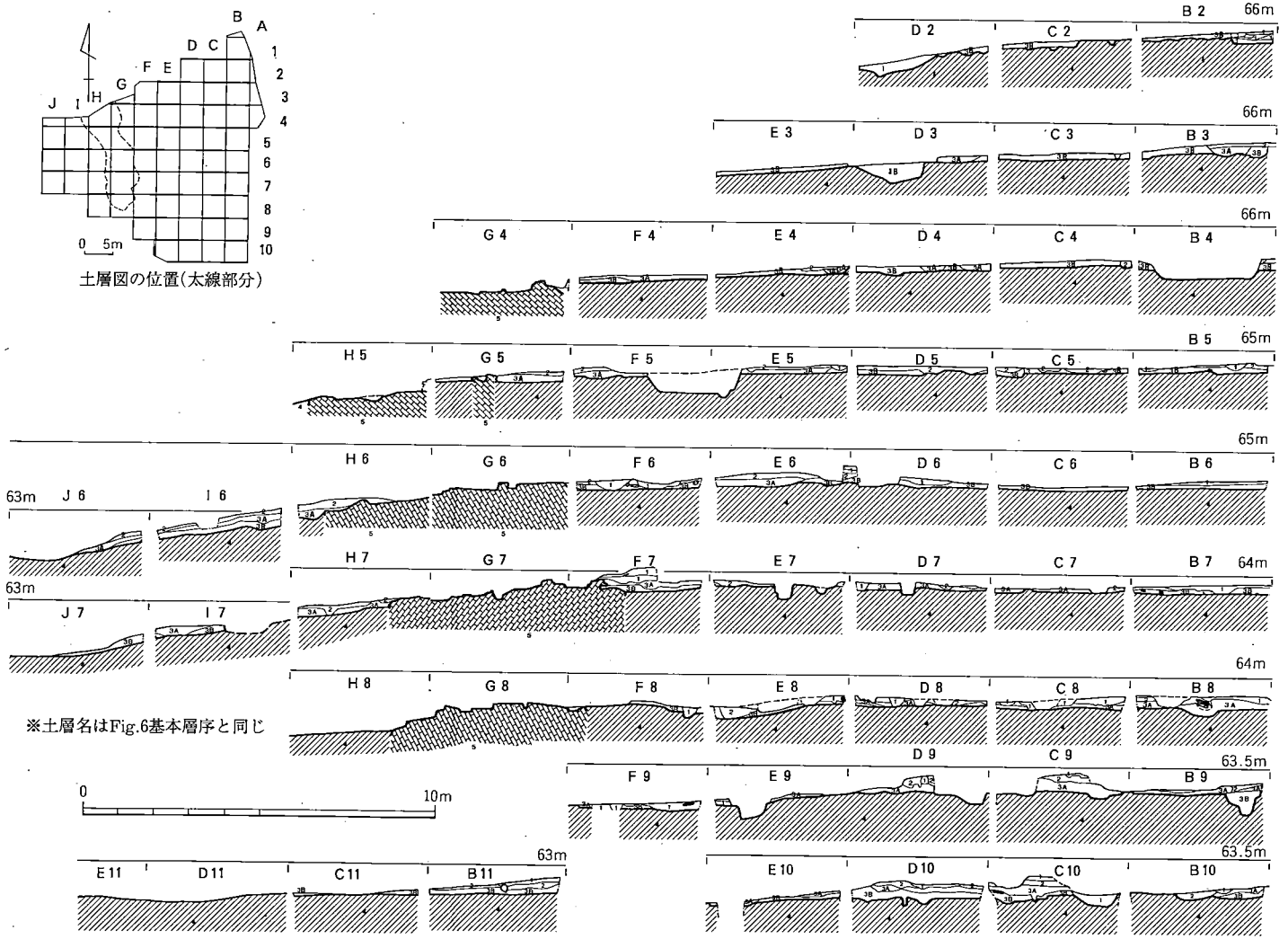


Fig. 7　縄文包含層各グリッド北壁土層実測図 (1/200)

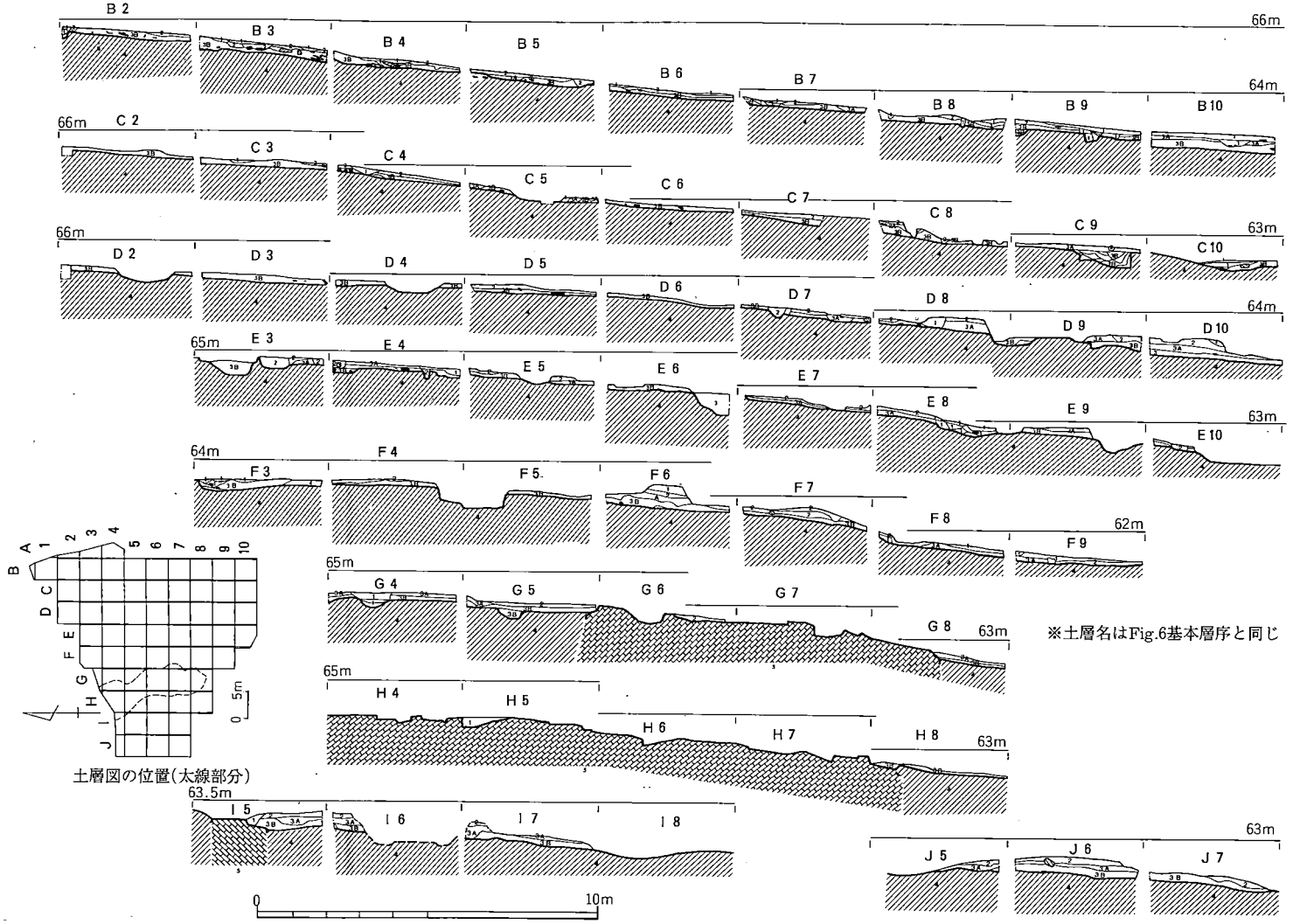


Fig. 8　縄文包含層各グリッド東壁土層実測図 (1/200)

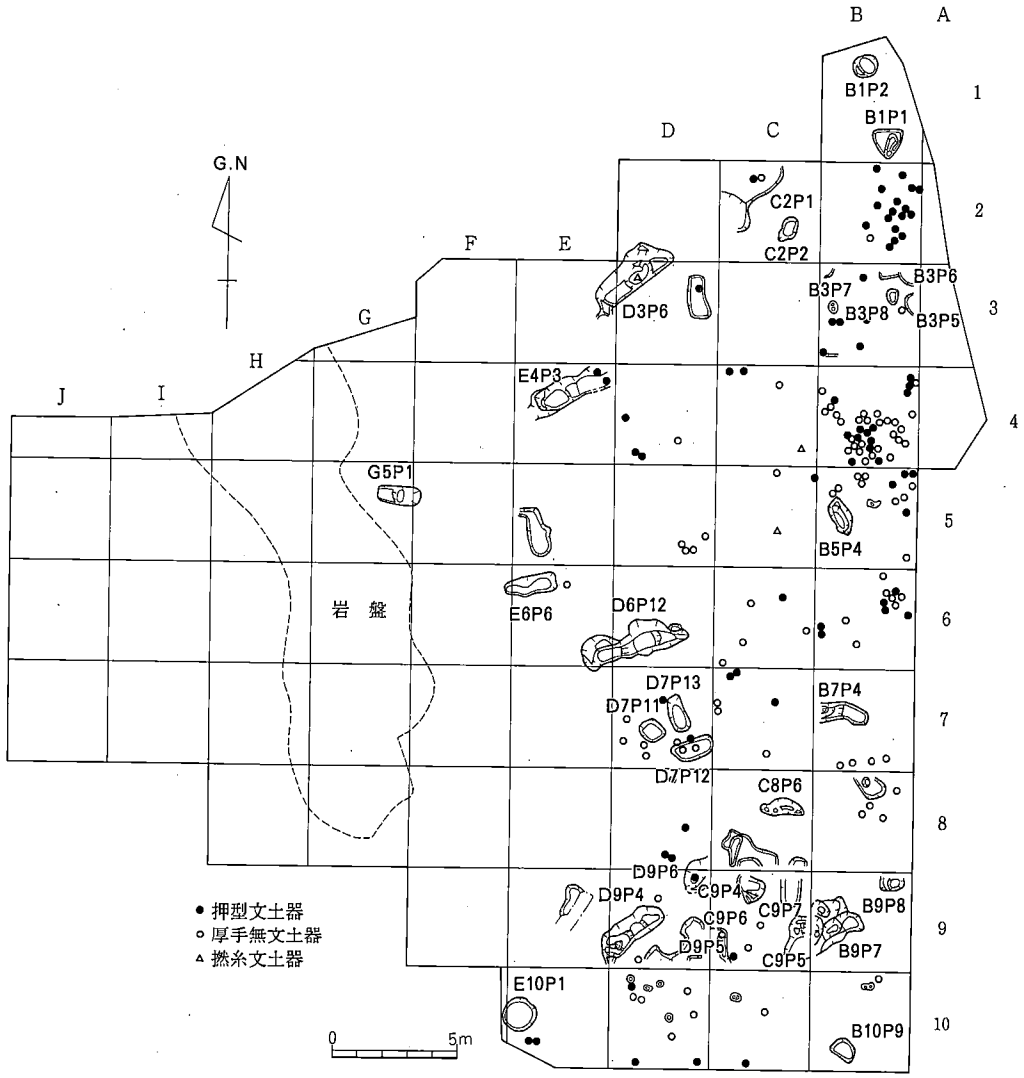


Fig. 9　縄文時代黄色土遺構・縄文早期土器出土分布図（1/300）

黄色土埋土小ピット　　12個

縄文晩期

竪穴住居跡　　4軒

略方(円)形小型土壙　　6基

不整形土壙・小ピット　　多数

弥生時代

土壙　　3基

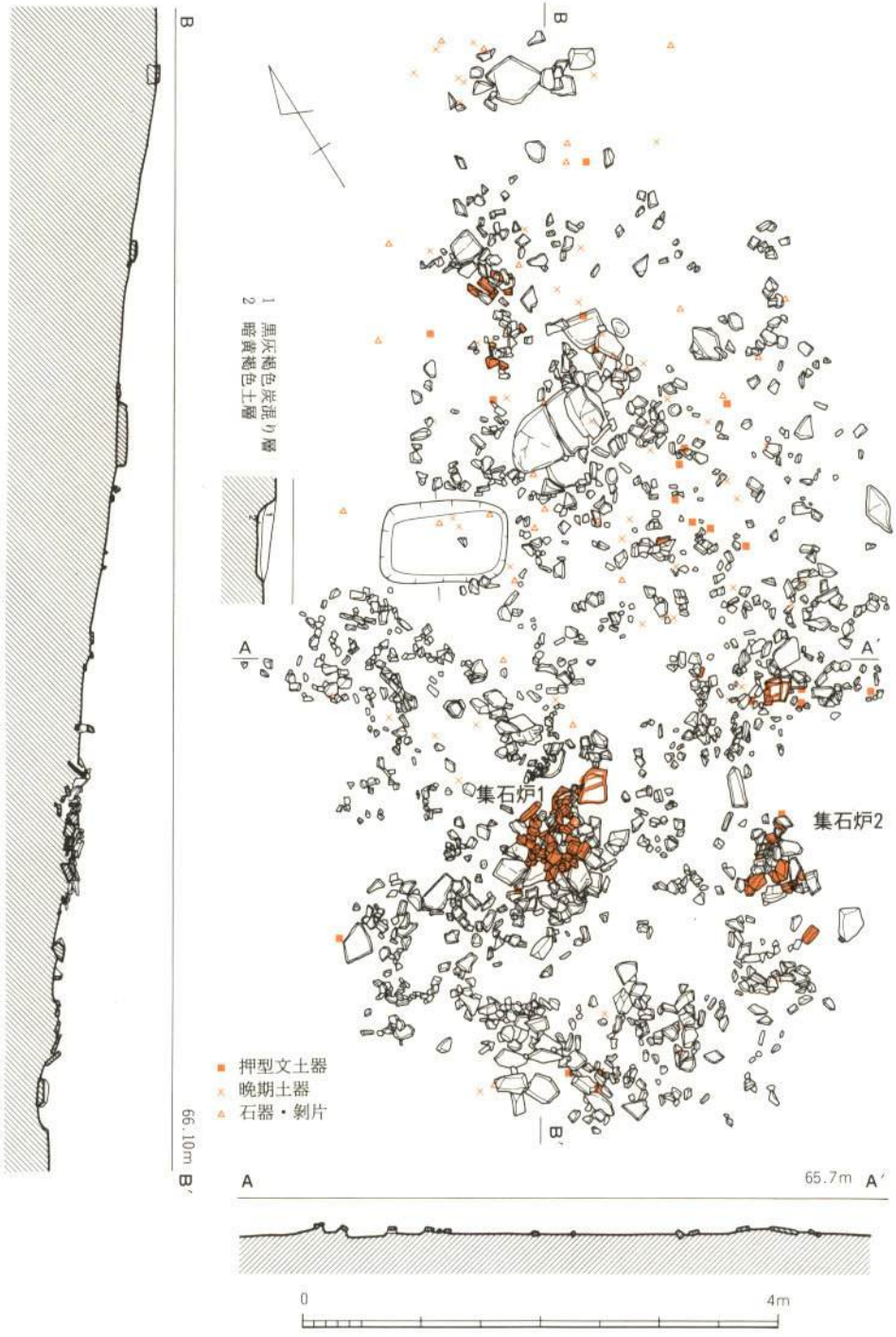


Fig. 10　ＳＸ１集石遺構実測図（1/60）

B　集石遺構

ＳＸ１集石遺構

（Fig. 10～13, PL. 3）

集石状況　調査区の北端近くのＢ１・２～Ｃ２・３にかけて南北長さ約10m，東西幅約5.5mの範囲に，ここの基盤である黒色片岩の板状礫の集石が認められ，押型文土器・晩期土器・石器類が多く出土した。実はこの部分の調査は，縄文調査区設定以前の古墳群調査時に行われたものである。集石は，南半の２基の集石炉付近に顕著で，北端ではまばらである。北寄りには大きい石が３枚蓋石状に並んでいて，その下も精査したが何ら検出できなかった。中央西寄りには東西1.05m，幅0.68mの浅い長方形土壙が検出され，その上半埋土中には炭が多く混入していた。集石炉に関連する掘り込み炉の可能性も否定できない。ただ，壁・底等は焼けていない。

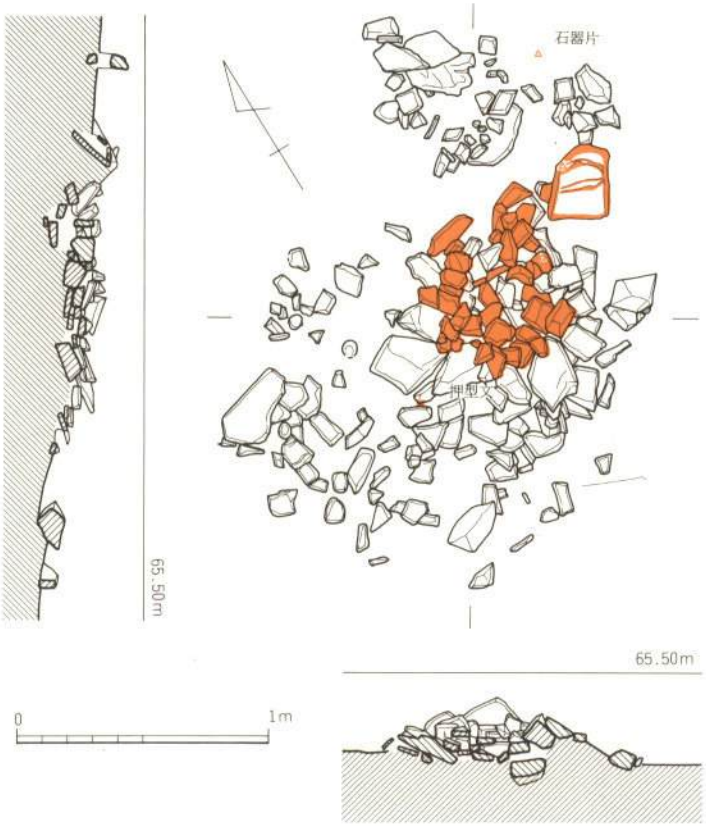


Fig. 11　第１号集石炉（ＳＸ１内）実測図（1/30）

集石炉　厳密に言うと炉でない可能性もある。単に集石してある上部に積まれた石が焼けたものが多いということである。掘り込み等は認められず，配石・敷石等の様子も無い。集石炉１では，約１m範囲の中に大きめの板石を雑に集め，その上に焼け石を中央付近に乗せたという感じである。注目すべきは，下位の外寄りの石の中にも焼け石が在るということで，何度も繰り返して使用されたものと思われる。焼け石は，集石炉１・２以外の北側や，ずっと北寄りの部分でも散乱して見つかっており，この近辺で何回も石焼きクッキングが行われていたことを物語っている。

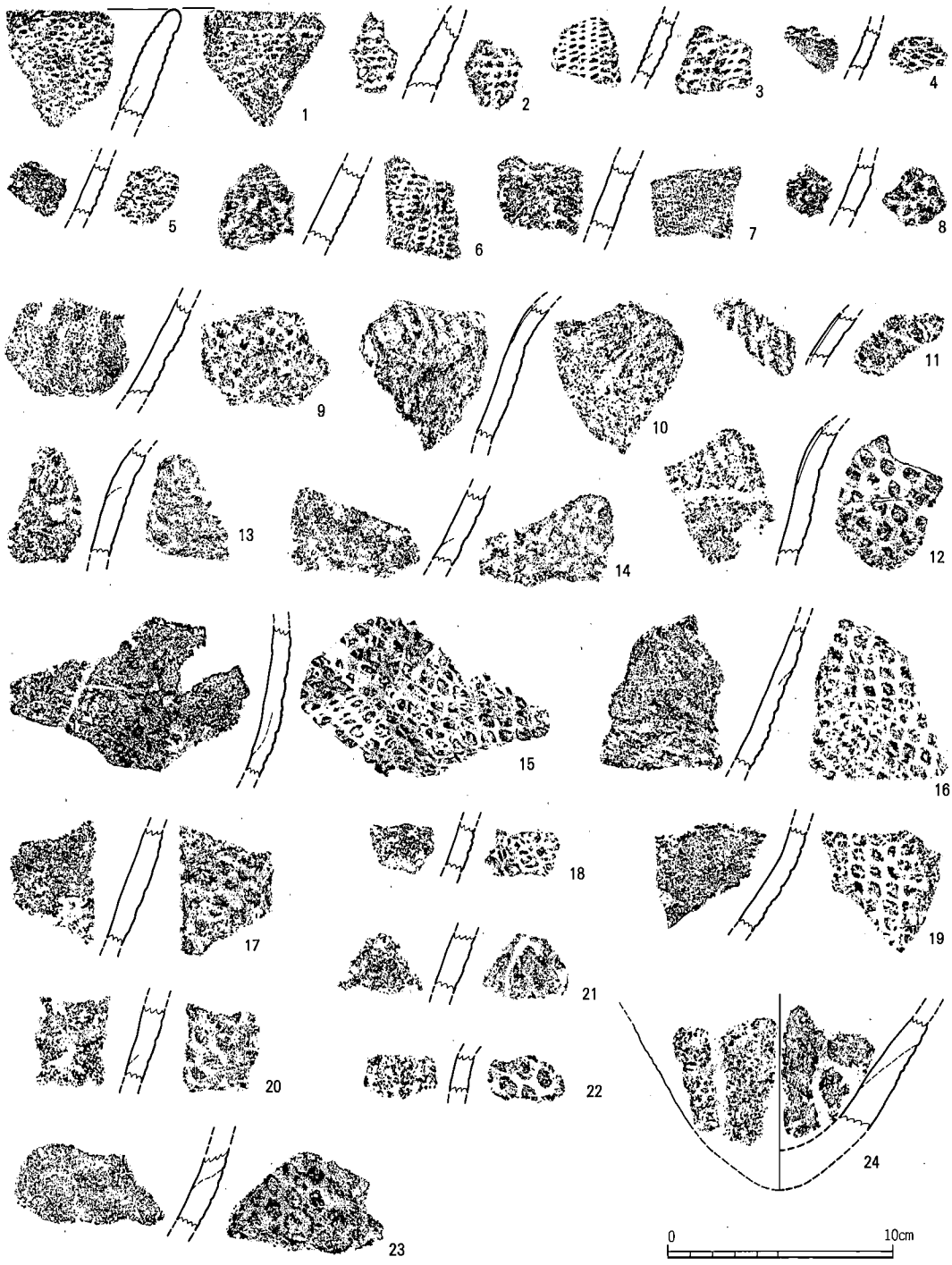


Fig. 12　ＳＸ１集石遺構出土押型文土器実測図（1/3）

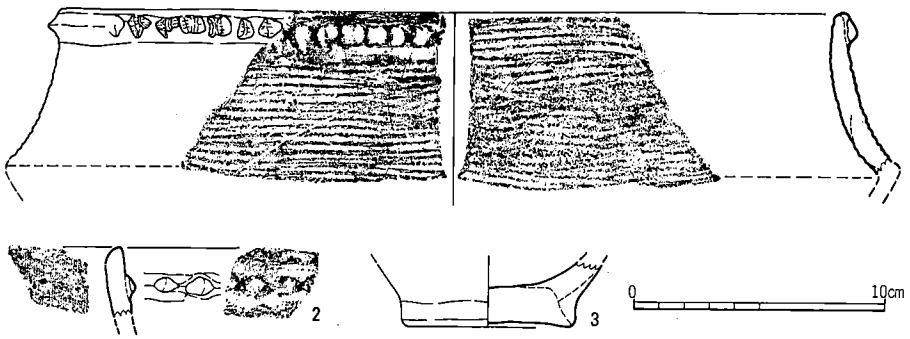


Fig. 13　ＳＸ１集石遺構出土晩期土器実測図（1/3）

出土遺物

押型文土器１・２類（Fig. 12—１～7）この分類は後節「Ｆ 早期の土器」におけるものと合わせている。１・２は口縁部の内外面ともに長さ５㎜大の小さい楕円型押型文を横位に施すもので，１類とされよう。３・４は胴部上半片で，内外面に横位楕円形押型文があるが，２類の早水台段階の可能性もある。５～７は，いずれも外面に長さ５㎜大の横位楕円形押型文を施すが，１・２類のいずれか判然としない。

押型文土器３類（Fig. 12—８・9）外面に７～５㎜大の縦位の楕円形押型文を施す類で，楕円粒の大きさで10番以下の４類と区別した。

押型文土器４類（Fig. 12—10～23）外面に長さ９～12㎜大の縦位或は斜位のぶっとい楕円形押型文を施し，口縁内面にはやや斜位の平行原体条痕を施す類。口縁は大きく開き(10・12)，胴部は丸みを持ってすぼまる(15・19)。内面は横位ナデが多いが，15は横位擦過の上をナデている。11と13は同一個体。15・16・18・19は菱形に近い楕円形押型文で，同一原体使用。

押型文土器底部（Fig. 12—24）外面上半にやや右下がり横位の5×3～2.5㎜の小さい楕円形押型文を施し，下半はナデ。内面は横位ナデ。粗砂かなり含み，１・２類の底部となろう。

刻目凸帯文深鉢（Fig. 13—１・2）１は内外面丁寧な横位アナダラ条痕を施し，口縁に接する外面凸帯に貝殻腹縁を突っ込む粗大な刻目を巡らす。より原初的刻目凸帯に近い。２は外面口縁下1.1cm下がった位置に凸帯を付け，太い棒或は指先による刻目を巡らす。外面の凸帯より上は横位条痕を残し，内面は横位ナデ。

晩期底部（Fig. 13—3）底径6.8cmで，底外面全体が僅かな上げ底となる。弥生前期に近い。

以上の出土遺物のうち，集石炉の時期を示すものは，出土位置の近さや量的に見て，押型文土器の時期であることは疑いなかろう。それも押型文土器４類の田村式段階が集石炉が最も使用された時期と考える。

Ｃ　黄色土埋土土壙

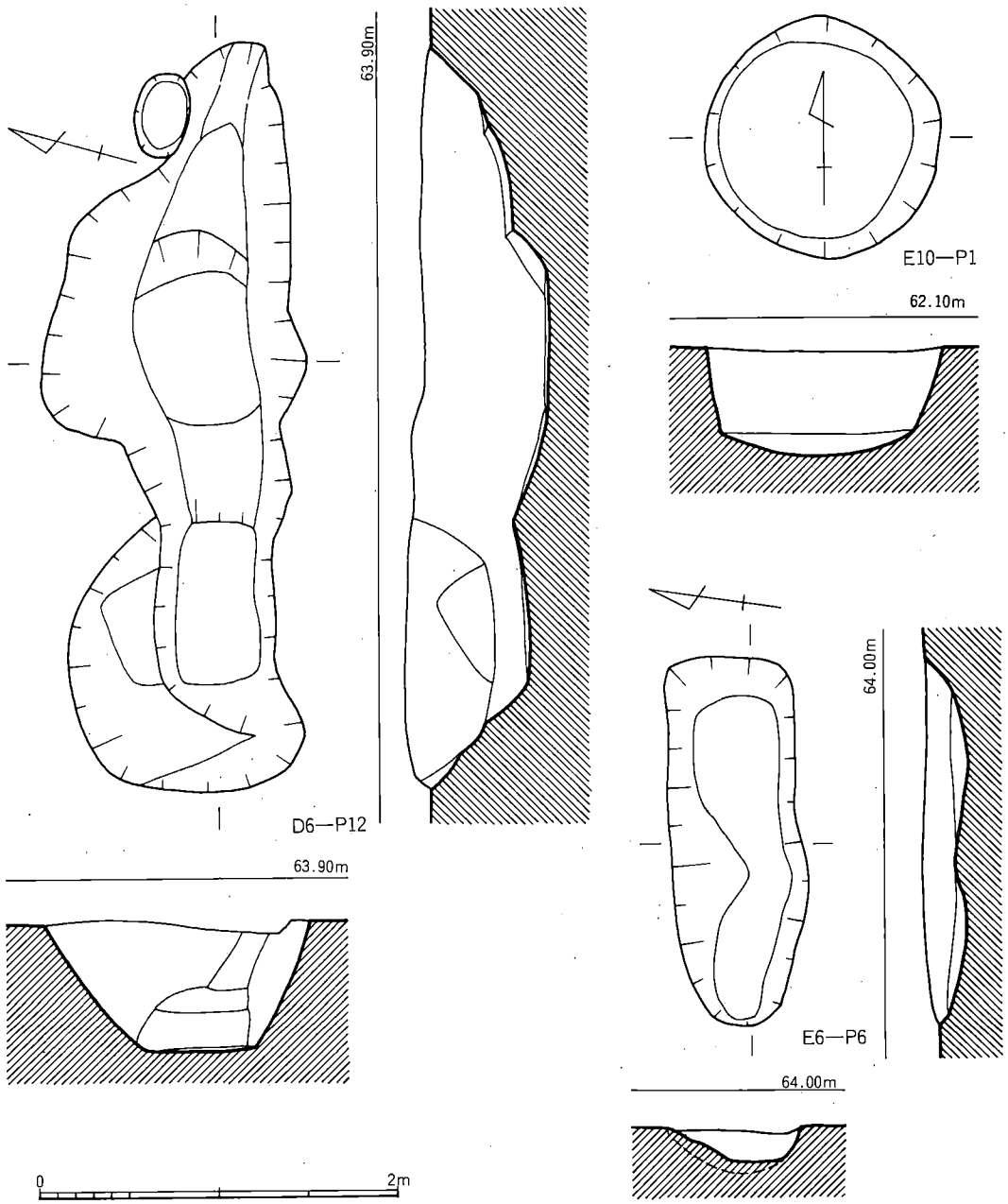


Fig. 14　黄色土埋土土壙群実測図（その１）(1/40)

土壙状の大きい穴が31基検出され，うち５例を図示した。埋土の黄色土中からは早期の遺物小片を多く観察したが，図示できるものは少い。風倒木痕と思われるものからは晩期の遺物が出土しており，それらの成因自体は晩期以降となろう。

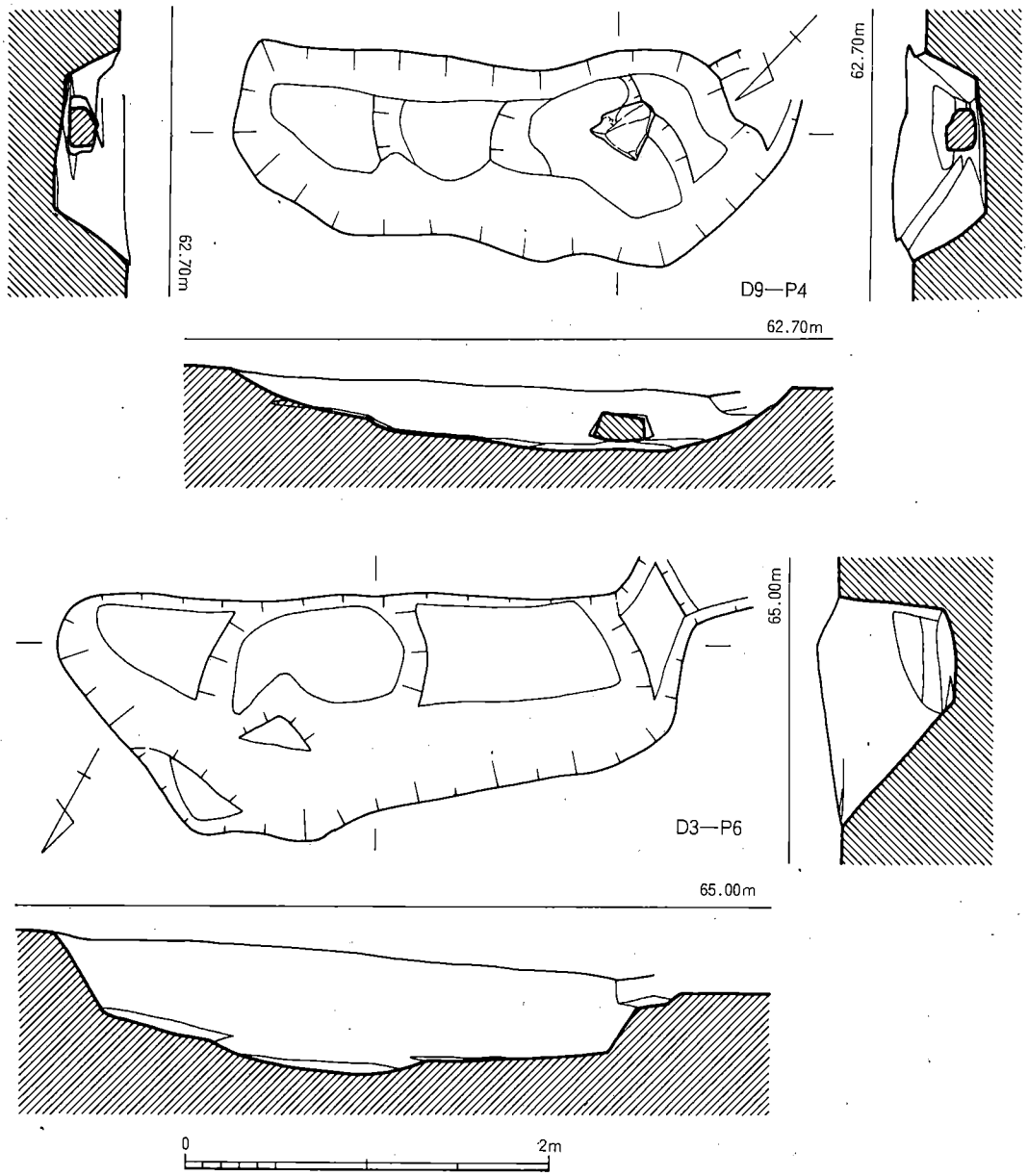


Fig. 15　黄色土埋土土壙群実測図（その２）(1/40)

D6-P12（Fig. 14）調査範囲の中央部に位置する風倒木痕。長さ4.17m，幅1.5m，深さ0.7mで，底面は段々になる。出土遺物(Fig. 17)は口縁で屈折して直に立ち上がる晩期半粗製深鉢。外面屈折稜より上は横ナデ，以下は横位擦過。内面はやや雑な横ナデ。晩期前葉。

E10-P1（Fig. 14）調査区南端に位置する直径1.3m強の正円形プランの穴。底面は丸味を持ち

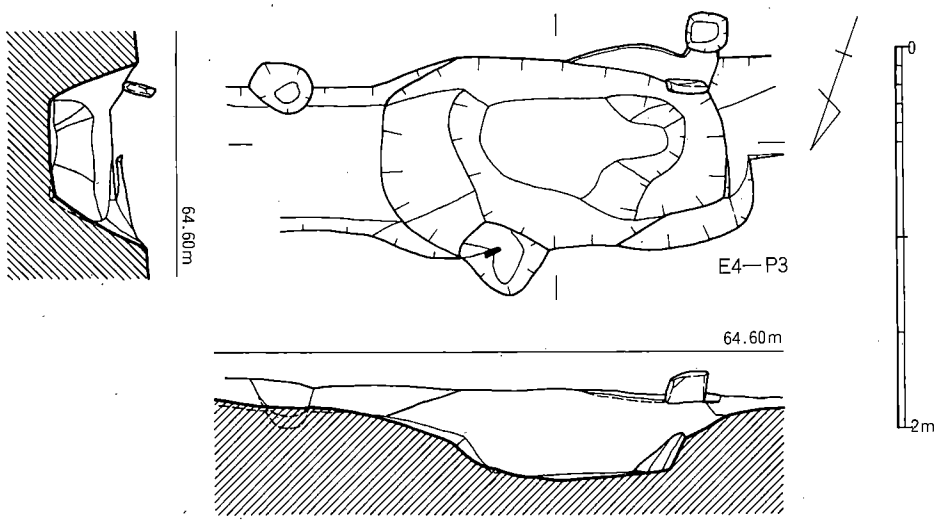


Fig. 16　黄色土埋土土壙群実測図（その３）(1/40)

深さ60cm。埋土中から押型文土器と，立派な黒曜石製尖頭器(Fig. 68—１)が出土。明らかな人工的掘削による縄文早期遺構で，墓壙或は貯蔵穴と推定するが，今後他遺跡での類例を待つに値する重要遺構と考える。

E6-P6（Fig. 14）　調査区中央にて長軸を東西にとる遺構。長さ2.05m，幅0.77m，深さ0.26mと浅い。底面は凹凸があり，風倒木痕の可能性もあり。図示できる出土遺物は無い。

D9-P4（Fig. 15）調査区南端寄りに在り，長さ３m，幅1.2m，深さ0.35mの風倒木痕。底面は段々状になり，晩期底部（Fig. 17）が出土。中央寄りが僅かな上げ底となる類で，内外面ナデ調整。深鉢底部となろう。

D3-P6（Fig. 15）調査区北端寄りに位置する風倒木痕で，長さ3.5m，幅1.3m，深さ0.7m。底面は段々状になる。弥生中期前葉の甕底部(Fig. 17)が出土。外面は丁寧なナデ調整。

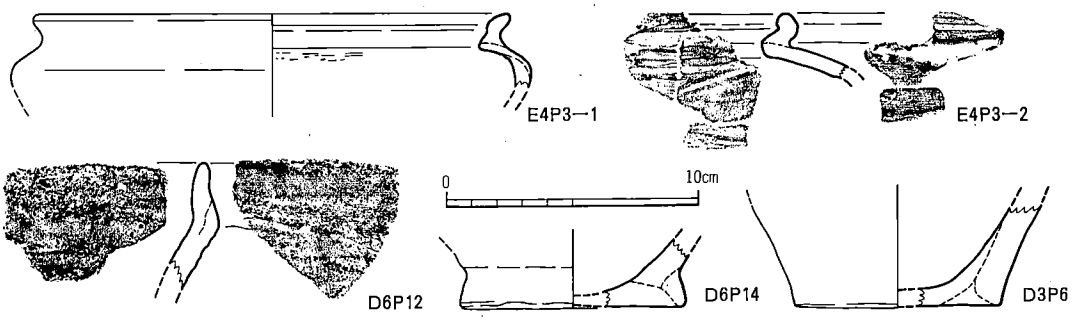


Fig. 17　黄色土埋土土壙群出土土器実測図（1/3）

E4-P3(Fig. 16) 調査区の中央北寄りに位置する略長方形土壙。長さ1.8m，幅1m，深さ0.47mで，これもおそらく風倒木痕。晩期浅鉢片2点(Fig. 17)が出土。2は玉縁状口縁の内側が沈線的様相をみせて，1よりは古相を示す。1は口径19cmの小型品で，内面屈折稜直下は横位擦過を残すが，他は横ヘラ磨き。2点とも晩期後半に近い黒川式新期のもの。

D　竪穴住居跡

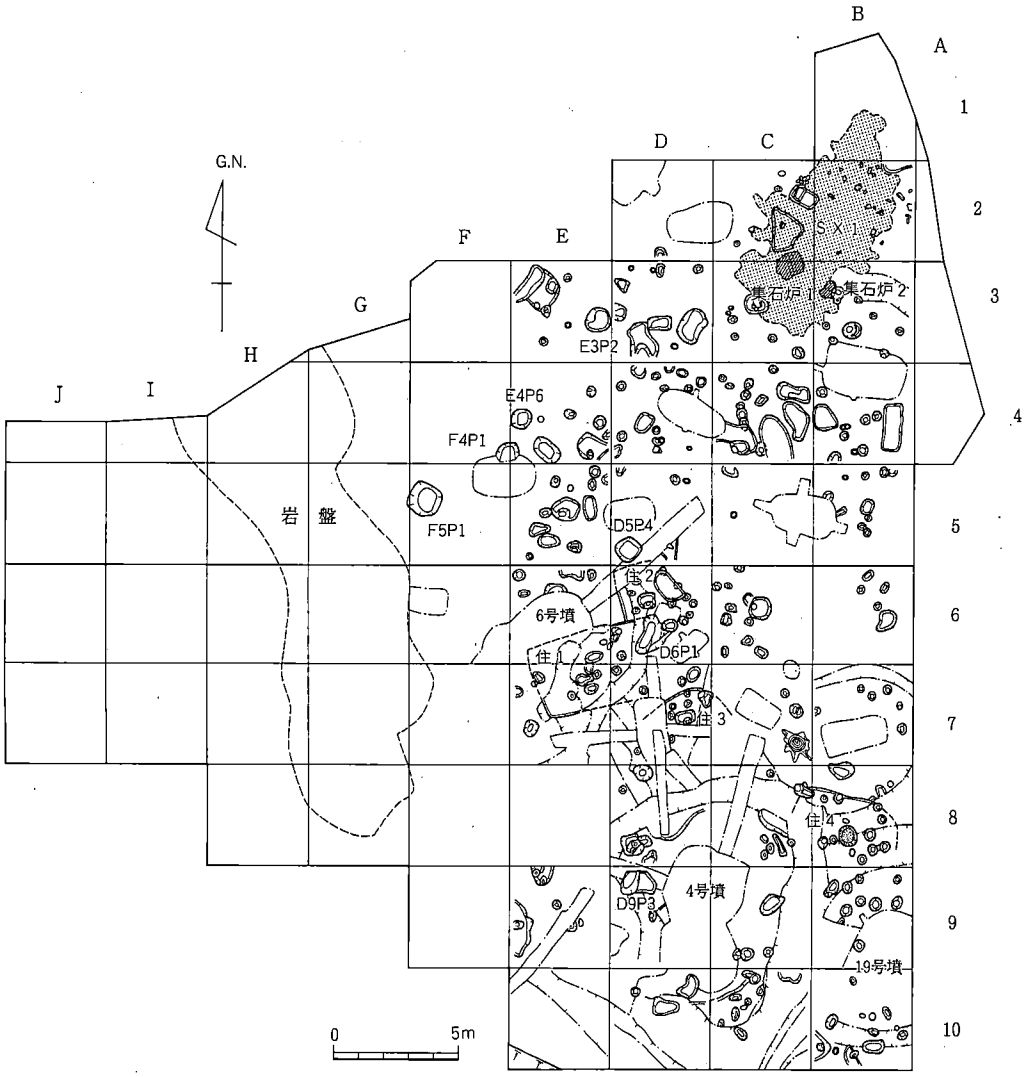


Fig. 18　縄文晩期遺構(黒色土・暗褐色土埋土)全体図 (1/300)

一応4軒分確認したが，全容を知り得るものは無い。いずれも古墳群の墳丘下にかろうじて残っていたものであるが，6・9号墳，石棺墓のC25・28などの墓壙・周溝・墳丘トレンチ等

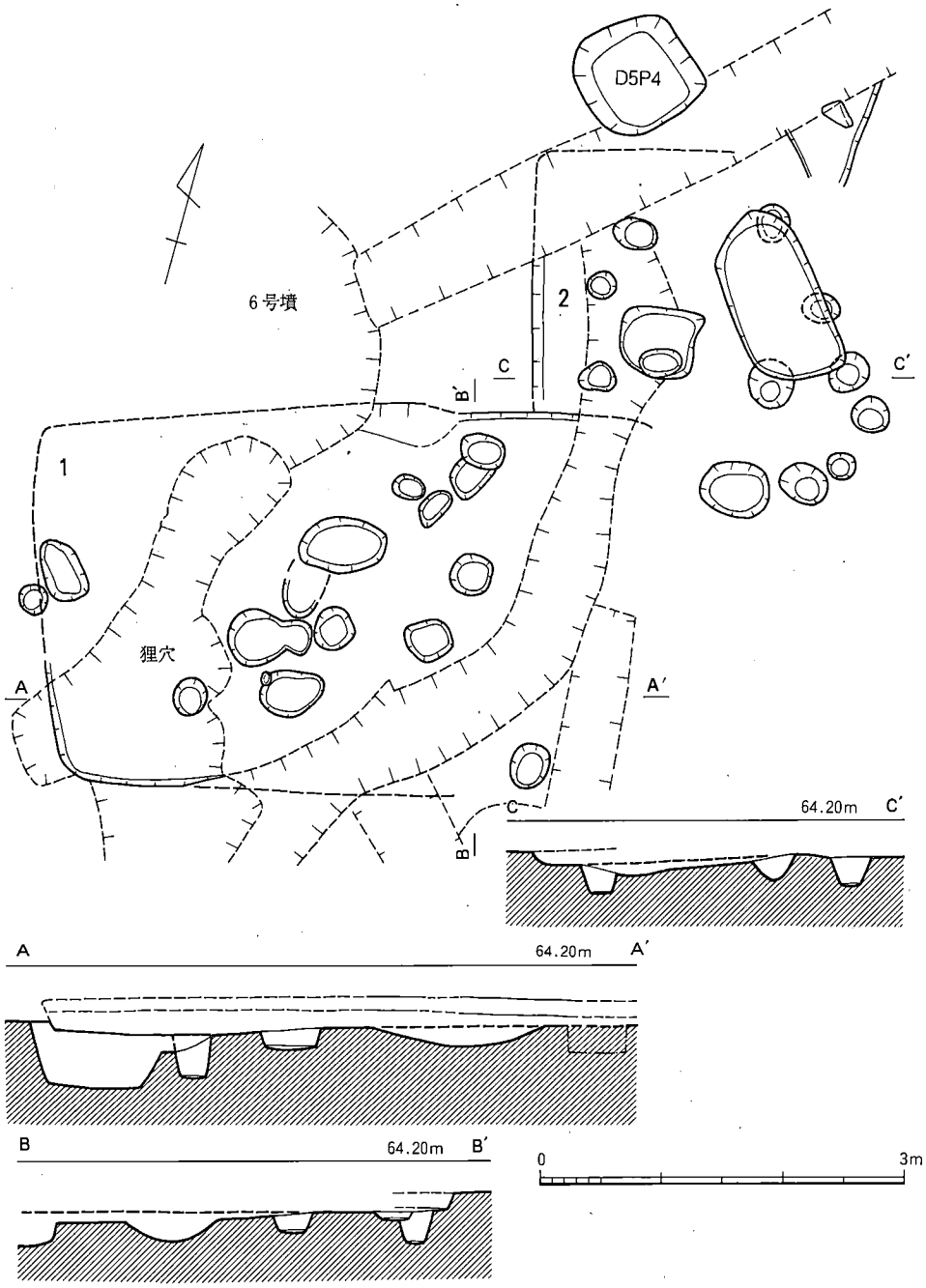


Fig. 19　第1・2号縄文住居跡実測図（1/60）

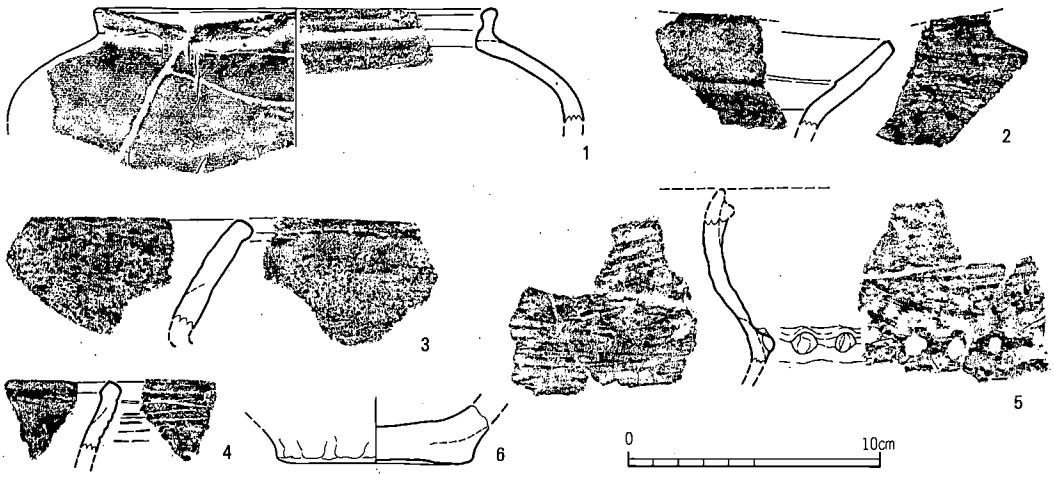


Fig. 20　第１号住居跡出土晩期土器実測図（1/3）

でズタズタにされた状態で検出したというのが実状である。住居跡どうしでの切り合いや，接した状況もみられ，少くとも３小期の集落が考えられる。

第１号縄文竪穴住居跡（Fig. 19，PL. 6）

調査区の中央やや南寄りにて検出した長方形住居である。北壁の１/３程と，南西隅付近を検出したのみで，他は６号墳主体部・周溝，C28石棺系竪穴式石室のトレンチ等で切られており，全容はつかめない。

東西4.4m以上，南北３m程で，床面積15m²弱の小規模住居となろう。床面には小ピットが14個検出されたが，規則的配置状況はつかめない。炉は検出されていない。

出土遺物（Fig. 20）

浅鉢（１～３）１は精製浅鉢3ｂ類で黒川式新段階。胎土精良で内外面横ヘラ磨き。復元口径16cm。２は精製浅鉢５類で波状口縁となる。粗細砂を幾らか含み，内外面横ヘラ磨き。３は精製浅鉢６類となろうが，半精製品である。粗細砂を多く含み，内外面ともに横位擦過の上を横位ナデ。

深鉢（４～６）４は精製深鉢で外面に細く浅い雑な沈線を５本施す。粗砂少量含み，内面はナデか。具体的器形は不明。５は大きく湾曲して肩が張る刻目凸帯文土器で，内面横位条痕，外面は横位条痕の上を雑な横ナデ。口縁部にも凸帯の痕跡がみられ，肩と両方に刻目を施す類となろう。刻目は大きく，指爪先によるもの。初源的な感じである。粗砂多く含む。６は中央部が僅かな上げ底となる類で，内面は丁寧なナデ。細砂多く含む。底径８cm。

以上のうち６は若干新しくなり，１～４は黒川式新期から幾らか新しい段階で，第１号住居跡の時期を示していよう。５も刻目凸帯文土器発生期に近いものであり，矛盾は無かろう。

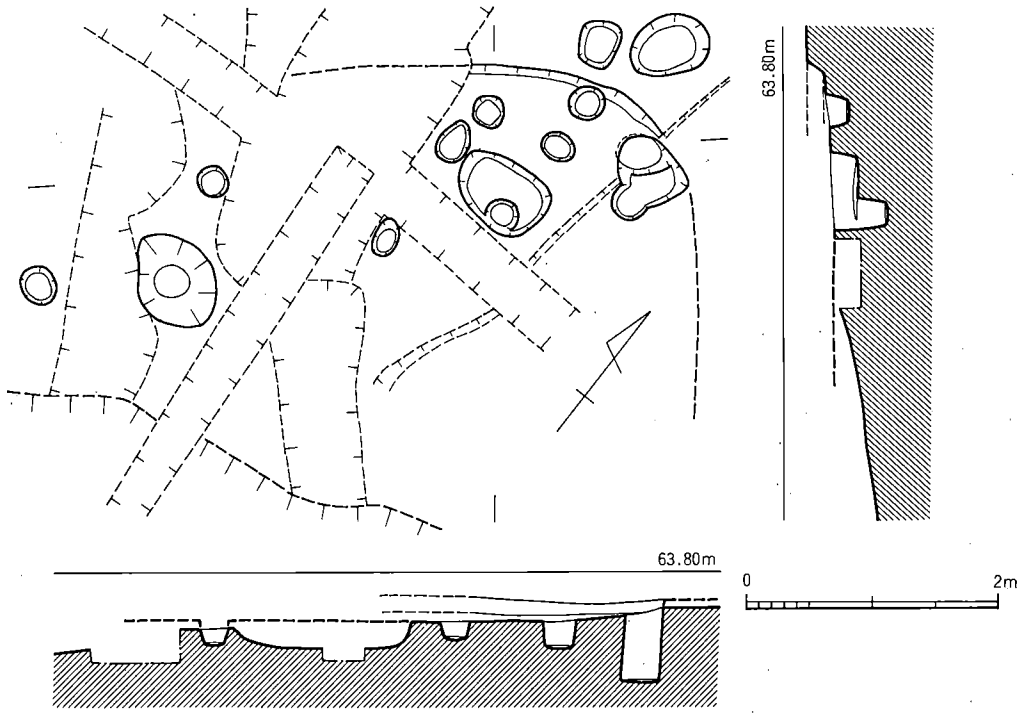


Fig. 21　第3号縄文住居跡実測図（1/60）

第2号縄文竪穴住居跡（Fig. 19，PL. 7）

第1号住居跡に南半を切られ，東側は6号墳の地山整形時に大きく削平されている。つまり，西壁の一部しか検出されていないが，北側は6号墳Bトレンチの北側に検出されない為，トレンチ内で収まる範囲のものと考えた。深さ13cm程で，全体の規模は不明。床面に13個の小ピットがみられるが柱穴配置は定かでない。炉等の諸施設も認められない。図示できる遺物は無いが，第1号住居跡に切られていることから，当住居は黒川式新段階或はそれ以前のものであるが，黒川式の範疇を出るものではなかろう。

第3号縄文竪穴住居跡（Fig. 21，PL. 7）

調査区の中央やや南寄りに位置する。北辺の一部を検出したのみで，全体の平面形態・規模は不明。隅丸となるようで，長方形住居となる第1号住居とは趣を異にする。西半をC28石棺系竪穴式石室に切られ，南半は4号墳地山整形で削平されている。炉等の施設は発見できなかった。床面に小ピット10個が検出されたが，具体的柱穴配置は定かでない。出土遺物のうち図示出来るものは無いが，晩期の住居であることは間違いなかろう。

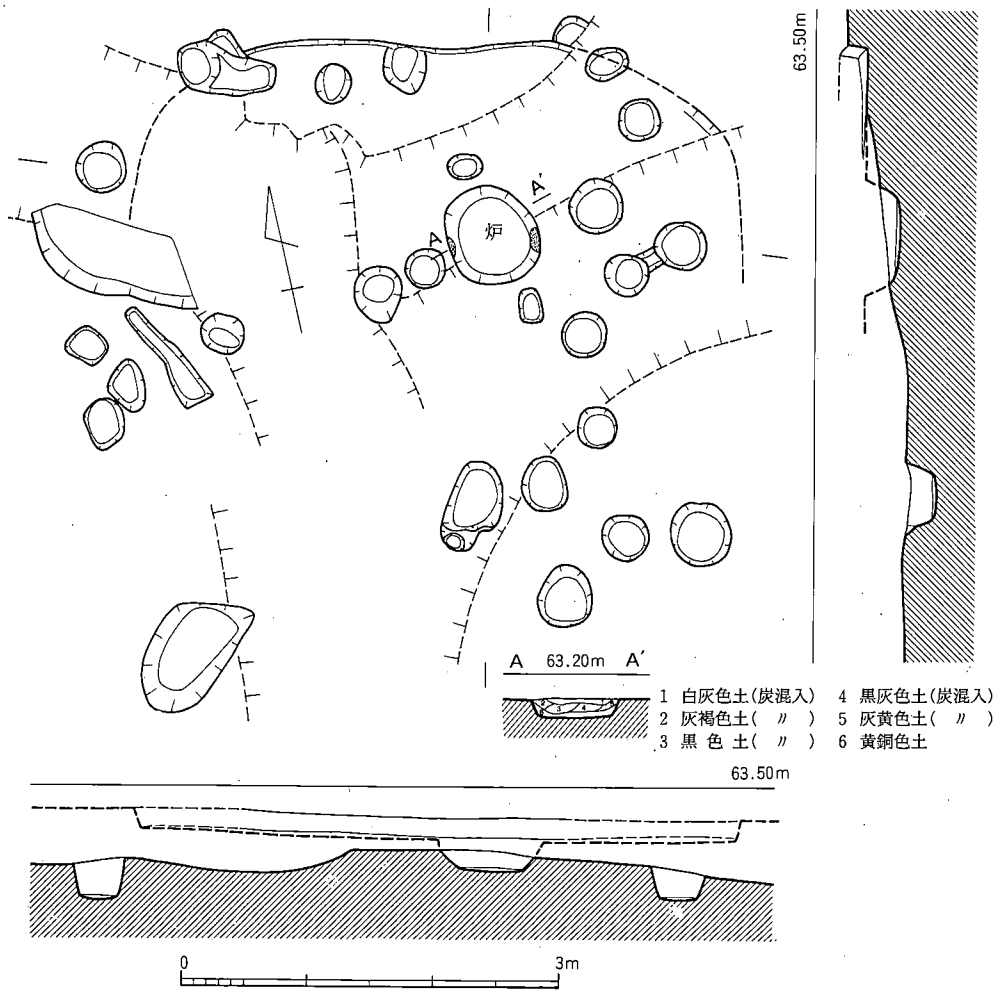


Fig. 22　第4号縄文住居跡実測図 (1/60)

第4号縄文竪穴住居跡 (Fig. 22, PL. 8)

調査区の南半で東寄りに位置する。北壁を検出したのみで全体の形状は不明であるが，東端でも一部壁が見つかっている事からみると，隅丸気味の方(長方)形となろう。東西は5m弱となりそうだ。炉が中央より東寄りに発見された。70×82cmの楕円形で深さ16cm。炭・灰混入の埋土で，東西両端の壁が焼けていた。上半を削平されているので，復元床面からの深さ26cm程と推定される。しっかりした素掘り炉であったことがわかる。床面範囲内に18個の小ピットが検出されたが，具体的柱穴配置は不明。出土遺物のうち図示できるものは無いが，黒川式前後のものが多く，当住居跡の時期を示すと考えられる。

E　晩期土壙

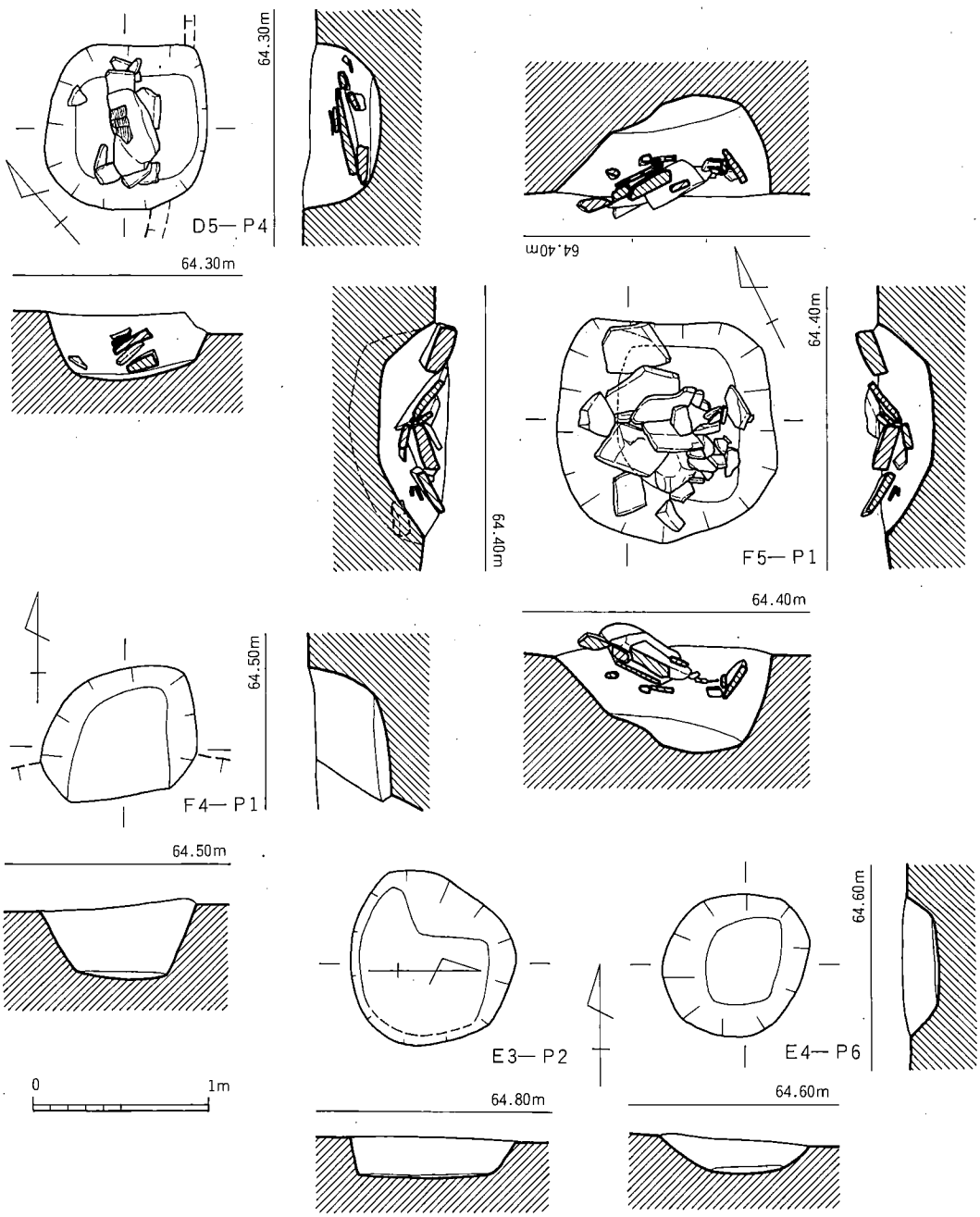


Fig. 23　縄文晩期土壙実測図（1/40）

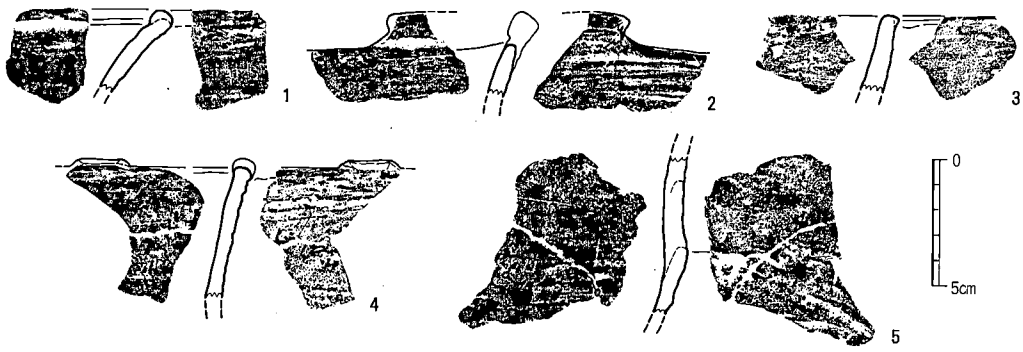


Fig. 24　D 5 - P 4 土壙出土土器実測図 (1/3)

調査区内では，Fig. 18に示すとおり，多くの不整形大型晩期土壙や，小ピットが検出されている。これらは，明確な性格を示すものではないが，縄文竪穴住居跡とともに生活の痕跡を示す集中ぶりと見てよかろう。数多の土壙のうち，わりと小型で，円・方形の平面プランをなし，出土遺物の顕著なものが以下の 5 基認められたので報告する。

D 5 - P 4 (Fig. 23, PL. 9)

ここで報告する晩期土壙のうち，他の 4 基は調査区北西寄りに，北東～南西へ並んでおり，あたかも集落の外縁に意図して営まれたような状況を示しているが，この 1 基だけはそれらから離れて，ほぼ中央に位置している。

略方形の土壙で，94×92cmの上端規模で深さ45cmとなり，底面は丸味をおびる。埋土は黒色土で，炭を若干，晩期土器片を多量含む。黒色片岩の板石を数段積み重ねてあり，その最上石直上に深鉢片がのっていた。土壙上面の石がそのまま沈んだような状態である。

出土遺物 (Fig. 24)

浅鉢（1）大きく開く口縁内端に玉縁状の凸起を付ける精製浅鉢 2 C - 2 類である。細砂かなり含み，内面は横ナデ，外面は横位条痕の上横ナデ。

深鉢（2～5）2 は外傾して開く口縁にリボン状凸起を付ける類で，細砂多く含む。内面は横位条痕の上を横ナデ，外面は横位条痕。3 は口縁外端が僅かにはみ出し，やや内湾気味に丸味を持つ鉢状器形となろう。粗砂多く含み，内面は横位条痕の上をナデ，外面は横位条痕の上をヘラナデ。4 は口縁にリボン状凸起の倭化した類を付けるもの。粗砂幾らか含み，内面は横位の雑なナデ，外面は横位条痕の上をナデ。5 は体部屈折部片で，外面に明瞭な稜をつくる。粗砂かなり含み，内面は横位ヘラナデ，外面は稜より上が横位擦過の上をナデ，下が斜位条痕の上をナデ。下半には煤付着。

以上の土器は，黒川式土器であるが，中でもより新しい段階のものであろう。

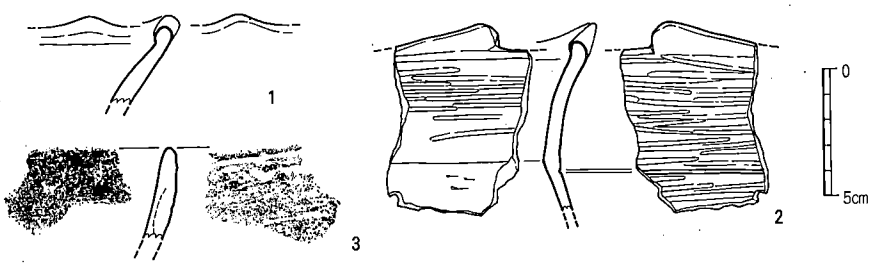


Fig. 25　E 3 - P 2 土壙出土土器実測図 (1/3)

E 3 - P 2 (Fig. 23)

調査区の北寄りに検出された土壙で，晩期土壙の中で最北端に位置する。94×102cmの略円形プランで，深さ23cmの規模で，底面は平らである。暗黒褐色土埋土で，晩期土器を多く含み，焼土若干，焼石，扁平打製石斧(Fig. 82- 4)が出土した。

出土遺物 (Fig. 25)

浅鉢（1）玉縁状口縁類の小さな山形凸起をもつ類。細砂多く含み，内外面横ヘラ磨きの黒色磨研土器である。

深鉢（2・3）2は片削ぎ状凸起を付ける類で，細砂を幾らか含むのみ。胴部との境に沈線を施し，外面はやや粗い横ヘラ磨き，内面の稜より上は横ヘラ磨き，以下はヘラ削り状の横位擦過。3は小型の鉢状の器種となろう。細砂多く含み，外面は雑な横位擦過，内面は横位ナデ。

以上の土器は，諸特徴から黒川式期のものと考えられる。前述のD 5 - P 4 のものよりは若干古い様相を示している。扁平打製石斧の共伴は，この時期まで確実に伴う事が判る貴重例。

F 4 - P 1 (Fig. 23)

調査区の北西側で，南半を石棺系竪穴式石室のC32に切られている。後述するE 4 - P 6 の南隣に位置し，東西90cm，南北75cm以上の略方形気味の平面形をなす。深さ47cmとしっかりした土壙で，上面に30cm大の板石が3個あった。埋土に炭化物少量含み，晩期土器片が多量出土した。焼けた痕跡は無い。

出土遺物 (Fig. 26)

深鉢（1～5）1は外傾して開く程度の口縁片で，外面上端から2.3cmのみ横位条痕を残し，以下はナデ消している。内面は横位条痕の上をナデか。粗砂僅か含み，外面には煤が付着。2は深鉢くびれ部の外面に粘土紐貼り付けの曲線文を施す異類であるが，類例が少く具体的文様構成は明らかでない。内面の屈折部より上は条痕の上を横位の丁寧なナデ，下は横位擦過，外面は雑なナデ。粗細砂多く含む。3は薄手で体部で緩やかに屈曲する類。粗砂幾らか含み，外面下端は雑な横位擦過，それ以上は横位アナダラ条痕，内面は横位擦過か。4は体部くびれ部外面の稜より上に弧状に条痕を施し，文様を意図したものと考えられる。稜直下には横位の条痕，

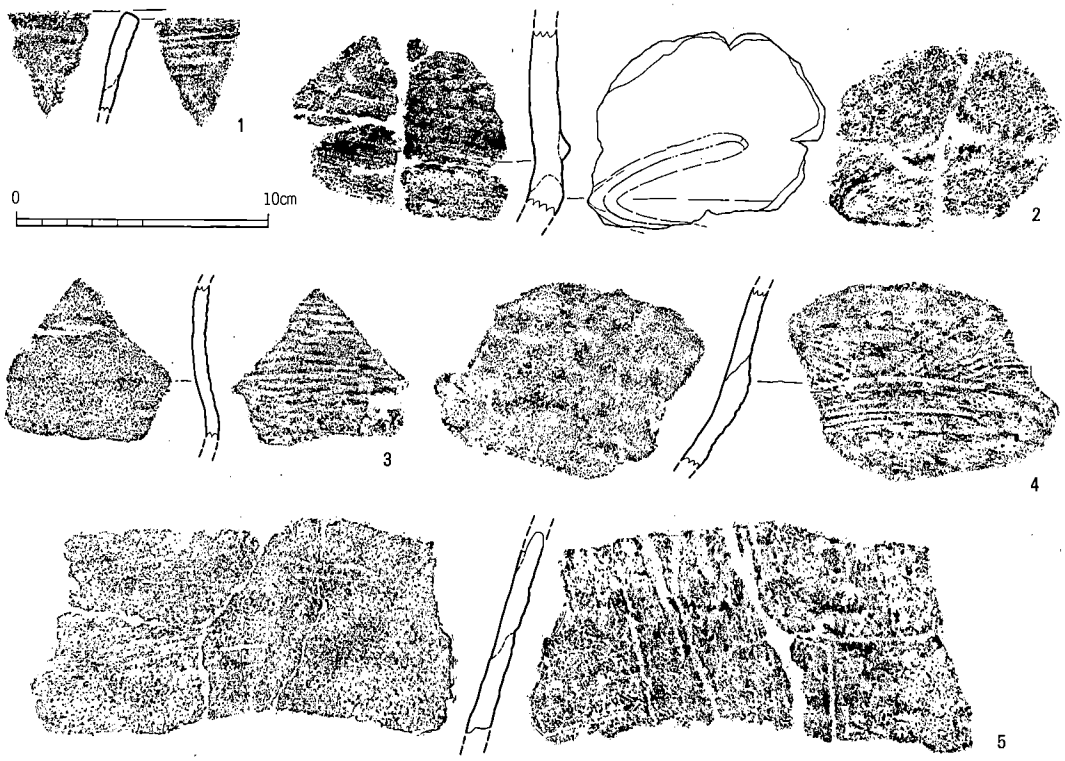


Fig. 26　Ｆ４－Ｐ１土壙出土土器実測図（1/3）

内面上端付近は横位ナデ，以下は擦過の上を横位ナデ。粗砂粒多し。５は粗製深鉢の胴部下半片で，断面上端は擬口縁風の接合面をみせている。粗砂極めて多く，内面は横位条痕の上を丁寧なナデ，外面は縦位条痕の上を雑なナデ。

以上の土器は，１や４のように貝殻条痕を文様として意図して使用している点や，２の粘土貼付文などに古い様相がみられ，晩期の中頃に近い前葉の入佐式段階と考えられる。

Ｆ５－Ｐ１（Fig. 23，PL. 8）

調査区中央のやや北西寄りに位置し，晩期土壙群での最西南端にあたる。125×126cmの略方形プランをなし，深さ57cmで，黒褐色埋土。片岩の小板石が多く上面から中央へ沈むような形で検出された。炭化したどんぐり状の堅果類が若干出土した。炭片は小片が幾らかみられたのみで，壙内外は焼けていない。縄文晩期土器片が多量出土したが，図示できるものは無い。時期は他晩期土壙と同じく，黒川式を前後する頃と考えられる。

Ｅ４－Ｐ６（Fig. 23）

既述のＦ４－Ｐ１のすぐ北隣に位置し，83×83cmの上端径で，深さ20cmとなる。上端での平面

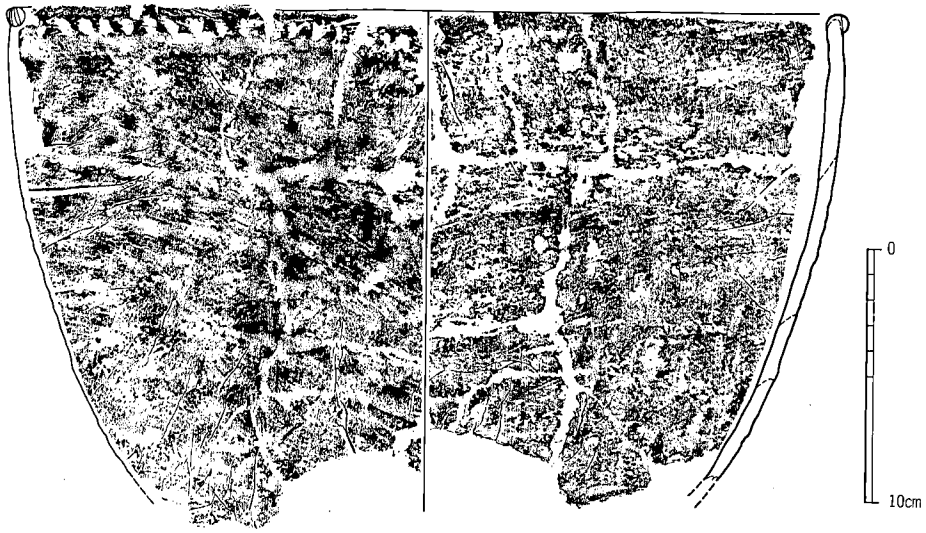


Fig. 27　第8号土壙出土土器実測図（1/3）

形は略円形となるが下端の形状はやや角張っている。晩期土器片多量出土したが，図示できるものは無い。他晩期土壙と同様に黒川式期を前後する頃の所産と考えられよう。

D－8出土深鉢（Fig. 27，PL. 21）

このD－8は，第8号土壙の意味で，既に1986年に「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（6）柿原古墳群II　中巻」252頁に報告したものである。出土土器を今回報告するものである。土壙は42×28cmの楕円形プランで，深さ35cm，下半はフラスコ状断面となる。壙内上半部からこの深鉢大片が出土している。

口径33.2cmで，胴部が丸味を持って口縁へと立ち上がる。口唇部を包み込むような凸帯を付け，大きく雑なヘラによる斜位の刻目を施す。内外面ともに粗雑な横位擦過のままで，粗砂多く含む。1/4残存。この土器は，刻目も古拙な感じで，曲り田(古)式段階のもので，本遺跡では最も新しい時期の稀少例である。

F　早期の土器

ここでは，前節までの遺構に伴わない縄文時代早期押型文土器を中心とした出土土器を報告する。つまり，グリッド設定した範囲でナンバリングして取り上げた土器(出土分布状況はFig. 9参照)，晩期の土壙や住居跡に混入したもの，古墳調査時に墳丘盛土内や周溝・石室埋土内から出土したもの，表土剝ぎや遺構検出作業中に見つけた表採品などが含まれる。

晩期遺物でも同様であるが，特に古墳造営に起因する縄文層の掘削・攪乱による出土品が目

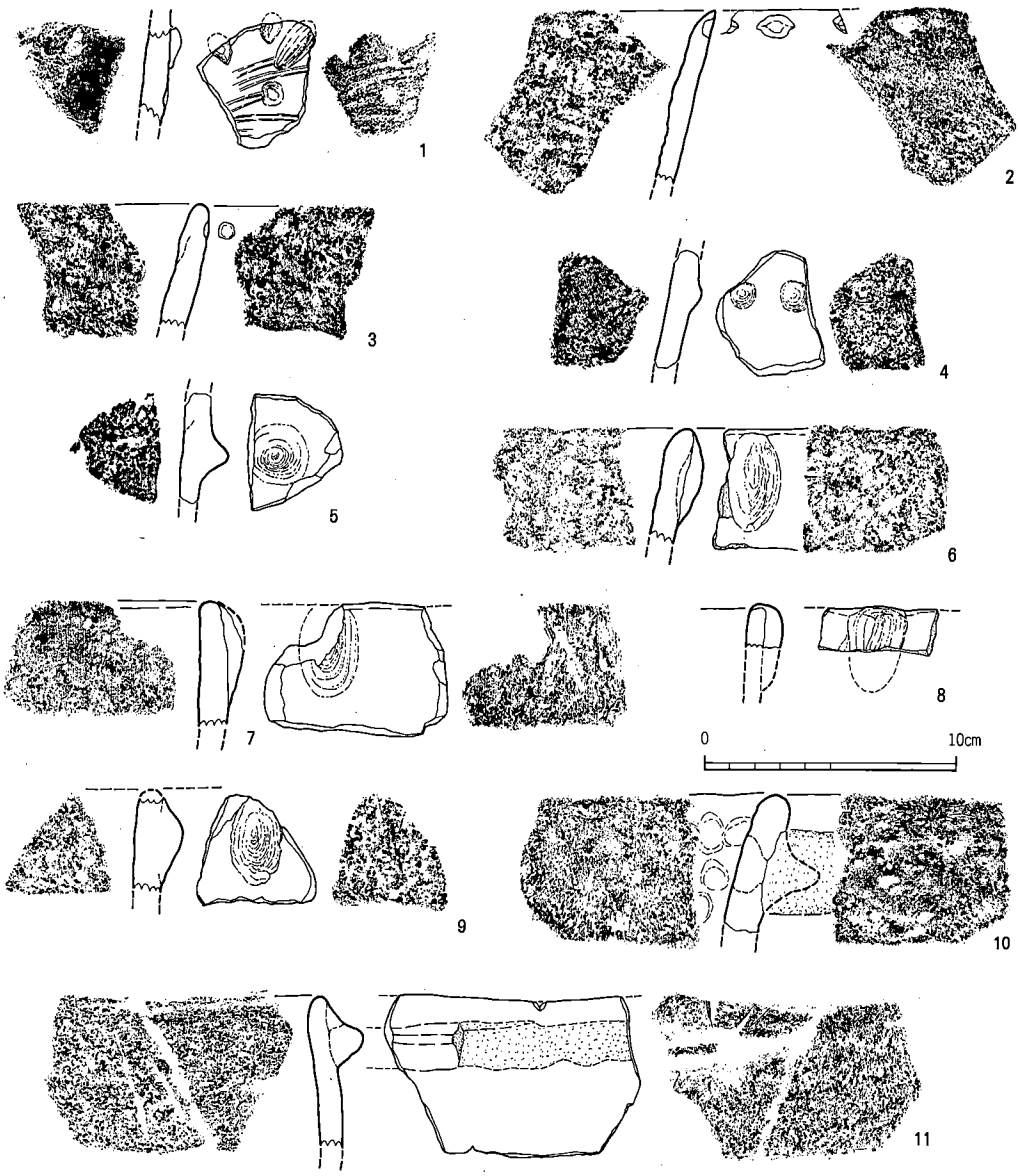


Fig. 28　刺突文・こぶ文・凸帯文土器実測図（1/3）

立ち，本来の原位置を特定し得ないものが多い。良好な資料に限ってそういうことがあり，とても残念である。

早期前後の土器は，Ｂ２グリッドを中心とするＳＸ１集石遺構付近と，Ｂ４グリッド南半からＢ５グリッド北半にかけての部位に集中部分がみられる。また，Fig. 9のドット図には記載していないが，Ａ４グリッドの黄色土下層からその下の暗紫色砂礫層上面に食い込む状態で，

厚手無文土器が多く集中出土した。このようにＡ４・Ｂ４・Ｂ５グリッドを中心とする範囲が当遺跡での最集中部であることがわかる。

また，当遺跡内における，早期前後の土器の層位的関係は，各グリッド毎に，１点毎に層位・レベルまでおさえているが，検討の結果もFig. 6の基本層序模式図に概念的に示した程度にしかわからなかった。ただ，その中ではっきりと確信したわずかな例証は，上述のＡ４グリッドにおける厚手無文土器の出土状況であった。この意味で，当遺跡における層位的最古遺物は，厚手無文土器（こぶ文土器も含めて）がイメージされる。

刺突文土器（Fig. 28—１～３，PL. 11）

１は，アーモンド形こぶ文を貼り付け，周辺に径１cm大の円形・楕円の刺突を施す類。外面地文は横位二枚貝条痕。内面は丁寧なナデ仕上げ。下の円形刺突文は浅いが，上方の２つの楕円形のものは深い。胎土には細砂粒を僅かに含むのみ。４号墳２区周溝内出土。草創期とする「柏原式」の範疇とされよう。

２は，直線的に外傾する口縁直下に，刺突文を連続施文する。２号墳玄室内混入品で，内面は横位条痕の上を横位ナデ，やや凹凸多し。外面は磨滅して調整不明。刺突は上下幅１cm，横幅1.5cmの小指先大の大きめで深いもの。口唇部がシャープに尖り特徴的。細砂粒をかなり含む。１と同じく草創期。

３は，つくりや胎土から，厚手無文土器のうちのやや薄手の部類であり，１・２とは一線を画すべきもの。外面口縁直下に浅めの円形刺突文が１個認められる。Ｄ６-Ｐ２出土品で，内外ともにナデで凹凸多し。

４も，他遺跡例からすると刺突文を伴うものと考えられるが，本例ではこぶ文しか認められないため，とりあえずここでは除く。

こぶ文土器（Fig. 28—４～９，PL. 11）

こぶ文土器１類（４）おそらく口縁部下位と思われるあたりに，直径１～1.2cm，高さ４㎜ほどの小さい円形のこぶを付ける類で，この資料では２個が並ぶ。刺突文等はこの破片では見られない。内面中央付近に横位ヘラナデ状調整が観察できるが，内外面ともに他部位は磨滅して調整不明。細砂粒多く含む。本来刺突文を伴うものなのかもしれないが，とりあえずこの類に入れておく。Ｉ６黄色土出土。

こぶ文土器２類（５）円錐形のとんがり円形こぶを付ける類で，直径2.3cm，高さ９㎜ほどと高い。粗・細砂粒を幾らか含むのみで，外面ナデ，内面は横位ナデか。Ａ２上層出土品。

こぶ文土器３類（６～９）後述する厚手無文土器のやや薄手の類の口縁に接した外面に，縦４cm，幅２～2.4cm，高さ７㎜ほどの楕円形こぶを貼り付けた類。６は６号墳Ⅳ区墳丘内出土。外

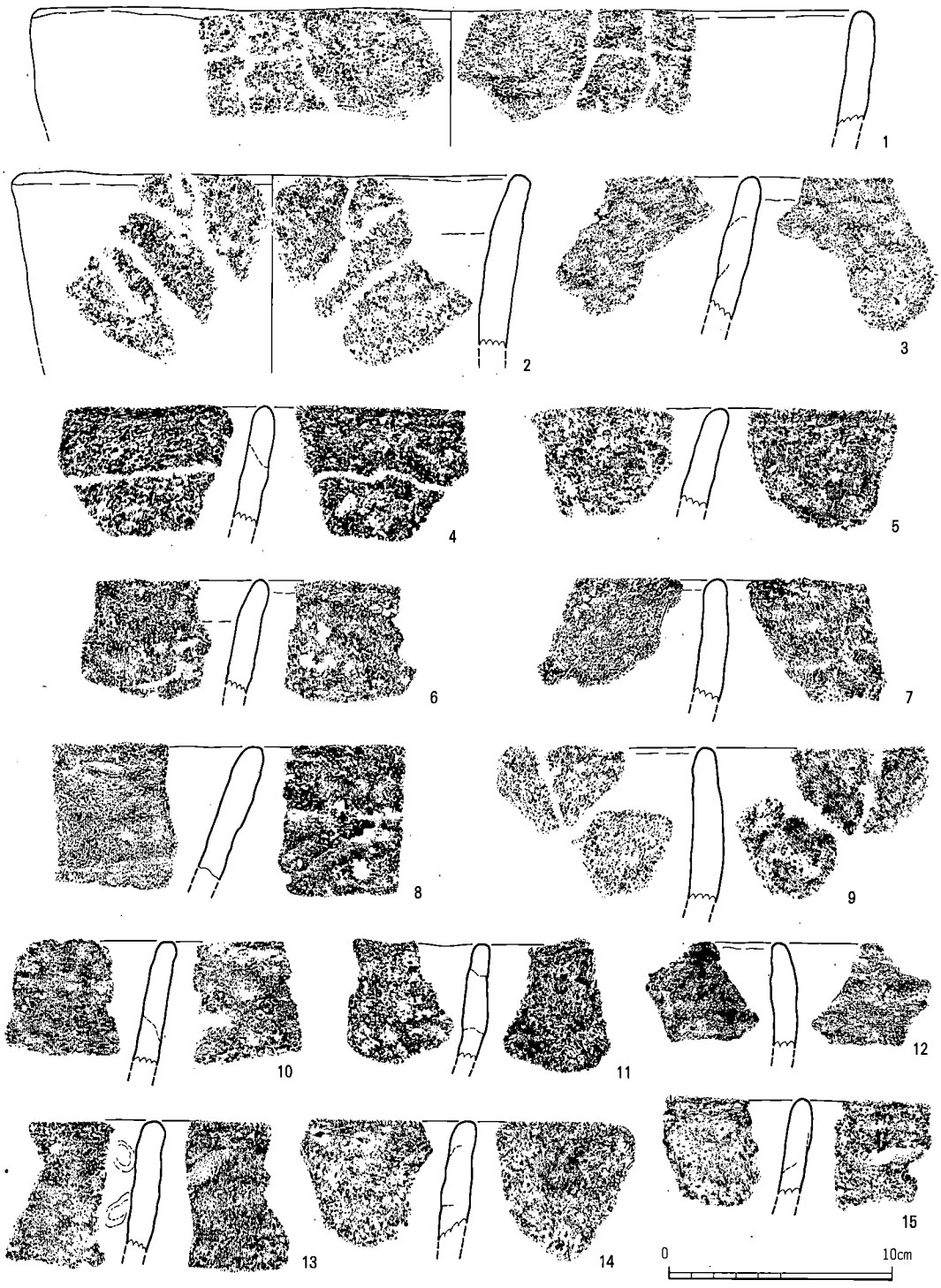


Fig. 29　厚手無文土器実測図（その１）(1/3)

傾して開く口縁となる類で，粗砂僅かに含むが大旨精良で角閃石が目立つ。内外面ナデか。凹凸が多い。7は6号墳北側近辺出土。やや内湾気味のかなり大口径のものとなり，胎土かなり精良だが角閃石微粒目立つ。内外面ナデで指圧痕の凹凸多し。8は3号石室墓壙内出土。薄い器壁の口縁上端に巻き込むようにこぶ文を貼付する。細砂かなり含み角閃石目立つ。他の6・7・9と若干趣きが異り，別類となるかもしれぬ。内外面ナデか。9はF6黄色土上層出土。内外面ナデ，内面は凹凸あり。細砂幾らか含み，角閃石目立つ。

以上，こぶ文を3類に分けたが，1類は連続文であり，文様効果としての発想。2・3類は全周に多くても2～4個程度付くと思われ，把手的な凸起として機能的面も見逃がせず，この両者は基本的な由来・系統において異る類と考える。

凸帯文土器（Fig. 28—10・11，PL. 11）

厚手無文土器の口縁下外面に，幅広く高い大きな凸帯を貼り付ける類で，いずれも貼付技術の未熟さの故にきれいに剝がれている。

10は，C8黄色土上層出土品で，器壁が厚く外反して開く口縁となる。内面指押さえ痕多く，粗砂幾らか含むが目立たない。3.5cm幅で凸帯が剝げており，これと接合しないため図示しなかったが，大きな断面三角凸帯が別にあり，同一個体と思われる。

11は，B5-35出土で，内湾する丸い胴部を持つ器形に断面三角凸帯を付けたもの。凸帯の大半が剝げており，その部分のみ黒い。器表磨滅して調整不明。細砂幾らか含み，角閃石が目立つ。

以上の凸帯文土器は類例を見ないものであるが，胎土・焼成・口縁形態・つくりなどすべての点で，厚手無文土器と共通し，既述したこぶ文土器3類とも共通する類で，少くとも縄文早期を下るものではないことは明らかである。

厚手無文土器（Fig. 29～31，PL. 12・13）

無文であるというマイナーな無特徴の土器という呼称から受けるイメージとは全く正反対の特徴著しい土器群である。薄手だなと感ずるものでも最低1cmの厚さを持ち，胴部片では1.5cmの部厚いものも多い。口縁端はどれも丸くおさめ，内外面とも指押さえの凹凸が多く，他の仕上げ調整技法は無い。細砂粒は含むがわりと胎土精良のものが多い。見ただけでボテボテの厚手無文土器と判かる多特徴類である。

かなり大口径の大型品となるもの（1・7・18・19）と，中型品（2・17）との2種あり，口縁がわずかに外傾気味に開き筒状の器形となりそうなもの（2・6）や，内湾気味となり胴部が丸味を持つもの（7・9・12・18）などの器形による異種も考えられる。

1は，A4黄色土下層出土で，粗細砂幾らか含む。口径38cmと大きい。2はA3黒色土出土

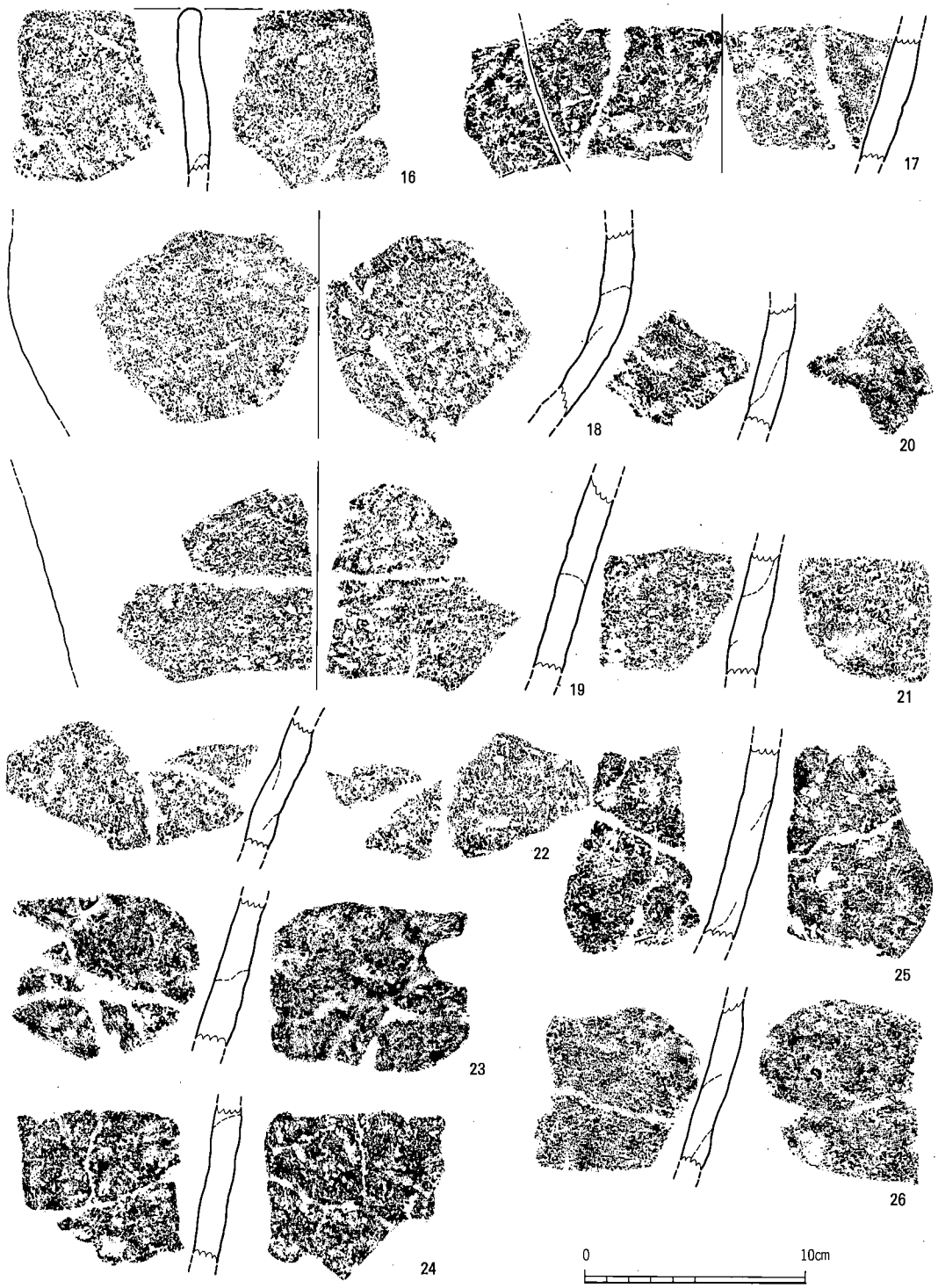


Fig. 30　厚手無文土器実測図（その２）(1/3)

で，粗細砂かなり含む。内面上端付近は横ナデ，他は磨滅。口径23.4cmの中型。３は６号墳II区墳丘内出土で，粗細砂かなり含む。内外ナデで指頭圧痕による凹凸多し。４はＩ６黒色土出土で，粗砂わずかに含む。内外面凹凸多し。５はＡ４黄色土出土で細砂多く含む。表裏とも凹凸多し。６は１号石室Ａトレンチ内出土で，細砂多く含み角閃石が目立つ。内外面手捏ね的で凹凸多し。７はＩ６黒色土出土で，粗砂僅か，細砂幾らか含み，角閃石目立つ。８はＪ６黄色土出土で，粗砂僅か，微細砂多く含み，角閃石が目立つ。下端断面は接合面。外面は特に凹凸多く手捏ね的。９はＡ３黒色土出土で粗細砂かなり含む。10はＡ４黒色土出土で粗砂幾らか含む。11はＢ４-60(黄色土下層出土品)で粗細砂多く含み，赤褐色粒・角閃石が目立つ。内外面指頭圧痕多く凹凸著しい。12はＥ４-41(縄文晩期ピット中混入品)で，胎土精良で内外面にかすかに横位条痕風の痕跡がナデ消されて観察されるため，晩期粗製深鉢の可能性もある。13はＨ６黄色土出土品で粗砂幾らか含む。外面横位の指押さえナデ，内面は指頭圧痕明瞭。14はＢ４-Ｐ２(晩期小ピット)混入品で，粗砂幾らか，細砂多く含み角閃石が目立つ。内外指押圧の凹凸あり。15は５号墳墓道埋土出土で粗石英・赤褐色粒を多く含む。16はＢ４黄色土上層出土で，粗砂幾らか，細砂かなり含み，角閃石が目立つ。内外面指凹凸多し。17はＢ３-124(黄色土出土品)で，細砂僅か含むが大旨胎土精良で，内外面ナデ。内面の方が凹凸多し。18はＡ４黄色土下層出土で，粗砂僅か，細砂幾らか含み，角閃石が目立つ。内外面ともにナデ，指頭圧痕が幾らかある。19はＣ53墓壙掘方埋土中出土品で粗砂多く含む。外面一部に煤付着。外面は一部に横位擦過状部があり，内面は雑な横位ナデ(擦過状)で外面より粗雑。21はＡ４黄色土最下層出土品で1.5cmの部厚いもの。粗砂僅か含み，内外面ナデで凹凸多し。22はＡ４黄色土下層出土品で粗砂僅かに含み角閃石が目立つ。下半部でかなり大きな径となろう。内外面凹凸多く，外面はや

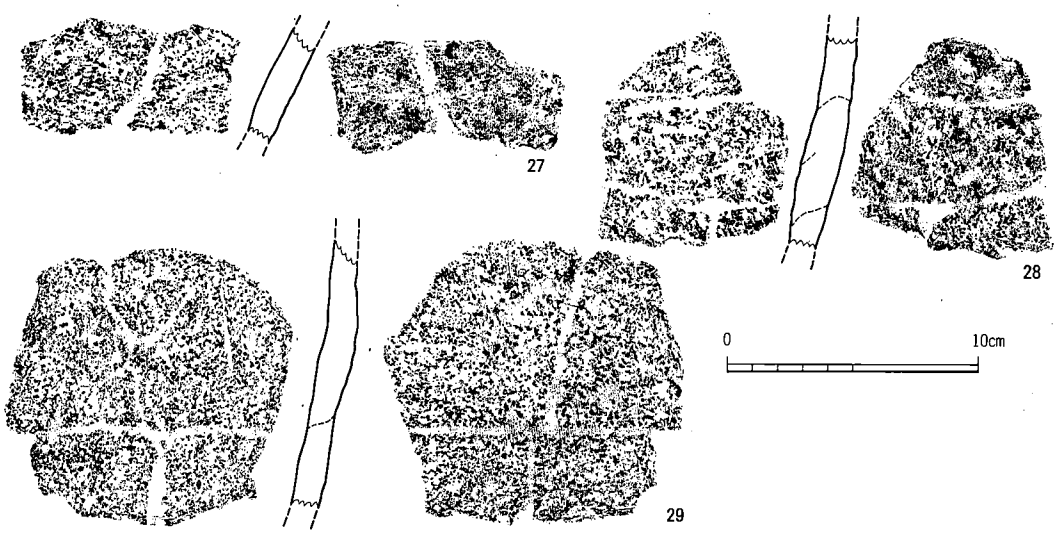


Fig. 31　厚手無文土器実測図（その３）(1/3)

や粗雑。23はＢＣ４黄色土中出土で細砂多く含み角閃石が目立つ。内外凹凸多く，1.6cmと部厚い。24はＢ６-25(黄色土出土品)で，粗砂幾らか含み，内外面指頭凹凸多し。25はＣ53墓壙掘方埋土中出土品で，粗砂幾らか含み，内外面雑なナデで凹凸多し。26はＩ６黒色土出土で粗砂幾らか，細砂かなり含む。内面は横ナデか。外面凹凸多し。27はＣ43東周溝出土。粗砂多く含み，

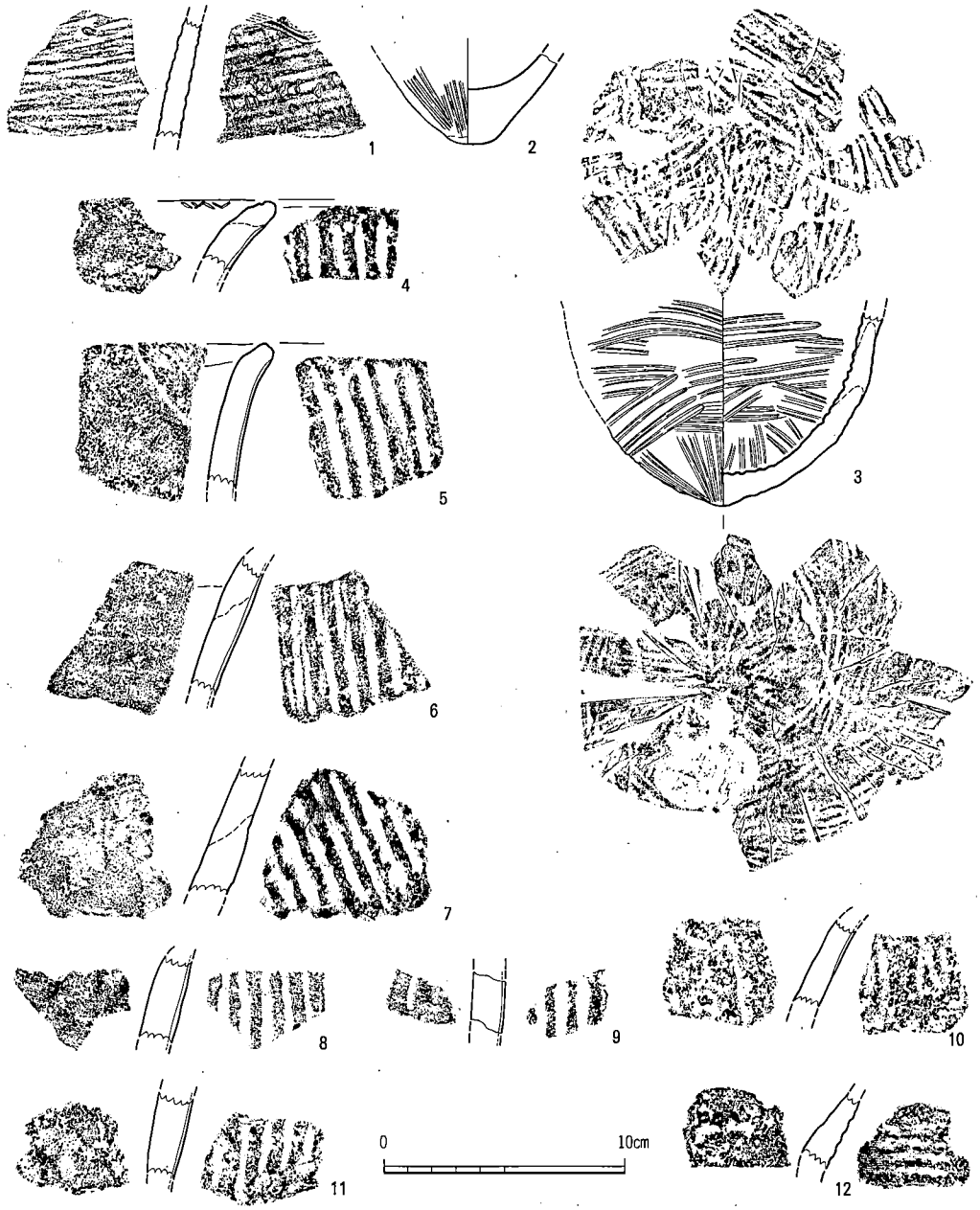


Fig. 32　条痕文土器・外面凹線文土器実測図（1/3）

内外磨滅しており，押型文土器４類の下半部の可能性もある。28はＡ４黄色土出土で粗大石英粒僅かに，細砂幾らか含む。内面かなり剝落，外面は凹凸多い。29はＡ４黄色土下層出土で粗砂幾らか細砂多く含む。角閃石が目立つ。内面指押圧痕多く，外面は未調整風で凹凸多し。

条痕文土器（Fig. 32—１～３，PL. 13・17）

１は，内外面横位アナダラ条痕を施し，外面上端に細沈線曲線文，中央に斜位の貝殻腹縁による刺突連続文を施す類。７号墳Ｉ区周溝内出土品で，細砂かなり含む。貝殻文系土器群の流れに位置付けられよう。

２は，３号墳II区墳裾出土品で，外面に縦位二枚貝条痕を施す尖底部。細砂若干含み，内外面煤付着。底外面と内面はナデ。

３は，Ａ４黄色土下層出土品で，丸く張る胴部に尖底をなす。内外面ともに胴部は横位，底部付近は縦位のアナダラ条痕を施す。特に外面底部の放射状条痕は特徴的である。胴部の接合痕は擬口縁風。粗大な石英粒等を多く含む。層位的に見ても厚手無文土器や押型文土器と同段階のものと考えられる。

外面凹線文土器（Fig. 32—４～12，PL. 13）

４・５や12に見られるように，基本的に押型文土器群中に包含されるものと考えるが，外面の平行凹線が極めて特徴的であるため，ここに別項を立てて報告しておく。いずれも大旨胎土精良で，厚手品の特色を持つ。

４はＳＸ１集石遺構付近出土品で，細砂幾らか含み，口縁内面上端に横位山形押型文，外面に縦位平行凹線を施す。５はＣ２-４（黄色土土壙上層出土品）で，短く折れて外反する口縁内面に山形押型文のような気がする痕跡がみられる。外面にはやや斜位の太い平行凹線文を施す。細砂幾らか含むがかなり胎土精良。６はＥ６-40（黄色土中出土品）で細砂幾らか含む。やや斜位気味の平行凹線文を施す。中途で文様を継いでいる。７はＢ６-77（黄色土最下層出土品）で，細砂幾らか含むが胎土はかなり精良。外面にやや斜位の平行凹線を施す。８はＥ６-Ｐ５（晩期小ピット）出土で，胎土精良。内面は丁寧なナデ，外面に縦位の平行凹線文。９はＥＦ６黄色土出土で細砂幾らか含むがわりと胎土精良。内面ナデか，外面には太い縦位平行凹線を施す。10はＦ５-13（上層出土品）で，細砂多く含み，器表磨滅するが，縦位平行凹線文を施す。11は表採品で，細砂幾らか含み，外面に太い平行凹線文を施す。12は外面に横位の平行凹線文を施すが，楕円形押型文原体による押し引き条痕の可能性がある。角閃石が目立つが胎土精良で，内面はナデ。基本的に４～11までのものとは異る類。

４～11は，他例を聞かず，押型文土器群の亜流として「柿原タイプ」と呼称できよう。

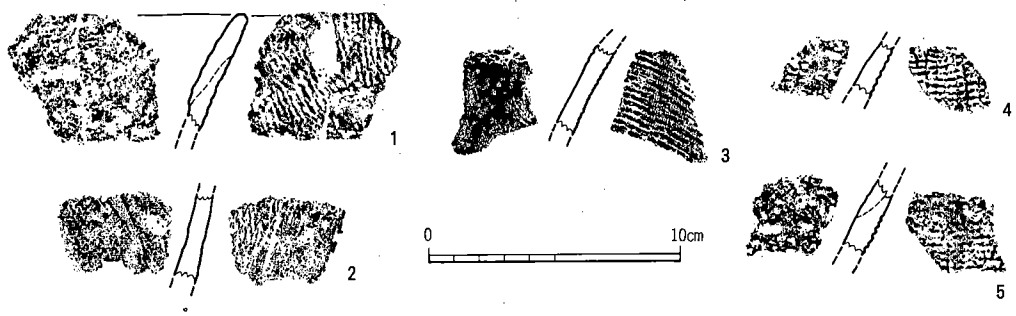


Fig. 33　撚糸文(1･2)，撚糸文十押型文(3)，格子目押型文(4･5)土器実測図 (1/3)

撚糸文土器 (Fig. 33—1～3，PL. 17)

1は，B6-8(黒色土出土品)で，外面に縦位撚糸文を施し，内面は横位ナデか，凹凸多し。粗細砂かなり含む。内面下端の段は部分的なもの。

2は，B5-37(黄色土出土品)で，外面に縦位撚糸文を施し，内面はナデで凹凸あり。粗砂をかなり含む。

3は，I6出土品で，外面に斜位の撚糸文を施し，内面上端には6～7×2～2.5㎜大の小さな横位楕円形押型文がみられる。胎土に細砂粒を幾らか含み，内面は横ナデ調整。押型文と撚糸文の合体類。

格子目押型文土器 (Fig. 33—4・5，PL. 17)

4は，A3出土品で，外面に横位格子目押型文を施す。格子は2.5～3×1～1.5㎜大と小さいもの。内面は剝落しているがナデか。細砂幾らか含むのみ。

5もA3出土品で，外面上半は無施文部分，下半に横位の小さい格子目押型文を施す。内面かなり剝落しているがナデか。細砂幾らか含むのみ。

押型文土器1類 (Fig. 34，PL. 14)

外面に小さい横位楕円形押型文(4～6×2～3㎜)を施し，口縁内面にも横位楕円形押型文を施す類である。胴部片については，楕円粒の大きさで2類と区別した。

1はB1-P1(黄色土小ピット)出土品で，内面に横位楕円形押型文，外面は横ナデで無施文帯。粗砂僅かに含む。2はB4-24(黄色土出土品)で，内面上半と外面に横位穀粒文押型文を施す。細砂幾らか含むが精良。3はD3-6(黒色土出土品)で，内面下端が無施文部分となっているがそれよりも上方には横位楕円形押型文，外面はナデ。粗砂僅かに含む。4はE4-49(黄色土土壙内出土品)で，内面上半は無文部で下半と外面に横位楕円形押型文を施す。粗石英若干含む。5はB5-P2(晩期小ピット)出土で内外ともに横位楕円形押型文。細砂幾らか含む。6はC9南東暗褐色土出土品で，外面上半に横位穀粒文押型文を施し，下半は無文。内面は丁寧な

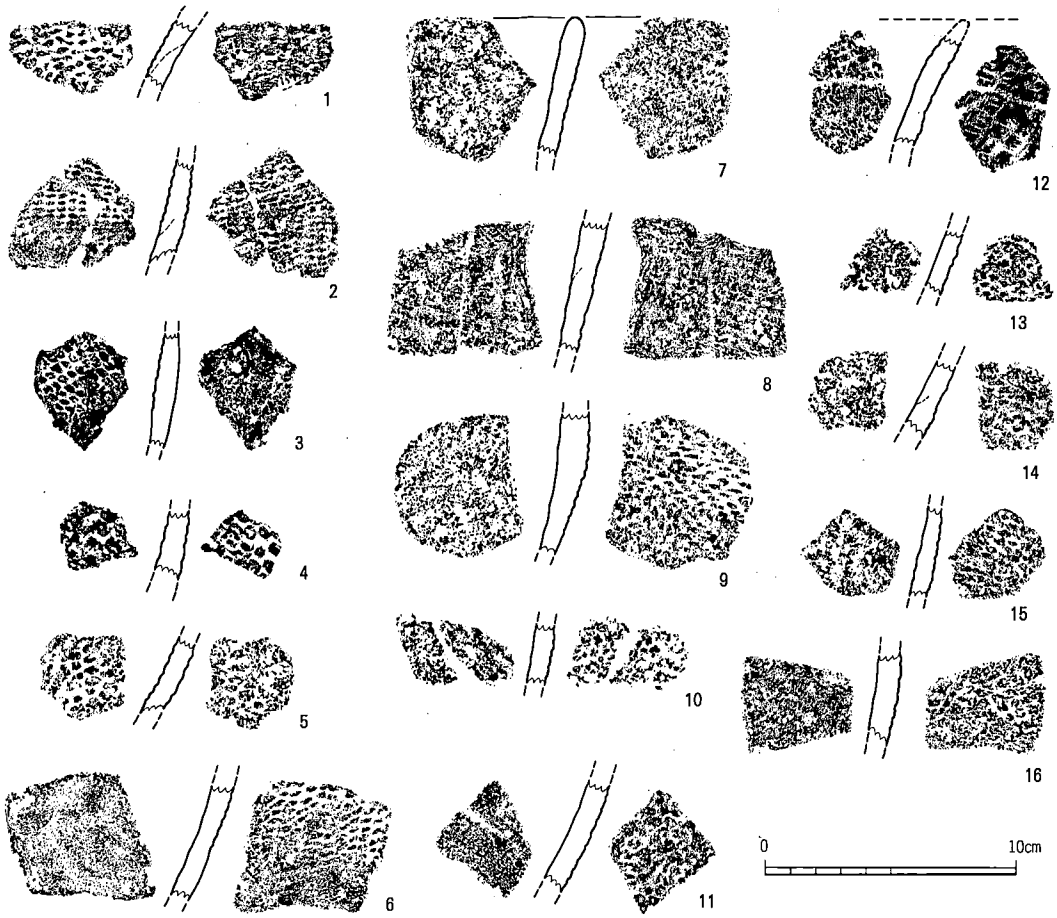


Fig. 34　押型文土器１類実測図（1/3）

ナデ。細砂幾らか含み，角閃石が目立つ。７はＢ２・３黄色土出土品で外面の口縁から1.6cm下がった位置から下に横位穀粒文押型文を施す。内面は磨滅。粗砂多く含む。８はＢ６-36(黄色土出土品)で，極めて不明瞭であるが外面にやや右下がりの小さい楕円形押型文を施す。内面はかなり剝落。細砂多く含み，角閃石が目立つ。９は４号墳Ｂトレンチ墳丘内出土品で，外面下端が無文部になるがそれ以上は横位楕円形押型文を施す。内面は横位ナデか。石英・長石等の粗砂粒を多く含む。10はＳＸ１集石付近北側出土品で，外面に斜位の穀粒文押型文を施す。内面はナデか。粗砂かなり含む。11はＥ６上層(黒色土)出土品で，外面に横位楕円形押型文を施し，内面はナデ。細砂かなり含む。12はＡ３黒色土出土で，外面に横位の菱形に近い楕円形押型文を施し，内面上端に横位の小さめの楕円形押型文を巡らす。細砂かなり含む。13はＡ３黒色土出土で，外面に横位の穀粒文押型文を施す。細砂僅かに含み内面はナデか。14はＢ５-68(黄色土下層出土品)で，外面に横位楕円形押型文を施す。内面はナデか。細砂多く含む。15はＢ４

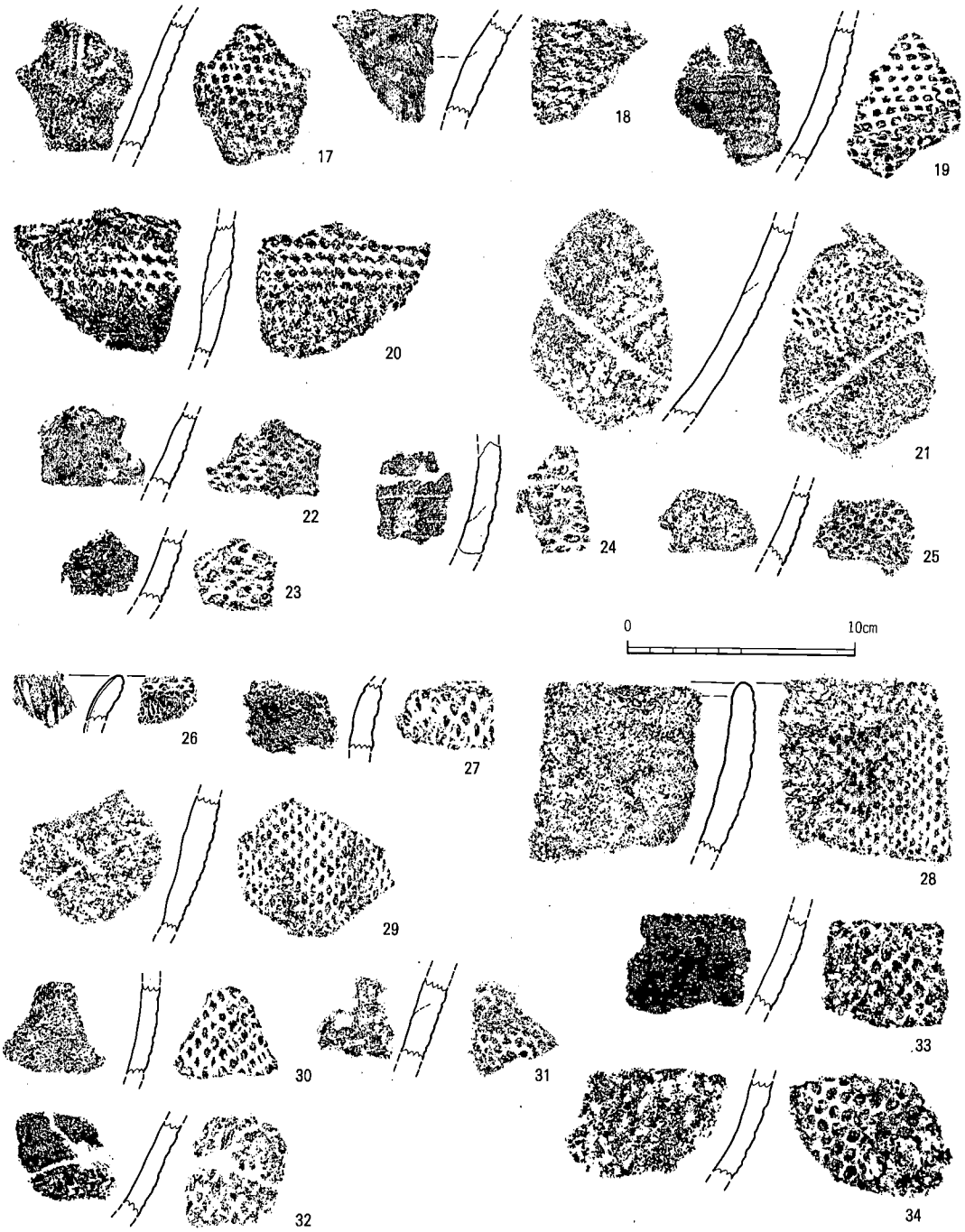


Fig. 35　押型文土器 2 類・ 3 類実測図 (1/3)

黄色土上層出土で，外面に横位穀粒文押型文を施す。粗砂少量含み，内面はナデか。16はＣ３周溝内出土品で，外面に横位楕円形押型文を施す。細砂多く含み，内面はナデか。

以上の１類は，稲荷山段階のものの他，胴部片の中には早水台段階のものも含んでいよう。

押型文土器２類（Fig. 35—17～25）

外面横位楕円形押型文土器のうち，口縁内面に縦位原体条痕を有するもの，楕円粒の大きさが７～５×３～５㎜の中型のものをこの類として１類と区別した。

17はＥ６上層(黒色土)出土品で外面にやや右下がりの横位楕円形押型文，内面上端に不明瞭であるが縦位の原体条痕を施す。内面はナデで細砂を多く含む。18はＢ１－Ｐ１(黄色土ピット)出土で，外面に横位楕円形押型文，内面はやや斜位の横ナデ。細砂幾らか含む。19はＩ５黄色土出土で，外面に横位の菱形・平行四辺形気味の楕円形押型文を施し，内面は横ナデ。粗砂幾らか含み，外面上半に煤が付着。20はＥ４－３(黒色土出土品)で，内外面の上半に横位楕円形押型文を施し，内外下半はナデ調整。粗石英・雲母等多く含む。21はＢ４-14(黄色土出土品)で，外面上半のみにやや斜位・横位の穀粒文押型文，下半と内面はナデか。粗・細砂かなり含む。22は11号墳Ｉ区周溝内出土品で，外面に横位楕円形押型文を施すが上端と下端部は無施文となる。内面はやや斜めのナデ。粗大石英粒を幾らか含む。23はＪ６黄色土最下層出土品で細砂多く含む。内面はナデ。24はＢ２-50(黄色土出土品)で，外面に横位楕円形押型文，内面は横ナデ。細砂多く含む。25は表採品で，外面は細身(７×３㎜)の横位楕円形押型文を施す。内面はナデで，細砂多く含む。

押型文土器３類（Fig. 35—26～34）

外面に縦位の楕円形押型文を施し，楕円粒の大きさが４類のように粗大でないものをこの類とした。楕円粒は５～７×３～６㎜と大小の幅がある。

26はＪ５出土品で，内面に縦位の原体条痕，外面上端に横位の楕円形押型文，以下に縦位のそれが施される。粗砂僅か，細砂幾らか含む。27はＢ２-58(黄色土出土品)で，内面上端に横位の，外面に縦位の楕円形押型文を施す。細砂多く含む。28はＢ４-25(黄色土出土品)で，やや内湾気味に立ち上がる口縁となる。内面はやや凹凸が多く横ナデか。粗砂多く含み，外面に煤がこびりつく。29はＢ４-16(黄色土出土品)で，内面磨滅。粗砂多く含む。外面に煤が付着し，28と同一個体となろう。30は４号石室埋土中出土で，粗砂少量含み，内面は丁寧なナデ。31はＡ４黒色土出土で，細砂多く含み，内面は横位の粗いナデ。32はＪ６黄色土出土で，外面に縦位・斜位の中型楕円形押型文を施す。細砂多く含み，内面はナデ。33はＦ６黄色土出土で，内面は丁寧なナデ。粗砂幾らか含む。34はＣ７－７(黒色土出土品)で，外面に縦・斜位の楕円形押型文を施し，内面は磨滅。粗細砂をかなり含む。

押型文土器４類（Fig. 36・37，PL. 15・16）

口縁が大きく開き，内面に長い縦位原体条痕を施し，外面に斜位～縦位の粗大な楕円形押型文（７～10×４～８㎜）をみせる類で，本遺跡では既述のＳＸ１集石遺構出土品（Fig. 12）とともに最も多い新段階の類である。

35は，ＳＸ１集石遺構の集石炉２内出土品で，本来Fig. 12に掲載すべきものである。復元口径28cmとなる。内面に長く原体条痕を施し，外面の上から2.5cmの間は無施文で，以下に斜位の10×７㎜の粗大な斜位楕円形押型文がみられる。粗細砂かなり含む。36は表採品で，外面に不

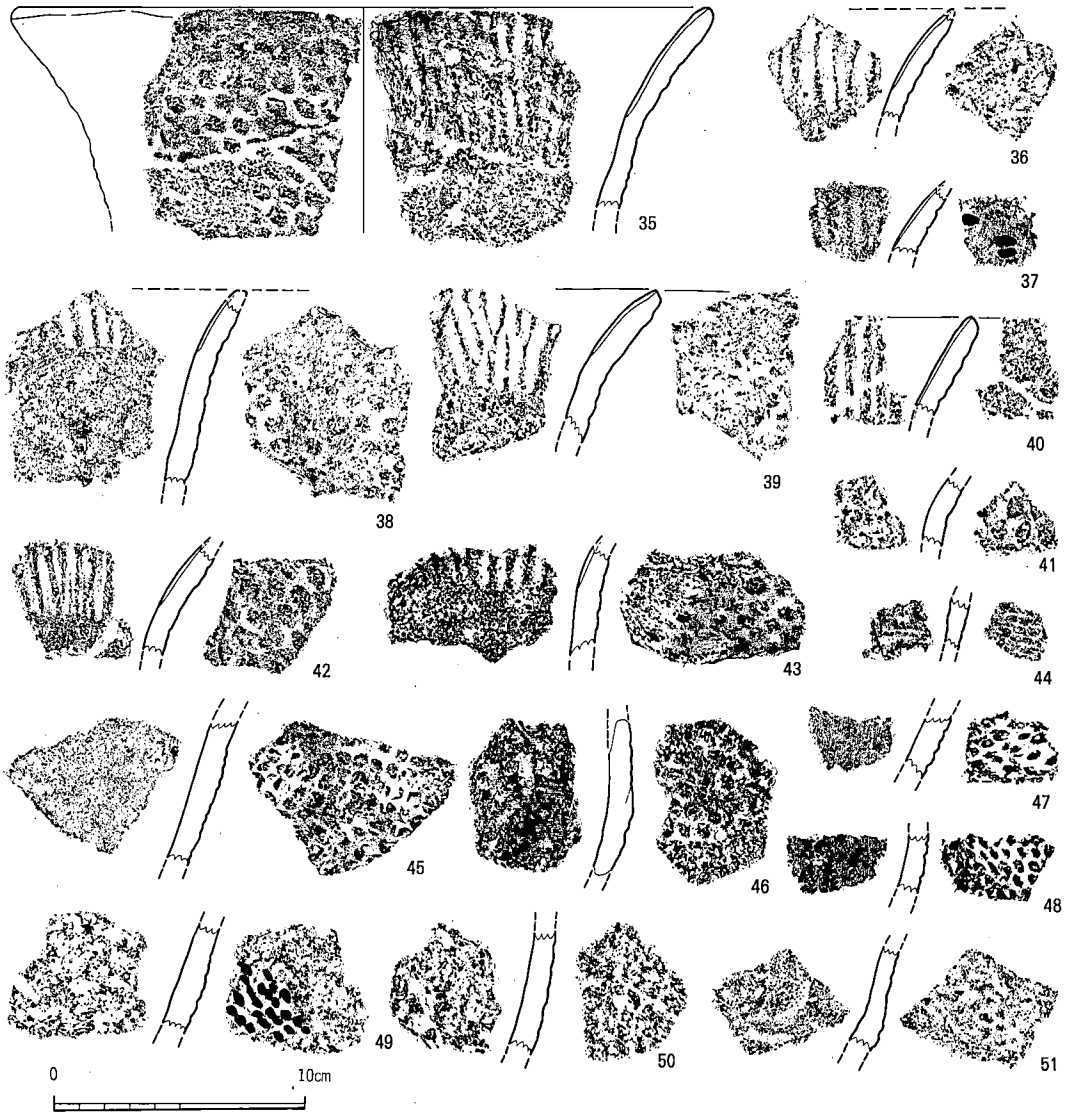


Fig. 36　押型文土器４類実測図（その１）（1/3）

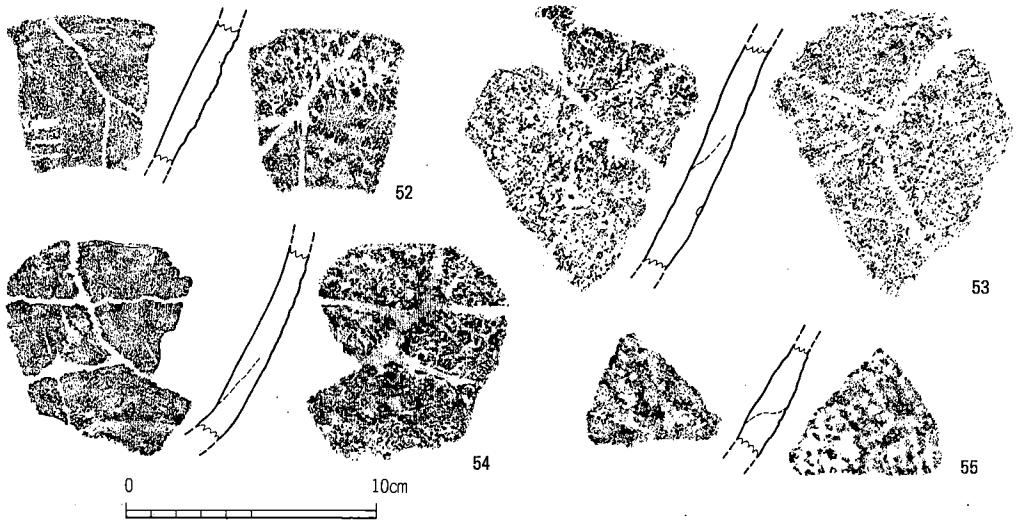


Fig. 37　押型文土器４類実測図（その２）(1/3)

明瞭な大きな楕円形押型文を施す。粗細砂かなり含む。38はC10墓壙出土品で，外面はかなり剝落しているが横位の粗大な(９×７㎜)楕円形押型文を施し，粗砂かなり含む。39は表採品で，外面は著しく剝落して不明瞭だがやや右下がり斜位の楕円形押型文(10×６㎜)を施す。粗細砂多く含む。40は集石付近北東側出土品で，内面は原体条痕，外面は不明瞭だが大きい楕円形押型文を施す。粗砂多く含む。41は集石付近北東側出土で細砂多く含み内面はナデか。42はＢ３黄色土出土で粗細砂多く含む。43はＣ９北東土壙出土で内面下半はナデ。粗砂かなり含む。44はＢ４黄色土上層出土で外面にやや斜めの横位楕円形押型文を施す。胎土精良で内面はナデか。外面に煤付着。45はＩ６黒色土出土で，外面上端は無文部分，内面は丁寧なナデ。粗砂幾らか，細砂多く含む。外面煤付着。46はＤ７-18(黒色土出土品)で，外面には斜・縦位の楕円形押型文を施し，内面は横ナデ。粗砂・赤褐色粒を多く含む。47はＢ１-Ｐ１(黄色土ピット)出土で，細砂多く含み，内面は横ナデ。48は４号墳III区墳丘内出土品で，粗砂かなり含み，内面はナデて平滑となる。49はＢ３-147(黄色土出土品)で，細砂多く含み，内面の器表は剝落。外面左下半のみ右下がり斜位の楕円形押型文。右上半は無施文。50はＢ４出土で，外面には縦・斜位の大きな楕円形押型文(９×６㎜)，内面は磨滅。細砂かなり含む。51は６号墳II区墳丘内出土で，内面は凹凸多くナデか。外面は右下がり斜位の押型文。粗砂多く含む。52はＦ３黄色土上層出土で，内面は横位ナデ。外面上半のみ斜位押型文，下半はナデか。細砂幾らか含むのみ。53はＣ43東周溝出土で，外面荒れて不明瞭だが上端にわずかに斜位の楕円形押型文が見える。内面も剝落著しい。粗細砂多く含む。54はＣ９-Ｐ５(黄色土土壙)出土品で，外面上半のみに斜位の楕円形押型文(７×５㎜)，下半はナデ。内面はかなり丁寧な横ナデ。粗砂かなり含む。55は７号墳Ｉ区墳丘内出土で，外面の上端部と１cm幅の無施文部の下に斜位の楕円形押型文を施す。

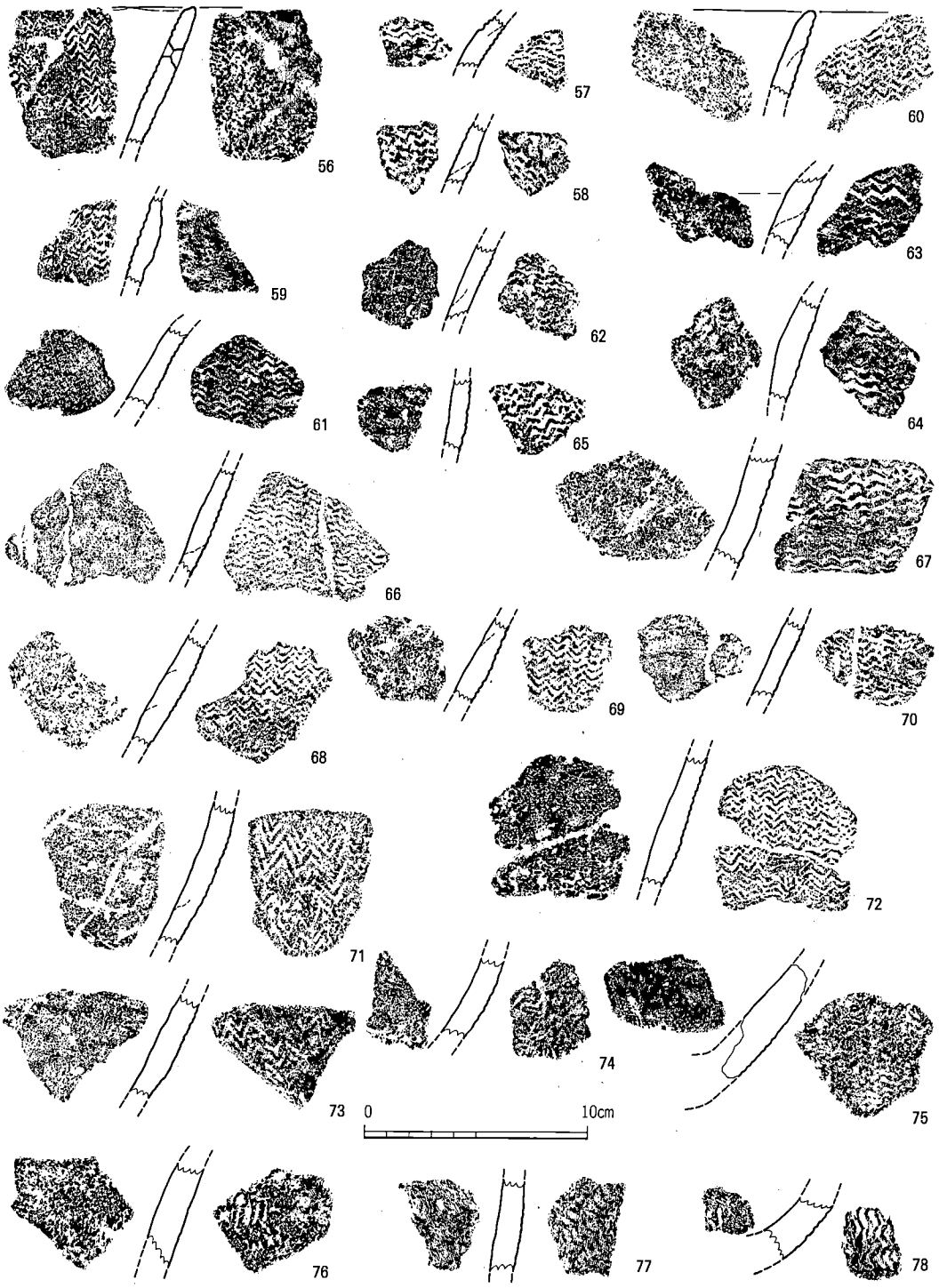


Fig. 38　押型文土器 5 類・ 6 類実測図 (1/3)

内面は横・斜位のナデ。粗砂若干含む。

押型文土器5類（Fig. 38—56～75，PL. 16・17）

山形押型文を横位に施すものをこの類としたが，器壁が薄くて小さい押型文のもの(56～62・66・69・70)は押型文前半段階に，他の厚くて大きな山形押型文の類は後半段階に位置付けられよう。

56はA3黒色土出土で，外面口縁下1.5cm間は無施文，その下にかなり不明瞭だが横位山形押型文を施す。内面口縁下4.8cm間も小さい横位山形文を施す。補修孔があり，粗砂幾らか含み，角閃石が目立つ。57はA4黄色土出土で，内面上端と外面に横位山形押型文を施す。粗砂僅かに含む。58はI7黄色土出土で，外面上半は剝落，下半にやや斜位の山形押型文。内面下端はナデ。粗砂かなり含む。59は表採品で，外面は極めて凹凸多く，磨滅のためか無文。内面は山形押型文の帯状施文で，上下両端が無施文部となる。細砂幾らか含む。60は6号墳III区墳丘内出土で，内面と外面の下端部分は無施文。粗砂多く含む。61はI6黒色土出土で，細砂多く含み，角閃石が目立つ。内面はナデか。62はA3黒色土出土で，外面上半に横位山形押型文，下半は無施文。内面は横位ナデ。細砂幾らか含む。63はJ6黄色土出土で，外面は幾らか大きめの山形押型文。内面中途には稜を作り，ナデ調整。粗砂僅か含む。64はD6-3（黒色土出土品）で，内面はナデ，外面の原体は63と同じ。粗砂若干，細砂多く含む。65はE4・5黄色土出土で，内面は横位ナデ。粗砂僅か含む。66はH7黄色土上層出土で，薄手で細かい山形押型文を施す。内面はナデか，やや凹凸あり。粗細砂多く含む。67はJ6黄色土出土で，粗細砂多く含む。外面下半に幅1cm程の無施文部がみられる。押型文は63・64の原体と同じ。内面はナデで角閃石が目立つ。68は6号墳石室内埋土中出土で，外面下半に幅1cmの無施文帯があり，最下端には再び横位山形文が施文されている。粗大石英粒幾らか，細砂多く含み，内面は横位ナデか。69はA4黄色土下層出土で，粗砂幾らか，細砂かなり含む。角閃石が目立つ。内面横位ナデ。70はC30埋土中出土で，粗砂若干含み，内面は横位ナデ。71はB3-30(黒色土出土品)で，外面に一単位の長さ1.5cm，幅1.6cmの粗大な横位山形押型文を施す。細砂多く含み，内面横ナデか。72はB5-10(黒色土出土品)で，粗砂多く含み角閃石が目立つ。内面はナデ。73はC10墓壙内出土で，内面上半は横位擦過状をなし，以下はナデか。細砂幾らか含むが大旨胎土精良。74はC4-P3（晩期の穴)出土で，外面にほぼ横位の山形押型文を施し，内面は横ナデ。細砂幾らか含む。75は底部近くの部厚い部分で，C5-15(黄色土出土品)で，外面下半に横位山形押型文のやや細かいものを施す。内面は横位ナデ。細砂多く含む。

押型文土器6類（Fig. 38—76～78）

山形押型文を縦位に施すものをこの類とした。器壁が厚く，山形文も粗大であり，押型文後

半期の中でも新しい段階のものとされよう。ただ，この3点に限ってみれば，手向山Ⅰ式或いはそれに直結してゆくような前段階の器形を持つものになるとは考えられない。

76はC 4－9（黒色土出土品）で，器壁が1.4cmと部厚く，外面に縦位の伸びきった山形押型文を施している。細砂多く含み，内面はナデか。77は4号墳Ⅳ区墳丘内出土で，細砂多く含む。内面はナデか。78はD 6上層出土品で，細砂をかなり含む。底に極めて近い部分で，内面はナデ。

早期土器底部（Fig. 39）

既に押型文・条痕文等の施文された底部については各々の項で報告した。ここでは，残存するこの部位に施文の見られないものをとり上げる。

1は，C 3周溝内出土品で，鋭い尖底をなしている。細砂幾らか含むが大旨精良。内外面ともナデ。2はF 5黄色土上層出土で，底がやや丸味を持ち，全体に薄手。粗砂やや多く含み，内面はナデ，外面は磨滅。内底部には指押さえ痕が残る。3はE 7－3（上層出土品）で，細砂多く含み，角閃石が目立つ。外面は強い押さえナデ，内面にも指頭圧痕が残る。4はC 2墓壙内出土品で，内外面わりと丁寧なナデ。粗砂幾らか，細砂かなり含む。胴部下半でも1.2cmと部厚く，厚手無文土器の底部の可能性がある。

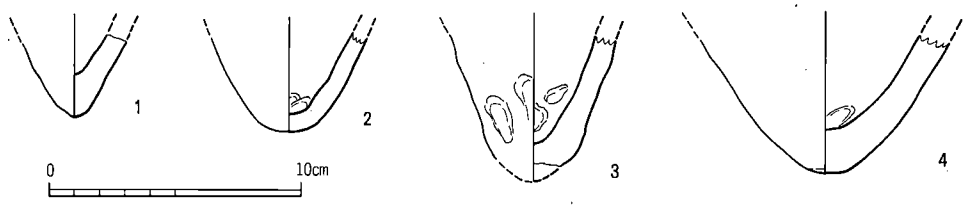


Fig. 39　早期尖底実測図（1/3）

G　晩期の土器

ここでは，既に前述した竪穴住居跡・晩期土壙・集石遺構に混入の晩期土器・黄色土埋土土壙に混入した晩期土器等を除いたものをとり上げる。即ち，各グリッド出土のもの以外にも，各古墳・石棺系竪穴式石室の墓壙内・周溝内・墳丘各トレンチ出土のものも多い。

層位的に，各グリッド出土品で検討してみたが，黒色土・暗褐色土が薄く，黄色土最下層まで晩期土器が混入していることもわかり，上下間での明確な型式差をつかむことができなかっ

た。よって，これらをまとめて，器種別に総合して分類したい。

時期的な出土量の違いを概説する。縄文後期としてもいいのではないかと思われるものが数点ある。次に御領系の晩期初葉のものがごく僅かみられ，晩期中葉の入佐式段階のものが全体の１割程度となる。黒川式から刻目凸帯文土器の夜臼古段階までが当遺跡の圧倒的多数を占めており，うち黒川古段階は少ない。よって大多数は黒川式新段階・礫石原式・山ノ寺式・曲り田(古)式といった従来の型式名の範囲に収まるものである。

精製浅鉢１類（Fig. 40，PL. 18）

御領式土器の系統の中で押さえられる晩期初葉～前葉の過渡的段階のものである。

１ａ類（１）丸く外反する口縁の外面に太い凹線を２本巡す類で，下端の屈折部外面には沈線が施される。細砂かなり含み，内外面ともに横ヘラ磨き。７号墳II区墳丘内出土。口径35cm。

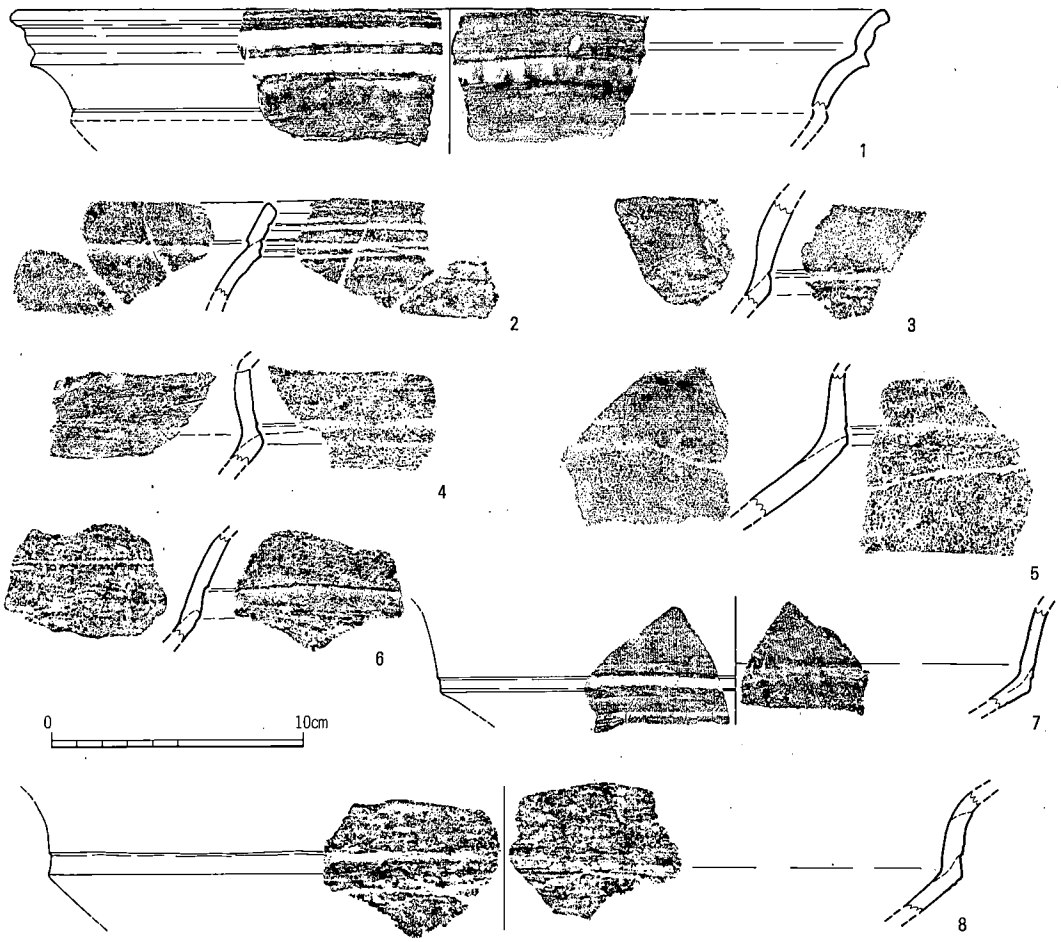


Fig. 40　精製浅鉢実測図（その１）(1/3)

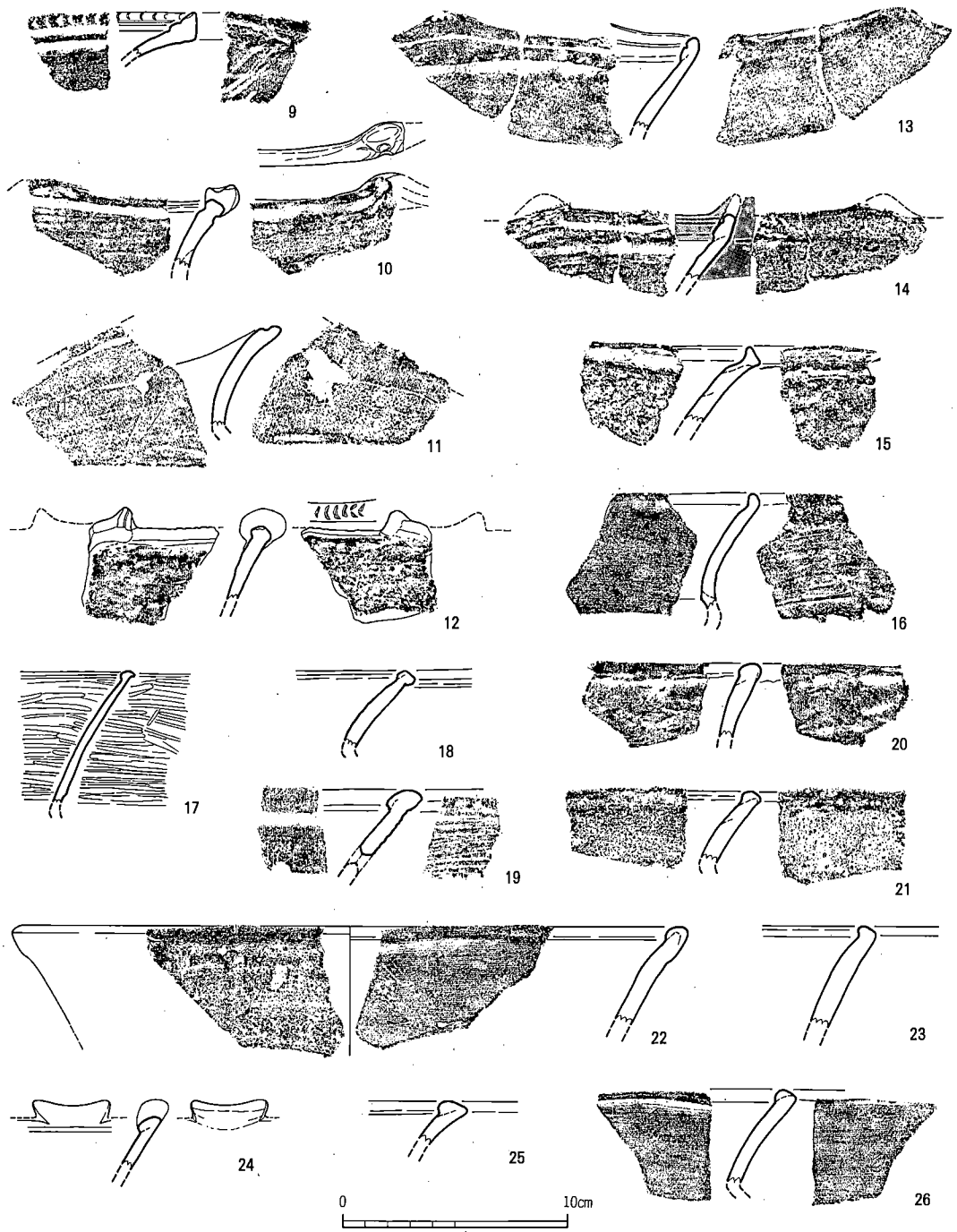


Fig. 41　精製浅鉢実測図（その２）(1/3)

1 b類（2）口縁外面が3条の沈線文となる類で，内面屈折部は段状となる。内外面横ヘラ磨き。細砂多く含む。D 7-6（上層出土品）。

体部 a類（3～5）体部屈折部外面に沈線を施し，屈折部から上があまり外に開かずに外傾して立ち上がる類。上記1 a類に対応しよう。3は表採品で，細砂多く含む。屈折部から上の内外面は横ヘラ磨き，下の内面は横ナデ，外面は横位擦過の上をナデ。4はC32周辺包含層出土で，細砂多く含む。内面は横位ナデ，外面はやや粗いナデか。断面上端は接合面。5は表採品で，粗細砂多く含み，内面と外面の屈折稜から上はヘラ磨き，下は横位擦過の上ナデ。

体部 b類（6～8）屈折部外面に明瞭な段をつくり，a類よりも外方へ開く類で，薄手のものが多い。上記1 b類に対応しよう。6はD 8-7で細砂多く含む。内面は横位条痕の上をナデ消し，外面の段より上は横位擦過の上をナデ，段から稜までは横位ナデ，稜から下は雑な擦過と思われる。7はF 6-15で，胎土精良。内外面とも横ヘラ磨き。8は大型品で，G 4黒色土出土。粗砂かなり含み，内面は雑な横ヘラ磨き，外面はやや粗雑だが横ナデか。半精製品。

精製浅鉢 2 類（Fig. 41・42，PL. 19・20）

口縁が長く大きく開くもので，体部で屈折して底へ至るものをこの類としたが，屈折した下半が丸く張った胴部となるものもあるかもしれない。口縁内端を突出させて玉縁状口縁とするものが大部分を占めるが，その他の形状のものも含めて5種に細分した。各々時期差がある。

2 a類（9）口縁上面を肥厚させ，その上面の中央に沈線を巡らせ，沈線と口唇上端間に半裁竹管状の刺突文を連続させている。内面は丁寧なヘラ磨き，外面はナデで一部分ヘラ磨き。胎土精良で，C 8石棺系竪穴式石室内出土。異類で型式名・時期の見当がつかない。後期か。

2 b類（10・11・13・14）内面に沈線を入れて波状口縁となるものをこの類とした。13・14を2 b類とし，10のように内外双方に沈線を入れるものと11のように内面を肥厚させないまま沈線を入れたものなどを2 b′類としてこの類の中にとりあえず入れておく。13はC32周辺包含層出土で，細砂かなり含み，内外面とも横ヘラ磨き。14はF 6第1層出土で，内面肥厚部から外面に濃赤茶色の赤色顔料を塗布している。粗砂少量，細砂多く含み，内外面ともにかなり雑な横ヘラ磨きを施す。**2 b′類**とした10は，H 6黒色土出土で，粗砂幾らか含み，内面は横ヘラ磨き，外面は横位擦過の上を横ヘラ磨き。凸起部上端面には大小2つの凹点を施す。11は7号墳III区墳丘内出土で，大きく波状口縁となる類。細砂多く含み，内外面とも横ヘラ磨き。

2 c類（12・15～29）口縁内端を肥厚させて玉縁状につくる類である。更に細分して4種に分ける。

2 c-1類（15・16・23）は，口縁内端が上方へ尖り気味に突出するタイプで古段階と考えられる。15はF 6黒色土層出土で，細砂多く含み口唇外側面から内面は横ヘラ磨き，外面は丁寧なナデか。16は上端がやや丸くなるもので，5号墳IV区墳丘内出土。胎土精良で内面下位の稜ま

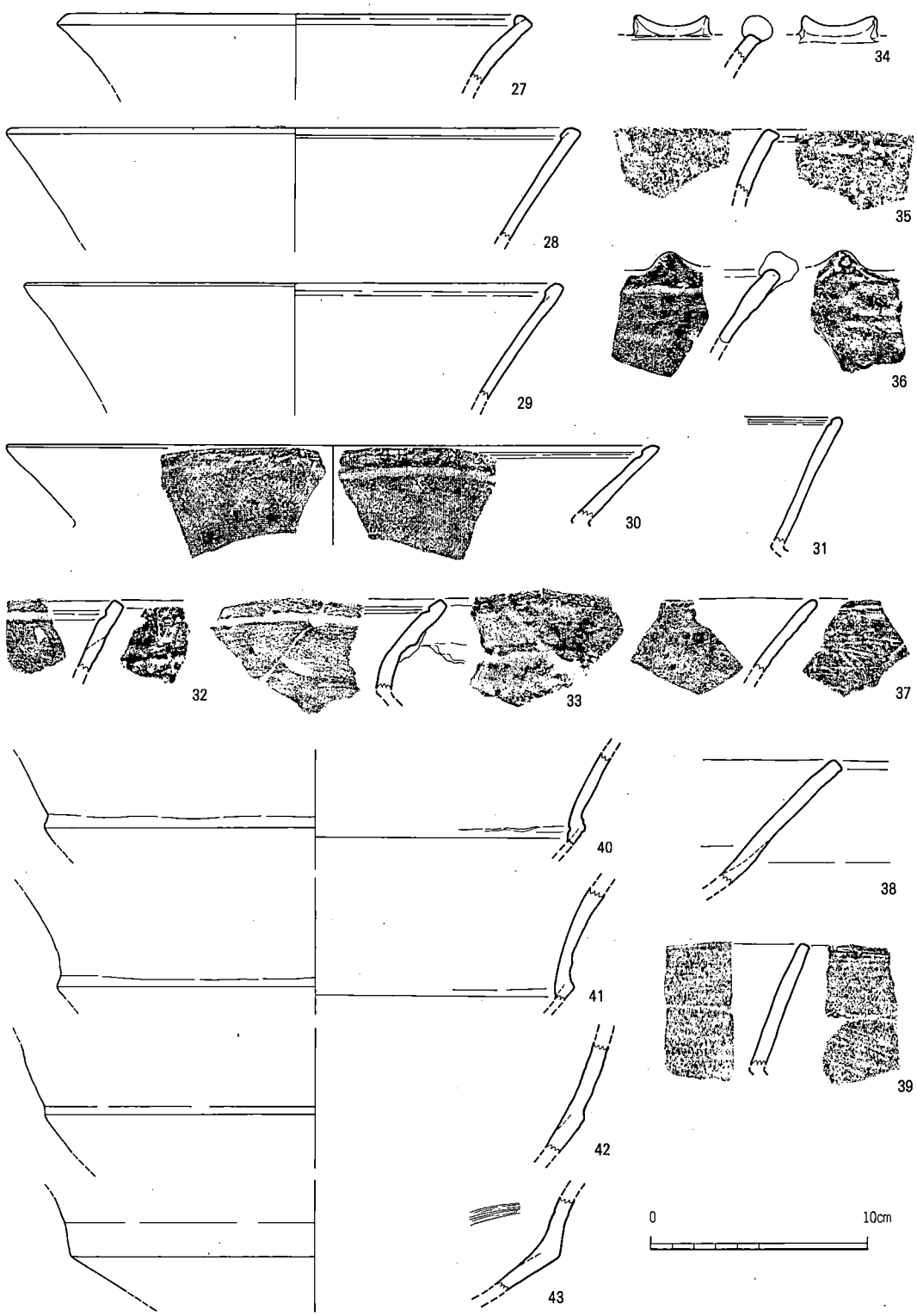


Fig. 42　精製浅鉢実測図（その３）(1/3)

では横ヘラ磨き，以下内面は横位削り状擦過。外面は横位ヘラナデ状。23はＥ６－９で，細砂を幾らか含み，内外面横ヘラ磨き。**２ｃ－２類**(17・19～22・24～27)は丸く玉縁状口縁となる類で量的に多い。17はＦ５黒色土出土で，胎土精良，内外面横ヘラ磨きの極薄手精品。外端が小さく突出する。19は大きな玉縁状となる類で，６号石室内埋土中出土。外面に横位条痕を残し，玉縁部から内面は横ヘラ磨き。細砂かなり含み，両面からの穿孔による補修孔がある。20はＨ７黒色土出土。粗砂少なく，外面横ナデ，内面は横位擦過の上を横ナデ。21は７号墳III区周溝外出土。細砂かなり含み，内面横ヘラ磨き，外面も同じか。22は復元口径30cmで，Ｅ７最上層出土。胎土精良で内面横ヘラ磨き，外面は磨滅。24はＥ６上層出土で，胎土精良，内外面横ヘラ磨き。25はＤ９－３で胎土精良，内外面横ヘラ磨き。26はＥ６最上層(６号墳盛土中)出土で，胎土精良，内外面横ヘラ磨き。27はＦ５－Ｐ１出土で，胎土精良。内外面横ヘラ磨きだが外面はやや粗雑。**２ｃ－２'類**(12)は，２ｃ－２類の口縁上面に貝殻腹縁による極めて浅い刺突状刻目を施すもの。４号墳IV区墳丘内出土で，リボン状凸起を付ける。内面はナデの上を部分的にヘラ磨き，外面は横位擦過の上をナデ。粗砂僅か含む。**２ｃ－３類**(28・29)は，玉縁状口縁の内側がやや平たくなり，その下端が段をなす類。２ｃ－２類の退化形態と思われる。28は６号墳Ｉ区墳丘内出土で，胎土精良，内外面横ヘラ磨き。29はＡ３黄色土最下層出土で，細砂幾らか含み，内外面横ヘラ磨き。**２ｃ－４類**(18)は内面が段状となり外端が突出し口唇面が平坦面をなす形状のもの。表採品で，粗細砂かなり含み，内面は横位条痕の上を横ヘラ磨き，外面は横位擦過の上を横ヘラ磨き。

２ｄ類（30～33）２ｃ－３類の内面の段が沈線に変化したもので，玉縁状の肥厚は全く無くなり，角張った口唇部となる類。30は７号墳IV区墳丘内出土で，胎土精良，内外面横ヘラ磨き。31はＦ５黒色土出土で細砂かなり含み内外面横ヘラ磨き。32はＤ７－６で粗砂幾らか含み，内面は丁寧な横ナデ，外面は凹凸多い横位擦過の上ナデ。33はＤ７－６で粗砂僅か含み，内面下端はナデ，それ以上は横位擦過。外面は横位擦過の上雑なナデ。

２ｅ類（34～39）２ｃ～２ｄ類の系統とは異なる長く開口する類で口唇部が角張るものが多い。34はＩ７黒色土出土で胎土精良，内外面横ヘラ磨き。35はＤ９－３で細粗砂幾らか含み内外面磨滅。36はＢ10－Ｐ１で大旨精良。内面丁寧なナデ，外面横位擦過の上をナデ。リボン状凸起を付ける。37はＥＦ６黄色土出土で粗砂幾らか含む。内面横ナデ，外面横位擦過。38はＣ９南東側出土で細砂幾らか含む。全面丁寧な横ナデ。39はＪ６黒色土出土で粗細砂幾らか含む。内外面ともに横位条痕の上を，内面は丁寧な横ナデ，外面はナデ。

２類屈折部（40～43）40は６号墳Ｉ区墳丘内出土で胎土精良。内外面横ヘラ磨き。41はＥ４－32で胎土精良。内外面横ヘラ磨き。以上は２ｃ類の体部となろう。42は表採品で細砂多く含み内外面横ヘラ磨き。43はＩ６黒色土出土で片岩片を僅かに含む。内面に僅かに条痕が残るが他は横ヘラ磨き。

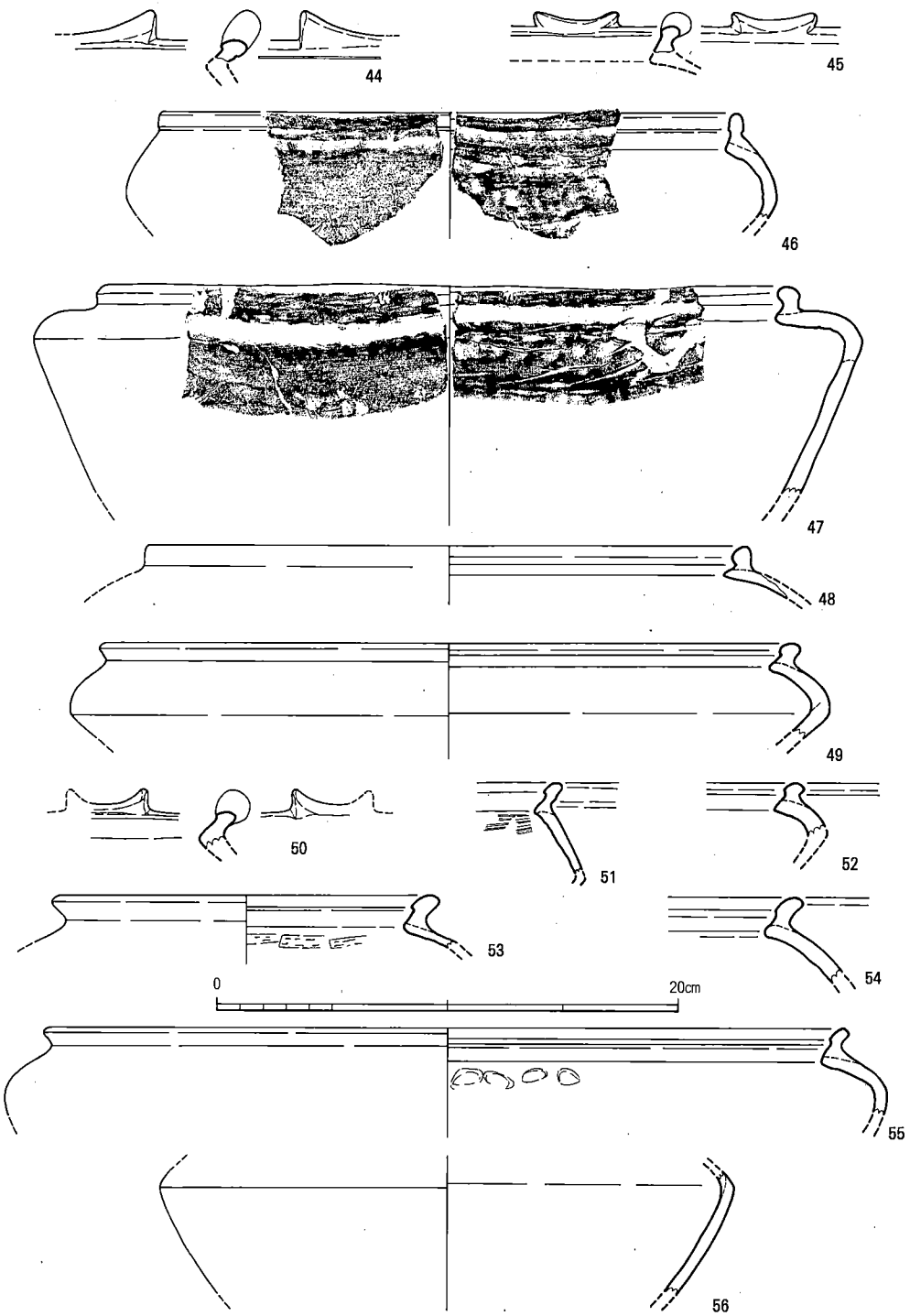


Fig. 43　精製浅鉢実測図（その４）(1/3)

精製浅鉢3類（Fig. 43～Fig. 44—62，PL. 19・20）

玉縁状口縁から丸く張る胴部をつくる類で，リボン状凸起を付けることが多い。変遷の経過の中で3類に分けられる。黒川式土器を代表する器種である。

3 a類（44）大形の整美なリボンを付ける玉縁状口縁の外面に沈線を施す類。E 8 黄色土出土で胎土精良，内外面横ヘラ磨き。

3 a′類（46）口縁外面の沈線が段に変化した類。C 3 北側暗褐色土出土で胎土精良。内外面ヘラ磨きだが内面屈折稜直下の幅1cm程横位擦過が残る。

3 b類（45・47～56）丸っこい玉縁状口縁のものを**3 b－1類**(45・47～50)とする。外面には既に沈線は無い。リボンもやや小ぶりとなる。45はB 6－8で胎土精良内外面横ヘラ磨き。47は1号石室西寄り包含層出土で，胴部最大径部に稜を持ち，胎土精良。内外面横ヘラ磨きだが，内面屈折稜直下に指頭圧痕が連続する。48は7号墳Bトレ内出土で胎土精良。内外磨滅。49はD 7－P 1出土で胎土精良。胴最大径直下に稜をつくる。内外磨滅。50はJ 6黒色土出土で胎土精良，内外横ヘラ磨き。**3 b－2類**（51～55）は玉縁状口縁がやや崩れ，長めで角張ってきつつあり，内面に段をつくる類。51はD 8－38で胎土精良。内外面横ヘラ磨きだが内面稜直下に横位条痕が残る。52は7号墳III区墳丘内出土で胎土精良，内外横ヘラ磨き。53は表採品で内外横ヘラ磨きだが内面に横位擦過が残る。54は3号墳1区墳丘内出土で胎土精良。かなり大ぶりとなろう。55は7号墳1区墳丘内出土で胎土精良。内外横ヘラ磨き。56は胴部片でこの類或は3 c類のもので，4号墳羨道埋土中出土で内外ともに横位擦過の上を粗い横ヘラ磨き。

3 c類（57～62）口縁内面に段をつくり胴部の稜がぐっと上方へきて，丸い胴張りではなく完全に屈折するタイプとなる類(3 c－1類)と，胴部屈折部が口縁との境に更に接近して，もはや張る胴部ではなくなってしまう形態のもの(3 c－2類)までを変化が判かる為に含めておく。**3 c－1類**（57・58）は黒川式最新期と位置付けられる。57はF 5－P 1(晩期土壙)出土で，北九州市域・瀬戸内系に近い口縁形態を示す。内外横ヘラ磨きで胎土大旨精良。かなり大口径。58は3号墳III区墳丘表土出土で細砂かなり含む。内外丁寧なナデ。**3 c－2類**（59～62）は胴が張らないので別類にした方がよいかもしれない。既に黒川式の範疇から完全にはずれた礫石原段階に入る。59はH 4黒色土出土で胎土精良，内外横ヘラ磨き。60はD 7－P 5出土で胎土大旨精良。内外横ヘラ磨き。61はC30埋土中出土で細砂幾らか含み，内外丁寧な横ナデ。62は6号墳北側付近出土で細砂幾らか含み，内外横ヘラ磨き。

精製浅鉢4類（Fig. 44—63～67）

丸い胴張りになるという意味で，3類に含むべきであるが，他に類例稀少で《柿原タイプ》と呼びたい特徴ある類のため特に別類とした。玉縁口縁・胴張りの3 b類から枝別かれした類で全て胎土精良で内外面は基本的に横ヘラ磨き仕上げ。内面の沈線と尖り気味口唇が特徴。

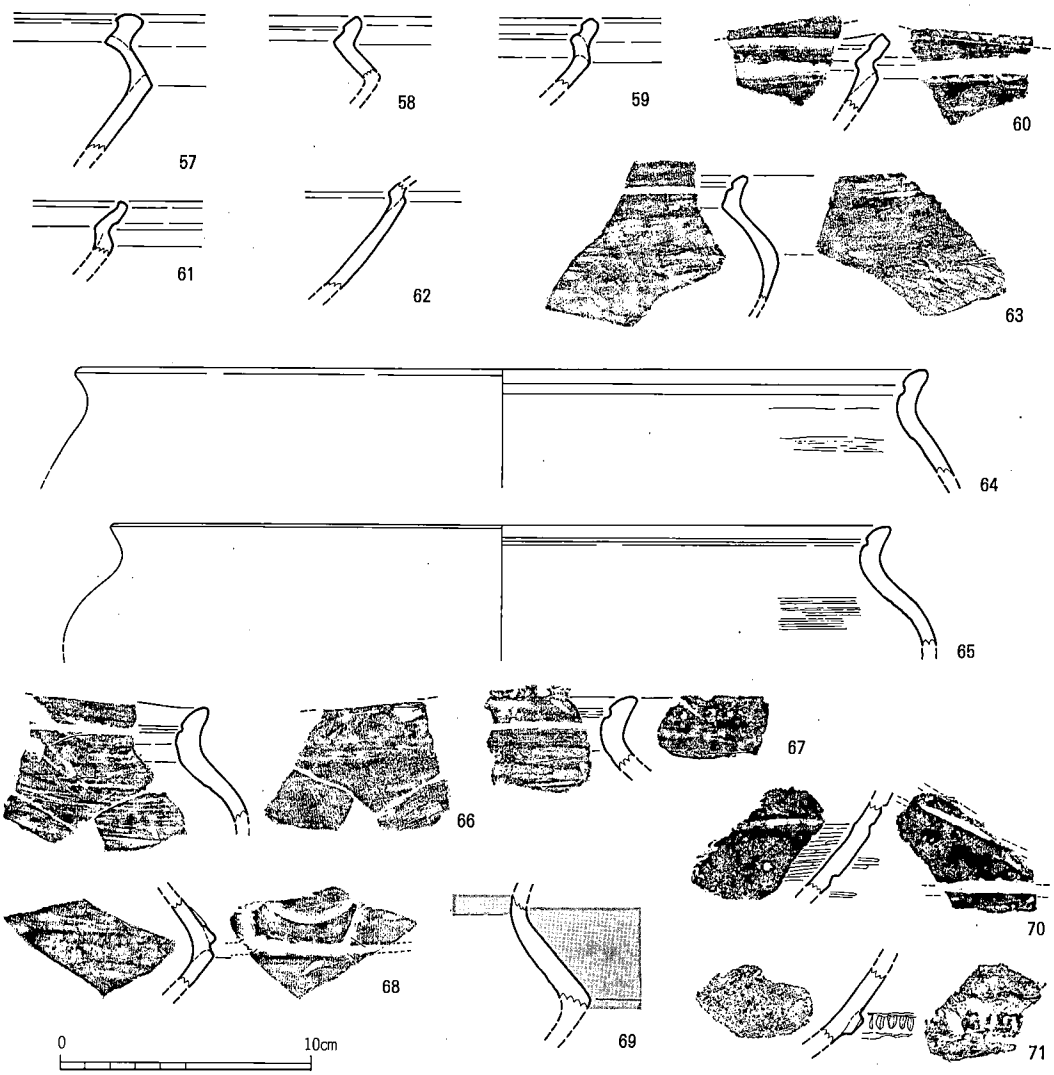


Fig. 44　精製浅鉢実測図（その５）(1/3)

４ａ類（63）口縁と体部との境の内面に稜を残す類で３ｂ－２類と４ｂ類との過渡的段階。Ｉ４羨道内埋土出土で，外面に漆状の塗料が認められる。

４ｂ類（64～67）64はＣ２墓壙内出土で口径34cm。内面一部に横位擦過が残る。65はＣ２墓壙内出土で口径31cm。内面一部に横ヘラ磨き時のヘラ先が細く残る。66は１号石室Ⅱ区墓壙内出土で内面下半は横ナデ。波状口縁となるか。67は１号石室Ｂトレ出土。内面下端は横位擦過。

各類体部片（68～71）68は３ｂ類・３ｃ－１類・４ａ類のいずれかの胴屈折部で，Ｉ７黄色土出土で，外面稜の直上に沈線を施し，それに接して整美なリボン状浮文を飾っている。胎土精良，内外横ヘラ磨き。69は表採品で外面と内面上端に鈍い赤茶色の丹塗りを施す。４ｂ類或は特殊

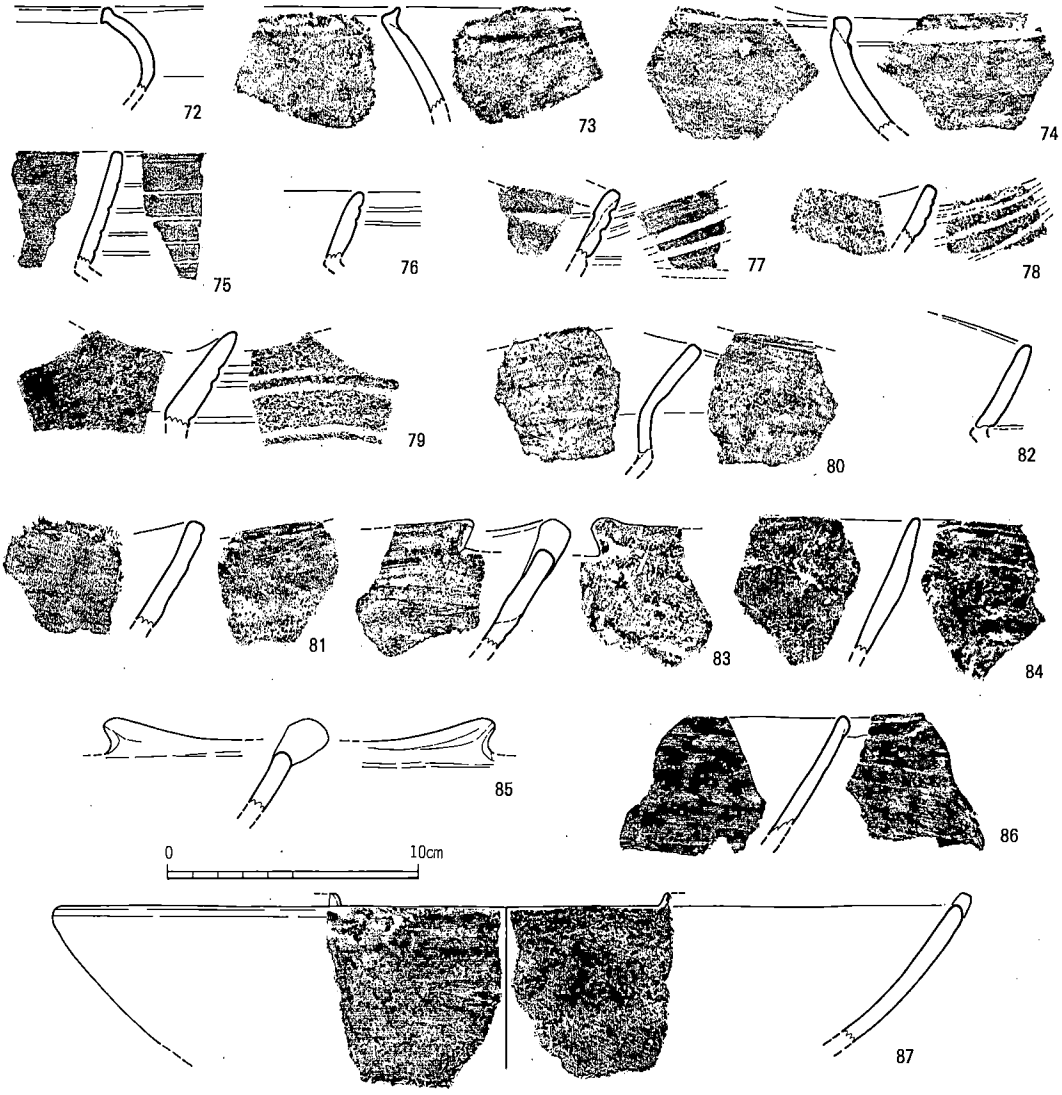


Fig. 45　精製浅鉢実測図（その６）(1/3)

な壺状器種と思われる。粗細砂かなり含み内外横ヘラ磨き。70は４号墳２区周溝内出土で６ｂ類（Fig. 45—77）と同類であろう。粗砂僅か含み，内外横ヘラ磨き。71は器種は見当が付かない。谷部表採品で外面凸帯上にヘラによる刻目を施す。胎土精良，内外ヘラ磨きで平滑。

精製浅鉢５類（Fig. 45—72～74）

同一類としては無理かもしれないが，内湾して胴張りする無頸の類である。72（**５ａ類**）はＣ９黒色包含層出土で胎土精良，内面は丁寧なナデ，外面横ヘラ磨き。外面下位に稜があり，３

b類の変種であろう。73(5 b類)は表採品で内面ヘラ磨き，外面下半は横位擦過。口縁周辺横ナデ。胎土精良。74(5 c類)はC32周辺包含層出土で内面横位擦過の上ヘラナデ，外面は横ヘラ磨き。器形の見当が付かない。

精製浅鉢 6 類 (Fig. 45—75～81，PL. 20)

やや長めの内湾気味の口縁に沈線文を施す類を総括してこの類としたが，各々系統の異なるものが含まれている。波状口縁となるものが多い。75(6 a類)は表土出土で内外横ヘラ磨き，胎土大旨精良。76は6号墳III区墳丘内出土で，細砂多く含み内外面ナデ。77(6 b類)はD 7-P 1出土で細砂少量含み内外横ヘラ磨き。78はD 8-7で内面横ナデで胎土かなり精良。79(6 c類)はG 5黒色土出土で細砂幾らか含む。80(6 d類)はC 7付近表土下出土で細砂幾らか含む。内外面横ヘラ磨き。外面全体に煤こびりつく。断面下端は接合面。81は細砂幾らか含み内外面横ヘラ磨き。外面下端は沈線或は段。

精製浅鉢 7 類 (Fig. 45—82～87)

大きく開いて大皿状となる類で，片リボン状凸起が付くものもある。82はB 2-73で粗砂幾らか含み，内面雑な横位ヘラナデ，外面は横位擦過の上ナデ。83は3号墳石室盗掘壙内出土で内面横位ナデ，外面は雑な横位擦過。粗砂若干細砂多く含む。84は細砂多く含みC 7-30で，外面上半は横位擦過，下半はその上を横ナデ。内面は横ナデか。85はI 6黒色土出土で細砂やや多く含む。内外磨滅。86はC 4墓壙内出土で胎土精良，内面横ヘラ磨き，外面は横位条痕の上をヘラ磨きか。煤がこびりつく。87は表採品で細砂多く含み，外面上半は横ヘラ磨き，下半はナデ。内面ヘラ磨きか。凸起は退化形態か。

高杯等 (Fig. 46，PL. 21)

晩期後半～末段階の高杯或は浅鉢となるものをまとめた。1はC 8-4で粗砂幾らか含む。内面上半は横ヘラ磨き，以下屈曲部まで横位条痕，それ以下はナデ。外面屈折稜より上は雑な横ヘラ磨き，下は横位擦過。2は6号墳Bトレンチ内出土で粗砂僅かに含む。内面上半は横ナデ下半はナデ，外面上半はナデ，下半は横位擦過。3はP 8付近表採で，粗砂かなり含む。外面はヘラ磨き，下端はナデ，内面磨滅。4は4号石室埋土中出土で刻目凸帯文土器に伴う高杯となろう。内面と外面下半は横位擦過，上半は横ナデ。細砂多く含む。5はD 7-9で細砂多く含む。内外面丁寧なナデ。6はB 6-52で粗細砂多く含む。内外面横ナデだが，外面は雑で凹凸あり。7は6号墳III区墳丘内出土で粗砂かなり含む。外面下半は横位擦過の上ナデ。他は丁寧な横ナデ。

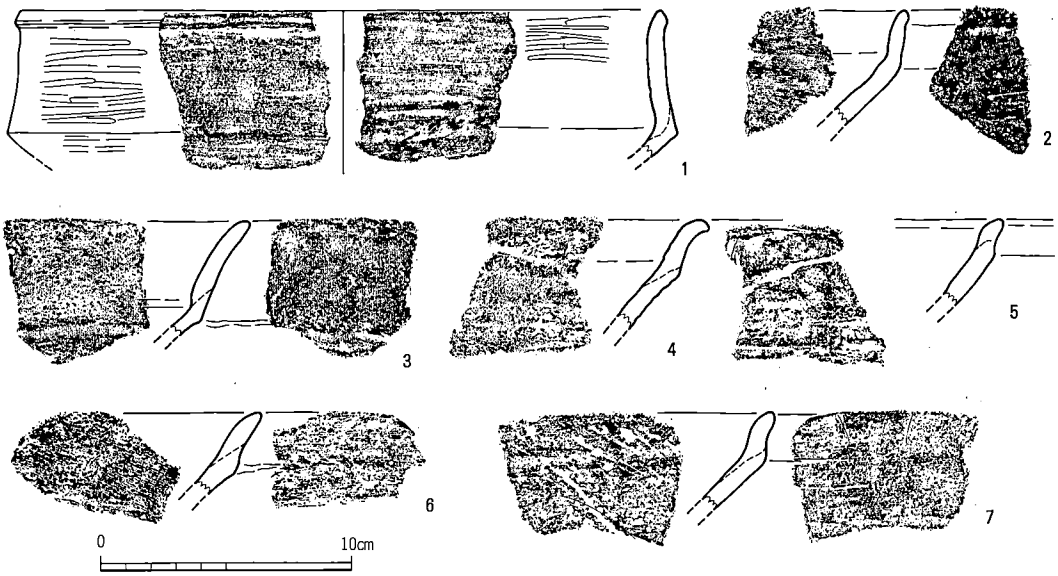


Fig. 46　高杯・浅鉢実測図（1/3）

精製鉢・マリ類（Fig. 47）

定型的精製マリ（1～5）と大小の単純に開く椀状・鉢状のものをまとめた。全器形がわかればかなり分類可能である。ここではやめとく。1は6号墳III区墳丘内出土でやや厚手大型品。内外横ヘラ磨き。2は6号墳III区墳丘内出土で胎土大旨精良で内外横ヘラ磨き。3は7号墳墓壙内出土で胎土精良，内外横ヘラ磨き。4は6号墳III区墳丘内出土で胎土かなり精良。内外横ヘラ磨き。7はD 7-11で口唇外端を突出させる。粗砂多く含み，内面ナデ，外面横位条痕の上をナデか。8はBC 3黄色土出土で胎土精良。外面は意図的斜位アナダラ条痕。内面横ナデ。9はC39墓壙内出土で胎土精良。口縁外面横ナデ，内面ヘラ磨きか。外面胴部に条痕が残る。10はB 6-54で粗砂僅か含むがかなり精良。内面擦過の上横ナデ，外面ナデ。11は表採品で角がシャープ。粗砂幾らか含み，内面はヘラ磨き，外面は雑な横位擦過の上をヘラ磨き。12はB 9黄色土上層出土で胎土精良。内外面横ヘラ磨き。13は7号墳III区墳丘内出土で胎土精良，内外横ヘラ磨き。14はC 4出土品で粗砂幾らか含み，内面は横位条痕の上横ナデ。外面は横位擦過の上横ナデ。15はC32周辺包含層出土で粗砂幾らか含む。内面横ヘラ磨き，外面は横位条痕の上を横位ナデ消し。16はC 2墓壙内出土で粗砂多く含む。内外面ナデ。17はI 6黄色土出土で胎土精良。内外面横ナデで内面下半はやや粗雑。18はF 5黒色土出土で粗砂少量含む。内面丁寧なナデ。外面磨滅。19はC32掘方内，C32周辺包含層出土品で，内面横ヘラ磨き，外面は横位擦過の上を横位ヘラナデ。細砂多く，粗砂僅か含む。特異な器種となろう。

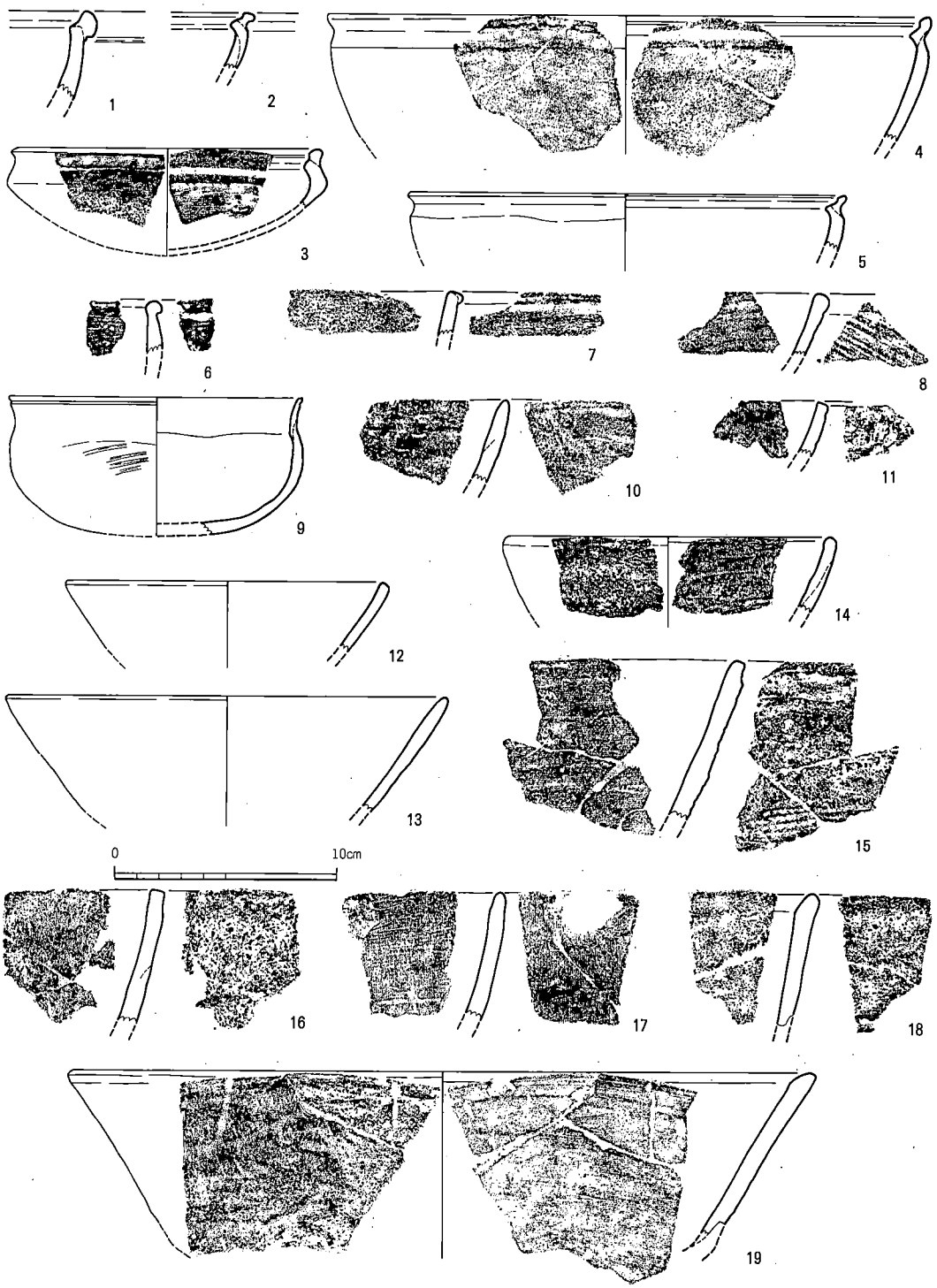


Fig. 47　マリ・精製鉢実測図（1/3）

精製深鉢１類（Fig. 48・49，PL. 18）

１ａ類（１～９・16）晩期中葉の口縁が長く肥厚外反して外面を沈線文で飾る類。条痕を文様として施したもの（16）も含めた。古閑式・入佐式等に相当する。１・２は口縁上面が角張り，古い様相。１はＥ６北半黒色土出土。内面横ナデ。２は７号墳出土で内外面丁寧な横ナデ。３

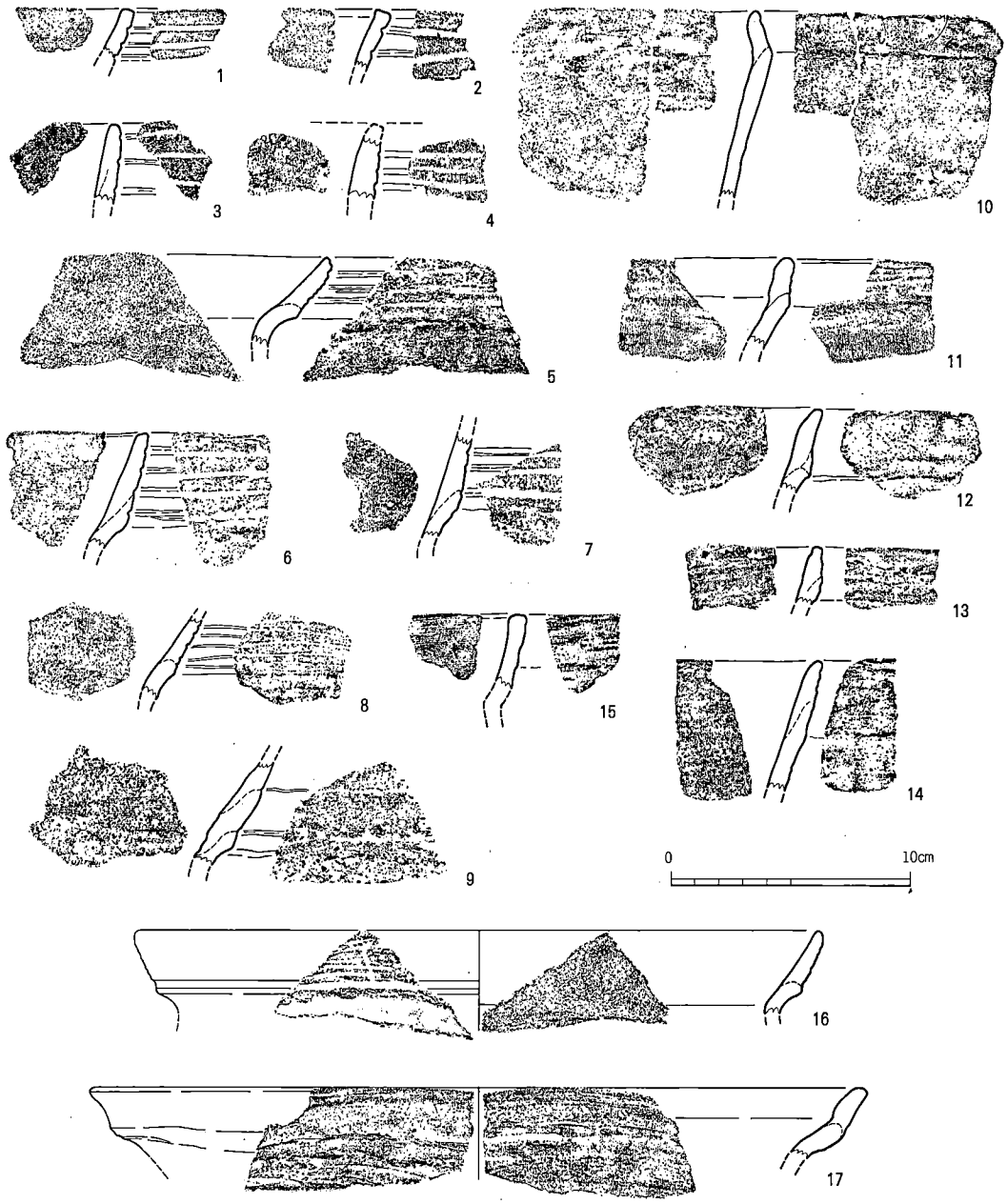


Fig. 48　精製深鉢実測図（その１）(1/3)

Fig. 49　精製深鉢実測図（その２）(1/3)

はＥ７出土。４は７号墳III区墳丘内出土で内面横ナデ。５は６号墳III区墳丘内出土で内面は丁寧なナデ。外面沈線は雑。６は６号墳Ｃトレ墳丘内出土で内面は横ナデ，外面下端は雑な擦過状。外面に煤こびりつく。７は４号墳II区周溝内出土で，内面丁寧なナデ，外面下端は横位擦過。８はＨ６黒色土出土で内面丁寧な横位ヘラナデ。外面下端は横ナデ。外面煤付着。９は７号墳II区墳丘内出土で内外面横ナデで外面は雑。16はＣ７－４で内面は丁寧なナデ，外面は文様としての横位条痕の下に沈線，その下方は横ナデ。

１ｂ類（10～15・17・18）１ａ類より古相を示す口縁が短く無文のもの，外面肥厚部が長く１ａ類の無文のものなどを含む。10はＤ７－６で内傾する口縁となる。内面は横位擦過の上ヘラナデ。外面屈折稜から上は煤がこびりつく。下は横位ヘラナデ。11は６号墳III区墳丘内出土で内面は横位条痕の上ナデ，外面稜より上は横位条痕の上ナデ，下は横位擦過の上ナデ。外面下半は煤こびりつく。12は４号墳前庭部出土で内面はやや粗い横ナデ，外面横位条痕の上横ナデ。13は集石付近北東側出土で内面横位条痕の上をナデ，外面は煤付着して横位擦過の上雑なナデ。14はＣ５-24で内面は丁寧な横ナデ，外面は粗雑な横位擦過。15はＤ６-24で内面横ヘラ磨き，外面横位擦過。17はＥ７狸穴出土で内面横ヘラ磨き，外面上半は横ナデ，下半は横位擦過の上を雑なナデ。18はＤ７－６で口縁内外面横ナデ，以下内面は横位擦過の上をわりと丁寧なナデ。外面は横位擦過の上をナデ。断面下端は接合面。

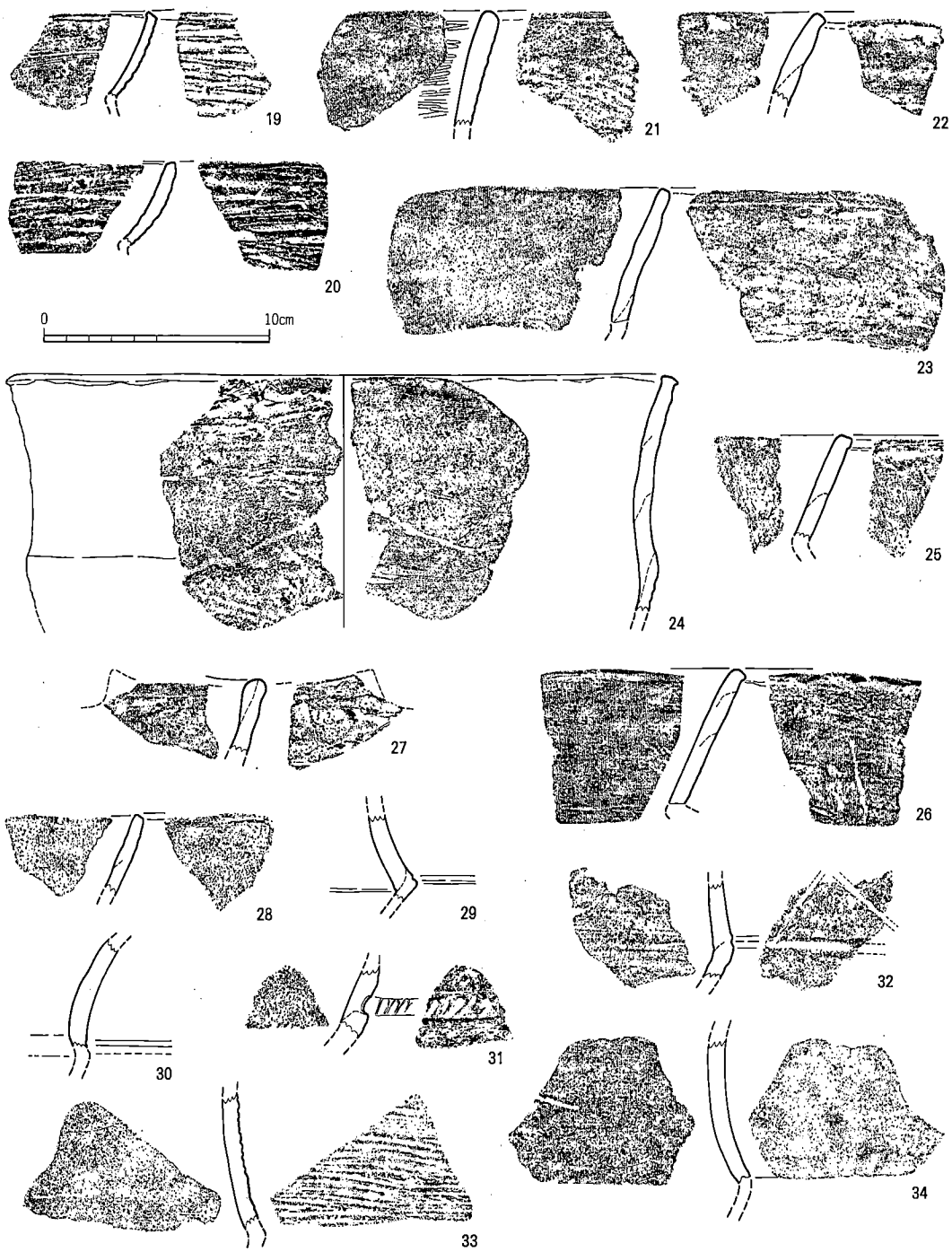


Fig. 50　精製深鉢実測図（その３）(1/3)

精製深鉢 2 類（Fig. 50—19・20，Fig. 55—1・2）

薄手で内湾して開く口縁で，外面に横位条痕を施す特徴が目立つ。縄文後期の伝統のものと，思われる。19はＣ２墓壙内出土で胎土精良，内面横ナデ，外面は横位アナダラ条痕が意識的。外面に煤がこびりつく。20はＦ６黄色土出土で内面は横位条痕の上をやや斜位の擦過，外面は横位条痕。胎土精良の精製品。粗製深鉢とした Fig. 55-1・2もこの類と思われるのでここで説明する。１はＥＦ黄色土中６で胎土精良，内外横位アナダラ条痕で内面はその上を雑な横ヘラナデ。２はＢ３-33で粗砂多く含み，内外横位アナダラ条痕だが内面上半はその上を横ナデ。外面に煤こびりつく。この類は後期北久根式からみられ，後期そのものの可能性もある。

精製深鉢 3 類（Fig. 50—21～24）

胴部中位で屈曲して長く頸部がのびて緩やかに外傾する伝統的深鉢の形態。口唇部が角張るものが多く，粗製のものは量的に圧倒的に多いが，精製品は少ない。21はＥ５-Ｐ３出土で内面横ヘラ磨き，外面は条痕の上を雑なナデ。22はＦ４黒色土出土で内面は丁寧なナデ，外面は横ナデ。23はＣ７-９で内面は丁寧な横ナデ，外面は横位擦過の上を雑な横ヘラ磨き。口径45cm程。24はＤ５-Ｐ４出土で内面下端付近は横位ヘラナデ，それ以上は横ナデ。外面上半は横位条痕の上を横位擦過。中位はナデ。屈曲部以下は煤がこびりつき横位条痕の上をナデ。

精製深鉢 4 類（Fig. 50—25～28）

直線的に開く口頸部から強く屈折して胴部が張る器形となる類で，口縁外端が突出する特徴を持つ。粗製品は多いが精製品は少ない。25はＣ７付近表土下出土で内外面丁寧なナデか。26は表採品で外面横位条痕，内面は条痕の上を横ヘラ磨き。外面に煤こびりつく。断面下端は接合面。27はＤ８-56で片リボン状凸起となる。内面は横ナデ，外面は雑な擦過の上をナデ。28はＢ６-15で内面横ナデ，外面は横位擦過の上を横位ナデ。

精製深鉢胴部（Fig. 50—29～34）

29・30・32は外面屈折部に沈線を巡らせ，精製深鉢１類の古期のもの。33・34は３類のものか。29は６号墳北側近辺出土で内外面横ヘラ磨き。晩期初頭。30はＥ７狸穴出土で内外面横ヘラ磨き。31は太い凹線内に先端の角張った棒先で斜位に連続押圧したもの。７号墳II区墳丘内出土で内面は横位擦過の上ナデ，外面上半はナデ，下半は粗い横位擦過。粗砂かなり含み，器形は見当がつかない。32は鋸歯状に沈線を施す類で，Ｃ９古墳盛土中出土。内面は横位条痕，外面上半はナデか，煤こびりつく。下半は横位擦過。33は６号墳III区墳丘内出土で外面横位アナダラ条痕，内面はナデで平滑。外面に煤こびりつく。34はＣ４出土で内外面丁寧な横ナデでかなり平滑。細砂多く含む。

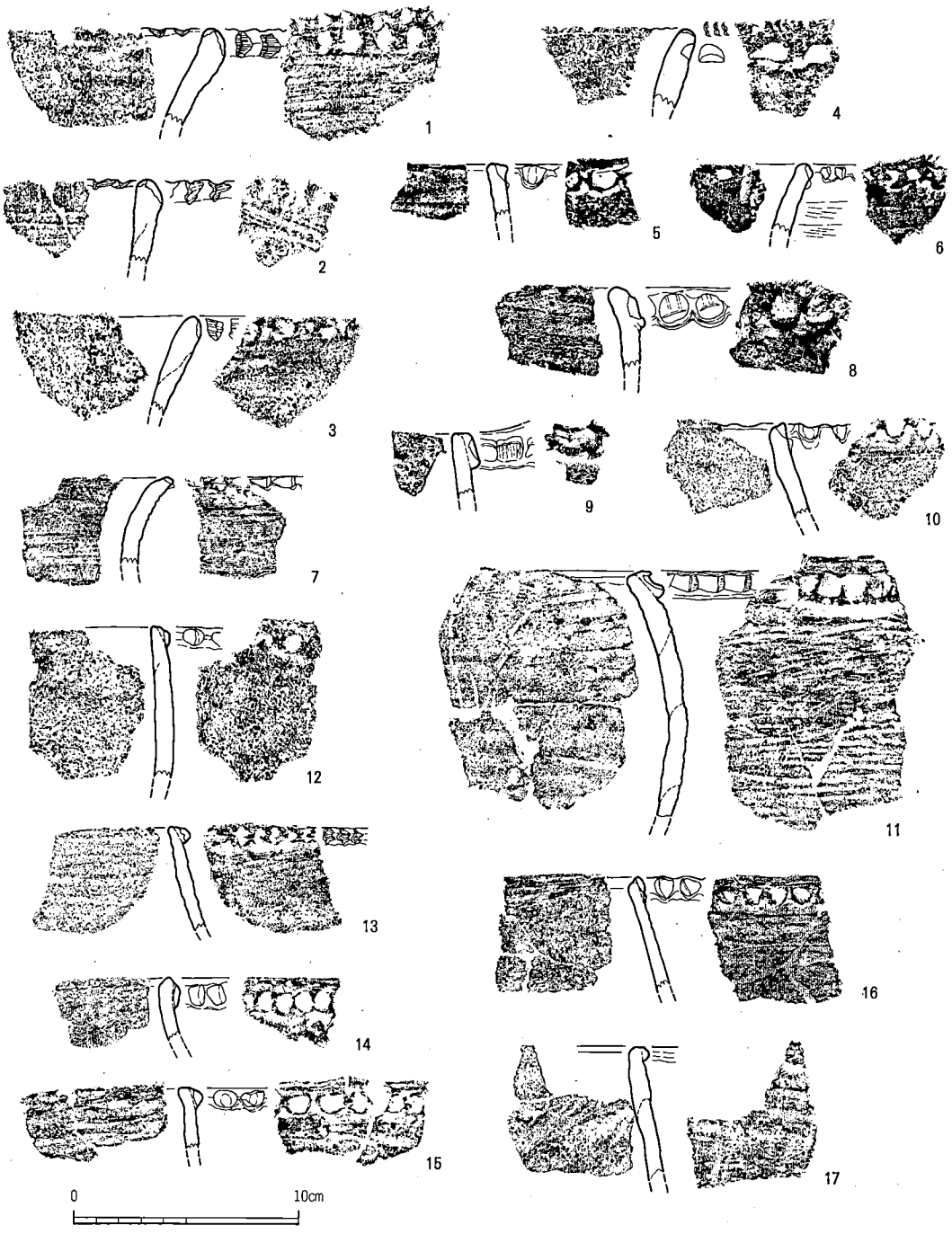


Fig. 51　刻目凸帯文土器実測図（その１）(1/3)

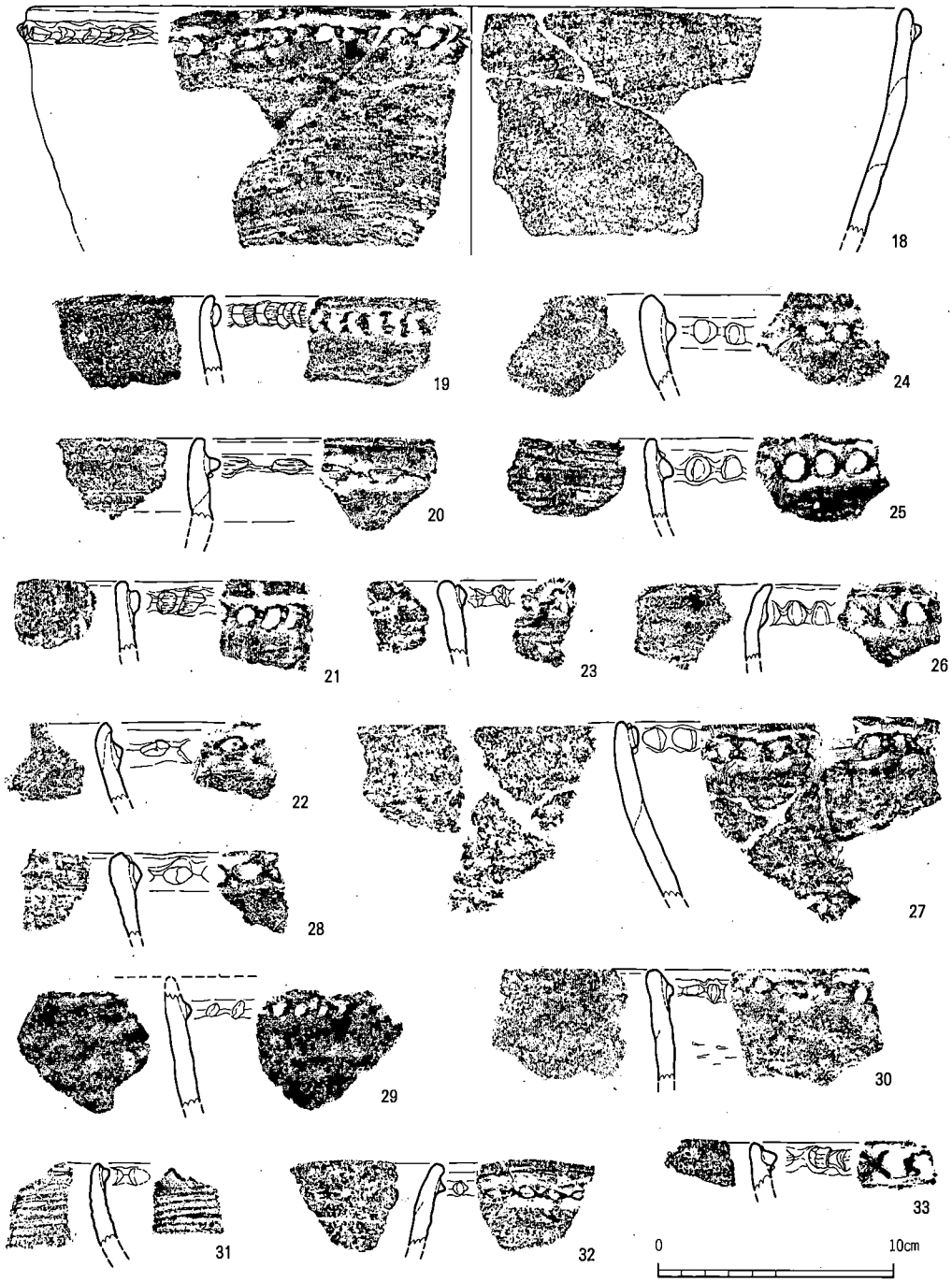


Fig. 52　刻目凸帯文土器実測図（その２）(1/3)

刻目凸帯文土器1類（Fig. 51－1～3・7）

正確には凸帯を付けないので0類とでもすべき古相類で，口縁外端・上面・内端に大きく刻目を施す特異例である。2類以下の刻目凸帯文土器発生への原姿と考える。**1a類**（1～3）1は6号墳石室内埋土出土で貝殻腹縁による大きな刻目を口唇外端と内端に施す。内面横位ナデ，外面はヘナタリ条痕。2は表採品で1と同類。内面は横位条痕，外面上半は横位条痕，下半は未調整風。3は外端に貝殻腹縁による大きな刻目を施す類で外面は粗い横位擦過。内面は横ナデか。**1b類**（4）C8上層出土で口唇上面に貝殻腹縁による刺突文，外面口縁直下に径11mmの太い円棒を斜め上方から突っ込んだ異類。内面はナデ，外面は雑な横位擦過。**1c類**（7）F4黒色土出土で丸く外反して開く口縁上面に，ヘラで横に切ったような刻目を施す。内外面横位条痕の上を横位擦過。

刻目凸帯文土器2類（Fig. 51－5・6・8・10）

凸帯を付けないままに口唇外端に粘土をはみ出させ乍ら施すぶっとい刻目類で，始源形態を示す。**2a類**（5・8）丸く胴張りする類で，5はE5-33で指先押圧による幅11mmの刻目を施す。内外面横ナデだが外面は雑。8はD6-1で指先を上から押圧した丸い刻目で幅13mm。粘土が大きくはみ出し，下端は二重あご状になる。内外面横位擦過。外面に煤がこびりつく。**2b類**（6・10）は外反或は内傾する口縁となる器形。6は6号墳III区墳丘内出土で棒端を斜めに突っ込んだ刺突状刻目。内面横ナデ，外面横位擦過。10はC31出土で口縁外端に太い指による刻目を施す。内面横位の丁寧なナデ，外面は横位擦過。

刻目凸帯文土器3類（Fig. 51－9・11～17）

凸帯を口縁に接して，或は口縁を巻き込むように付けた類。うち胴が丸く張り，胴部に屈折をつくらない**3a類**（9・11・12）は特に古相を持つ。9は表採で内面斜位ナデ。幅12mmの指爪先の上方からの刻目。11はF5黒色土出土で内面は強い指横ナデ。外面は雑な条痕。指爪先で横に抉り込む刻目。12は6号墳Bトレ墳丘出土で内外磨滅。爪による幅9mmの横位抉り刻目。**3b類**（13～17）は3類のうち体部屈曲部を持つ類。ただし，後述する4b類と合わせてこの器形のものは数多いが，Fig. 53の刻目の肩部施文例が少く，割合として1/4以下のものにしか刻目を施していないということになる。よってこの類で上下2段に刻目を持つものがあるとすれば14ぐらいであろう。13はE3-18で内面横位条痕の上ヘラナデ状，内面は横条痕の上ナデか。貝殻腹縁による強い刺突状刻目。14は表採で内面横ヘラ磨き。指先爪による大きい刻目。15はF5黒色土出土で内面横位擦過の上横ナデ。外面雑な横位擦過。指先押圧による幅11mmの刻目。16はC7付近暗褐色土出土で内面上端は横ナデ。以下横ヘラ磨き。外面上半横位ヘナタリ条痕，下半は横ヘラナデ状。爪による太い刻目。17はC9-14＋C9-38で内面上半は丁寧なナデ，下

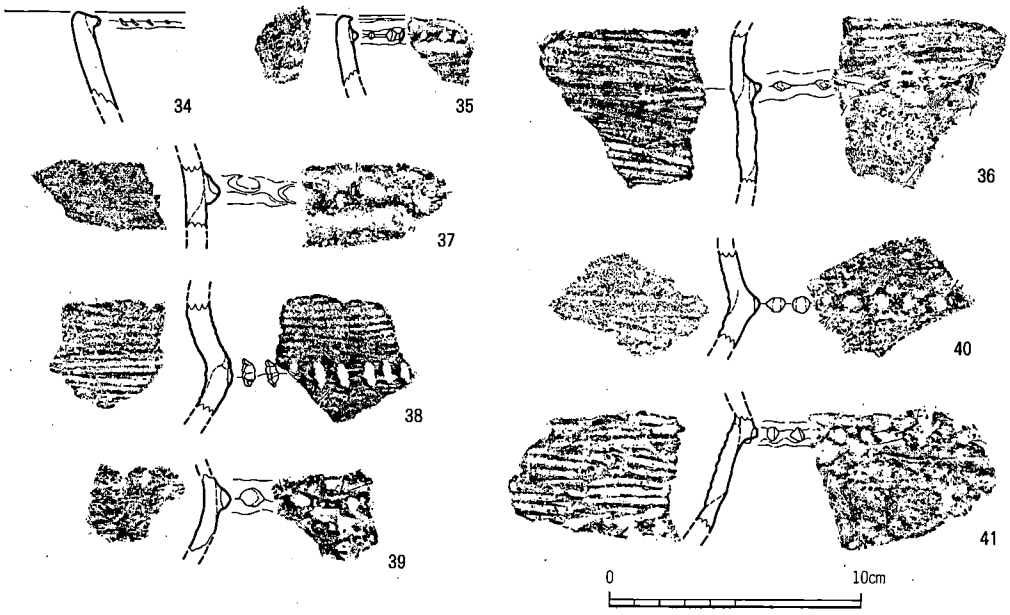


Fig. 53　刻目凸帯文土器実測図（その３）(1/3)

半は横位擦過の上ナデ。外面は横位擦過。断面下端は接合面。凸帯残存部が極小だが刻目が予測される。

刻目凸帯文土器４類（Fig. 52，Fig. 53—34・35）

刻目凸帯が口縁上端から僅かに下がった位置に付けられる類。これまた大きく古拙な刻目が殆どである。**４ａ類**(18・30・32) ４類のうち肩が張らず，屈曲部を作らない器形。18はＣ６西側表土下出土で内面ヘラナデ状。外面上位は横ナデ，以下横位擦過。貝殻腹縁による粗大な刻目。30はＢ３-Ｐ２出土で胴が丸く張る器形。内面丁寧なナデ，外面横位擦過。実にきたない刻目だが丸い棒によるものか。原初的。32はＨ２出土で小ぶりの鉢状器形となるか。内面横ナデ。外面横位擦過。指先或は丸棒押圧の刻目。**４ｂ類**(19～29・31・33～35) ４類のうち肩が張り屈曲部を有する器形のもの。19はＤ６上層出土で内面はわりと丁寧なナデ，外面ナデ。貝殻腹縁を横位に斜めに突っ込んだ粗雑な刻目。20は表採で内外面横ナデ。刻目は幅15㎜の貝殻腹縁による削り込み状。21は表採品で内面横位擦過の上横ナデ，外面横位条痕の上ナデ。貝殻腹縁で削り込んだ刻目。22はＥ８黄色土出土で内面ナデ，外面横位条痕。貝殻腹縁で削り込んだ刻目か。23は表採品で内外面横位条痕の上をナデ。貝殻腹縁によるかと思われる太く雑な刻目。24はＣ７付近表土下出土で内外面丁寧なナデ。指先押圧による幅10㎜の刻目。25は３号墳石室盗掘壙内出土で内面横位条痕，内面横ナデ。爪跡を残す指先による径11㎜の刻目。26は４号石室内埋土出土で内外面横ナデ。低い凸帯に指頭押圧の大きい刻目。27はＥ３-16で内面横位条痕を

ナデ消し，外面は横位ヘラナデ状。指爪先による幅11㎜の大きい刻目。28はＤ９－４で内面横位擦過，外面ナデか。指爪先による幅12㎜の刻目。29は７号墳盗掘壙内出土で内面横ナデ，外面横位擦過の上ナデ。磨滅して不明瞭だが刻目は貝殻腹縁によるか。31はＣ31出土で内外アナダラ条痕。指爪先による刻目か。33はＣ４付近表採で内面ナデ。指先を横位に突っ込んだ刻目。34は７号墳Ｂトレ出土で内面横ナデ，外面丁寧なナデ。浅く極小の刻目。35はＢ４黄色土上層出土で内外面横ナデ。先端の丸いヘラ先或は小さな爪先による刻目。

刻目凸帯文土器肩部（Fig. 53—36～41）

36はＤ７－８で内面横位ヘナタリ条痕，外面上半は横位条痕，下半は雑なナデ。刻目は不明瞭だが貝殻腹縁の可能性強し。晩期ではないような気もする。37は６号墳Ⅳ区墳丘内墓道脇出土で内面横ヘラ磨き，外面ナデか。指押圧による幅12㎜の極めて初源的な刻目。38はＥ４－Ｐ５出土で外面下半は条痕の上ナデ，他内外面は横位条痕。１ａ類の肩部に貝殻腹縁による刻目を施したものか。39はＤ８－７で内面横ナデ，外面ナデか。指頭押圧による大きな刻目。40は６号墳Ⅰ区墳裾出土で内面下端は横位条痕それ以上は横ナデ，外面上半はナデで煤付着，下半は横位条痕をナデ消し。棒押圧による刻目。41は４号墳Ⅱ区墳丘内出土で内面横位アナダラ条痕。外面はナデで凹凸かなりある。先端の丸いヘラ或は爪先による刻目。

壺形土器（Fig. 54—１～６，PL. 18）

１はＤ８－Ｐ１出土で口径5.6㎝の直口小壺。内面横ヘラ磨きで外面には濃赤色の赤色顔料を塗る。胎土精良で焼成不良，内面黒褐色。２は４号墳掘方内出土の丹塗り磨研小壺。内面上半は雑な横位ナデ，下半はオサエナデで凹凸あり。頸部下端は水平に小さな段をつくる。丸底だがすわりは良い。３はＢ３－14で内外面横ヘラ磨きで口縁内側から外面は鈍い暗赤色顔料がみら

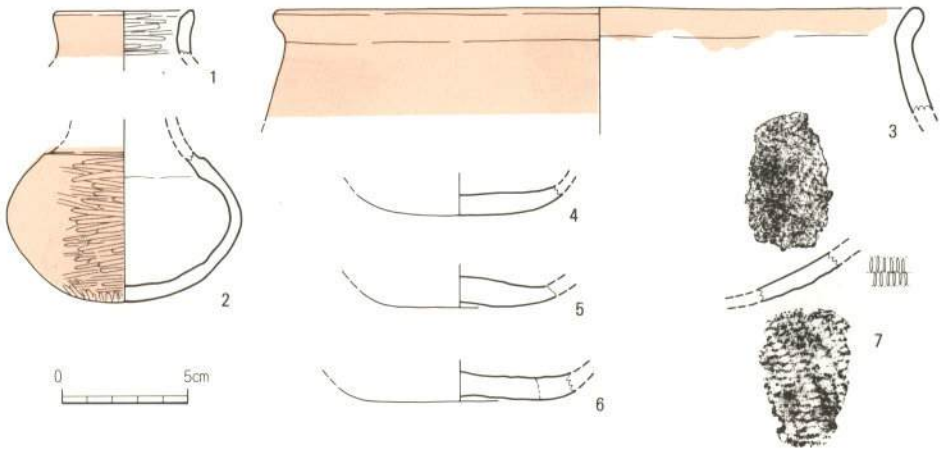


Fig. 54　晩期壺・組織痕土器実測図（1/3）

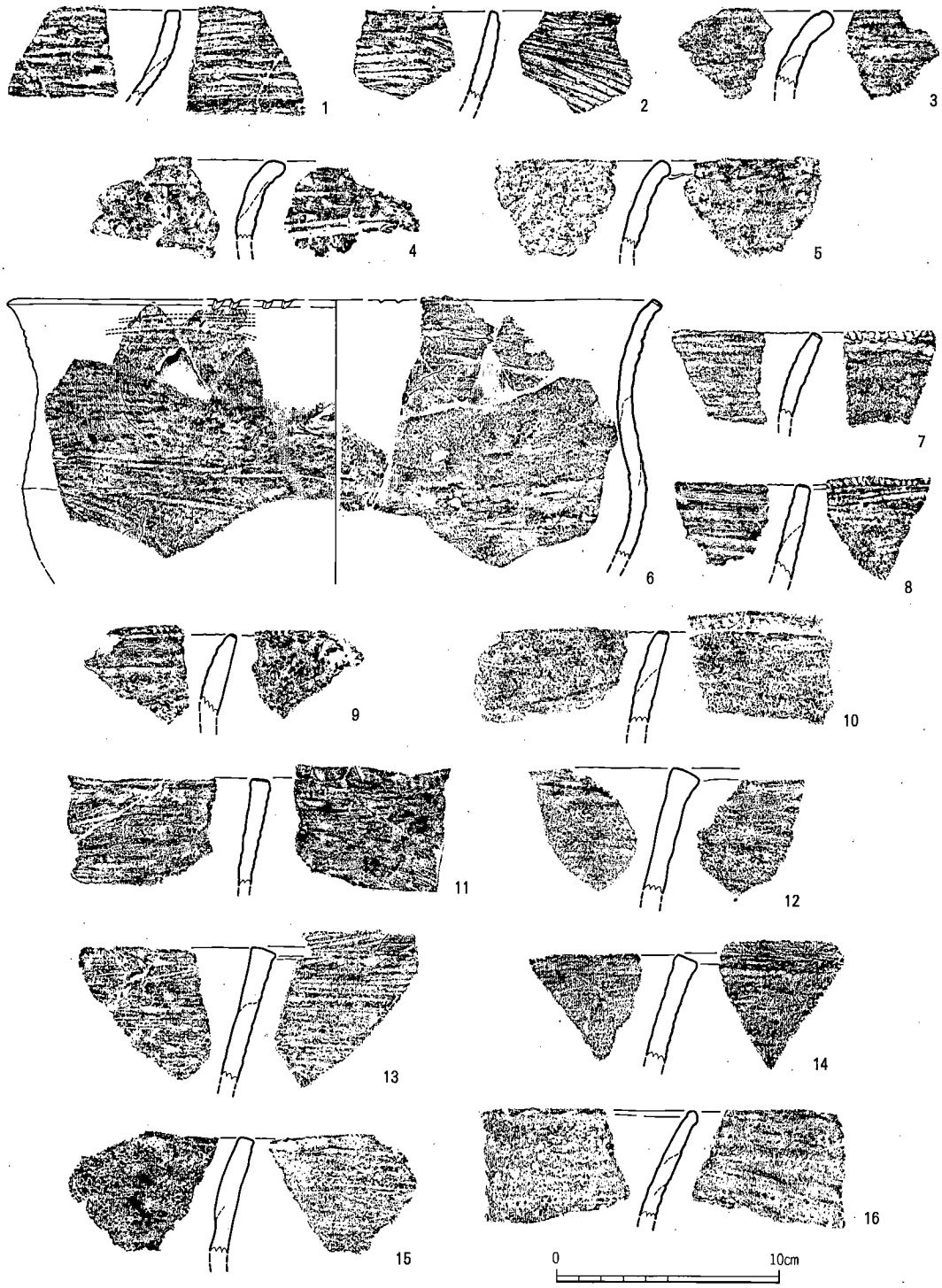


Fig. 55　粗製深鉢実測図（その１）(1/3)

れる。粗細砂幾らか含み，焼成やや良好で暗黄褐色をなす。4はB4黄色土上層出土で底内面ヘラ磨き，胴部内面横ナデ，外面は丁寧なナデ。胎土精良で丸底。5はG4黒色土出土で内面はナデ。6は6号墳I区墳丘内出土で内面は一方向への指オサエナデ。外面は雑なナデ。細砂多く含む。

組織痕文土器（Fig. 54—7，PL. 22）

3号墳出土で内面は丁寧な横ナデ。外面に畳表状の組織圧痕がみられる。繊維の太さ1～2㎜，経糸は1㎝に4本の密度。緯糸の間隔は7～10㎜である。胎土に粗砂幾らか含む。組織痕の認められるのはこの1片のみ。

粗製深鉢1類（Fig. 55—3～16，Fig. 56—17・18・20・21・24）

口縁が外反して胴部で屈曲・屈折する伝統的器形のもの。**1a類**（3～5）は口縁部が丸く強

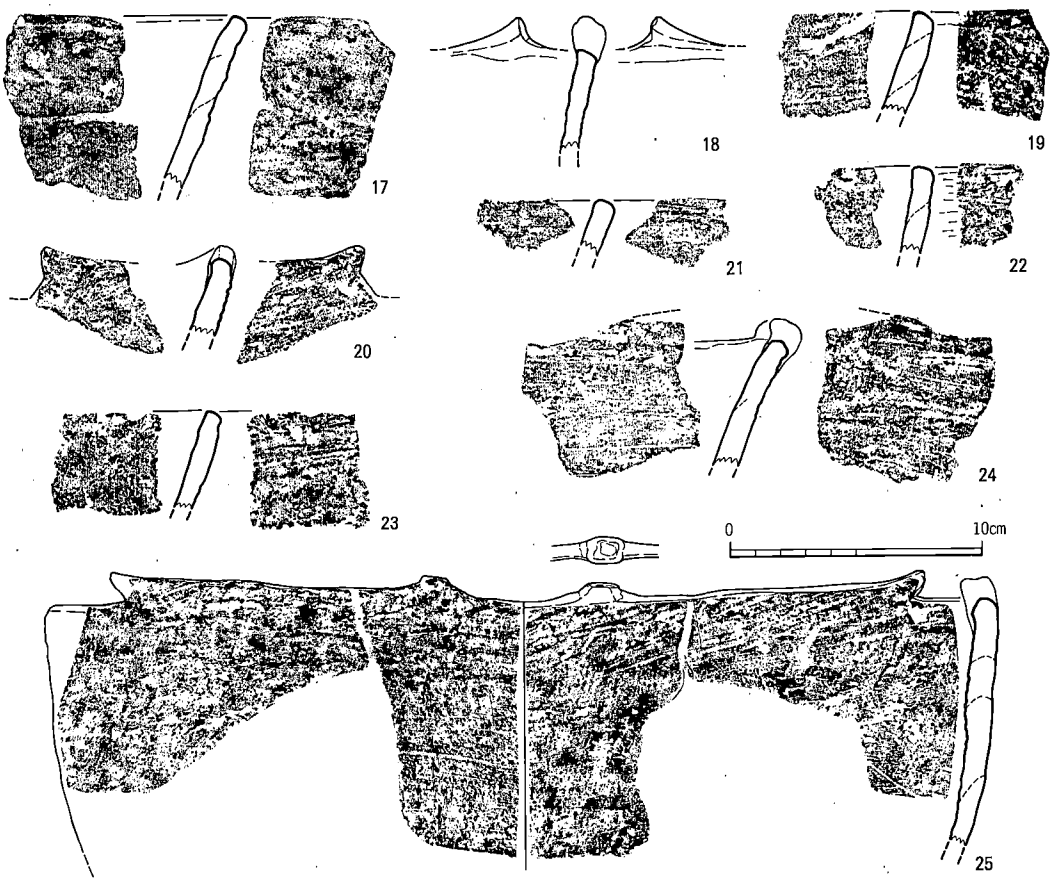


Fig. 56　粗製深鉢実測図（その2）（1/3）

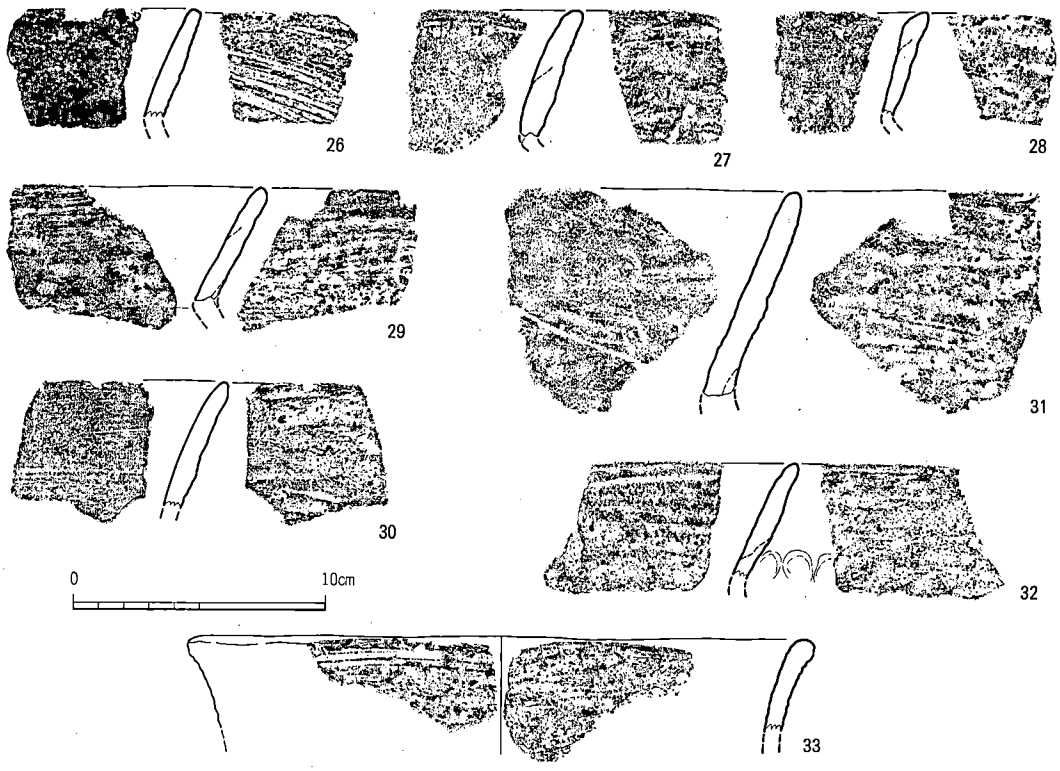


Fig. 57　粗製深鉢実測図（その３）(1/3)

く外反する類。３は内外横位条痕の上を横ナデ。４は外面横位アナダラ条痕，内面は横ナデ。５は内面雑な横ナデ，外面は横位擦過の上を雑なナデ。**１ｂ類**(６～10)は口唇上面に浅く密な刻目を施す特徴的な類。６は内面横位条痕の上を雑な横位擦過。外面は横位条痕。外面口縁直下に３本の沈線。外面下端付近は煤がこびりつく。刻目はこの類の他の７～10とは趣が異なり，ヘラによるしっかりしたもの。これのみ縄文後期的。７は内面横位条痕，外面は条痕の上をナデ。８は内外面ヘナタリ条痕。９は内面上半は横ナデ，下半はやや左下がり条痕。外面には煤が厚くこびりつく。10は内外面横位条痕の上雑な横ナデ。**１ｃ類**(11～14)は外傾して開く口唇部が厚くなり上面が広い平坦面をなす特徴的な類。11は口唇面に極めて浅い棒押圧痕がかすかに連続する。１ｂ類と共通するものか。内面は横位条痕の上ナデ消し。外面は雑な横位条痕。12は内面横ナデ，外面は横位条痕の上をナデか。13は内外面横位条痕で口唇上面にも条痕を施す。14は内外面横位条痕の上をナデ。口唇上面にも横位条痕が残る。**１ｄ類**(15～18・20・21・24)はａ～ｃに該当しない１類で，僅かに外反気味に直線的に開く口縁が多い。15は内面丁寧なナデ，外面は横位条痕の上をナデ。16は内外面横位条痕の上をナデ。17は内面横ヘラ磨き，外面は雑な横ナデ。15～17は半精製の丁寧なつくり。18は内面横位条痕の上を雑なナデ。外面は雑な擦過の上をナデ。20は内面雑な横位擦過の上をナデ。外は粗い横位擦過。21は内外横位擦

過。24は内面横ナデ，外面は雑な横位擦過の上横ナデ。凸起の形状不明。

粗製深鉢 2 類（Fig. 57）

直線的に外傾して開く長めの口縁下で屈折して，胴部上半で更に屈折する礫石原や深堀出土の頸部リボン付深鉢類。晩期中葉のもの。**2 a 類**(26)は口縁が角ばる半精製品で，内面横ヘラ磨き，外面は斜位の条痕。**2 b 類**(27～33)は口縁端が丸味を持ち粗製品。27は内面ナデ，外面は極めて雑な横位擦過。断面下端は接合面。28は内面ナデ，外面は未調整の雑なナデ。29は内面横位条痕の上を横ナデ。外面上半は横ナデ，下半は横位擦過。断面下端は接合面。30は内面横位条痕の上を横ナデ。外面は雑な横位擦過。煤が若干こびりつく。31は内面横位条痕の上を横ナデ,外面は粗雑な未調整風横位擦過。32は内面横ヘラ磨きにみえるヘラナデ，外面は横位擦過。下端は指圧痕。33は内面横位条痕の上横ナデ，外面横位アナダラ条痕。

粗製深鉢 3 類（Fig. 58）

口頸部が内傾し肩の張る器形となる類で,刻目凸帯文土器 3 b・4 b類の直接の祖形をなす器形である。**3 a 類**(34)は短く外折する口縁外面に巻き込んだような玉縁をつくる類で小型品。口唇内外面ヘラナデ風。内面と外面下端は横位擦過，上半はヘナタリ条痕。**3 b 類**(35・37)は口唇上面に細い線状刻目を密に施す類。35は内外面横ナデ。内面は丁寧，外面は凹凸多し。図示した外面の張り出しは部分的で凸帯ではない。37は内面横位条痕，外面は条痕をナデ消す。刻目はヘラ先か板端による。**3 c 類**(36・38～46)はａ・ｂ類に該当しないもので，各々細部ではかなり異るが，細分しないでおく。36は内面横ナデ，外面は横位条痕の上ナデ。38は内面丁寧なナデ，外面は横位擦過の上をナデ。39は内面横ナデ，外面は横位条痕の上を雑な横ナデ。内外面凹凸多し。40は内外面横位擦過で内面はその上をナデ。41は内面横位条痕を横ナデで消す。外面は横位擦過の上横ナデ。42は内面横位擦過の上横ナデ。外面上半は斜め擦過，下半はナデ。43は内面横位擦過の上ナデ，外面はやや雑な横位擦過。44は内面横位擦過の上ナデ，外面は横位条痕をきれいにナデ消し。口縁外端は意識したはみ出し。45は口唇上面が平坦となり，内面は横位条痕の上ナデ，外面は横位擦過の上ナデ。46は内面横位条痕の上を横位ヘラナデ，外面は雑な横ナデ或は擦過状。

粗製深鉢 4 類（Fig. 56—19・22・23・25，Fig. 59・60，Fig. 61—84～90）

胴部中位に屈曲や肩の張りを示さない，単純な鉢形となる類。口縁近くの上半が僅かに内湾気味に外傾して開くものが多い。口縁端の形状，器面調整等で数種に細分できそうだが全器形が判かるものが無いので今回はやめとく。19は内面横位擦過，外面は未調整風の雑なナデ。22は内面横ナデ，外面横位擦過。23は内面ナデ，外面上半は横位条痕，下半は未調整風横位擦過。

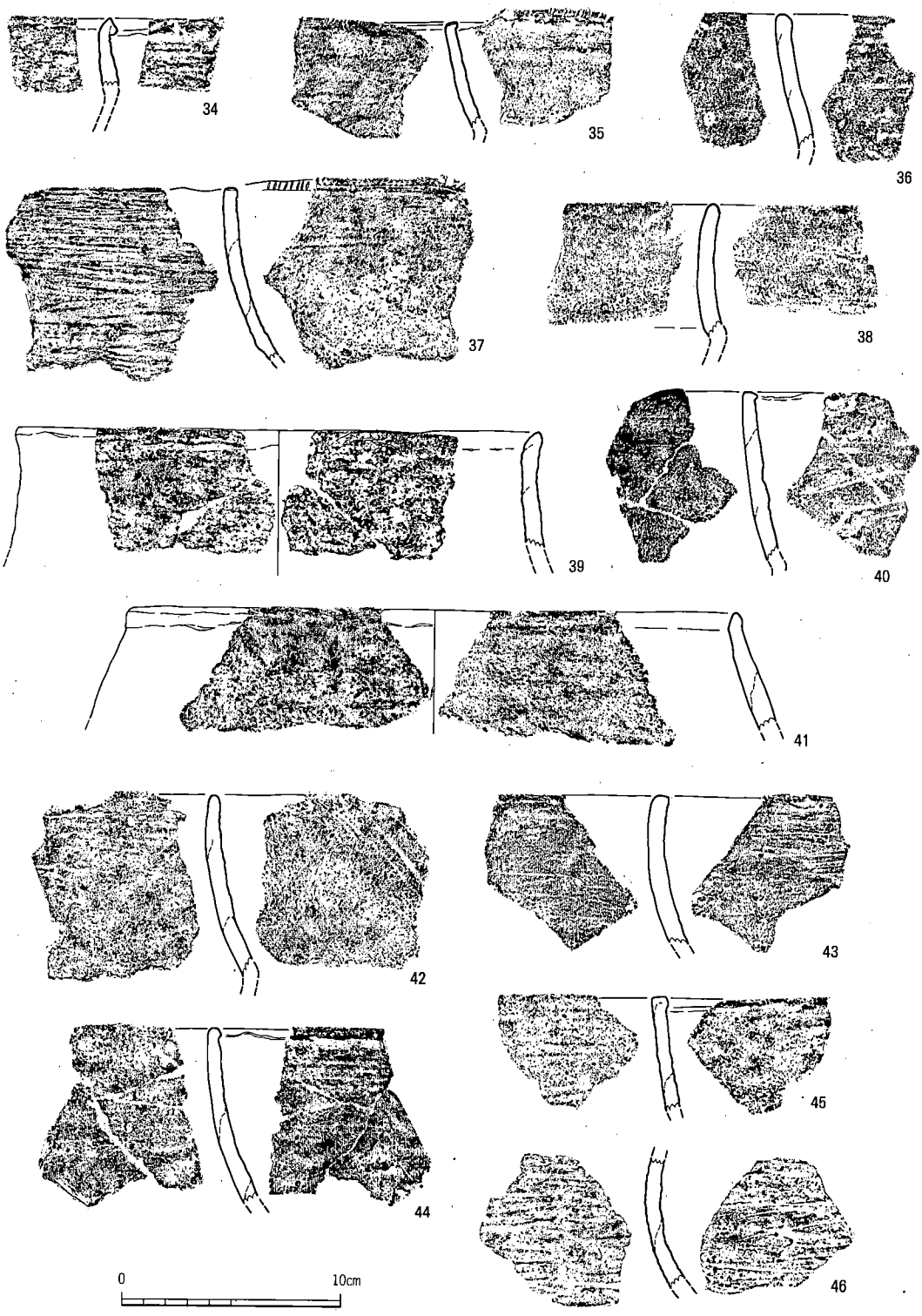


Fig. 58　粗製深鉢実測図（その４）(1/3)

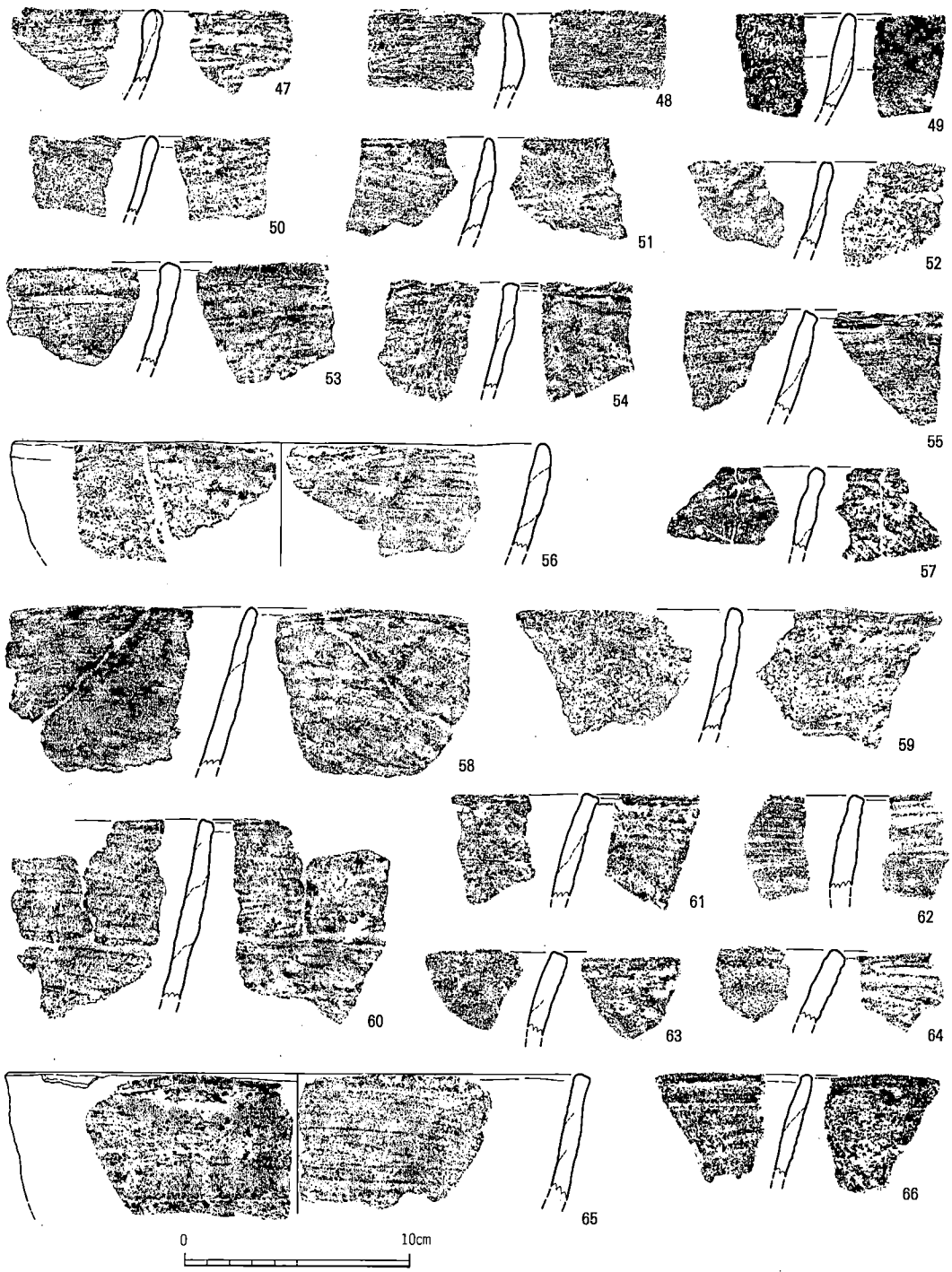


Fig. 59　粗製深鉢実測図（その５）(1/3)

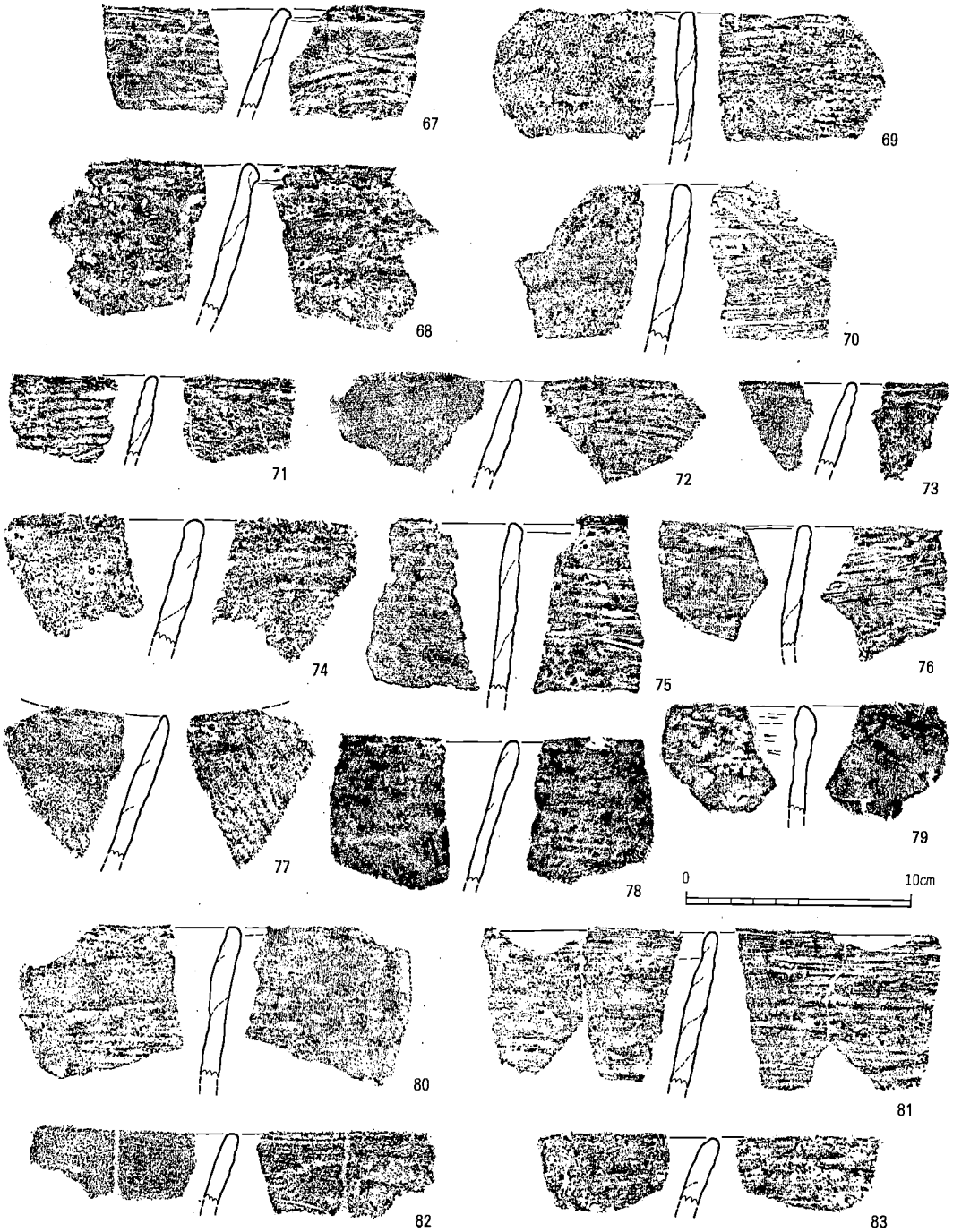


Fig. 60　粗製深鉢実測図（その６）(1/3)

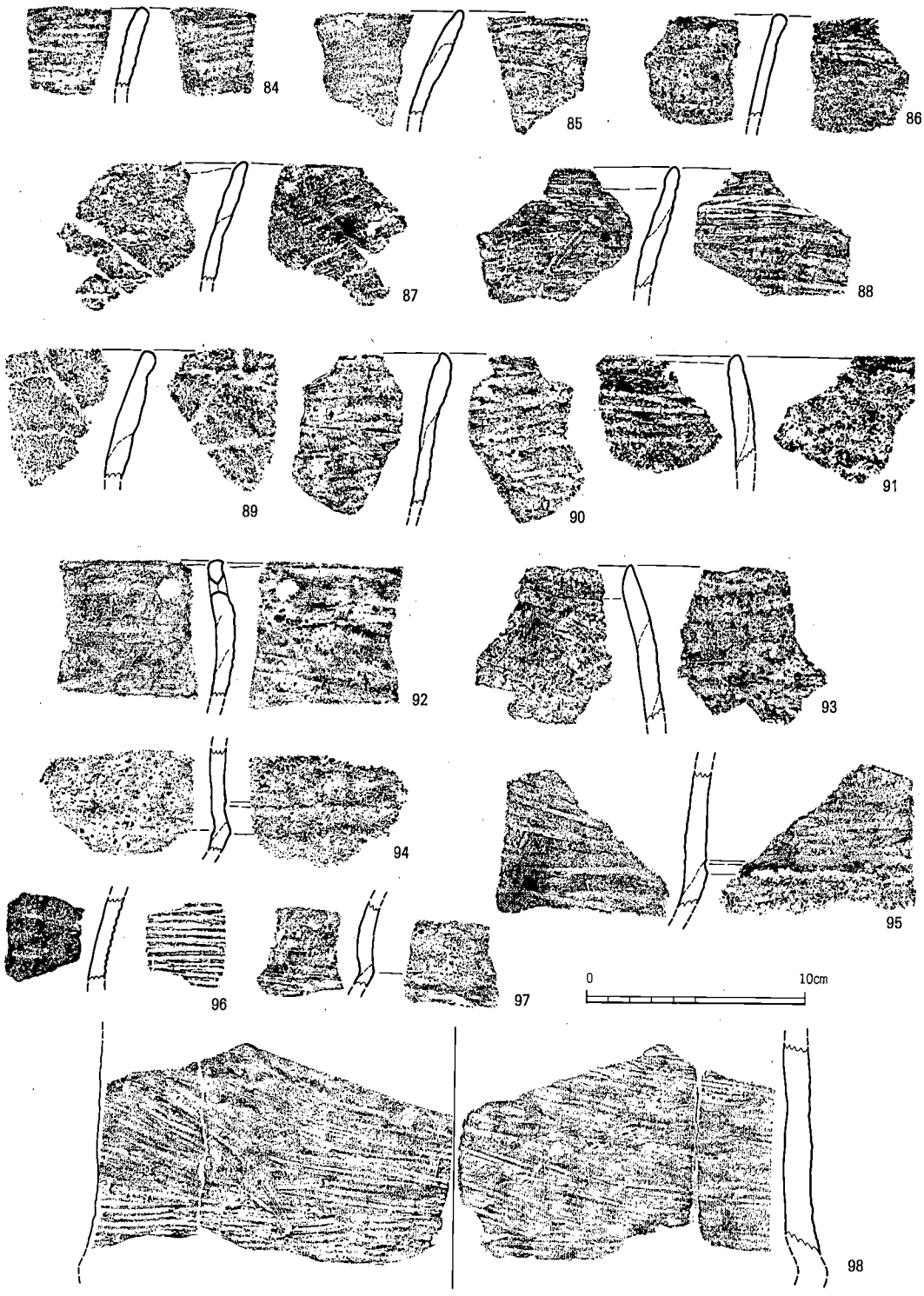


Fig. 61　粗製深鉢実測図（その７）(1/3)

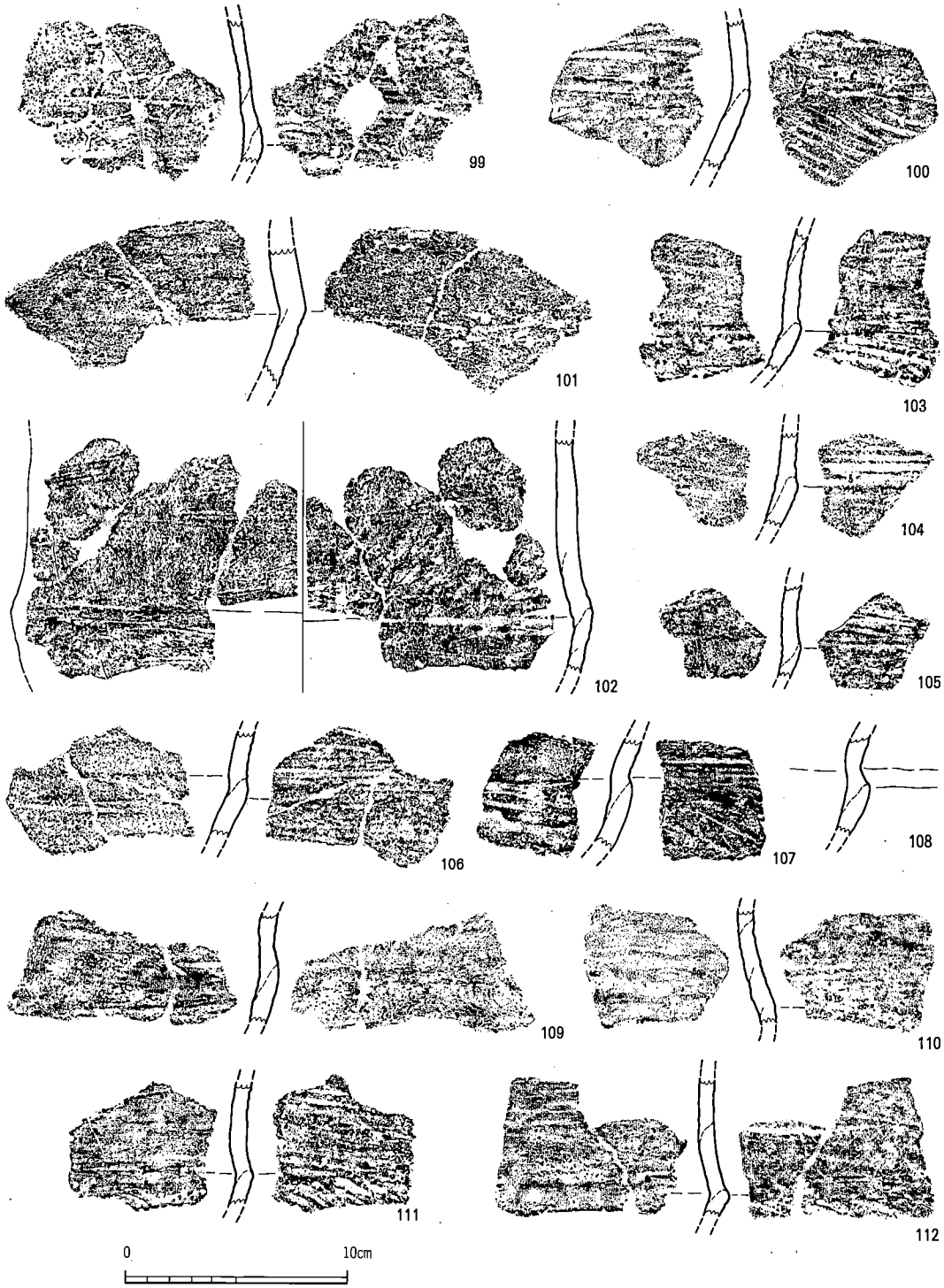


Fig. 62　粗製深鉢実測図（その８）(1/3)

25は上端面が窪んだこぶ状凸起と片削ぎリボン状凸起を併せ持つもので，内面上半は横位条痕，下半と外面は横位擦過。凸起の数は不明。47は小型品で口縁内外1cm下までは横位ヘラナデ，以下内外面は横位条痕の上ナデ。48は内面横位条痕の上をナデ，外面は横位擦過の上を横ナデ。49は細砂わずかに含むのみで，小型鉢となろう。内外面横位擦過の上をナデか。50は内面丁寧なナデ，外面荒い横位擦過。粗砂少量含むのみで小型マリ状となろう。51は内面横位条痕の上をナデ，かなり平滑。外面はやや雑なナデか。小ぶりの鉢となろう。52は内面横位擦過の上をヘラナデ，外面は雑な横位擦過で煤が厚くこびりつく。53は内面強い横ナデ。外面は横位条痕の上を横ナデ或は擦過。54は内面横位条痕の上をナデ。外面は横ナデ。半精製品。55は内面横位ヘラナデ，外面は横ナデ。外面下端に煤がこびりつく。56は内面横位条痕の上をナデ，外面は雑な横位擦過。57は内面雑な横ヘラ磨き，外面は雑な横位擦過。58は内面横ナデの上を横ヘラ磨き，外面は横位擦過の上を雑な横位ヘラナデ状。一部に条痕が残る。粗石英を幾らか含む半精製のやや大型品。59は内面横位擦過，外面は雑な横位擦過の上をナデ。口縁内外面横ナデ。60は内外横位条痕，口縁内外は横ナデ。61は内外横位条痕で内面はその上から横ナデ。62は内面横位条痕，外面は横位擦過。63は内面横ナデ。外面は横位擦過。64は内面横位擦過，外面は横位アナダラ条痕。65は内面横位条痕，外面は雑な横位擦過の上をナデで凹凸が多く煤がこびりつく。66は内面横位条痕の上をナデ，外面は雑な横位擦過。67は内面横位条痕の上をヘラナデ，外面は雑な条痕。口縁外端突出類。68は内面に雑な各方向のナデ，外面雑な横ナデ。内外面ともに凹凸激しい。69は内面横ナデ，外面は横位条痕の上を横位擦過。70は内面ナデでやや凹凸多し。外面は横位擦過。71は内外横位条痕で外面はその上を横ナデ。72は内面横ヘラ磨き，外面は横位ヘナタリ条痕で煤付着。73は内面丁寧な横位ヘラナデ，外面は横位擦過。74は内面雑な横ナデで凹凸が多し。外面は横位条痕の上を雑な擦過。75は内面横ヘラ磨き，外面は横位条痕の上を雑な横ナデ。晩期前半代。76は内面横ヘラ磨き，外面横位アナダラ条痕。粗砂幾らか含むがかなり胎土精良で半精製品。77は内面横ナデ，外面は上半が横位擦過，下半が斜位条痕。78は内面横ナデ，外面は横位条痕。79は内面上半は雑な横位擦過，下半はナデ。外面は丁寧なナデだが極めて凹凸あり。80は内面横位条痕の上横ナデ，外面は横位条痕の上ナデ。大型品。81は内面横位擦過の上を横ナデ，外面は横位条痕の上を横ナデ。82は内面横ナデ，外面は雑な横位擦過で煤が付着。83は内面横ナデ，外面は雑な横位擦過。84は内外面横位アナダラ条痕。85は内面横位条痕の上を丁寧にナデ消す。外面は雑な横位擦過。86は横位擦過の上をナデ，外面上端は横位条痕，以下は条痕の上をナデ。87は内面横位擦過，外面は斜位擦過の上をナデ。88は内外横位条痕の上を横ナデ。89は内面わりと丁寧なナデ，外面は凹凸が多くナデか。90は内面上端は横ナデ，以下は横位条痕の上を横ナデ。外面は雑な横位擦過。

粗製深鉢5類（Fig. 61—91～93）

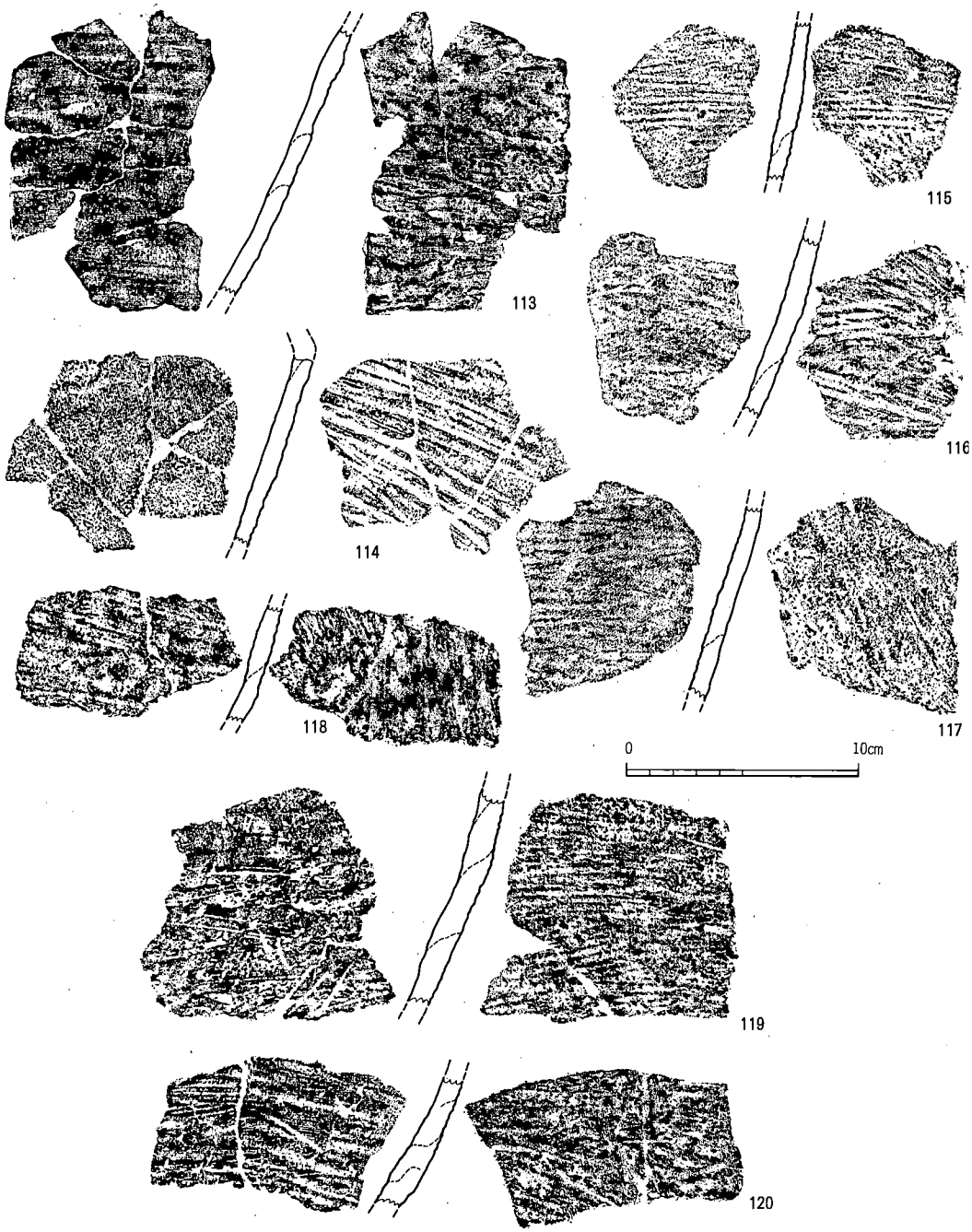


Fig. 63　粗製深鉢実測図（その９）(1/3)

内湾する口縁で丸い胴部となる類。91は内面横位条痕の上をナデ，外面は未調整風で雑なナデ。92は内面横位の丁寧なヘラナデ，外面は横位条痕の上を雑なナデ。補修孔がある。半精製

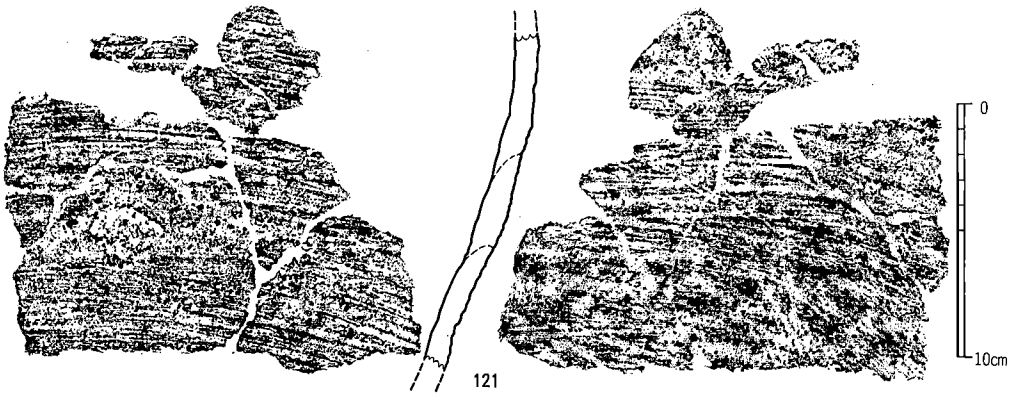


Fig. 64　粗製深鉢実測図（その10）（1/3）

の鉢となるか。93は口縁内外横ナデ，内外面雑な横位擦過。

粗製深鉢胴部片（Fig. 61—94～98，Fig. 62～64）

粗製深鉢1類のくびれ部(94～109・111)は外面稜の直上に沈線や段をつくる晩期前葉のもの(94・95)から，くびれ部がやや厚くなり特徴的な屈曲をみせるもの(106～109)で黒川新期まで下がる段階までみられる。また，粗製深鉢3類(110・112)の肩部もある。胴下半部片は大きい破片のみを図示した。

94は内面横ナデか。外面は横位擦過の上をナデか。小型品。95は内面横位ヘラナデ，外面上半は横位条痕の上を横ヘラナデ。下端は雑な横位擦過で煤がこびりつく。96は内面横ナデ，外面は整美なアナダラ条痕。胎土大旨精良で晩期ではない可能性もある。97は内面上半と外面は横位擦過の上をナデ。内面下端は横位条痕。98は内面横位アナダラ条痕をナデ消し。外面はやや雑な横位アナダラ条痕。99は内外横位条痕の上を雑なナデ・擦過。100は内面横ヘラナデ，外面上半は横位擦過，下半は斜位条痕。101は内面横位擦過をナデ消し。外面上半は横ナデ，下半は横位擦過。102は内面上端が横位擦過の上をナデ，中位が横位の削り状の擦過，下端が横位ナデ。外面上端は横条痕の上をヘラナデ，中位はナデ，稜直下は横位ヘラナデ，下端は条痕の上を雑なナデ。103は内面横位ヘラナデ，外面稜以上は条痕をナデ消し，以下は横位条痕。104は内面横位条痕の上をナデ，外面稜以上は条痕，以下は条痕ををナデ消し，煤付着。105は内面横位擦過，外面稜以上は横位条痕，以下は横位擦過。106は内面横位条痕の上をナデ，外面上半は横位条痕，くびれ部付近はナデ，下端は横位条痕の上をナデ。107は内面横ナデでくびれ直下に横位擦過痕が残る。外面上半は横位条痕，下半は斜位擦過。108は内外面横位擦過の上を雑なナデ。黒川式新～礫石原段階。109は内外横位擦過の上を雑なナデ。110は内面横位擦過の上横位ヘラナデ。外面稜より上は横位条痕，下位は横位擦過。外面煤付着。111は内面横位条痕の上を横位ヘラナデ。外面稜以上は横位条痕の上をナデ。下位は雑な横位条痕。112は内外横位条痕の

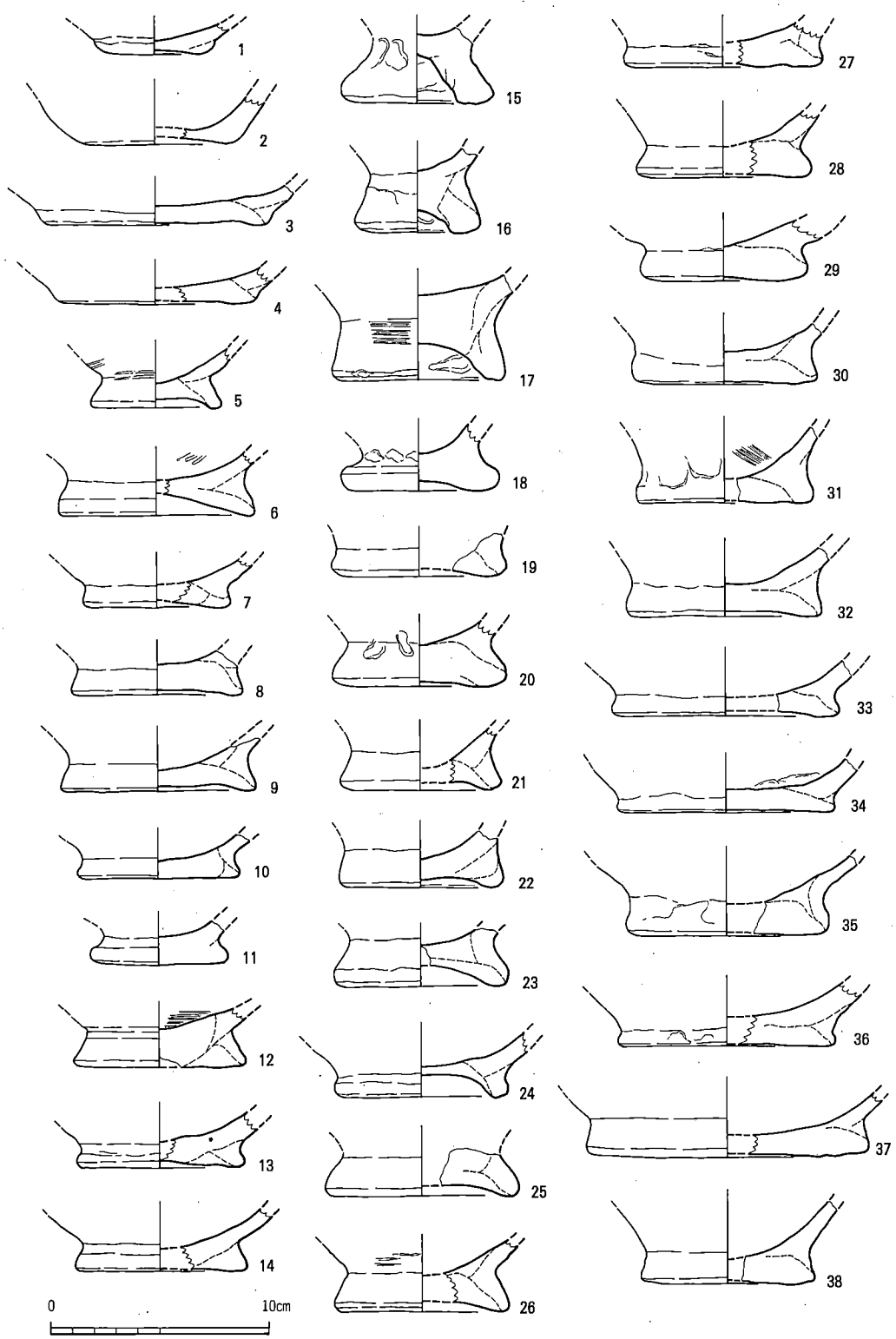


Fig. 65　晩期土器底部実測図（その１）(1/3)

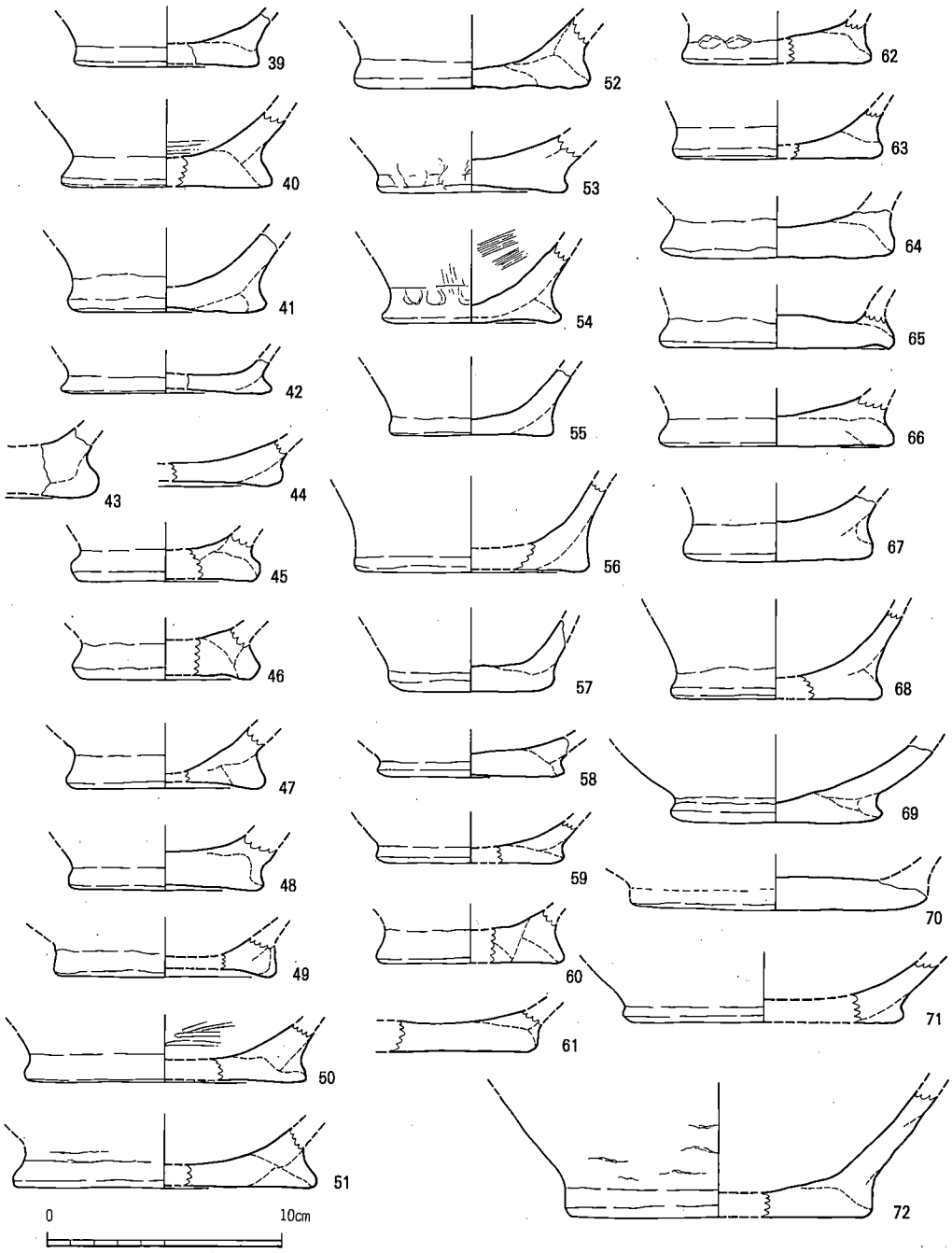


Fig. 66　晩期土器底部実測図（その２）(1/3)

上をナデ。外面稜以下に煤がこびりつく。113は内面横ヘラ磨き，外面は極めて粗雑な横位擦過で上半に煤付着。114は外面斜位条痕で煤がこびりつき，内面はナデか。115は内面と外面上半

は横位アナダラ条痕だが内面下端と上寄りでナデ消している。外面下半は雑な擦過。116は横位ヘナタリ条痕の上を斜めナデ上げ。外面はヘナタリ条痕。117は内面横位条痕，外面はやや斜位の掻きおろし状の擦過。外面上端は二次火熱を受けて赤変。118は内面やや斜位の条痕，外面は掻き上げ状縦位擦過。119は内面上端は横位ヘラナデ，以下は雑な横位擦過。外面横位アナダラ条痕。120は内面横位条痕の上をナデ，外面は条痕の上を雑な横位擦過。煤がこびりつく。121は内外面ともに横～斜位のヘナタリ条痕。外面に煤付着。

晩期土器底部（Fig. 55・66）

1・2は御領系土器の特徴を残し，晩期前半代のもの。3・4は外縁を残して中央が僅かな上げ底になり，内面は磨きやナデで平滑となる。5～14は明らかな精製浅鉢で，上げ底のものと平底のものとがある。5の外面には条痕が残る。6の内面はヘラ磨き。12の内面は横位条痕。15～17は高く大きな上げ底となる類で，17の外面には条痕が残る。高杯の祖形的な器形になるかもしれない。18～26は底外端が外方へ張って10～5㎜程の上げ底になる類。24の内面は斜位擦過。27～42は外縁を残して中央寄りだけが僅かな上げ底となる類。30の内面は板状擦過。31の内面は条痕が残る。32の底外面はカキトリ状擦過。34の底外面は擦過。36の底外面は小凹部が多くみられ，何らかの圧痕と思われる。39の外面は擦過。40の内面はヘラナデ。42の内面は擦過。43～56は底外面全体が僅かに上げ底状となるもの。50の内面はヘラナデ。51も同様。52の底外面は粗い未調整風擦過。54の内面はヘラナデで条痕が残る。56の底外面には小さい凹圧痕が多い。57～72は平底類。65・70は底内面中央が高くなり，円盤台状の接合法で，古い様相を示す。

H 石　　器

ここでは，柿原Ⅰ地区出土の全石器のうち，明らかな弥生時代のものを除くすべてを報告する。よって，弥生時代前期の打製石鏃等も含まれている可能性は否定しない。ただ，土器の出土量が圧倒的に縄文早・晩期のものが弥生土器より多量であり，石器の型式からみても大半は縄文期のものと言える。

特に縄文早期の貴重な尖頭器や，各型式のドリル，チョッパー状や横型の大きなスクレイパーなどは注目される。横型石匙の古い感じのもの，小型スクレイパー群の確かな存在も確認できる。また，打製石鏃は91点も出土し，早期の精品から剝片鏃の未製品に到るまで揃っている。さらに，磨石・凹石の類も30点出土し，使用痕の肉眼観察できない円礫まで含めるとこの倍近くなる。磨石の多量使用は生活の旺盛さを物語る処であろう。

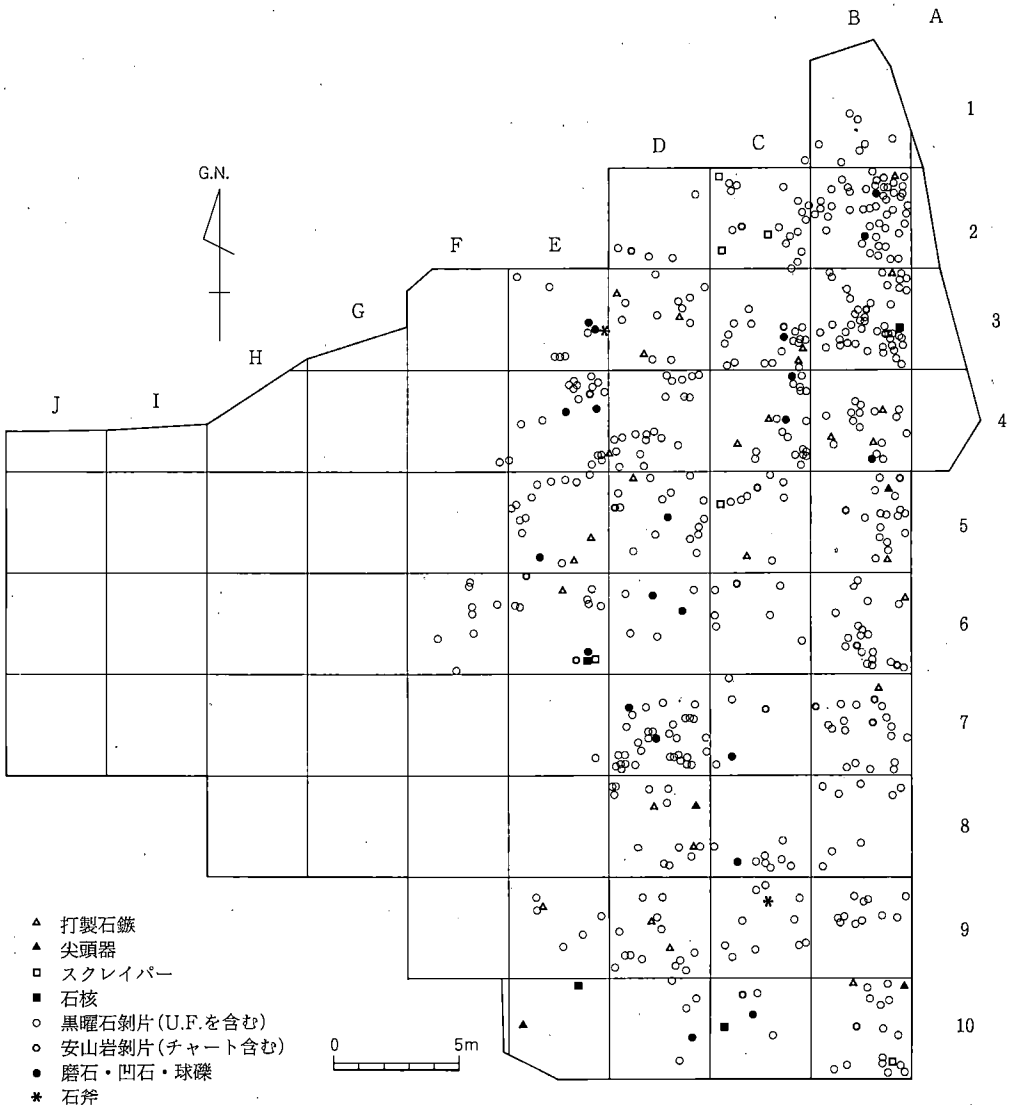


Fig. 67　縄文包含層　石器類出土分布図（1/300）

尖頭器状石器（Fig. 68, PL. 23）

3類に大別できる。長く槍形のもの(1)，大きく丸っこいやや扁平形のもの(2・4)，打製石鏃の大型品或は三角形スクレイパー状の厚手のもの(3・5・6)である。いずれも良質の腰岳系黒曜石製である。

1はE10-P1出土で，黄色土埋土の円形土壙内で押型文土器を伴うもの。長さ5.2cm，幅2.3cm，厚さ1.4cm，重量12.7g。風化し，特に稜線はかなり擦れている。縦長粗材を使用し，両側縁は交互剝離。縄文早期の所産。2はB5-32で，裏面の上下端に主要剝離面が残る。長さ5.1

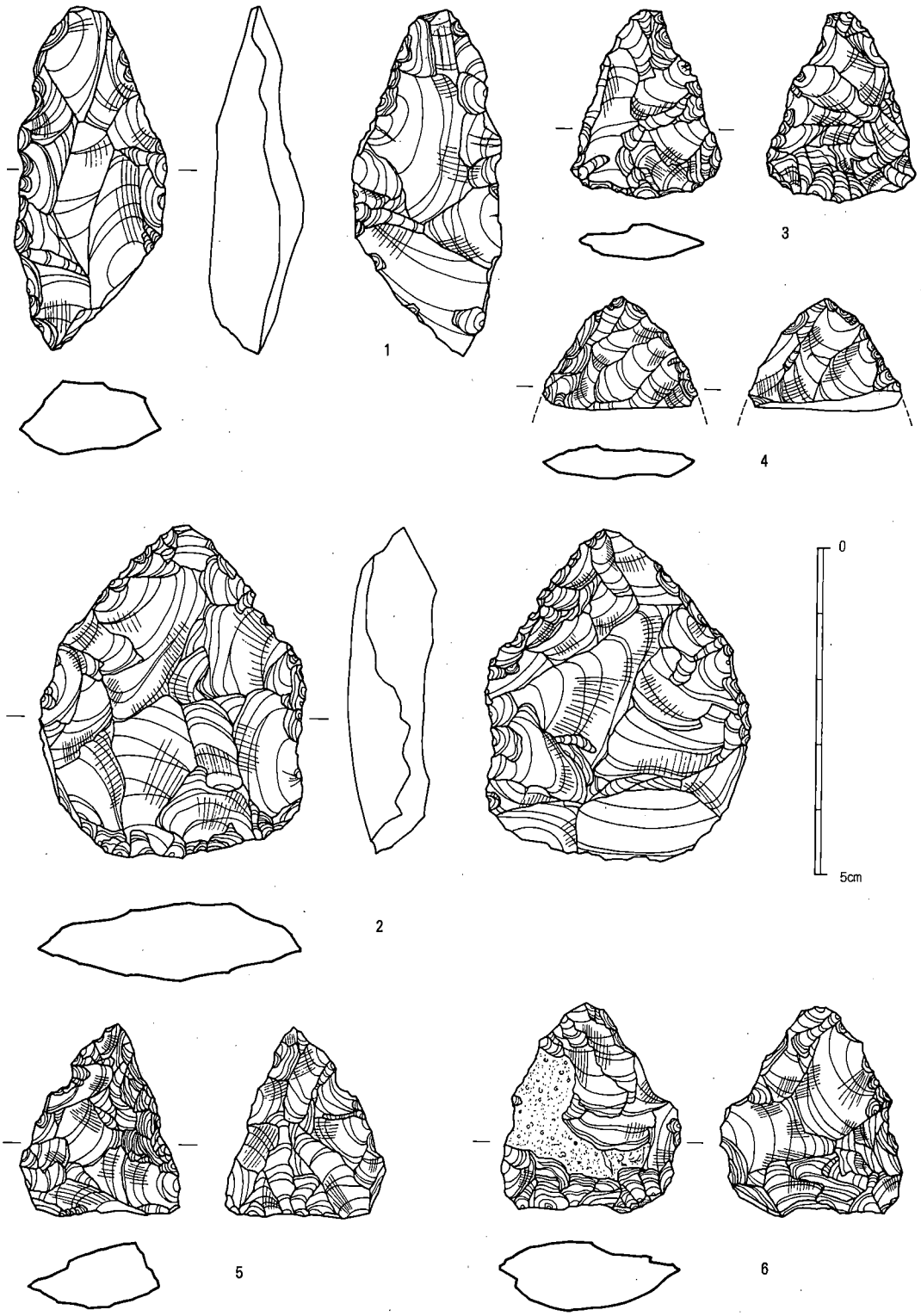


Fig. 68　尖頭器状石器実測図（実大）

cm，幅4.1cm，厚さ1.3cm，重量25ｇ。表裏とも調整は粗いままであるが縁辺には部分的に細調整を施す。表面の風化は見られない。３はＢ８－４で，長さ2.9cm，幅2.3cm，厚さ0.5cm，重量3.1ｇ。剝離は粗く，僅かに縁辺細調整するのみ。全面かなり擦れている。４は２と同類かと思われるがやや小型品で，Ｆ６黄色土出土。長さ1.7cm以上，幅2.4cm以上，厚さ0.5cm，重量1.1ｇ。表裏ともに一部に主要剝離面を残す。雑な剝離で縁辺細調整も片縁のみ。５は表採品で長さ３cm，幅2.5cm，厚さ１cmと部厚い。重量5.2ｇで，全面やや擦れている。６はＥ６最上層（６号墳盛土中）出土で，長さ3.2cm，幅2.8cm，厚さ1.1cm，重量8.4ｇ。表に自然面を残し，全体に粗雑な剝離であるが基部縁は表面のみの細調整が施される。

打製石鏃（Fig. 69～73，PL. 24・25）

形態分類　形態上，各種に分類できる。早期に属する精緻なつくりの鍬形鏃（１～８・16・17・19～21・23～27），凹基鏃（34～36・43～46），長い石槍状の類（37・38），五角形鏃（40～42），雑で形状も歪つな円・平基鏃（22・51～55・61・68・77），裏面に主要剝離面を大きく残したままの剝片鏃（62～64・67・72～76・80～85・87・90・91）などである。

時期分類　時期的には縄文早期と晩期が殆どと思われるが，全てについて両時期に峻別することはできない。出土土器の総量からみると晩期のものが６～７割近くあるので，打製石鏃についてもそれ位の割合となろうか。ただし，弥生前期～中期前葉の土器も出土しているので，この時期の分も幾らか含まれよう。また，表面の風化の度合いで時期判断できる部分もあるが，例えば，明らかに早期のものと思われる鍬形鏃のうちパティナが認められるのは，３・４・６だけで，２割にも満たないことを考えると，あまりあてにはできない。

欠損状況　欠損状況を見てみよう。片脚のみの欠損が目立ち，36例（40％）にのぼる。両脚欠損は６例（７％）で少ない。先端部欠損は14例（15％）となる。片脚欠損が多いのは，使用状況の問題というよりは，脚の長い鍬形鏃や凹基鏃が多い為で，石鏃の形状に左右されていると考えた方がよい。

不整形鏃　円基・平基鏃のうち先に分類の中で示した，粗雑で不整形の鏃は注目できる。単に作りが粗いという問題ではなく，基本的に打製石鏃としての作り方をしていない。丁寧な押圧剝離で縦軸の中心線に稜を持ってきて，縁辺部は細かく調整して仕上げるという打製石鏃製作の基本とは全く逆なのである。基部についても抉り部を作り出す行為が全く意図されない結果として，雑な平基や円基となっている訳である。剝片鏃を見ればわかるとおり，何は無くとも縁辺部リタッチと基部抉りだけは意図しているのに，である。これらの明確な事実は，この種の不整形鏃が，石鏃を意図して作られたものではないことを示すもの，つまり小型スクレイパー等の他使途用の石器と考えることもできる。単に未熟者の手による製品とするにはあまりにも技術が異なる。ただ，鏃としての使用には充分耐え得る類であり，先端が欠損したもの（54）も

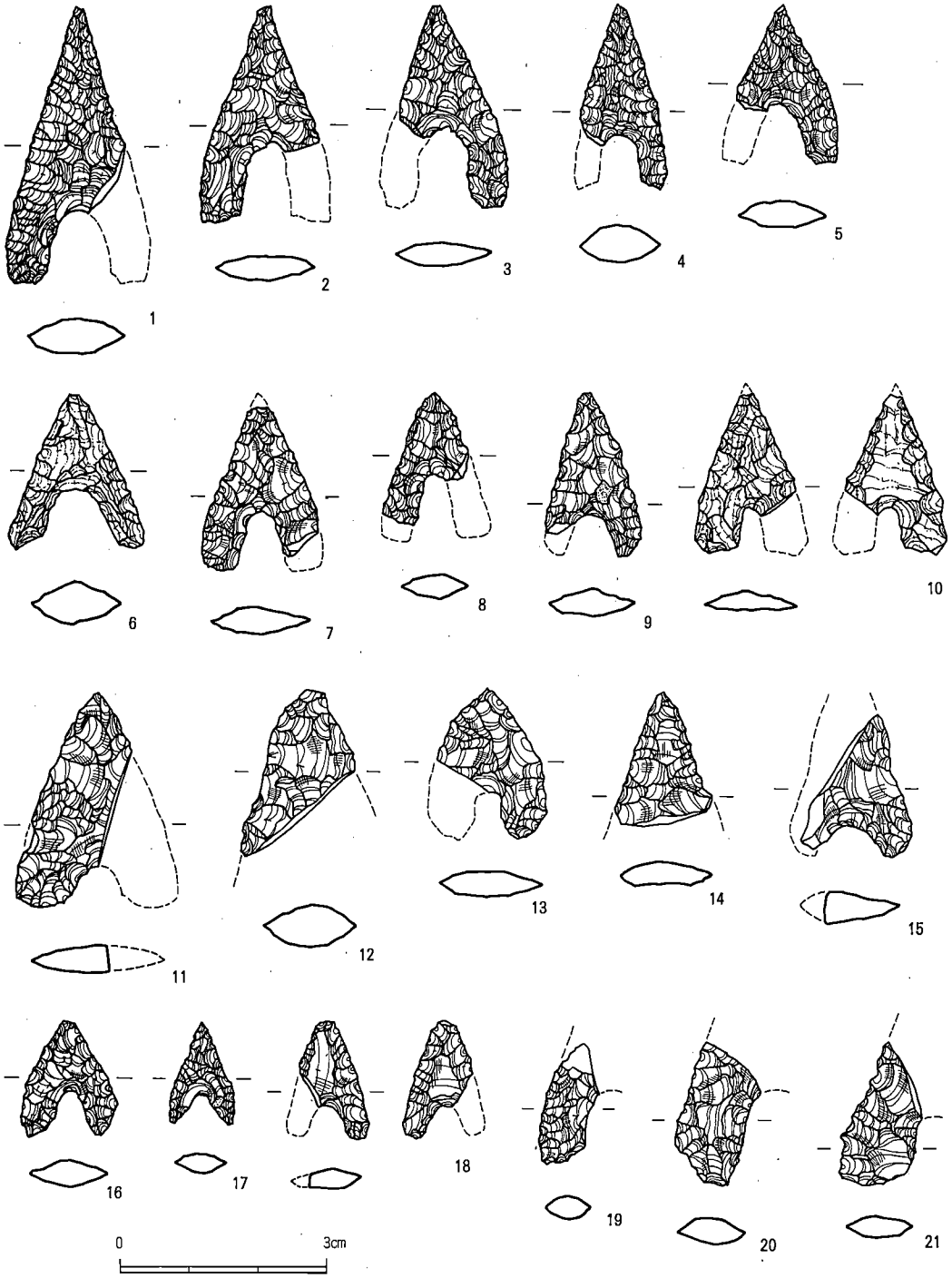


Fig. 69　打製石鏃実測図（その１）（実大）

あり実際に使用されたものと思う。やはり，これは時期的要因と考えられ，縄文早期という弓矢の出現直後の試行的段階を示すものとされよう。この中で使途の違いということに固執するとすれば，尖頭器状石器（Fig. 68—3・5・6）の小型品にあたるため，手持ちの小型槍或はヤス等の用途を考えることもできる。

使用石材　赤茶色の珪質のもの1点(22)，安山岩製9点(6・10・36・38・43～45・57・78)(10%)，姫島産の灰白色黒曜石製1点(59)，黒色で不純物を多く含む黒曜石製2点(53・55)，他は全て漆黒色良質或は半透明の腰岳系黒曜石製で78点(86%)となる。

1はA3黄色土出土で2.1g。表裏とも極めて丁寧。長さ4cm。2は表採品で1.2g。表裏とも丁寧で長さ3.1cm。3は裏面中央に主要剝離面を残し，表面風化。長さ2.9cm，重量0.9g。表採品。4はEF6黄色土出土でやや風化。表裏とも丁寧で1.1g．5はA2出土で裏面はやや雑。かなり透明なob.で0.7g。6は表採品でかなり風化。つくりはうまく，厚手で1.4g。7は表採品で裏面もわりと雑。1.1g。8はA4黒色土出土で0.4g。かなり半透明。9はD7-P3出土で表裏ともかなり雑。0.8g。10は表採品で雑なつくり。扁平で主要剝離面を大きく残す。0.7g。11は6号墳III区周溝内出土で，1.4g。長さ3.1cmとやや大型でかなり雑。12はD7黄色土出土で表裏とも雑。1.4gでかなり半透明。13はSX1集石遺構中出土品で，裏面中央に幾らか主要剝離面を残す。かなり透明で0.7g。14は表採品で表裏ともかなり雑。全体にかなり擦れており，0.8g。15は表採品で裏面も極めて粗雑。1g。16はA4出土で長さ1.6cm，重量0.5g。やや半透明で不純物を僅かに含む。17はD5-41で小さい乍らもつくりはうまい。早期タイプで0.2g。大きい不純物を僅かに含む。18はC4表層出土で主要剝離面を残し，かなり半透明で0.3g。19は表採品で丁寧なつくり。0.4g。20はかなり大型となる鍬形鏃脚部で，裏面も雑。0.8gで表採品。21はB1-55でやや半透明。0.6g。22はE9-5で赤茶色不透明の石材使用の粗製品。長さ2.6cmで3.2g。表に自然面を残し，基部の調整だけは裏面側もしっかり施す。古相を感じる。23はE5-28で表裏とも丁寧。0.8g。24はB4-66で表裏ともやや粗い。半透明で1.2g。25はB3-16で表裏とも丁寧。0.9g。26はD8-34で表裏とも丁寧で0.7g。27はE5-23で1.1g。28はC4-40で表裏とも粗い。やや半透明で1.2g。29はB4-57で主要剝離面を残し，やや半透明で0.7g。30はD9-50で主要剝離面を残し，0.8g。31はD3-41で自然面と主要剝離面を残した剝片鏃。0.3gでかなり半透明。32はB2-31で主要剝離面を残した剝片鏃。0.5g。33はB3-143で，不定形剝片を横位置に用いた粗製品。0.5g。34はC5-12で主要剝離面を中央に残す。0.8g。35は表採品で表に自然面，裏中央に幾らか主要剝離面を残す。1.4g。36は表採品で主要剝離面をかなり残す。1.6g。37はF3表土出土で長さ3cmの長細形。丁寧だが裏面はやや雑。1.2g。38はB7-34で整形がうまく丁寧。長さ2.6cmで1.4g。39は表採品で裏面の一部に主要剝離面を残す。1.9gで一部に不純物含む。長さ2.9cm。40はF6-34で裏はやや雑。長さ2.5cmで1.2g。41はD3-25で表裏ともやや雑。かなり半透明で小不純物多く含

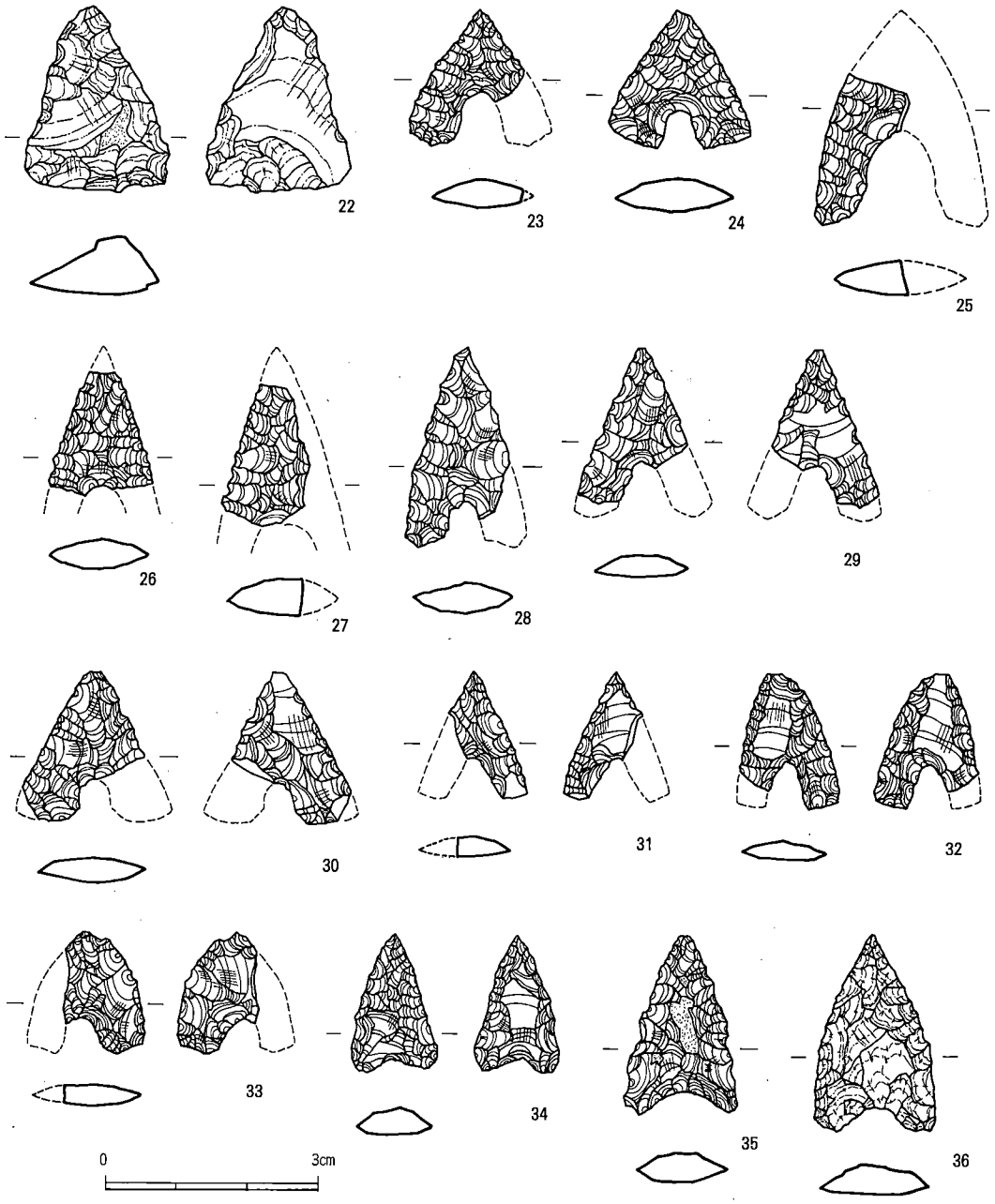


Fig. 70　打製石鏃実測図（その２）（実大）

む。長さ2.4cm，0.8ｇ。42はＩ７黒色土出土で1.5ｇ。43は表採品で調整は粗いが成形はうまい。長さ2.8cm，2.2ｇ。44はＥ６－Ｐ４出土で0.9ｇ。裏面中央に主要剝離面を残す。長さ2.4cm。45はＩ７黄色土出土で表裏とも粗い。長さ2.3cmで1.4ｇ。46はＥ４・５黄色土出土で風化

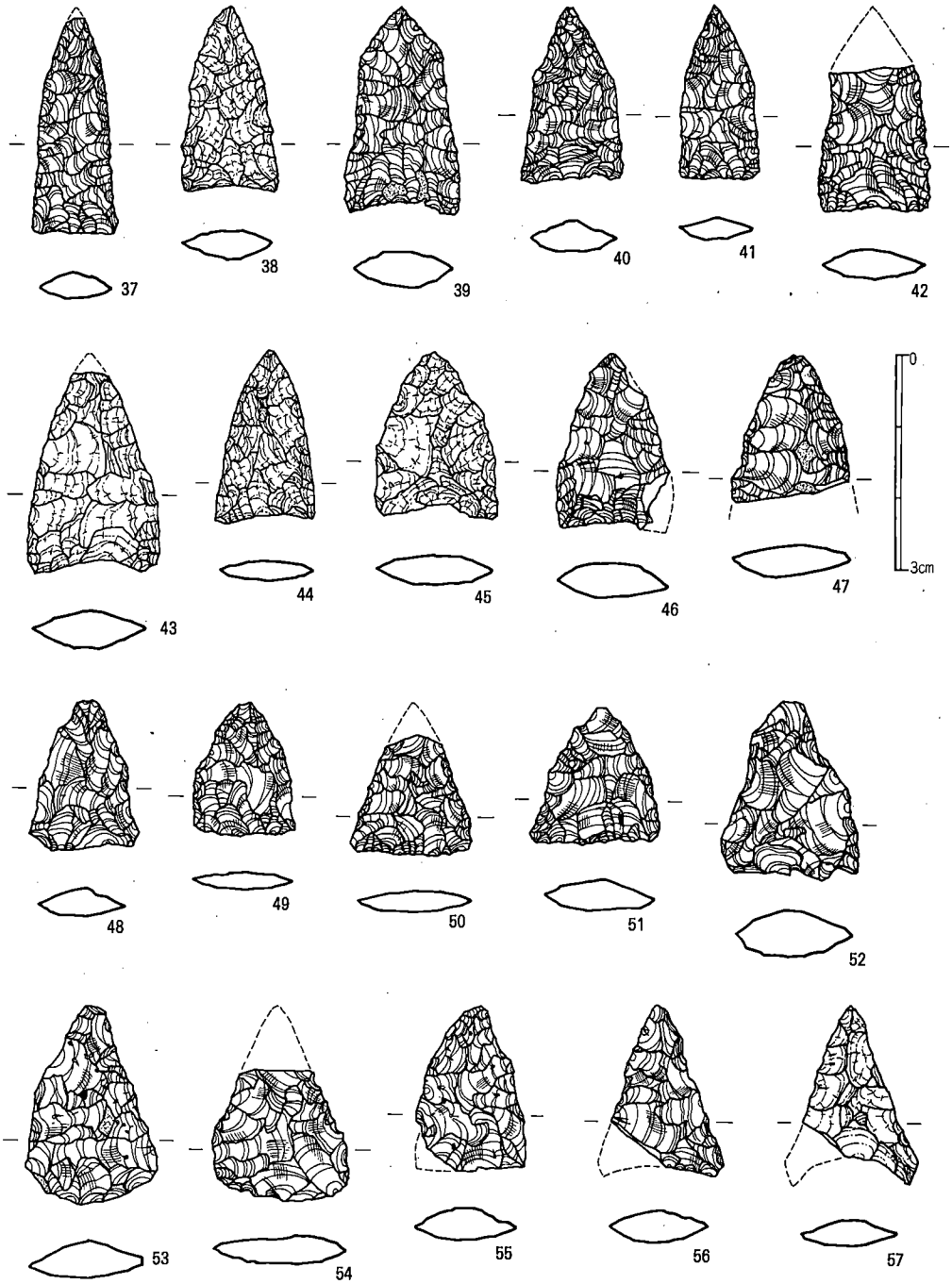


Fig. 71　打製石鏃実測図（その３）（実大）

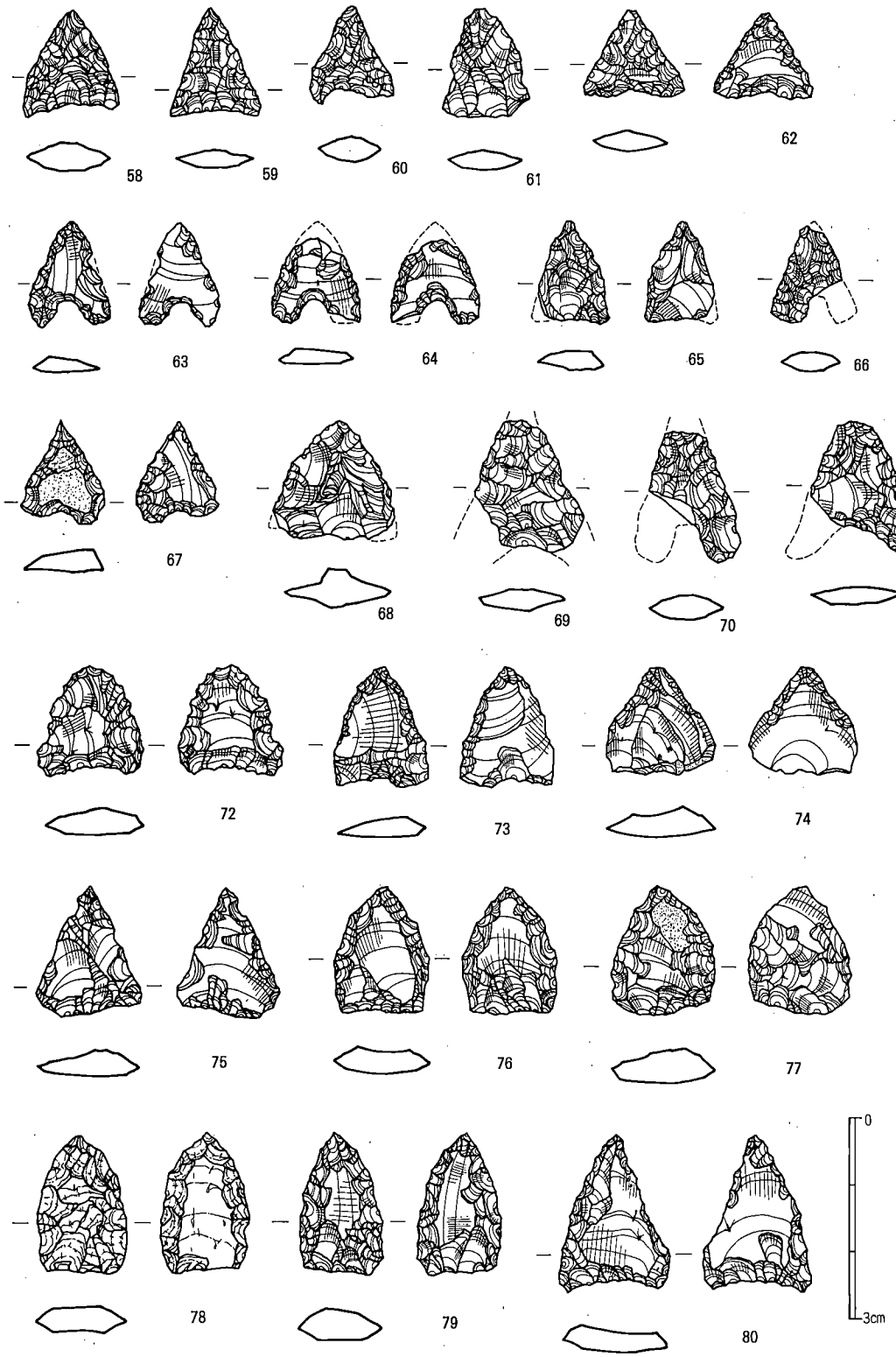


Fig. 72　打製石鏃実測図（その４）（実大）

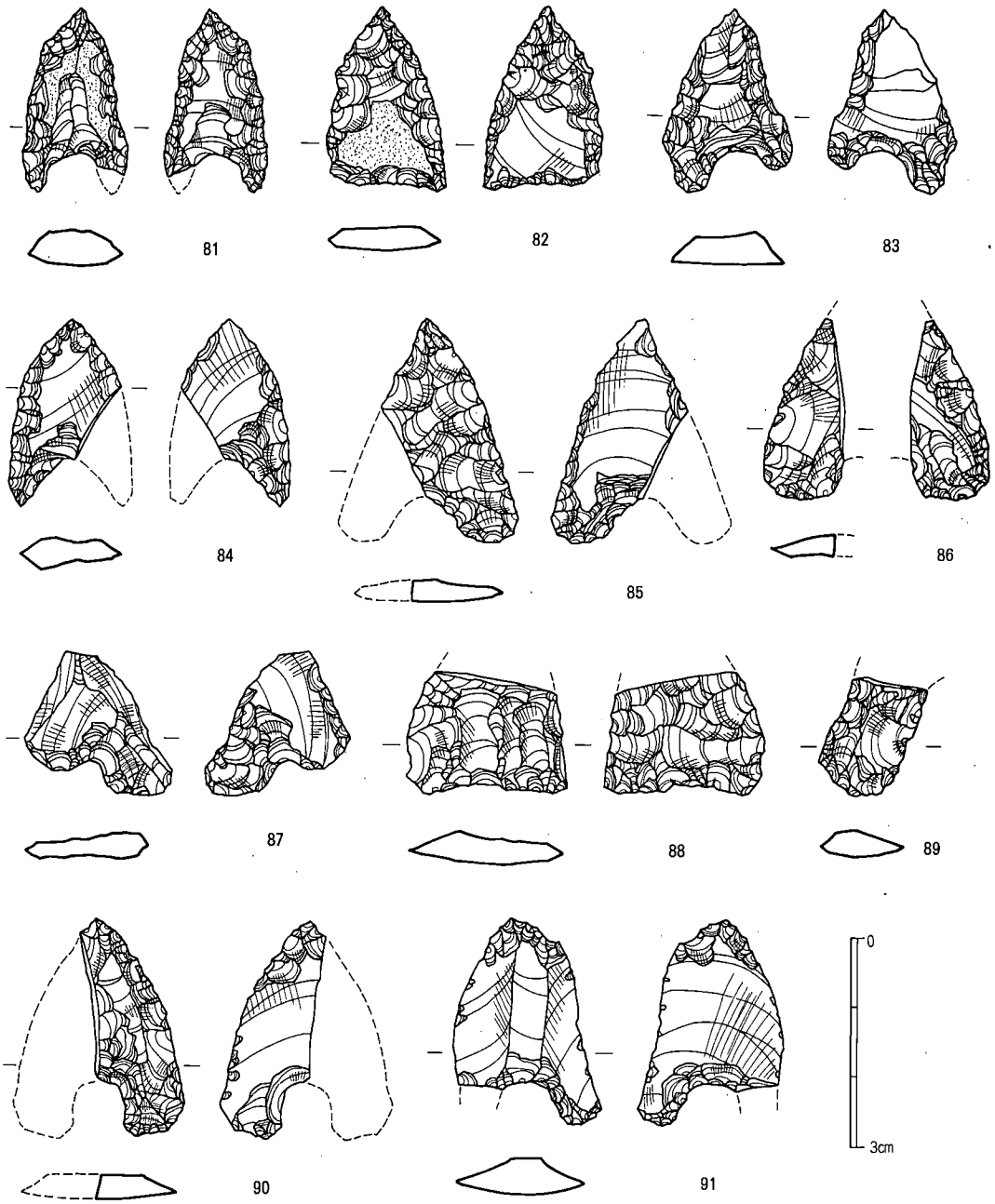


Fig. 73　打製石鏃実測図（その５）（実大）

しており裏面もやや雑。長さ2.5cm，1.4ｇ。47はＢ６-16で裏面中央に主要剝離面を残す。裏面も粗い。1.4ｇ。48はＣ３-12で裏もかなり粗雑。１ｇ。49はＣ４-Ｐ３出土で裏面も雑。0.7ｇ。

50は6号墳北側近辺出土で調整はかなり粗い。半透明で縞が入る良質のob.で0.8g。51はB10-32で表裏とも極めて雑。1.3gでやや半透明。52は典型的不整形鏃で黒色土出土。裏に主要剝離面を一部残し，調整の雑なのは特徴的。部厚く2.4g。53はF6黄色土出土で白い不純物を多く含む。極めて雑な円基類で，裏面に主要剝離面を残す。2.2g。54はB3-3で表裏ともに極めて雑。やや半透明で1.6g。55は表採品で小さい不純物を幾らか含み，裏面一部に主要剝離面を残し，1.4g。56はD3-11で表裏ともかなり雑。1g。57は表採品で表裏ともかなり大まかな調整。0.9g。58は表採品で白い不純物を僅かに含む。0.7g。59は表採品で姫島産黒曜石製。整形がうまく，0.4g。60は表採品で裏面下半に主要剝離面を残す。0.5g。61は表採品で全体に雑。0.5g。62はD8-6でかなり半透明。長さ1.3cmの小型類で0.3g。63は表土出土品で縁辺部のみ調整の小型剝片鏃。0.3g。64は表採品でかなり半透明の小型剝片鏃。0.3g。65はE7出土で長さ1.5cm，0.3gの小型粗製鏃。66はC7出土でやや半透明。裏面はかなり雑で0.3g。67は表採品で長さ1.6cm，重さ0.4gの小型剝片鏃。表に自然面，裏に主要剝離面をそのまま残し，皮部分の不定形剝片を横位置に使用している。68は表採品でかなり半透明。雑で中央にこぶが残る。1.1g。69はC3-46でやや半透明。裏面の一部に主要剝離面を残し0.9g。70はB5出土でやや半透明。0.8g。71は表採品でやや半透明。表裏ともかなり雑で0.8g。脚の形状に特色がありトロトロ石器の脚に共通する類か。72はB5-49でかなり半透明で僅かに不純物を含む。0.9g。73はE6-39でかなり半透明。バルブカットの剝片鏃で0.5g。74はD6-P2出土で幾らか不純物を含む。小剝片の先端のみに縁辺リタッチしただけの剝片鏃。長さ1.6cm，0.9g。75は表採の剝片鏃で0.8g。76は表採の剝片鏃で0.9g。77はD4-6で1.5g。78はD6-P12(黄色土土壙)出土で表面やや風化。1g。79はD7-6で横長状剝片使用。やや半透明で1.1g。80は6号墳北側近辺出土で1g。幾らか不純物を含む剝片鏃。81は縄文土器出土地点B出土で縁辺調整のみの雑なつくり。1.5g。82はやや半透明の表採品。1.4gの剝片鏃。83は表採品で裏面上端は新しいガジリ。表面が風化しており，早期段階の未製品か。1.7g。84はE7南東隅出土の剝片鏃。全面火熱を受けてザラザラ。1.4g。85は表採品でやや半透明の剝片鏃。1.4g。86はA2出土でかなり透明。裏面に主要剝離面を残し，0.9g。87はD6-P1(弥生土壙)出土の未製品。1.3g。88はC10古墳盛土中出土でやや歪つとなる。1.9g。89はA2出土でやや半透明。0.9g。90はA3黒色土出土でかなり半透明。1.4g。91はD7-6で未製品。基部の抉りと先端調整のみ。2.3g。

石錐 (Fig. 74, PL. 23)

8点出土したが，すべて腰岳系良質の黒曜石製で，形状・調整度合いから3種に大別する。**1類**(2・6)は縦長剝片を使用し，先端を細長くするための調整が密に施されている，所謂縄文的ドリルであり，先端は多角形断面となる。**2類**(1・4)は縦長剝片を使用し，先端部付近

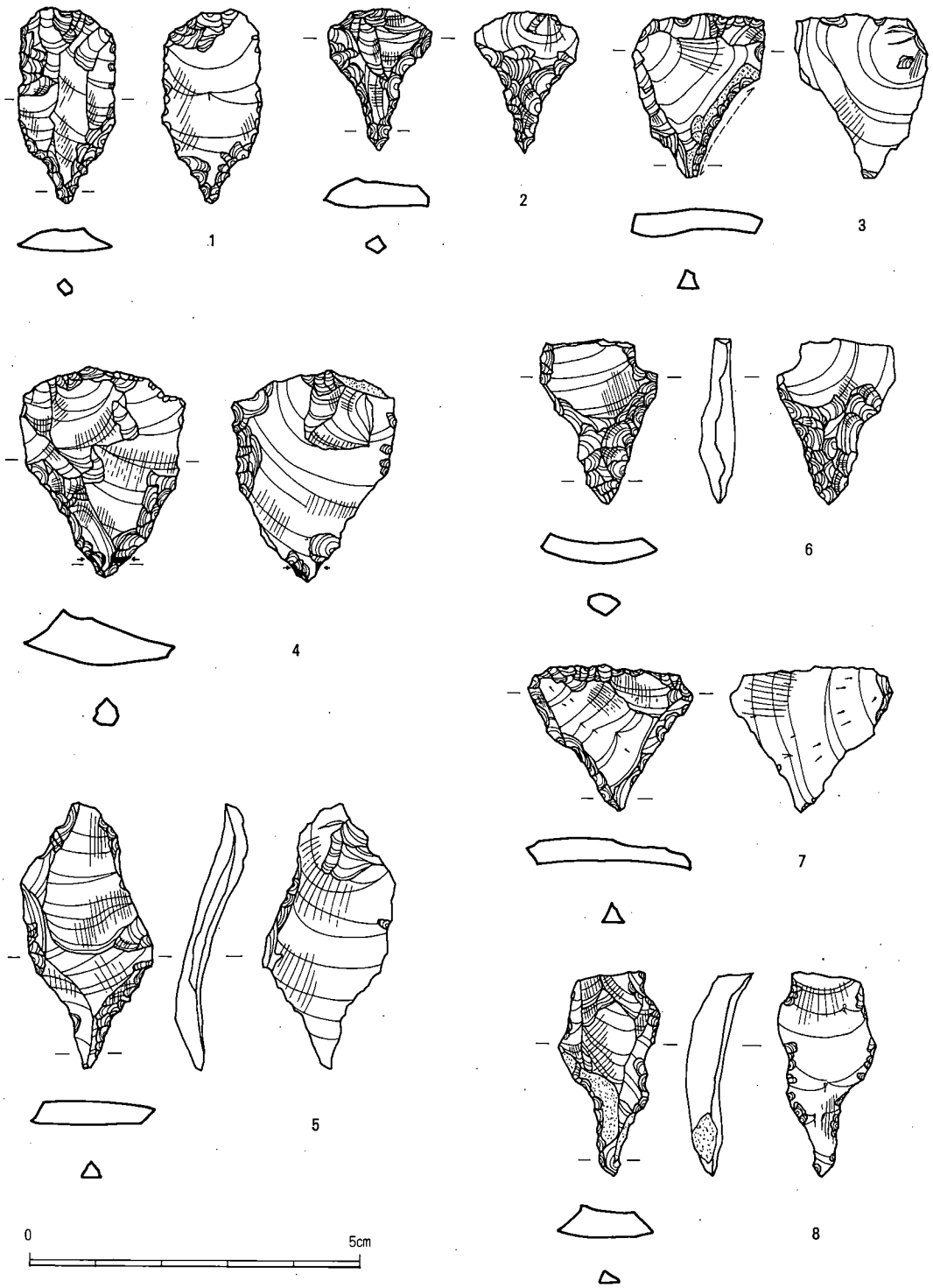


Fig. 74　石錐実測図（実大）

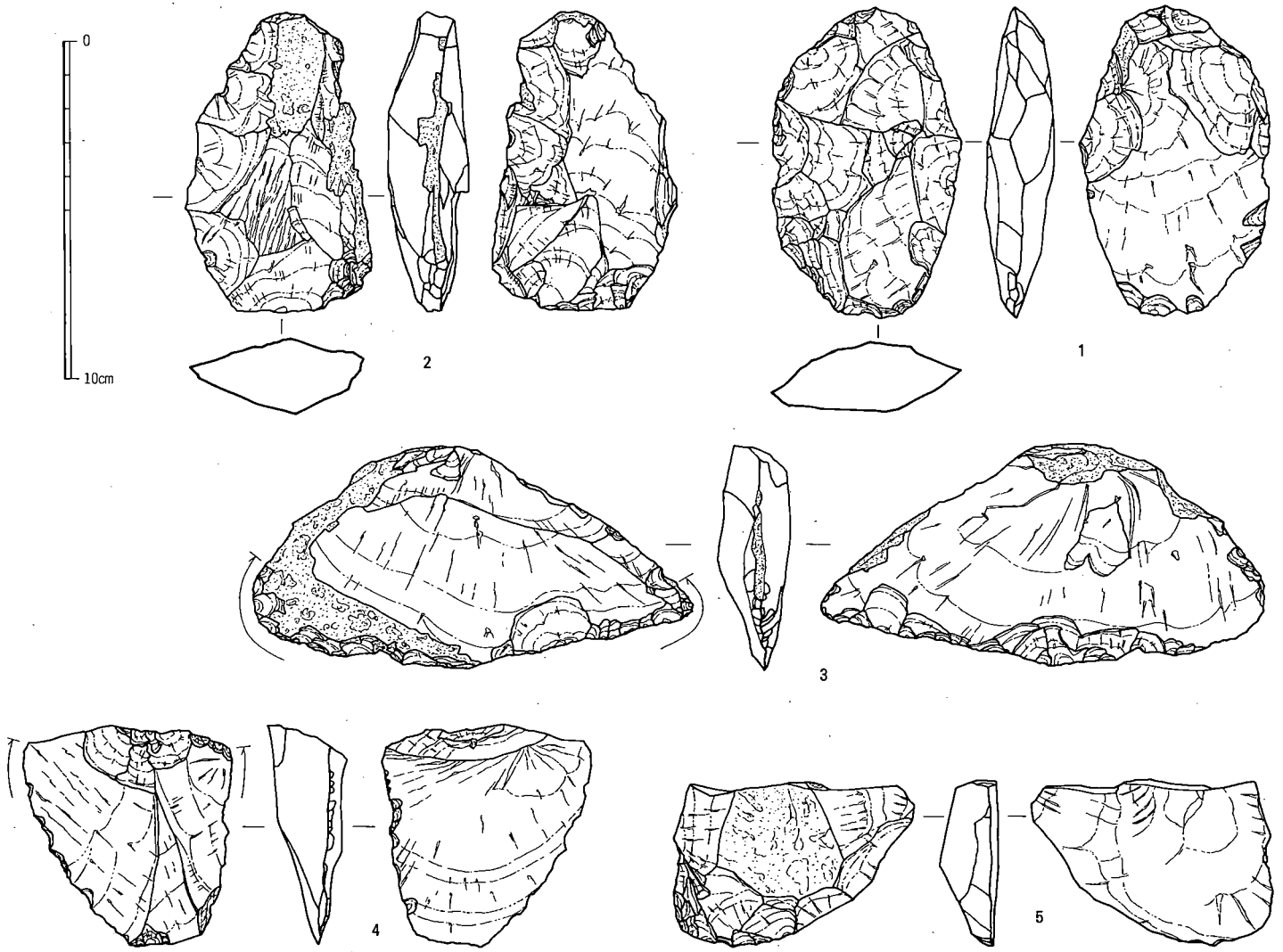


Fig. 75　打製石器実測図（その１）(1/2)

の縁辺調整のみのもので，先端の断面は多角形となる。**3類**（3・5・7・8）は不定形剝片の下端片端或は縦長状剝片の下端が細長く尖ったものを選んで，表面のみの片縁側だけの簡単な調整がみられるもの。先端は特徴的な三稜断面となる。1類は早期，2類は晩期，3類のうち5は晩期と思われるが他は不明。

1は表採品で長さ2.9cm，重さ1.7g。かなり半透明で，僅かに稜線が擦れており幾らか使用されている。2は6号墳III区周溝内出土で，長さ2.1cm，1gの小型品。使用痕は無い。3はC9上層出土品で，表右側辺は刃潰し状。幾らか先端の稜が擦れている。4は表採品で先端両側面が確実に擦れており，最大径6mmの孔をあけたものと思われる。5はD6-P12(黄色土土壙)出土で，長さ4.1cm。先端の使用痕はみられず，風化した剝離面が残っていることから，早期の剝片を再利用した晩期のものと考える。6は表採品で先端はあまり使用されておらず，長さ2.4cm，1.6g。7は表採品でかなり半透明で小さな不純物を多く含む。使用痕は無い。8は表採品で先端が僅かに擦れている。

スクレイパー（Fig. 75～79，PL. 26・27）

大型縦長類（1・2）安山岩の大きめの剝片の縦長下端に僅かな細調整が施される類で，チョッパー的でもある。1は表採品で横長素材を使用。長さ9.2cm，幅5.5cm，厚さ2cmで重量100gとなる。裏面の調整が僅かで，あまり風化していない。2は7号墳石室埋土出土で縦長状剝片を使用。長さ9cm，幅5.3cm，厚さ2.4cm，102g。万能石器的性格を感じる類。

大型横長類（3・6・9）安山岩の横長剝片使用の大型類。3は7号墳周溝内出土で下辺部に調整を施し使用する。120g。6はD6-P1(弥生土壙)出土で，下辺の裏面のみに細調整を施す。95g。9は8号墳Cトレンチ墳丘内出土で風化著しい。両側縁を片面調整したのみであるが上端折損部を除いて全面使用可能である。長さ14.8cm，幅11.5cm，厚さ1.5cm，185g。

安山岩不整形類（4・5・7・8・15・16・18～22）4はF5黒色土出土で62g。左側辺に僅かな刃こぼれがみられる。UFに近い。晩期か。5はD7-P12（黄色土土壙）出土で白色のプロピライトの風化著しいものか。表面のみに簡単に縁辺調整したもの。表面中央と打面は粗材面。45gで早期。7は表採品で表面下縁細調整部はやや磨耗している。32gで晩期か。8は集石付近出土で左右両側縁が使用可能。34.3g。15は表採品で左側縁以外は細調整を施し使用可能。5.6g。小型スクレイパーの類としてよかろう。16は表採品で調整打面でバルブカットしており，左側縁の調整のみ丁寧。他は雑。18はH7黄色土上層出土で11g。晩期か。19は7号墳IV区墳丘内出土で10.6g。20はF5黒色土出土で24g。右側縁のみに両面から調整剝離が施されている。21はJ7黄色土出土で両側縁を簡単に調整したもの。22はE6-47で13.2g。

横型石匙類（10～12）いずれも安山岩の横長剝片使用。10はC7付近表土下出土でかなり風化。11は6号墳II区周溝内出土で下辺刃部は使用による磨耗。やや風化しており早期か。16g。12

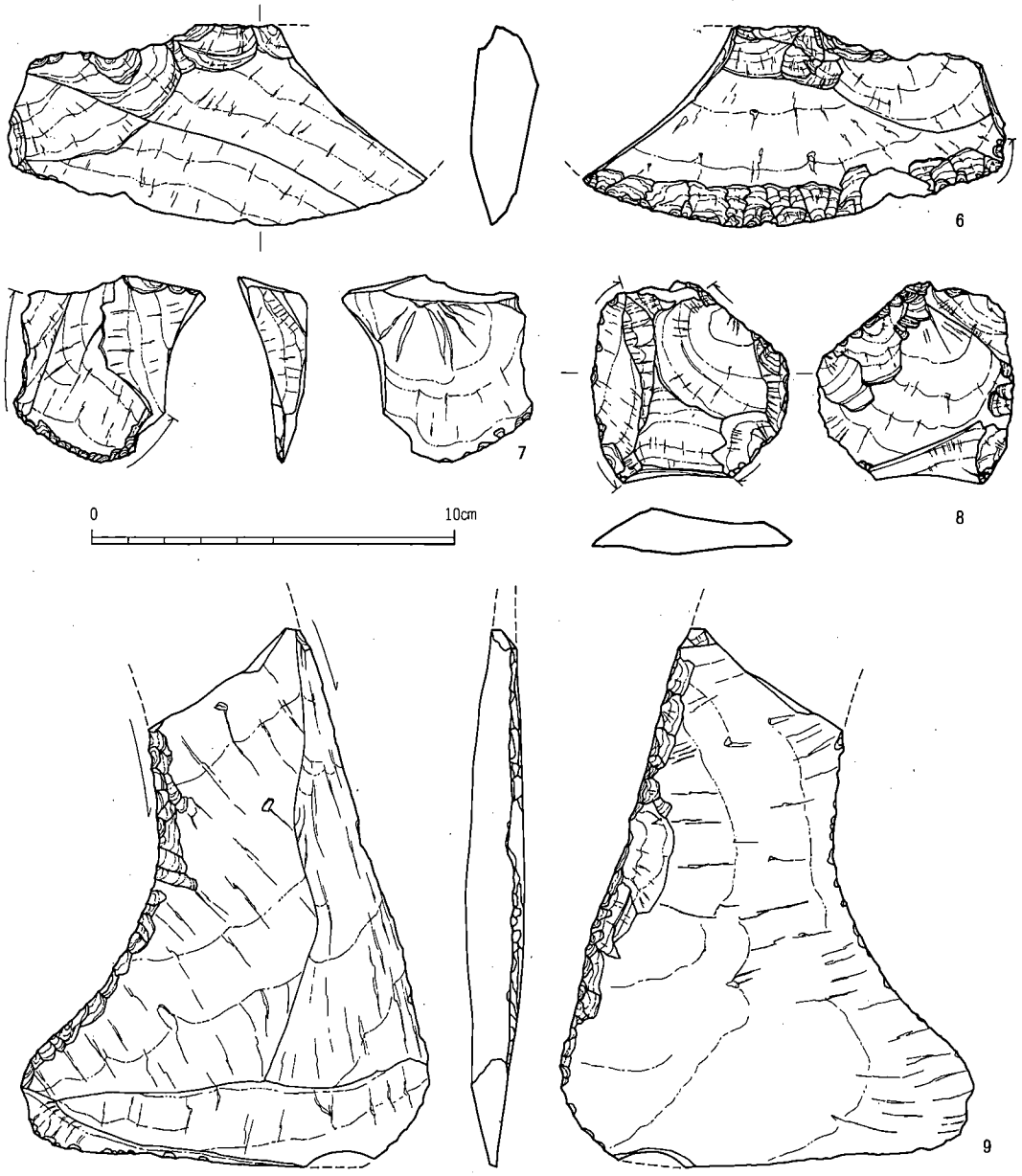


Fig. 76　打製石器実測図（その２）(1/2)

はＣ25周溝内出土で薄手で撮部のみ厚い。抉り部と下辺のみの調整。晩期か。10ｇ。

縦型石匙類（13・14）いずれも安山岩の縦長剝片を選択して作られたもの。細長さが特異である。13は２号墳Ⅳ区盛土内出土で，長さ9.4cm。表面やや風化。45ｇ。14は表採品であまり風化していない。長さ8.4cm，15ｇ。晩期か。

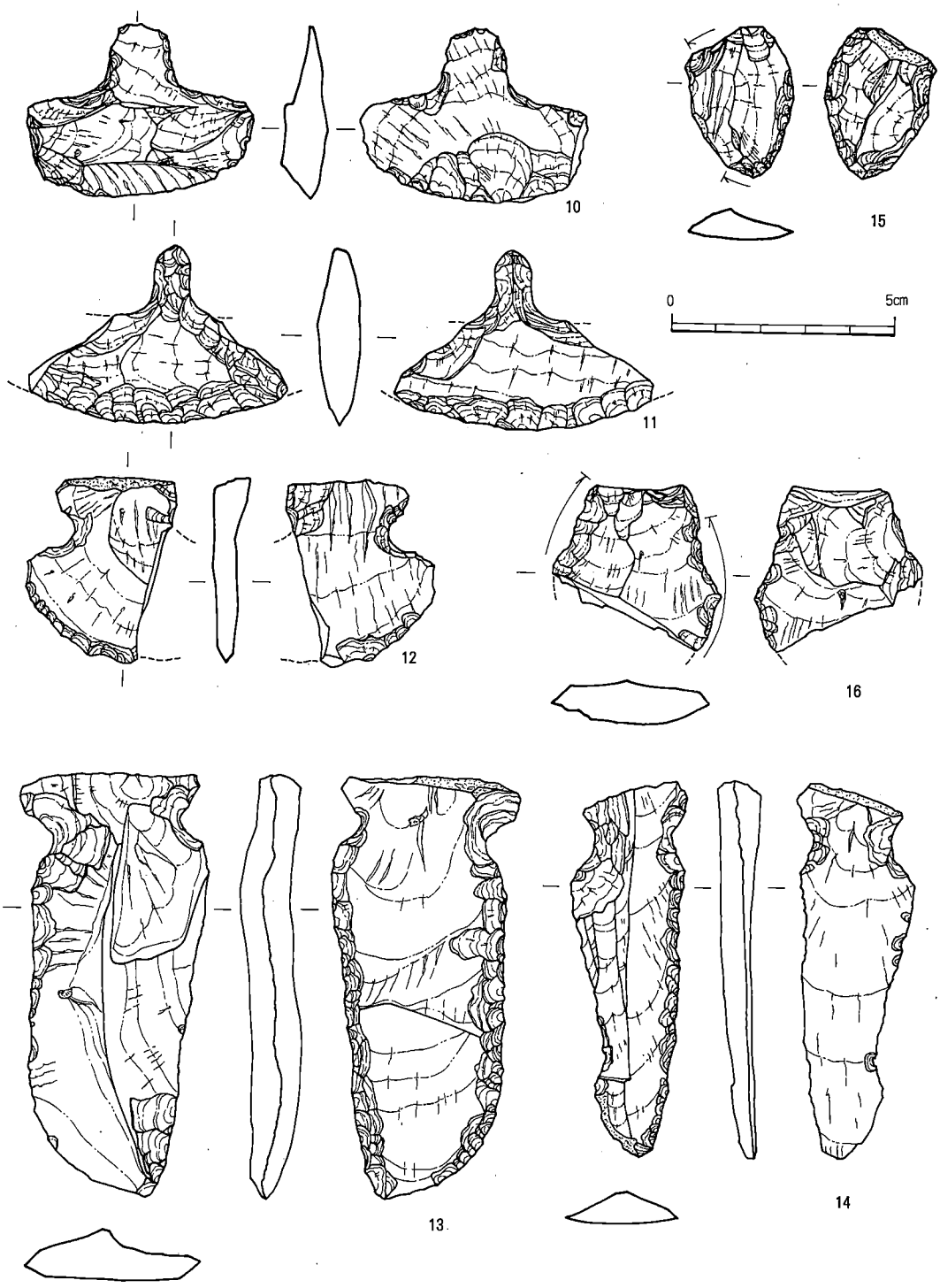


Fig. 77　打製石器実測図（その３）(2/3)

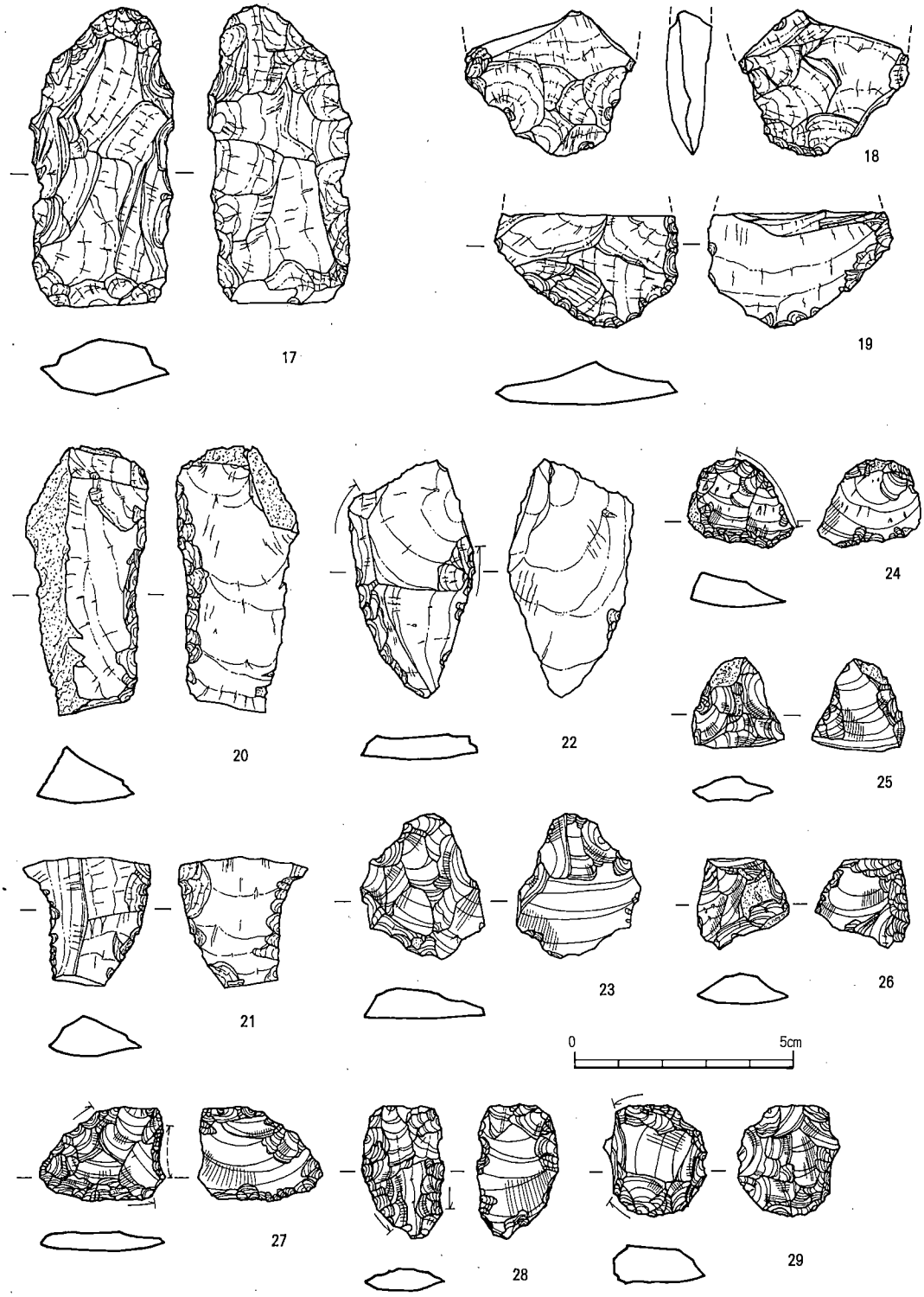


Fig. 78　打製石器実測図（その４）(2/3)

尖頭器状類（17）安山岩製の先端が曲がった石器で，一応スクレイパー類としたが，先端部に細調整が施されているので各用途が考えられる。表採品で両側縁は交互剝離。全周が使用可能で，長さ6.7cm，31.2ｇ。基部には新しいガジリがある。

小型類（23～35）すべて黒曜石製で，不定形剝片の縁辺かなりの周囲に簡単な調整を施しただけのものと，表裏に差はあるがかなりしつこく調整した類(27・29・30・32・33)の２種に分かれる。後者は「小型三角形スクレイパー」とでも呼ぶべき特徴的なタイプで，今後注目すべきであろう。23は表採品で全周使用可能。24はＣ２-15で不純物をやや多く含む。26はＣ９-８で下端は折断面ではなく生きている。26はＢ４-35で不純物を幾らか含む。裏面右辺は押圧剝離。27は表採品で小さな不純物を幾らか含む。バルブカットしており右側縁の点線部分は刃潰し状。28はＤ３-13でバルブ側カット。29は表採品で円盤状。30はＦ４黄色土出土で全面かなり擦れている。31はＤ６-23で上部に撮部を抉り出そうとしている。32はＡ４黄色土下層出土で表面やや風化。33は６号墳Ａトレ出土。34はＩ６黄色土出土で粗大な白っぽい不純物を多く含む。両側縁は鈍角でやや刃潰し的でエンドスクレイパーの類。35はＣ５東壁出土で縞状の不純物を含む。バルブカットしＵＦに近い。

つまみ形石器（Fig. 79—36～39，PL. 27）

いずれも腰岳系の漆黒色良質の黒曜石製。36は表採品で，折断後側縁に簡単な細調整を施して使用している。37は下辺と片側辺の中央に抉りを入れかけており折断前。Ａ２黄色土下層出土品。38はＣ９黒色土出土でやや半透明。下端を折断後，使用している。39は表採品で上下両端を折断。両側縁は使用されている。

以上４点しか出土しておらず，後期～晩期初葉における他遺跡での多量ぶりとは比較にならない。基本的に晩期中葉以降が主体となる当遺跡としては，つまみ形石器は基本的に激減するという時期的特徴をつかむことができた。

石核（Fig. 79—40・41，PL. 28）

図示したものの他にも数点出土しており，写真のみで示したものもある。図示した以外は規則性が認められず各面からの不整形剝片採取用の石核である。40はＥ６-21で大きめの不純物を僅かに含む黒曜石。３cm程の縦長状小剝片採取後に打面調整を行っている。表皮を大きく残したままでの小剝片採取。41はＧ４黒色土出土で漆黒色良質の黒曜石。打面と下端面は自然面。皮剝ぎ中途から2.5cm長さの短小剝片を採っている。65ｇで剝離面に光沢があり晩期か。

使用剝片（Fig. 80・81，PL. 28）

すべて黒曜石製で，62が姫島産の他は腰岳系の良質のもの。縦長剝片・不定形剝片の縁辺に

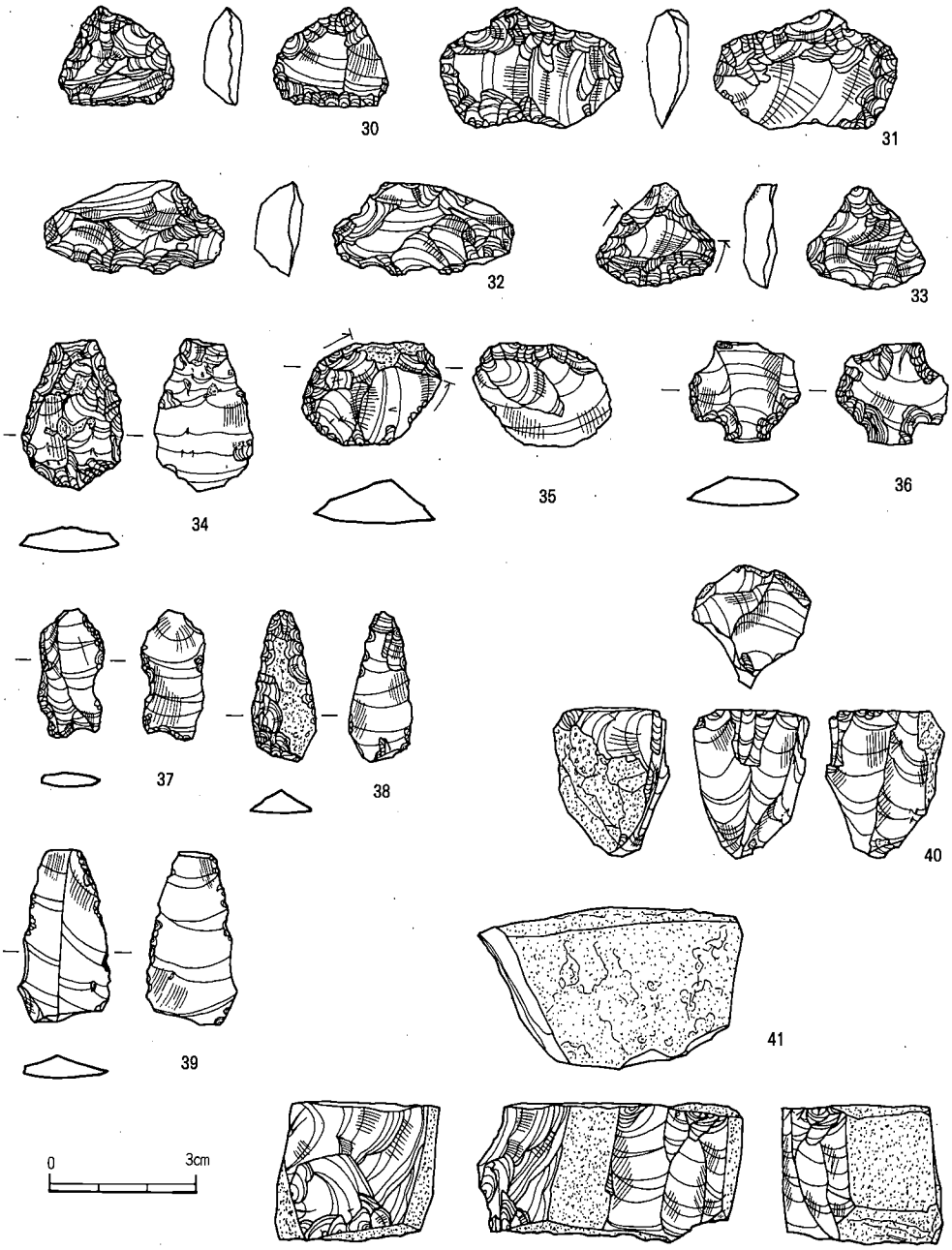


Fig. 79　打製石器実測図（その５）(2/3)

簡単な調整を施すもの，使用刃こぼれが見られるもの等である。42は表採品で打面は自然面。43はＣ２－１で打面は自然面。44は表採品で打面調整されており，下端縁に抉りの痕跡あり。45

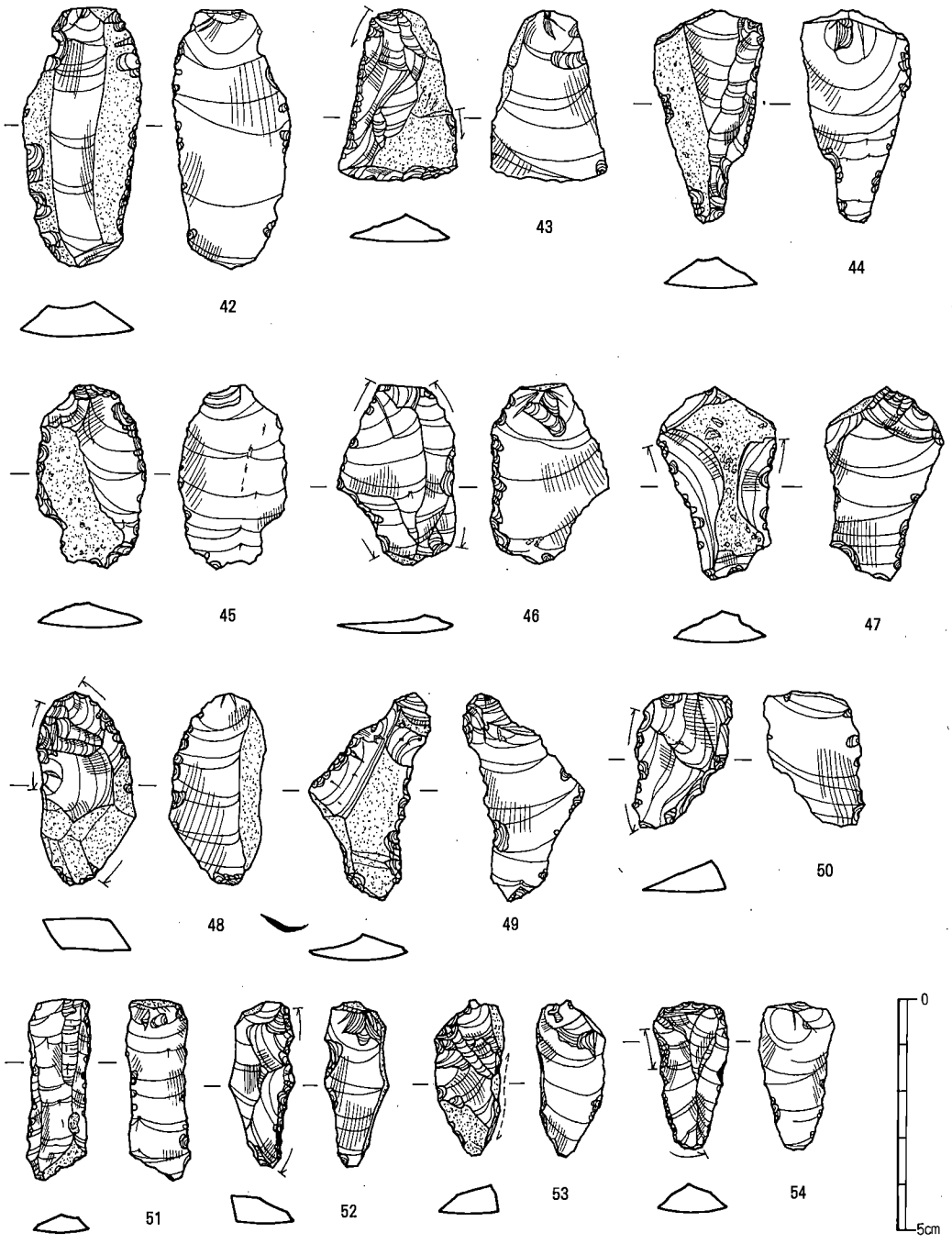


Fig. 80　打製石器実測図（その６）(2/3)

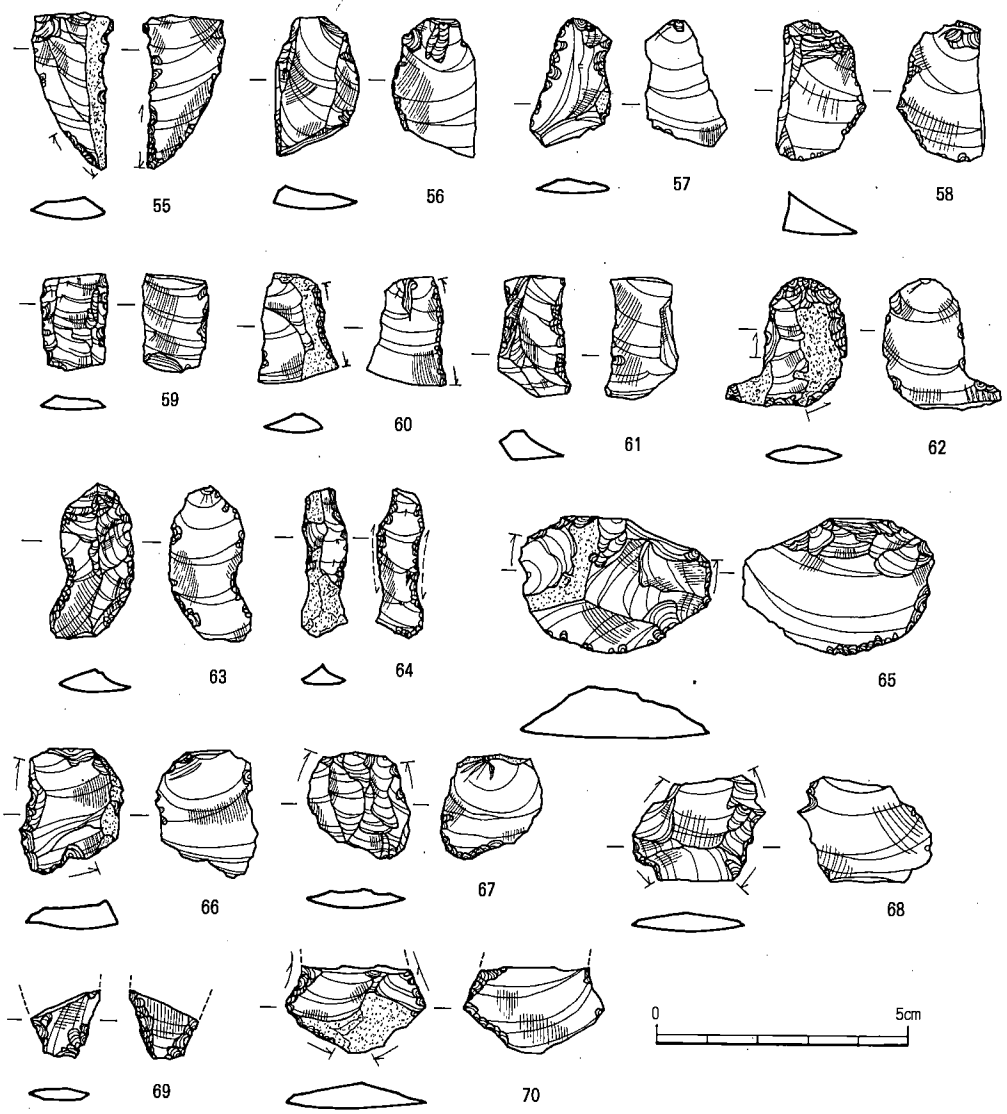


Fig. 81　打製石器実測図（その７）(2/3)

はＢ１－Ｐ２出土でバルブカット。46は表採品で打面は自然面。47はＤ９－Ｐ４出土でバルブカット。48は16号墳北側近辺出土で打面は自然面。小原石からの剝片。49は17号墳Ⅱ区裾表土出土で大きめの不純物を少し含む。50は６号墳北側付近出土で上半部カット。51は表採品で打面は自然面。52は表採品で右側縁はやや刃潰し的。53は表採品で右側縁の点線部は裏面からの押圧剝離で背潰し的。54はＥ６上層(黒色土)出土で表面やや風化。打面は調整面。55はＢ９－Ｐ８出土で上半折断。56はＤ８・９黄色土出土で打面は調整面。57は６号墳Ⅱ区出土。58は７号墳Ⅲ区

墳丘内出土でやや半透明。59はＥ６北半出土で上下を折断。60はＤ７－７で打面は自然面。61はＦ５－Ｐ１(晩期土壙)出土で上半折断。62はＢ８-31で上端を意図して調整した削器的用途。63はＣ10古墳盛土出土。64はＳＸ２赤褐色土層中出土で両側縁の中央付近が掻きこすったためかすれている。65は表土出土で打面は調整面，バルブカット。66は６号墳Ⅱ区出土でやや半透明。67はＳＸ１出土で打面は自然面。68はＳＸ１付近南東方向表採で上下端を折断。69はＳＸ１出土で剝片鏃未製品の可能性もある。70は表土出土で2.7ｇ。

磨製石斧 (Fig. 82，PL. 29)

１は２号墳Ｂトレ内出土で蛇文岩系の暗緑灰色の石材。刃部が片寄っており，風化著しく小さな孔が多くみられるが，本来丁寧な研磨と思われる。早期。２は３号墳Ａトレ内出土で砂岩系の灰色がかった白色の石材。細かい敲打痕を多く残しているが一応全面研磨。撥形石斧類で早期か。３はＣ９-31で淡灰色の砂岩製。両側面がやや面取り状となる蛤刃石斧。全面極めて丁寧な研磨で使用痕見えず。晩期か。

扁平打製石斧 (Fig. 82—４，PL. 29)

本遺跡で１点のみ出土したもので，Ｅ３-77(晩期土壙Ｅ３－Ｐ２出土品)で黒川式土器に伴う。緑色片岩製で，基部側面と基部寄りの両側縁の側面には素材自然面を残す。下端部は表裏とも磨耗している。黒川期までは確実に残る例であるが，土器の量からみると少なすぎ，かろうじて残ったという処か。

石錘 (Fig. 83—１・２，PL. 30)

扁平な自然転石の両端を打ち欠いたもの。１は表採品で結晶片岩製。335ｇ。２はＧ４上層出土で片岩製。小ぶりで135ｇ。

凹石 (Fig. 83—３・４，PL. 30)

３は６号墳Ⅳ区墳丘内出土。濃灰褐色の凝灰岩製。108ｇ。４はＨ５黒色土出土。多孔質の凝灰岩質石材。裏面は磨石として使用しているようだ。345ｇ。

磨石 (Fig. 83—５～Fig. 84—32，PL. 30)

28個図示したが，小破片や肉眼で使用面が認められなかった自然転石も多く，この倍ほどの数にのぼる。使用石材は17・20・21・29が砂岩の他は全て凝灰岩質のもので，石材の選択が行われている事は明白である。１kgを超えるもの（９・11・12・19）と，800～500ｇの中型のもの（８・16～18・21)，それ以下の小ぶりの類（７・27・30・31）などに分類できるが，破損品

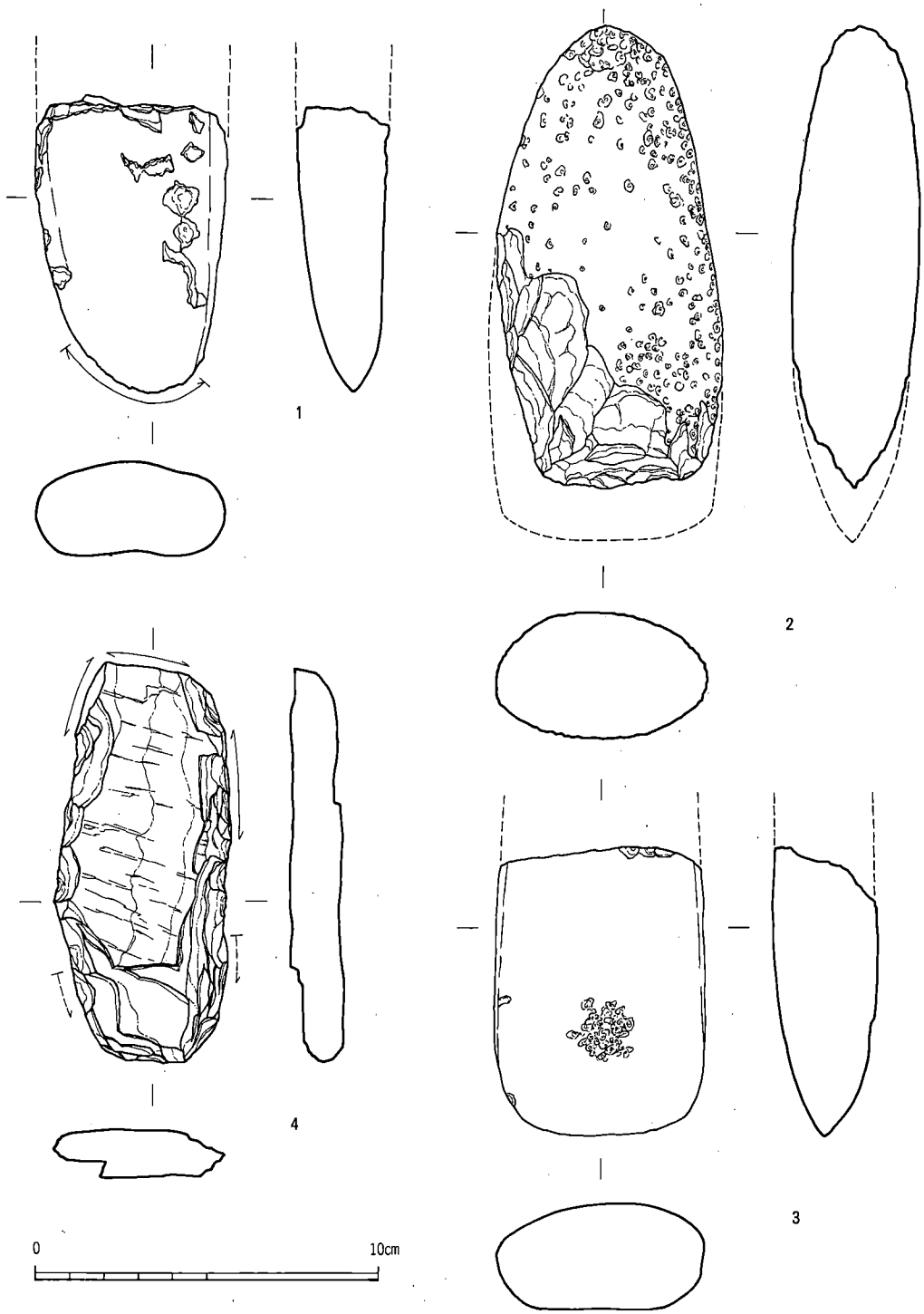


Fig. 82　磨製・打製石斧実測図（1/2）

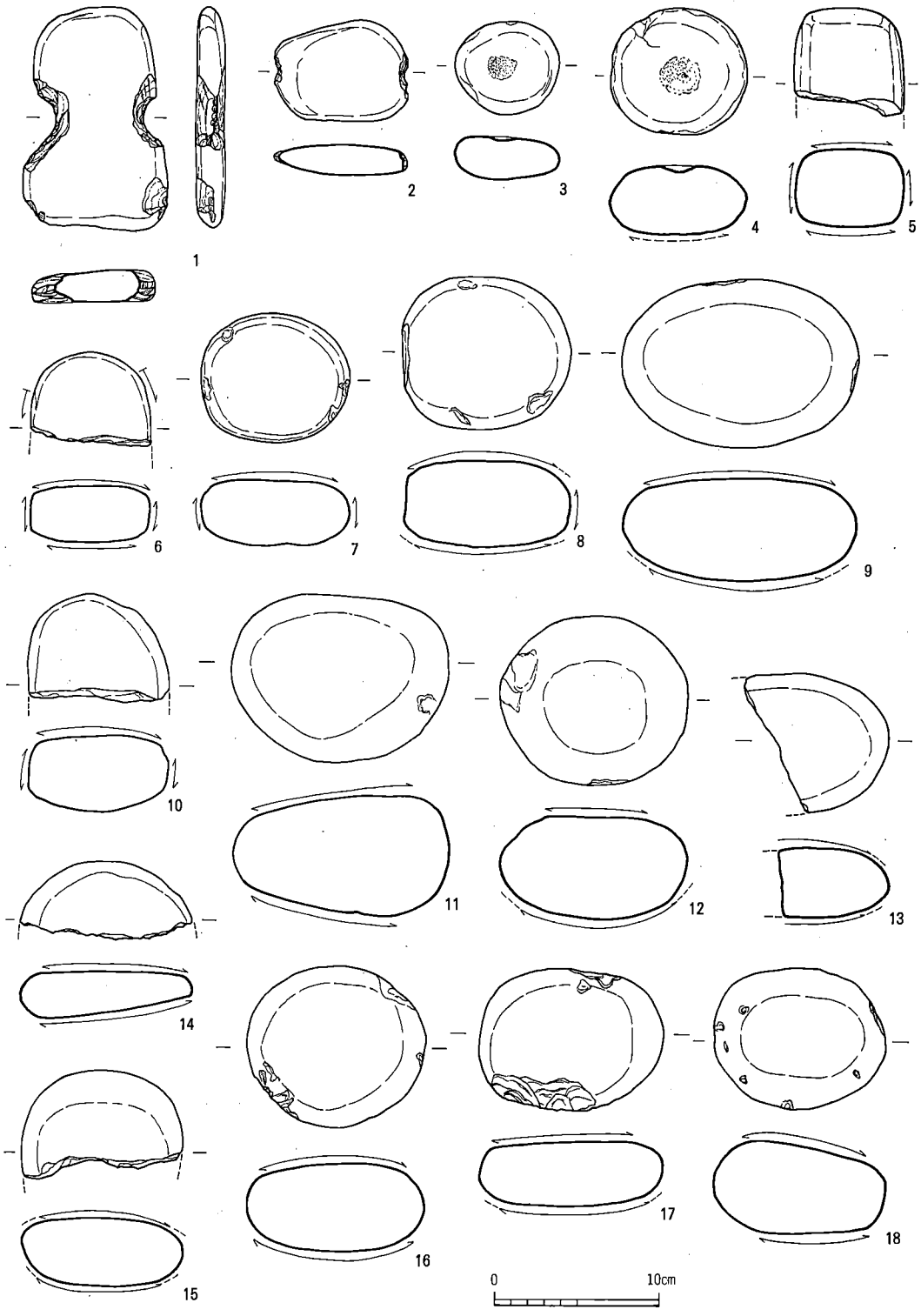


Fig. 83　石錘・凹石・磨石実測図（1/4）

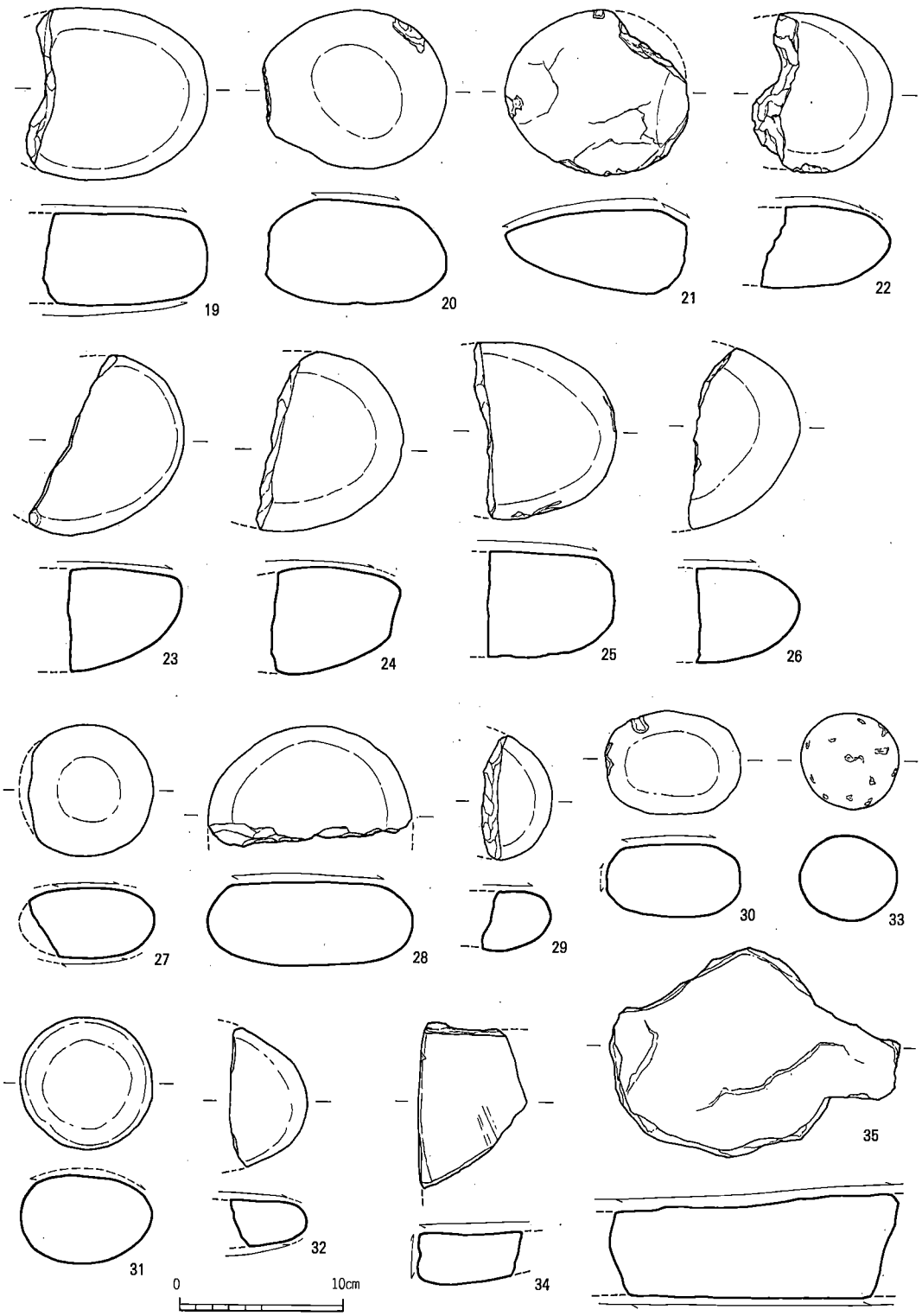


Fig. 84　磨石・球礫・砥石・石皿実測図 (1/4)

などからみて，大型の重量のあるものが最多となる。30の側端は叩石として使用。

凝灰岩質球状の円礫（Fig. 84—33）は直径6cm弱で180gとなる。B 4 -18で黄色土出土。

砥石・石皿（Fig. 84—34・35，PL. 31）

34は砂岩製粗砥で，上面と側面を使用。側面の中央は線状にへこみ，上面中央は大きくへこむ。時期不明。35はE 6黒色土出土で磨石の大半と同じ多孔質の凝灰岩製石皿。側面は全周欠損しており本来もっと大きかったであろう。表裏とも使用。磨石とセットとなり意義深い。

IV　弥生時代の遺構と遺物

A　土　　壙

柿原I地区の谷部では，縄文早・晩期，古墳群の他に，量的には少ないが弥生土器が散見して採集された。縄文調査区設定により弥生遺構の検出も期したが，若干の土壙等が発見されたに留まった。柿原古墳群全体としては，密ではないものの住居や甕棺墓群も調査されており，こういう山際の集落の存在を見逃す訳にはいかない。I地区は平坦地が在るにも関らず，顕著な遺構は見られず，土器だけが結構目立つ。縄文以来の伝統的な季節的キャンプ地であったか。

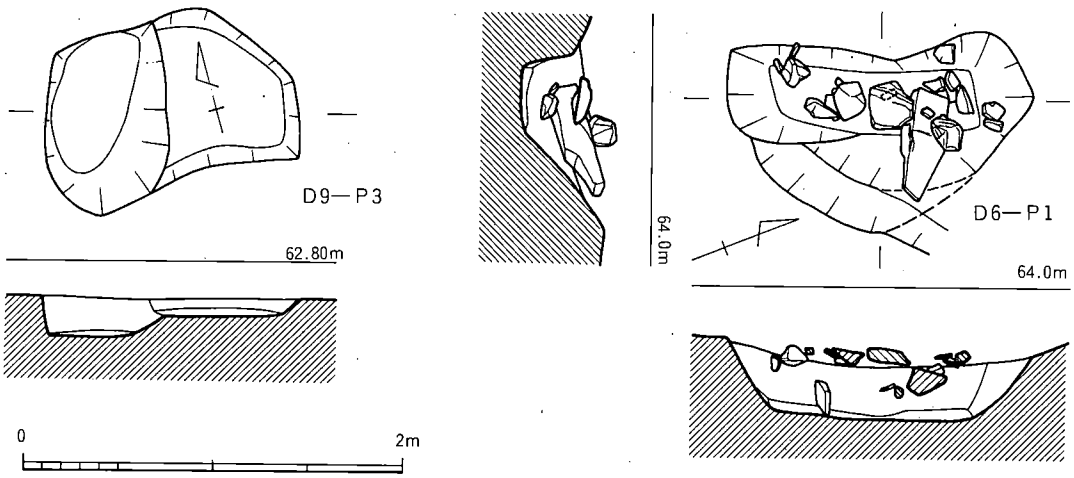


Fig. 85　弥生時代土壙実測図（1/40）

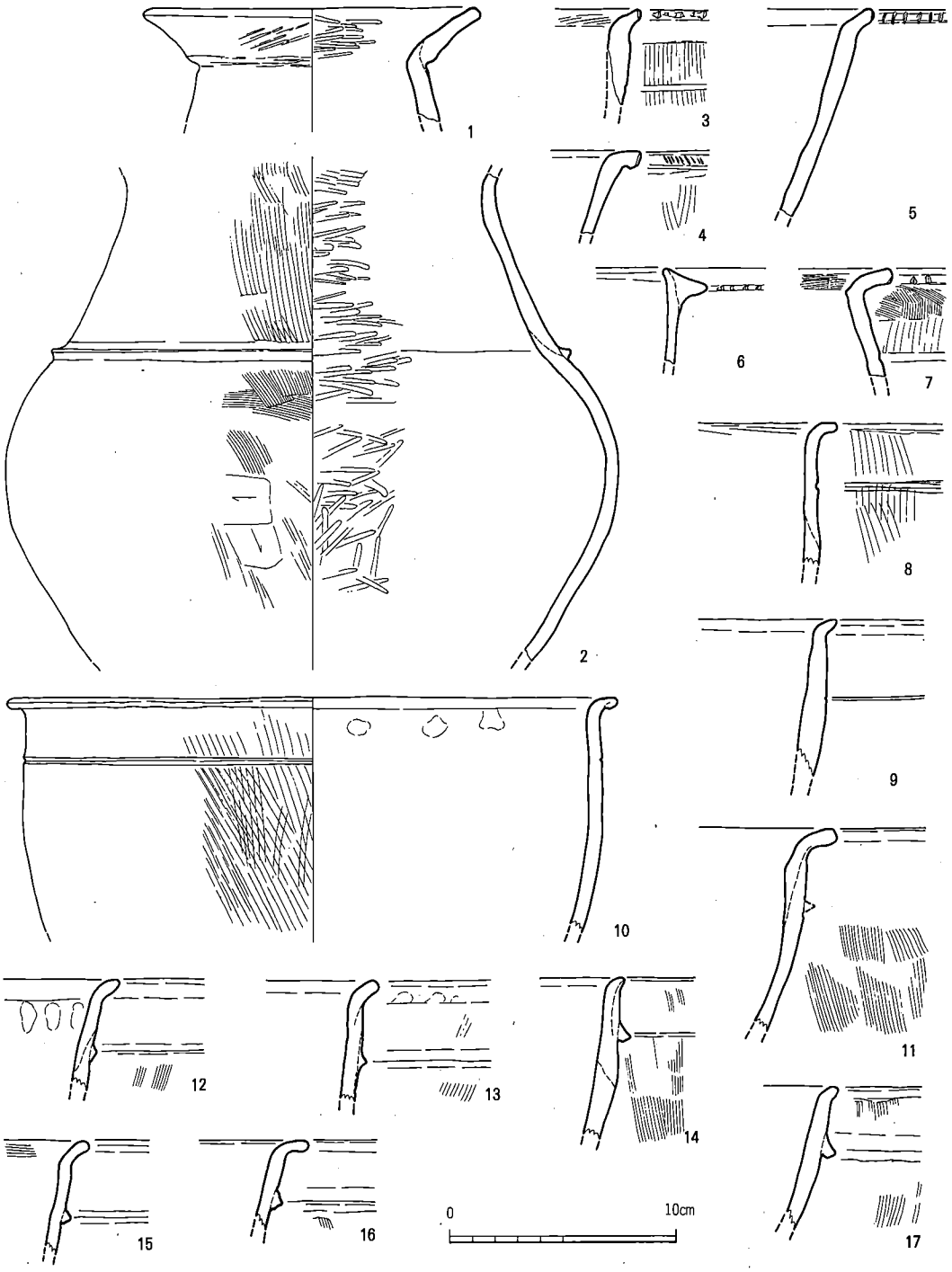


Fig. 86　弥生土器実測図（その１）(1/3)

D 9 - P 3 (Fig. 85)

調査区の南端近くの4号墳墳丘下にて検出した。暗褐色土埋土の二段掘り不整形土壙。東西135cm，南北100cm，深さ20cm。図示できる土器は無いが，弥生中期初頭の小片が多量出土。

D 6 - P 1 (Fig. 85, PL. 9)

調査区のほぼ中央に位置し，南北に長い略長方形プランをなす。上端で160×93cm，下端で113×36cm，深さ44cmとなる。壁は緩やかに開き，底面は中央が深くなる。石材が土壙上面に覆われたような状態で出土し，或物は中央へと沈んだ状況である。埋土中位から安山岩製スクレイパー(Fig. 76— 6)，上位から刻目の無い，凸帯を持つ如意形口縁甕片が出土した。後者は盗難に会い，現物は無い。弥生中期初頭の土壙墓であろう。

B 土　　器

図示したものはすべて原位置をとどめない，或は小ピット等から出土したものであるので，一括して報告する。弥生前期後葉～中期前葉までのものが殆どであるが，少量中期末のものが混じっている。

壺 (Fig. 86— 1・2，Fig. 87—37～47) 1は頸部内面ナデ，口唇周辺横ナデ，他は内外横ヘラ磨き。2は頸部外面粗い縦ハケ，胴部上半外面は細かいハケ，下半はハケの上削りがみえる。内面はヘラ磨きだが，上端一部に粗いハケが残る。37は全体が僅かな上げ底になる類で内外面丁寧なナデ。38は内面磨滅，外面はナデ。39は内外面ナデ。40は大型品で内外磨滅。41は内面ナデ，外面横ナデ。42は内外わりと丁寧なナデ。43以降は中期初頭の壺底部。43・44は内外磨滅。45は底部側面が横ナデの他は全面丁寧なナデ。46は外面ナデ，他は磨滅。47は内面ヘラ磨き，外面縦ハケ。底外面はナデ。

甕 (Fig. 86— 3～17，Fig. 87—18～35・49～53，Fig. 88) 3は胴部内面と口縁直下の外面は横ナデ，他はハケ。4は細く浅い刻目を密に施し，内面ナデ，外面は粗い縦ハケ。5は口縁内外面横ナデ，胴部内外面は丁寧なナデ。6は小さい刻目で内面はナデ。外面は煤付着。7は内面ナデ，外面の沈線の上は粗い縦ハケ，下は横ナデ。8は内面ナデで，外面に煤こびりつく。9は口縁下2cmまでは内外面横ナデ。胴内外面丁寧なナデ。10は内面ナデ，外面には煤こびりつく。11は凸帯が剝げており，内面はナデ。12は内面磨滅。13は内面ナデ，外面は煤がこびりつく。14は内面ナデ。15は外面横ナデ，内面は丁寧なナデ。16は内面ナデ，外面凸帯以上は横ナデ。17は内面ナデ。18～22は亀ノ甲式新期類。18は内面上半横ナデ。下半と外面は丁寧なナデ。19は胴部内外面磨滅。20は胴部内面丁寧なナデ，口縁下付近に煤がこびりつく。21は胴部内外

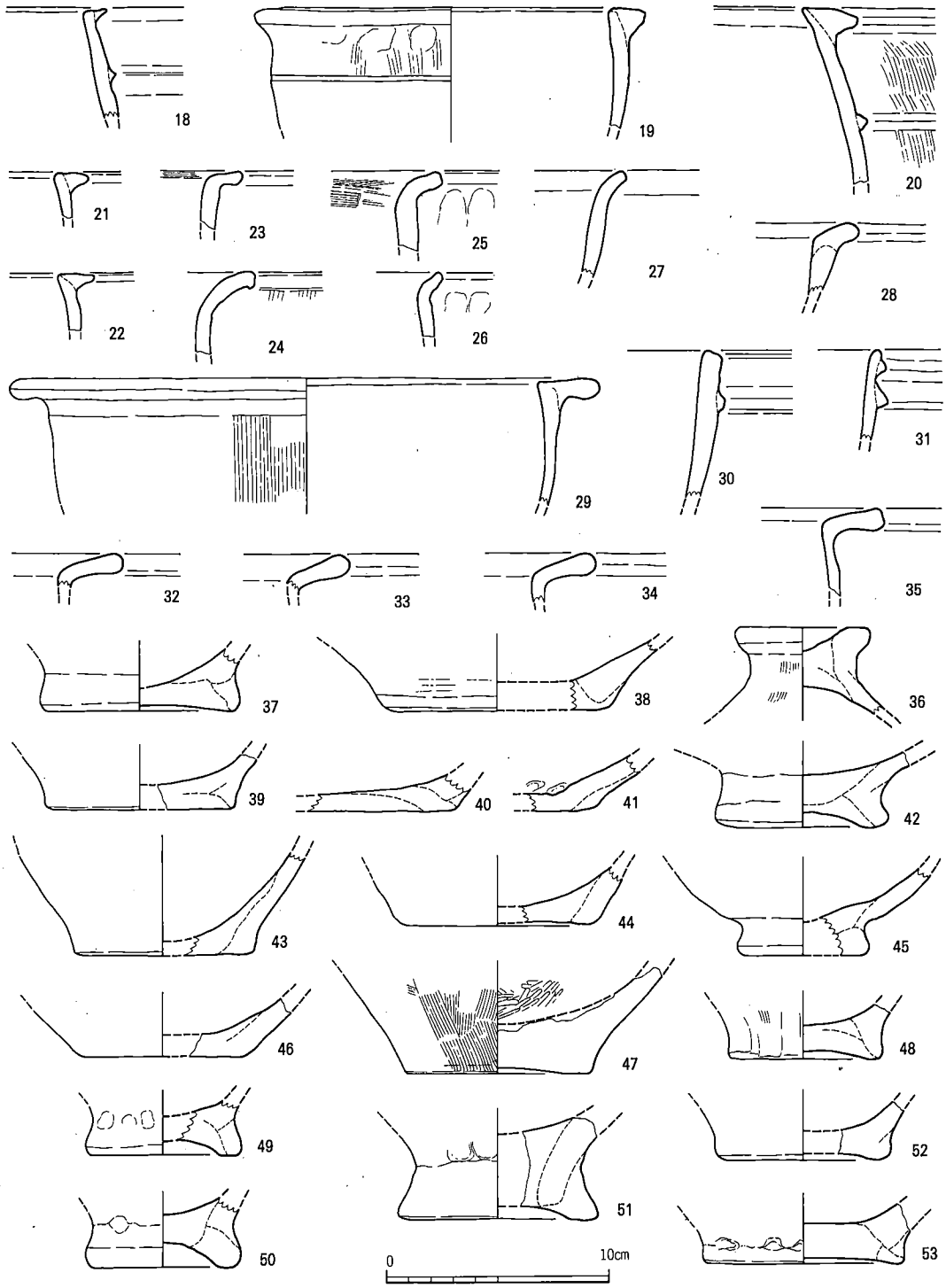


Fig. 87　弥生土器実測図（その２）(1/3)

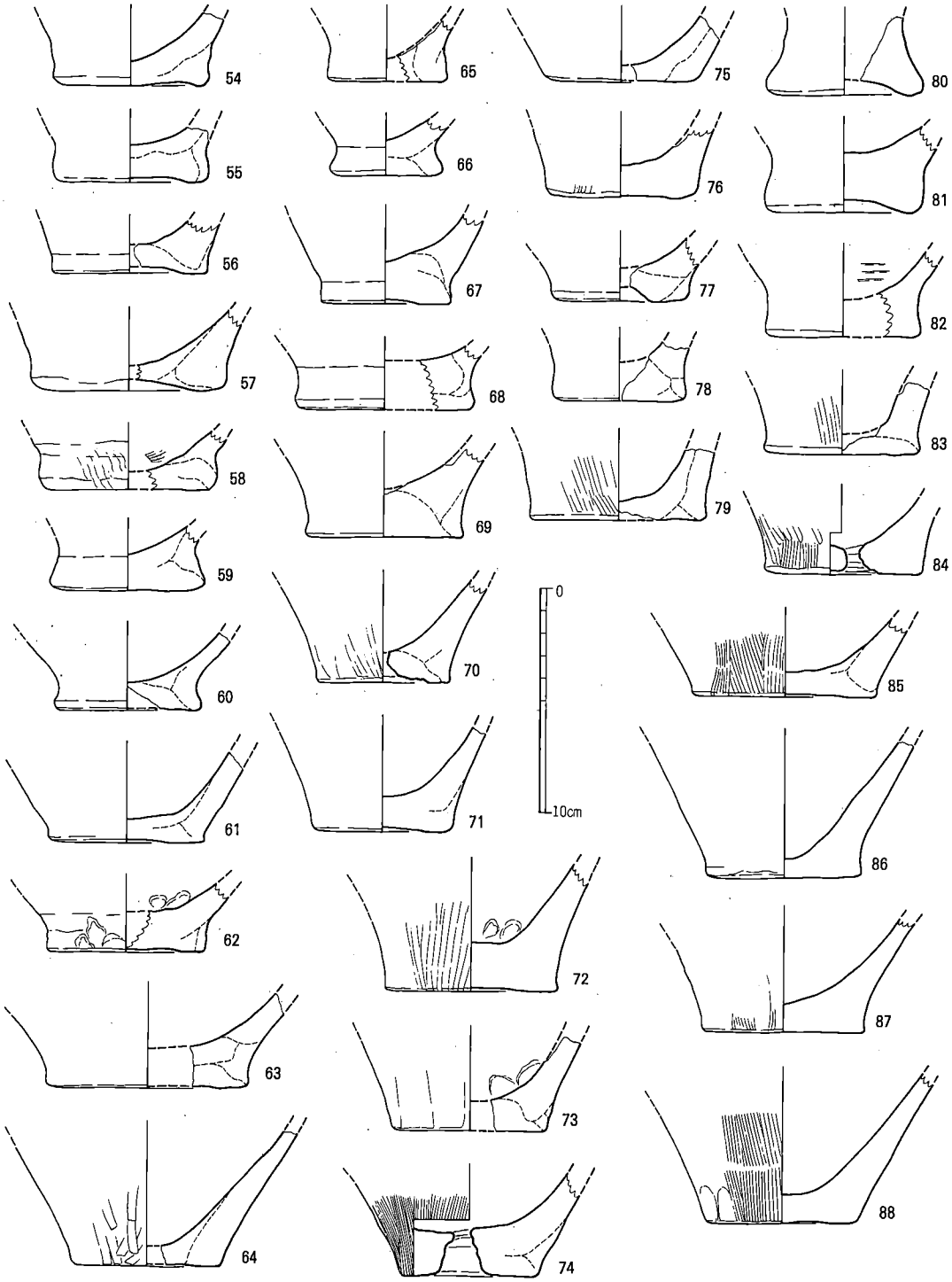


Fig. 88　弥生土器実測図（その３）(1/3)

面ナデ。22は内外面横ナデ。23は口縁内面横ハケ，胴部内面ナデ，外面は横ナデ。24は胴部内外面ナデ。25は胴部内面ナデ，外面は横ナデ。26は内外面ナデ。27は磨滅。28は中期初頭の鉢で内面ナデ，外面は磨滅。29は中期前葉の甕で内面磨滅。30は中期末頃の鉢か。凸帯周辺横ナデ，他は内外丁寧なナデ。31も鉢となるか。内外面横ナデ。32～35は中期末の甕。32・33は磨滅。34は胴部内面は丁寧なナデ，他は横ナデ。35は胴部内外面丁寧なナデ。48は内外面ナデで，外面に僅かにハケが残る。49・50は中央寄りが大きな上げ底となる類で，内外面ナデ。51は部厚い底部で内外面ナデ。52～57は前期的な中央寄りが上げ底になる類。56は中央に焼成後穿孔。58・59はやや厚手。60～64は中央寄りが僅かに上げ底状にへこむ底部。63は全面丁寧なナデ。64の外面は一部ヘラ磨きで底外面はヘラ削り状擦過。中期前葉。65～69は中期初頭の厚手類。70は外面ハケの上をナデ，底外面はナデ，内面磨滅。中央に焼成後穿孔。71は磨滅。72の外面は粗い縦ハケ。74は底部穿孔。75は中期末か。76～82は中期初頭。82の内面には粗いハケが残る。83～88は中期前葉の精製品。84は焼成後穿孔。86は外面は縦ハケを丁寧にナデ消す。87も同様。88の内面は横位の粗いナデ。

蓋（36）前期末～中期初頭の特徴をよく示す器形で，外面は縦ハケの上ナデ。他は内外ナデ。

C 石　　器

弥生前期後葉～中期前葉の土器が前項で報告した如く結構出土しており，石器類も当然出土してしかるべきと思われる。縄文時代石器の項で報告した，打製石鏃，安山岩製スクレイパー，

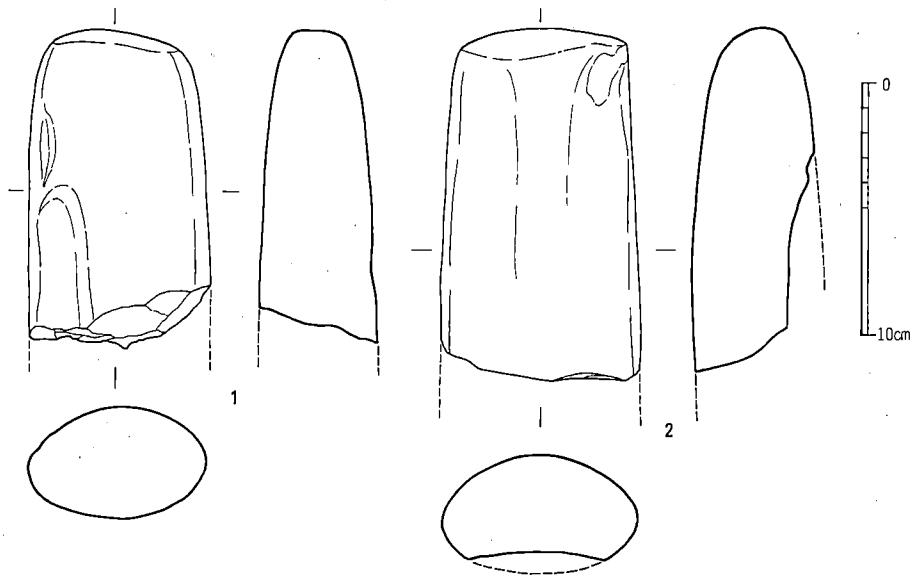


Fig. 89　弥生時代石斧実測図（1/3）

使用剝片等のうち幾らかは弥生時代のものになるかもしれない。ここでは一見して明らかな弥生時代磨製石斧を報告する。

磨製石斧（Fig. 89）いずれも玄武岩製太型蛤刃石斧で表面は風化している。1は6号墳Bトレ出土で，現存長さ12.7cm，幅7.2cm，厚さ4.4cm，重量680ｇ。2は3号墳墳丘内出土で現存長さ14.1cm，幅7.8cm，厚さ4.2cm以上，重量840ｇ。

V 各 論

A 縄文早期土器群について

柿原Ⅰ縄文遺跡調査の成果のうち特筆すべきは，草創期～早期の土器群のバラエティーの豊かさと，晩期中～後葉を中心とした多量の出土土器の中で刻目凸帯文土器の発生の示唆が得られたことであろう。うち，刺突文・こぶ文・凸帯文・厚手無文・条痕文・押型文等の各土器群については，層位的な明確なセット関係こそ把握できなかったにしろ，当遺跡出土で確認したことにより，広く北部九州域での分布が想定できるようになった意義は大きい。

草創期土器群　刺突文土器のFig. 28—1の二枚貝条痕地文と刺突の組合せは，「柏原式」（註1）に比定できる。斜位に貼付される楕円形アーモンド形こぶは，福岡市南区柏原遺跡群（註2）出土中にも認められる。報告者の山崎純男氏は草創期に位置付けている。Fig. 28—2は上記柏原遺跡以外に，福岡県筑紫野市原遺跡（註3）からもまとまった量が出土しており，同じく柏原式に比定してよい。こぶ文土器1類としたFig. 28—4についても，刺突文部位が欠損していると考えると小円形こぶも柏原式の粘土貼り付け文に符合するため，同じく柏原式の範疇と考えて草創期としてよい。問題は次のこぶ文2類としたFig. 28—5の円錐形こぶ類で，類例が皆無に近く時期判断に苦しむ。山鹿市東鍋田遺跡（註4）で早水台段階の押型文土器数点に伴って出土したこぶ文土器があるが，こぶの直径がこの柿原例より小さめで全く同類という訳ではない。ここでは，こぶ文土器3類とした縦長型こぶの類への移行形態と考えておく。胎土・焼成などは外面凹線文土器（Fig. 32—4～11）に類似しており，早期のこぶ付無文土器の一種と考えてもよい。

こぶ文土器3類　縦長4cm大の楕円形こぶを口縁に接して付ける類（Fig. 28—6～9）は，『柿原タイプこぶ文土器』と呼称したい。厚手無文土器の一種とみてもよいが，8のように薄手類もある。押型文土器に伴う無文土器については各地での調査例が知られており，大旨新段階に

なる程厚手となり量も多くなる傾向があると言われてきた。これらのうち，こぶを貼付する例は幾らか散見できる。大分県杵築市稲荷山遺跡(註5)では，無文土器のうち胴の張る内湾する口縁の器種にこぶ文が付き，極めて特徴的である。ここでは口縁外端に半円形・横長楕円形のこぶを付けており，柿原例のような明確な縦型楕円形類は見られない。大分県速見郡日出町早水台遺跡(註6)では報告されている分ではこぶ付は数点のみで量的割合が少いようである。現物を実見していないので形状が判断できない。大分県直入郡荻町政所馬渡遺跡(註7)では，やや横長の楕円形こぶが付くものが1点報告されている。また，大型楕円形押型文土器で知られる大分県大野郡朝地町田村遺跡(註8)でも内湾する無文土器に横長楕円形のこぶが付けられているものが1点ある。さらに大分県大野郡野津町新生遺跡(註9)では，早期土器群の中で圧倒的出土量を誇る厚手無文土器の中にこぶの付くものが散見される。また同報告書中で栗田勝弘氏は「無文土器の編年的位置は，今回出土量が比較的多かった早水台期に比定し得るであろう。」とされ，こぶ文の時期も同様に推定できよう。大分県臼杵市東台遺跡(註10)では，多くの厚手無文土器の中に横長楕円形こぶ文4点と柿原タイプの縦長楕円形こぶ文1点がみられる。これは大きさ，形状ともに柿原例に酷似しており，はっきりした類例品として唯一の比較資料である。この東台遺跡では稲荷山段階の横位山形押型文と斜位に交錯する二枚貝条痕文土器が出土しており，厚手無文土器の量はこれらを凌ぐようである。この縦長こぶ文が押型文と条痕文のいずれに伴うものか明確でなく，また条痕文土器自体にも厚手のものがあり古くなる可能性もあり，単純に時期を決定するわけにはいかない。熊本県下益城郡城南町沈目立山遺跡では横長・半円形のこぶが口縁に接して付けられた無文土器類が出土している。以上の各地こぶ文土器をまとめてみると，厚手無文土器自体が稲荷山～早水台段階に量的にピークを持ち，こぶ文もそれに連動しているということが判かる。更に縦長型の柿原タイプは大分県東台遺跡に1例見られるのみで，大半は横長楕円形・半円形の類で，柿原との共通性は認められない。この差異は地域性ではなく時期差を示すと考えたい。そこで，この縦長こぶ文のより古い段階を探すと，柏原F遺跡刺突文土器I(註11)の縦長こぶが認められる。これは草創期に位置付けられ，長さが柿原例(4cm)よりひとまわり小さく(2.8cm)，柏原E遺跡で主体的に出土した(貝殻条痕地文に刺突と小さい円形こぶを貼付する類の)刺突文土器から展開した刺突こぶ文に位置付けられる。この流れの中で，柿原こぶ文3類土器は，草創期刺突文の系譜は厚手無文土器へと受けつがれたという想定の中で，両者をつなぐ重要な鍵になっている。その点から，この柿原タイプは，草創期までは上げないものの，早期の古い段階に位置付けてよいと考える。条痕文・刺突文が消えてこぶ文だけが残ったものであろう。その意味からも，このこぶは「無文土器に偶々付けられた把手としての瘤」ではなく，あくまでも文様としての「こぶ文」と呼称しておかないと，系譜を正確におさえ得ないだろう。あきらかに煮沸に用いられた押型文土器にこぶが付くことはないということの裏返しでもあるのだから。

凸帯文土器　厚手無文土器の口縁直下に大きな断面三角形凸帯を付ける類（Fig. 28—10・11）で，類例を見ない。接合技術が未熟なために2点とも凸帯が剝げている。また，凸帯が全周するものかどうかも明確でない。途中で切れるものであれば，前述こぶ文土器の系譜の中での亜種とも考えることもできよう。はっきり言えるのは，隆帯文等と安易に結びつけられるような形態ではなく，粗大な鍔状の異類であるということ。一見して頭の中が真白けになる代物である。不勉強のため，お手上げということでしばらく保留。

厚手無文土器　従来，押型文土器に伴う無文土器として注目はされてきたが，必ずしも押型文と同等に扱われてきた訳ではない。既に本文中で述べたように厚手で指押圧が顕著で口唇部断面が丸く，極めて特徴的な土器群なのである。無文土器群の割合が多い遺跡としては，上記こぶ文土器の項で記した諸遺跡のうち，大分県稲荷山遺跡・東台遺跡・早水台遺跡・新生遺跡があげられる。いずれも，押型文期前半代のものであり，無文土器のピークとされる。瀬戸内地方においては，岡山県黄島貝塚(註12)で押型文3に対し厚手無文土器7の出土比率といわれる。広島市早稲田山遺跡(註13)では，押型文土器3・厚手無文土器5・条痕文土器2の割合といわれ，黄島式段階での無文土器の多さが指摘できる。器形からは各遺跡で内湾して胴の張る類の出土が報告されているが，柿原Ⅰ縄文遺跡でも，わずかに外傾して開き気味の類と内湾して胴が丸く張る類に分けられる。これらの器形についても，押型文土器からは全く関係を求め得ない処であり，別の系譜を考えねばならないだろう。福岡市柏原K遺跡(註14)からは層位的に押型文土器に先行する無文土器群が出土している。薄手と厚手大型の2種あり，口縁が内湾するものは無いが，胴部が丸く張りそうな小片は認められる。この例から，厚手無文土器は，早期押型文土器とセットになる粗製土器としてのマイナーな土器群なのではなく，草創期土器群の中から厚手無文土器が成立しつつある時点に押型文文化が覆さってきたと考える方がよさそうである。当柿原Ⅰ縄文遺跡の厚手無文土器は，図示したものの他に胴部片がかなりあるものの，遺跡全体としては全てを図示した押型文土器の量に比べるとやや少なめである。ただ，大粒楕円形の田村段階の押型文を主として出土したＳＸ１集石遺構からは厚手無文土器が1片も出土しておらず，やや南方のＡ４・Ｂ４・Ｂ５グリッド付近に集中して，しかも黄色土最下位の基盤層に密着するように出土したイメージが強いことから，厚手無文土器は当遺跡では量の少い(半分以下の)押型文前半期が下限と考えられる。その観点からみると，厚手無文土器の出土量は前半期押型文の土器量の倍以上となり，この時期では厚手無文土器が押型文土器量を圧倒するという他遺跡例と合致することになる。また，この厚手無文土器の末路については，少くとも押型文期以降に正統に引き継がれることはなく系譜は途絶える。というよりも，厚手のつくりは後半期の押型文土器のボテボテの器形に影響を残している。また，当遺跡では後述する外面凹線文土器において押型文土器との融合が図られていることがわかる。即ち，胎土がかなり精選されている点や，厚手なこと，焼成不良の灰色系の焼き上がりなど，両者に共通する点が

多く，外面凹線という意識的に特殊品としての融合が意図されている。広義にはこの外面凹線文厚手土器までを厚手無文土器の系譜に含めてよいと考える。

条痕文土器　量は3点のみと少いが，問題は多い。Fig. 32—1は条痕地の上の一部に細曲線文がみられ，前期轟式系としたが，連続刺突文の状況，本遺跡で他に前期遺物の出土がみられない事等から，未だ時期決定は保留しておきたい。佐世保市岩下洞穴(註15)第VI層出土品に類似の条痕文土器に刺突連続文を施し，斜位の細隆起文を一部に持つ破片があり，押型文期のものと考えてよかろう。細線文と細隆起文の差は大きいが，意匠的には同系譜上にあると思われる。次の Fig. 32—2・3の底部は，条痕文土器としては貴重な尖底例であり，早期に位置付ける根拠となるものとして重要である。うち2は押型文土器通有の尖底形状をなし時期的併行関係が推察できる。3は胴下半が球状に丸味を持ち，不安定な丸底に小さな尖底状突出部をつくったような器形である。尖底から丸底への転換期として前期と継がる過程のものか，或は草創期砲弾形丸底から早期尖底への萌芽の形態を示すものなのか。出土地点が厚手無文土器等を多く出土したA4グリッド黄色土下層であることを考えると，後者としか考えられない。とすれば尖底発生の上で貴重な説明資料になるに違いない。

外面凹線文土器　上記厚手無文土器の項で，既に幾らか触れたが，Fig. 32—4～11で，早期では類例を見ない外面縦位平行太凹線文土器である。やや斜位のものが多く，一見すると押型文土器後期の内面縦(斜)位原体条痕と結びつけそうになるが，この外面凹線は間隔が離れており，楕円形押型文原体の押圧条痕ではない。また，早期終末とする手向山式土器の外面凹線と拓影上では一見似ているが，土器の厚さ・器形・施文法等が全く異になる。よって，「柿原タイプ外面凹線文土器」と呼称するしかない類と考える。胴部以下の形状が明らかになった時点で『柿原式』としてよい。口縁内面に横位山形押型文を施し，押型文土器との関係は明白である。胎土がわりと精良で，厚手であることは，厚手無文土器からの系譜であることを物語る。時期の決め手は無い。以前，手向山式土器の外面凹線文の系譜に考えあぐねていたことがあったが，案外このあたりが祖源になっているのかもしれない。内面上端の山形押型文も不思議と共通する。となれば，厚手無文土器がその独自性を失い，押型文を受け入れる段階で，末段階の手向山式土器の祖源の要素を持ち得る時期のものとなり，押型文土器後半期と時期設定できよう。ただし，この外面凹線文土器は全器形が判らないことや，層位的に他類土器との関係が把えられていないことなどから，今しばらく類例の増加を俟つことにしよう。

押型文土器　楕円形押型文のみで構成されるものを4類(1～4類)に，山形押型文のみで構成されるものを2類(5・6類)に分けた。この他に，上記の外面凹線文土器の口唇内面に施される山形押型文，薄手の外面斜位撚糸文の内面に施される横位穀粒文押型文(Fig. 33—3)，細かい格子目押型文(Fig. 33—4・5)などがある。押型文の異なる文様の同一土器への施文は無い。分類した各類の詳細は本文中で既述したが，押型文土器前半代の土器量は少い。SX1出

土分(Fig. 12)も合わせると1/3程であり，後半期のものが2/3を占める。当遺跡出土押型文土器は，104点図示できた程であったにも関らず，層位的に全く各類間の関係をつかみ得なかったことは残念である。これは，早期のものと思われる打製石器が多く出土し，器種毎に明らかに分類が可能で，早期の古段階のものか新段階のものかつかめそうなものが多い点でも同様である。当甘木・朝倉地域での押型文文化把握において今後必要なのは，この層位関係等による各土器群の明確な位置付けであろう。

B　縄文晩期土器群について

土器分類　本文中で器種毎に細分類して，今後の土器編年に備えた。完形品が皆無のため，主に口縁部のみの器形による分類を目指した。晩期の中でも黒川式新段階前後のものが主体となるため，晩期初～中葉の出土数が少なく，主な器種でもかなり抜けている。今後横断道報告書のシリーズ中に晩期土器が大量に報告されるので，それらの成果がこの分類を充実してくれるだろう。また，分類表（Fig. 90～92）左欄にとりあえずの年代観を分類時のものさしとして記したので説明しておきたい。縄文晩期を初葉・前葉・中葉・後葉・末葉の5小期に分ける。初葉は御領式・鳥井原式，前葉は大石・上加世田・広田式，中葉は入佐・古閑式，後葉は黒川式，末葉は礫石原・長行・山ノ寺(古)段階の各土器形式が該当する。末葉の後を弥生早期とし，曲り田(古)式・菜畑13層等の刻目凸帯の確立盛行期とする。さらに，これらを将来的に細分できると考えられるので，各々古・新段階と仮称して分類した。中葉では，東九州・中九州で既に細分の案が示されており，北部九州でも分かれることは間違いなかろう。後葉は，九州の縄文研究者の懸案とも言える黒川式土器の再検討の試みの一つとして，とりあえず古・新の2段階に並べ直す作業を目指している。末葉は，弥生早期の設定に伴い，広義の黒川式土器からはずして位置付けを試みているため，しばらくは汎九州的視点からの細分は無理であろう。

精製浅鉢1類　各類毎に時期・形状・系統等について検討しておきたい。1a類は三万田式以来の口縁外面凹線文を持ち，晩期前葉まで上げてもよい。体部屈曲部の外面沈線も晩期初葉の特徴であるが，前葉乃至中葉古段階に残ったもの。1b類の内面に段をつくる特徴は，精製浅鉢6b類(77)とも共通し，晩期中葉に位置付けられる。なお，この1類浅鉢の系統は，精製浅鉢3c－2類(61)へ後葉古段階で小型化し，更に後葉新段階で(59)・(60)へと変化してゆく。また，マリ形土器へも影響を及ぼす。この1類浅鉢は，中葉古・新段階での数が足りないので今後は近隣遺跡例からの補充が必要である。甘木市高原遺跡E・F区(註16)の出土品なども参考になろう。

精製浅鉢2類　大きくラッパ状に開く口縁の類を2類としたが，その主体は2c・2d類である。2a類(9)は半裁竹管連続刺突文という九州では見られない施文の異類である。内面に沈線

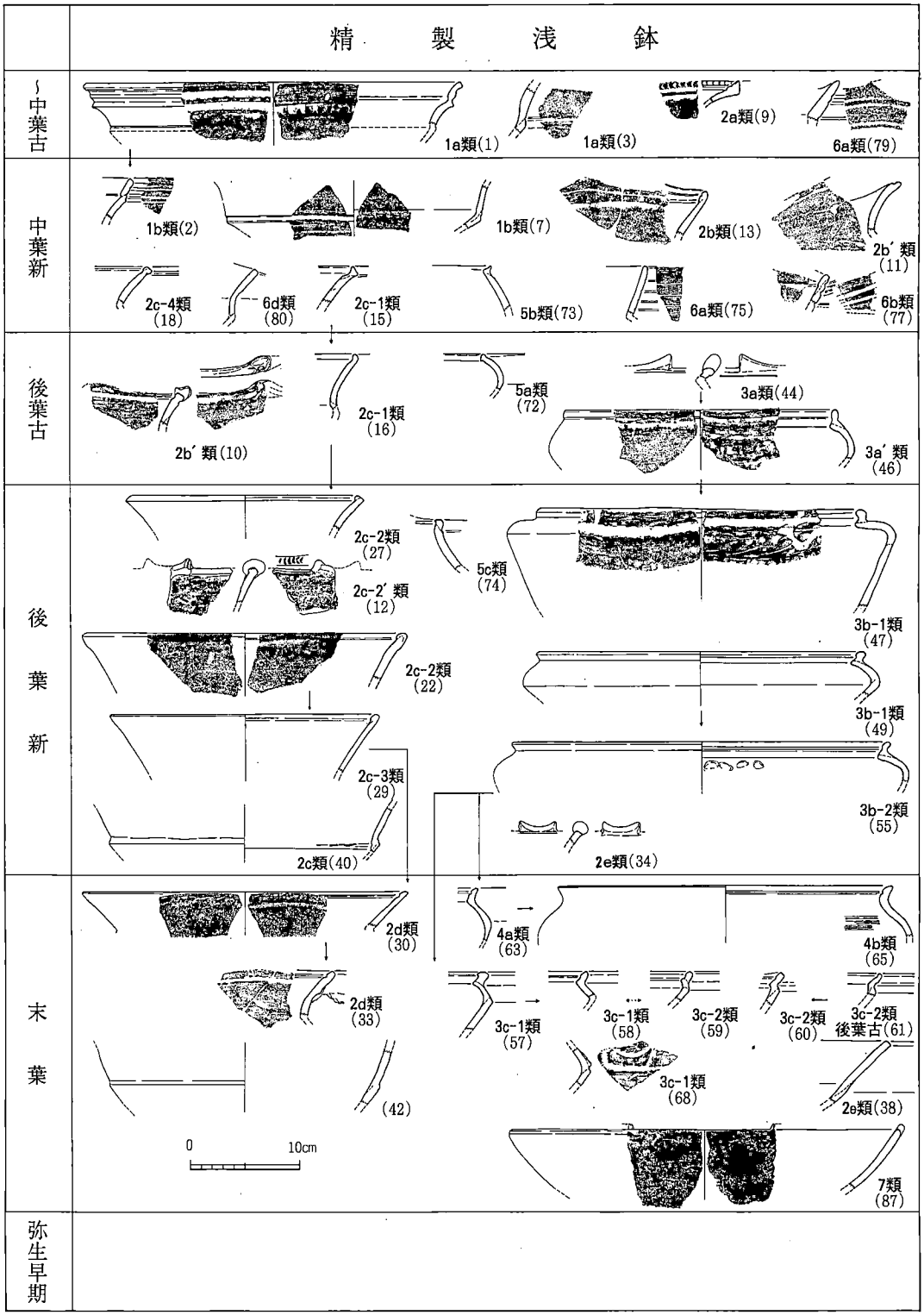


Fig. 90　縄文晩期土器分類（その１）(1/6)

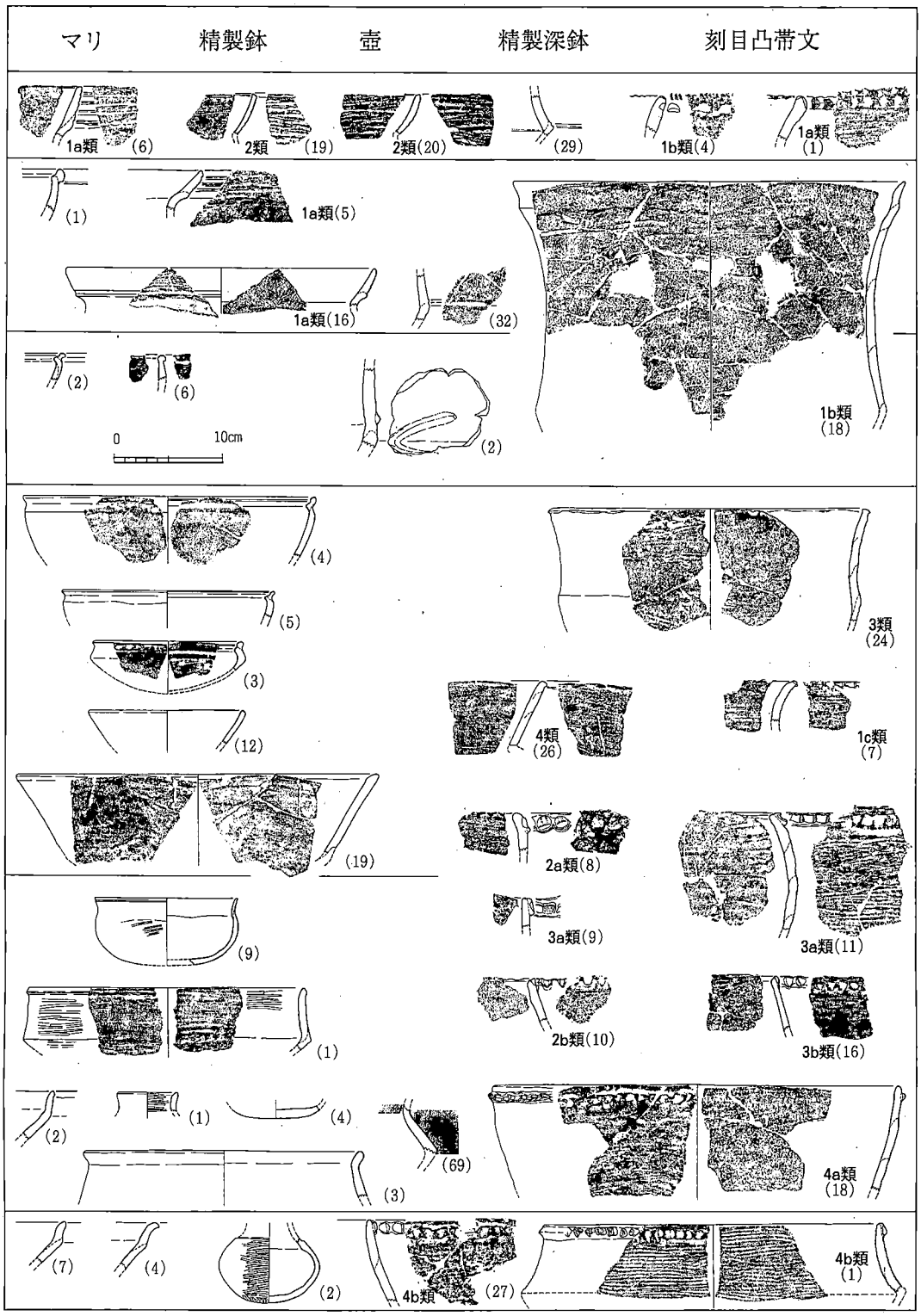


Fig. 91　縄文晩期土器分類（その２）(1/6)

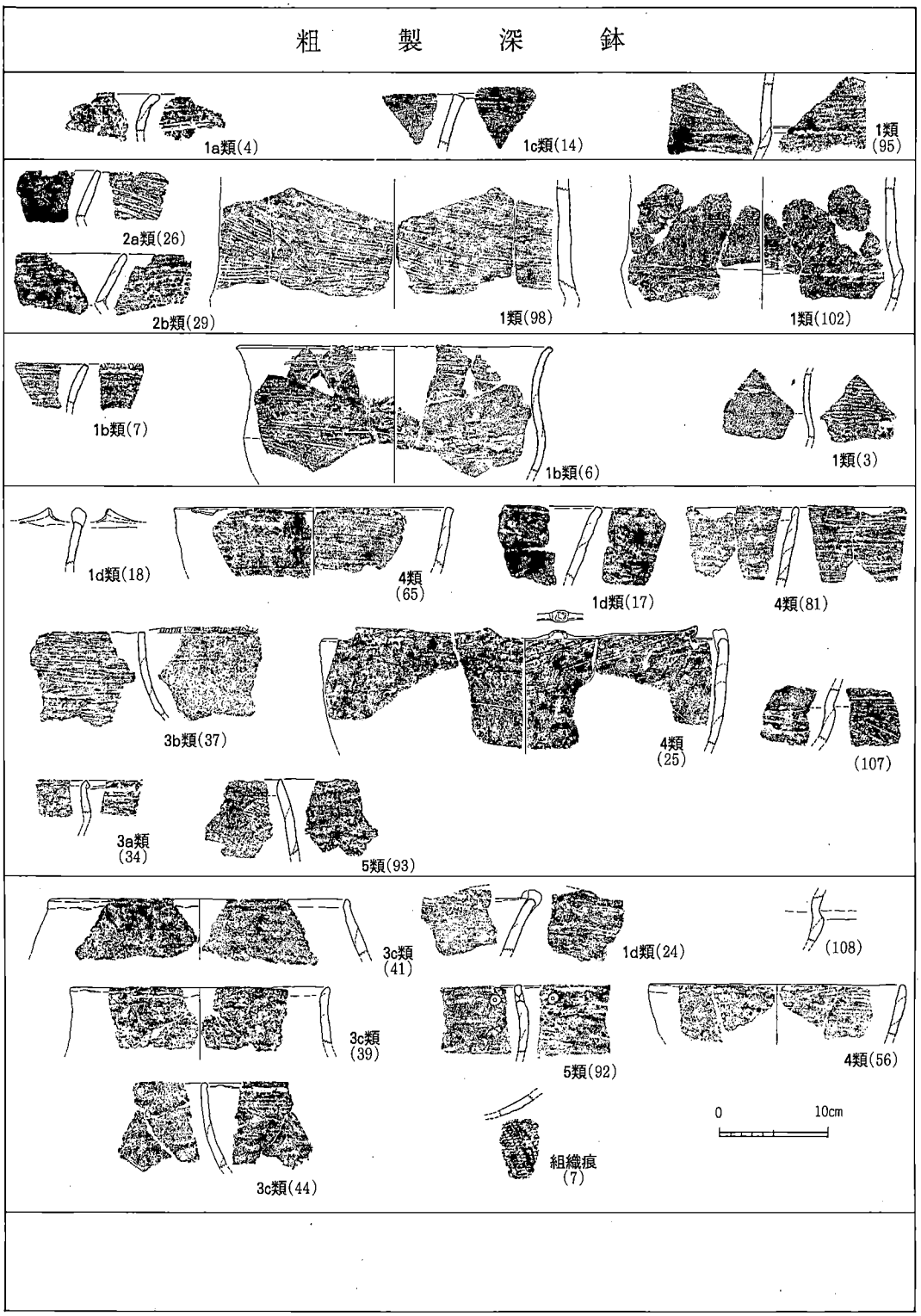


Fig. 92　縄文晩期土器分類（その３）(1/6)

と段をつくり出したしっかりした作りで，晩期なのかどうかも判断できない。黒土Ｂ１式等で半裁竹管が多用されることから，畿内～瀬戸内のものかもしれない。内面が肥厚して沈線を入れる２ｂ類は精製深鉢の波状口縁類となるかもしれないが，入佐併行期の中葉新段階でよかろう。類例は少いが中国地方の晩期前半代に散見する。２ｂ′類(11)も中葉新段階となろう。同類(10)は波状口縁というよりも山形凸起的であり，後葉古段階まで時期が下がると思われる。２ｃ類は，口縁内面が断面三角形の突出形状(15)から，２ｃ－１類(16)で丸みを持ち，２ｃ－２類で口唇部全体が玉縁状となり，２ｃ－３類でやや角ばった肥厚で内面が段状をなし，更に２ｄ類で内面の段が沈線となり肥厚が無くなる，という変遷を考えた。２ｃ－１類(15)と２ｃ－４類(18)は，この前段階に精製浅鉢１類との関係があるため，入佐段階後半の中葉新まで上げた。ただ，典型的玉縁口縁の２ｃ－２類(27・12・22)は黒川式古段階の後葉古まで上げていいかもしれない。また，体部屈曲部の変遷（40→42）は重要な目安となろう。

精製浅鉢３類　口縁が短く胴張りする，黒川式の代表的器種である。本来この器種は口縁がやや長めに開き，端部が玉縁となる黒川洞穴出土の浅鉢(註17)が原形で，分類表の後葉古に入るべきものと考える。本遺跡出土例ではそのタイプが欠けている。また，北部九州域でもあまり見たことがない。３ａ・３ａ′類としたものは，玉縁の外面の沈線・段を残し，頸内面の突出がまだ顕著でない類で，かろうじて後葉古に残しておく。リボン状凸起は大きく整美である。リボン状凸起そのものは，晩期中葉以降各器種に付くが，新しい時期のものは小さく粗雑となる。３ａ類は本遺跡東方の朝倉町治部ノ上遺跡Ａ１号土壙(註18)で粗製深鉢１ｂ類と扁平打製石斧２点とを伴っており，黒川古段階の良好なセットをなしている。３ｂ類は最も良く見られるタイプであるが，肩が張ってきて，玉縁口縁から角張った断面形態への変化がみられ，内面に段を持つようになる。晩期末葉に至ると３ｃ類となり，肩部にシャープな稜をつくり直線的に屈折する。３ｃ－１類の(57)は北九州市域で見られるような瀬戸内系の影響を受けている。３ｃ－２類とした浅鉢は胴の張る３類ではなく，１類からマリへ変化したものから出てくる系統にした方がよいが，口縁の角張った形状と屈折部外面稜のシャープさから小さな形態変化をつかむのに好資料と考え，この類に入れている。ただ(61)は後葉古段階まで溯る可能性も強い。また，(68)はリボンを浮き彫り状に施した精品で，屈折部に沈線を施しているため，中葉段階のものなのかもしれない。ただし，どの類のものかは判らない。

精製浅鉢４類　本来３類の胴張りのタイプとして扱うべきであるが，今回だけとりあえず別類として取り上げた。４ａ類(63)は，口縁が角張り，内面の稜をちゃんと残している点で，３ｂ－２類からの直接の変化と考えた。ただ，この類は黒川洞穴から類似品が出土しており，時期を上げてもいいのかもしれない。４類自体が北部九州域では出土例が少く，南九州で散見できる程度である。この類の年代が押さえられれば，各地域間の土器セット関係が判ってくるのではないかと考えられる。

精製浅鉢5～7類　5類は無頸状の胴張り類で，5ａ類(72)は3ａ類との関連で後葉古に，5ｂ類(73)は口縁の形状が2ｃ－1類と相通ずると考えて中葉新に置いた。5ｃ類(74)は口縁端の接合が2ｃ類の玉縁状口縁に近いかと考えたが，波状口縁になりそうだし，異器形であるので，中葉段階のものかもしれない。6類のうちｂ類(77)は中葉の特徴である内面中途有段を持つ類。ａ・ｃ類と整然とした沈線の状況などから前葉乃至後期まで溯るものかもしれない。6ｄ類(80)は大きく波状口縁となり頸部と体部で屈折する中葉の特色を示している。粗製深鉢2類と関連する器形となる。7類は大皿状の器種で，形骸化した凸起を付けるようだ。

マリ類　定型的マリ形土器の祖源は三万田式段階から登場し，黒川新期あたりまできちんと続いている。大形で深めのものと，小型小椀状のものがあり，口縁屈曲の特徴が引きつがれている。更に，定型的でない杯状・深皿状・小鉢状の小物類も併行して存在するようで，晩期初～後葉にかけてバラエティーに富んで量も多い。定型的マリ形土器は晩期末葉には消滅し，弥生期には引き継がれないが，これはどうしたことだろう。浅鉢形土器でも同様な現象がみられ，弥生文化に引き継がれなかった器種として，その理由と背景となる生活形態の変化が考察されるべきであろう。マリ形土器(1)は厚手やや大型で，古相を残している。(4)(5)は，後葉古まで上げてもよい。

精製鉢・高杯・壺類　精製鉢(19)は口縁内面に稜を持つ特徴的な大型器種であるが，類例が無く苦慮しているが，晩期後半に知られる組織痕土器の祖形となっているのではないかと思われる。そうだとしたら，晩期中葉まで上げてもよい。高杯と思われる(1)(2)(4)(7)は，各々器形変化しており系統が追える。(1)は低い筒状の脚部を付ける形状となろう。初現的高杯と言えよう。(7)は浅鉢になるかもしれない。壺類の(1)は直口の小壺口縁であるが，弥生早期的特徴の口唇形態をなさない。壺(3)は，口径が大きく，口縁は弥生早期的であるが，体部中途で屈曲する鉢・深鉢的形状になるような気もする。胴部に稜を作る(69)とともに異類的であるという意味で晩期末葉に入れておきたい。

精製深鉢　晩期前葉の口縁が長く外傾して開く1ａ類は，沈線を残すもの(5･6)と，条痕に変わったもの(16)とがあり，中葉の特色を示す。外面無文の1ｂ類(18)もあり，器形から中葉古段階まで上げてもよい。この時期に体部屈曲部上位に鋸歯状の沈線を施すもの(32)や，粘土紐貼り付けによる曲線文(2)が稀に見られる。2類(19･20)は，内湾する口縁に条痕文の顕著な特色ある器形をなすが，北久根式あたりから波状口縁となる類似品があり，後期に上るものなのかもしれない。今後注意を要する。3類(24)は，1類の系統で，粗製深鉢1類と共通する。分類図では後葉新に置いているが，口縁のしっかりした状況や，体部屈曲部の形状から後葉古まで上げた方がよい。精製深鉢4類(26)は，開口して胴の張る器形となろうが，いま一つイメージが湧かない。粗製深鉢1ｄ類と共通するものか。

刻目凸帯文土器　本遺跡出土の刻目文類は，全体に極めて粗雑な大きい刻目が多い。明確な刺

突によるものは無く，貝殻腹縁による抉り込み，指頭による爪先を残した押圧による刻目が多い。肩部刻目破片の数が，口縁刻目の数に比べて極めて少く，上下２段刻目或は肩部のみの刻目の類は僅かしかないと考えられる。器形も頸部が内傾して肩の張る弥生早期に特徴的なものは少い。１ａ・１ｂ類とした丸い断面形の口縁端に貝殻腹縁による抉り込み状刻目を施したものは，晩期としては異種であり，後期のものかもしれない。１ｃ類(7)は，外湾する口縁の上端にヘラで切ったような刻目を施しており，粗製深鉢１ｂ類からの変化と考えられ，年代を下げても後葉新までであろう。ただ，器形的には刻目凸帯文土器そのものには入らず，発生前夜の諸遺跡例と同じ類であろう。２・３類は粗大な刻目を施す類で，明らかに刻目凸帯文土器の発生当初期のものである。器形・施文状況などから弥生早期のものとは異り，先行することは間違いない。うち，凸帯を付ける３ａ・３ｂ類は，口唇部を巻き込むようにかぶせて凸帯を付ける特徴があり，注目される。この２・３類の感動的に始源的な刻目土器は，共伴関係は明確にできないが，一部には後葉新(黒川新)期まで溯るものがあると考えたい。本遺跡例でこの予測を裏付けるものを示すと，粗製深鉢３ａ類(34)で口縁を巻き込む凸帯の存在が認められ，粗製深鉢３ｃ類(39・41・44)で肩の張る器形が成立しており，その前段階としての粗製深鉢３ｂ類(37)においては肩の張る器形の口縁上面に伝統的な浅い刻目が施されていることなどが掲げられる。また，内湾する器形の粗製深鉢５類(93)も後葉新段階と思われ，成立段階の刻目凸帯文土器発生への環境は揃っている。よって，これら刻目凸帯文２・３類は，各地遺跡出土品で注目される「刻目凸帯文土器成立前夜」の土器ではなく，「成立当初期」の土器と考えたい。そして，成立の環境が出揃っている後葉新(黒川新)段階にその時期を求めたい。ただ，本遺跡出土の多くの刻目凸帯文２・３類は末葉期に置いて，確立盛行期の弥生早期に先行する未だ混沌とした，はっきり言ってきたない刻目施文技術の段階として把握しておきたい。

粗製深鉢　１類は口縁が外反する類で，御領式土器以来の伝統的深鉢であるが，１ａ類(4)は丸く外反し，ちょっと趣きが異る。１ｃ類(14)は出土例が多く，特徴的口縁であり，全器形を想定できないが，今後追求すべき器種であろう。１ｂ類(6)は，一見，典型的な１類土器のようであるが，口縁上面にしっかりした刻目が施され，外面上端に雑だがはっきりした沈線が複数見られ，ひょっとしたら後期のものではないかとも思われる。１ｄ類(17)は，内面だけヘラ磨きしており，粗製深鉢２類と同類の２段屈折の深鉢となるかもしれない。時期も中葉に上げてよい。末葉期に置いた１ｄ類(24)は，凸起部の形状がきちんとしたリボン状や片削ぎ三角形などを示さない。２類は，頸部と胴部で２段に屈折する長崎県深堀遺跡・礫石原遺跡出土品で知られる蝶ネクタイ付の器種となろう。蝶ネクタイ部分は出土しておらず，地域性を示しているのかもしれない。３類の頸部が内傾し肩の張る器形については，前項で刻目凸帯文土器の成立との関わりの強い類として詳述した。ただ，３ｂ類(37)は上端の浅く密な刻目が特徴的であるが，この施文そのものは，粗製深鉢１ｂ類(7)と共通性があり，時期を下げてもこの後葉新段階まで

であろう。また，３ｃ類(41)は，５類(93)と同類の胴張りの器形になるかもしれない。４類は単純な鉢形の器種であるが，分類表(Fig. 92)で置いた時期についてはあまり根拠は無い。ただ，(25)の上端凹状小凸起を持つ土器は，深鉢胴部稜上に付ける小凸起の例が九州内でも散見できるが，これを末葉に位置付けてよいと考えるので，末葉に近い時期に置いてみた。５類(92)は，底面に組織圧痕をしばしば持つ広口の鉢状類であり，当該期特有の器種である。(7)の組織圧痕土器とともに後葉段階までは上る可能性がある。体部屈曲部片の(107)(108)は，後葉～末葉の特徴を良く示すものである。

以上，柿原Ｉ縄文遺跡出土の土器について検討を試みたが，早期については草創期まで含めて，これから急スピードで解明が進むだろう。楽しみにしている。晩期の分類・編年については，確実に層位・遺構の切合い等で押さえてゆくことが急務である。でないと晩期の集落論・生産経済論・社会構造論の解明が望まれる昨今，物差がいいかげんでは困る。破片でも，稀少器種でも使える編年表を作ろう。次の機会からは，石器・遺構をも勘案したものを目指そう。

(1995年１月８日　中間研志)

註１）大塚達朗「九州地方の縄紋草創期編年と泉福寺洞穴」『縄文時代　２』縄文時代文化研究会　1991　の中で，〝続円孔紋土器〟として柏原式が設定されている。福井洞穴２層・泉福寺洞穴６ｂ層を九州の円孔紋土器の初現として捉え，泉福寺５層・柏原Ｅ例を経て展開する段階の柏原遺跡群の円孔刺突紋を柏原式とする。

２）山崎純男・小畑弘己『柏原遺跡群Ｉ』福岡市教育委員会　1983
山崎純男・小畑弘己『柏原遺跡群IV』福岡市教育委員会　1987
山崎純男・小畑弘己『柏原遺跡群Ｖ』福岡市教育委員会　1988

３）赤司善彦・水ノ江和同『原遺跡』福岡県教育委員会　1994

４）松本健郎「東鍋田遺跡」『菊池川流域文化財調査報告』1978

５）橘昌信ほか『稲荷山遺跡緊急発掘調査』大分県教育委員会　1970

６）八幡一郎・賀川光夫『早水台』大分県教育委員会　1955
八幡一郎・賀川光夫ほか『早水台（39年調査)』大分県教育委員会　1965

７）賀川光夫ほか『政所馬渡』別府大学付属博物館　1982

８）賀川光夫・羽田野一郎『大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告』朝地町教育委員会　1960

９）栗田勝弘『野津川流域の遺跡II』野津町教育委員会　1981

10）賀川光夫・清水宗昭ほか『東台遺跡』臼杵市教育委員会　1974

11）前掲書註２）の『柏原遺跡群Ｉ』中の第15図（25頁）の土器で，口縁直下に連続刺突文，以下に櫛歯状押圧を施すもので，長さ2.8cm，幅1.5cmの縦長こぶを３ケ所付けている。

12）鎌木義昌「備前黄島貝塚の研究」『吉備考古』第77号　1949

13）潮見浩「広島市牛田早稲田遺跡の発掘調査報告」『広島考古研究』第２号　1960

14）前掲書２）の『柏原遺跡群Ｖ』中 Fig. 303（377頁）に19点の押型文土器に先行する無文土器が示されている。

15）麻生優『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会　1968

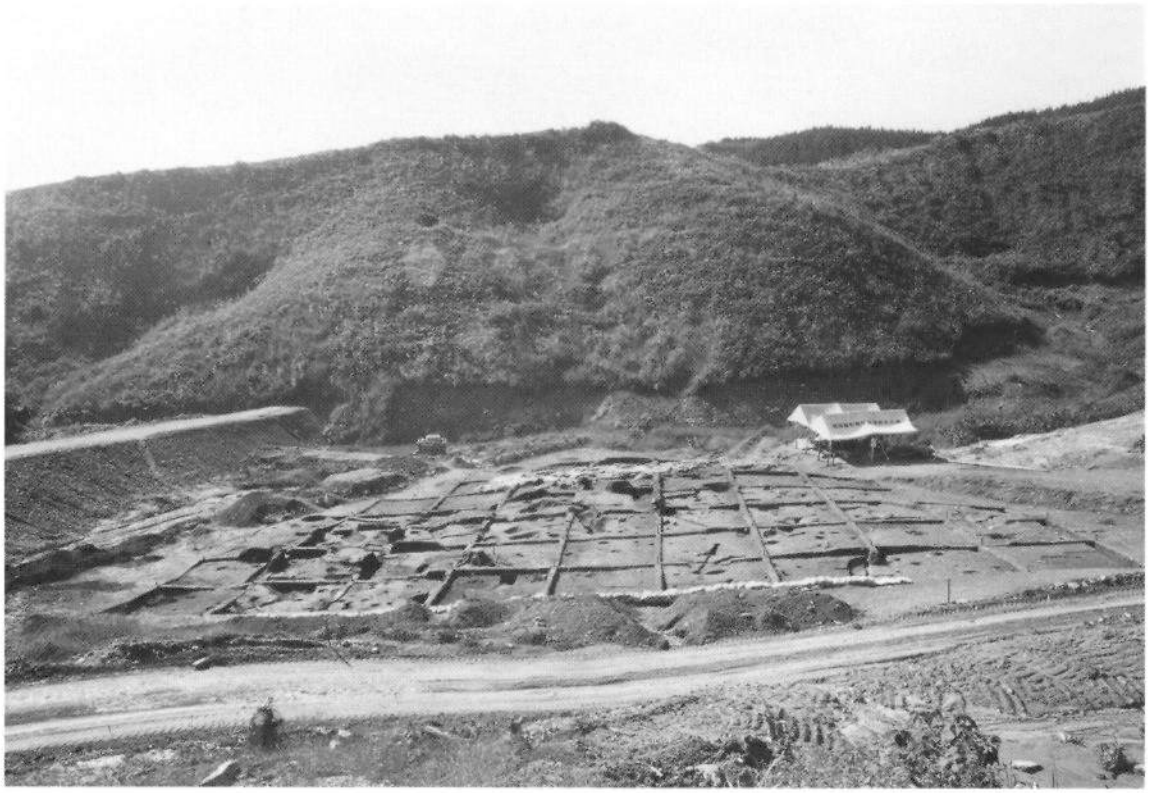
16）伊崎俊秋『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　31』福岡県教育委員会　1994

17）河口貞徳「Kurokawa Site, Kagoshima Pref.(1)～(4)」『西日本における晩期縄文土器集成図』1962のうち，21・25番の土器は祖源形であり，プレ３ａ類と呼べよう。更に，河口貞徳「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967　の230図のうち５・６は，もう一段階変化しており，３ａ類最古タイプに位置付けられよう。

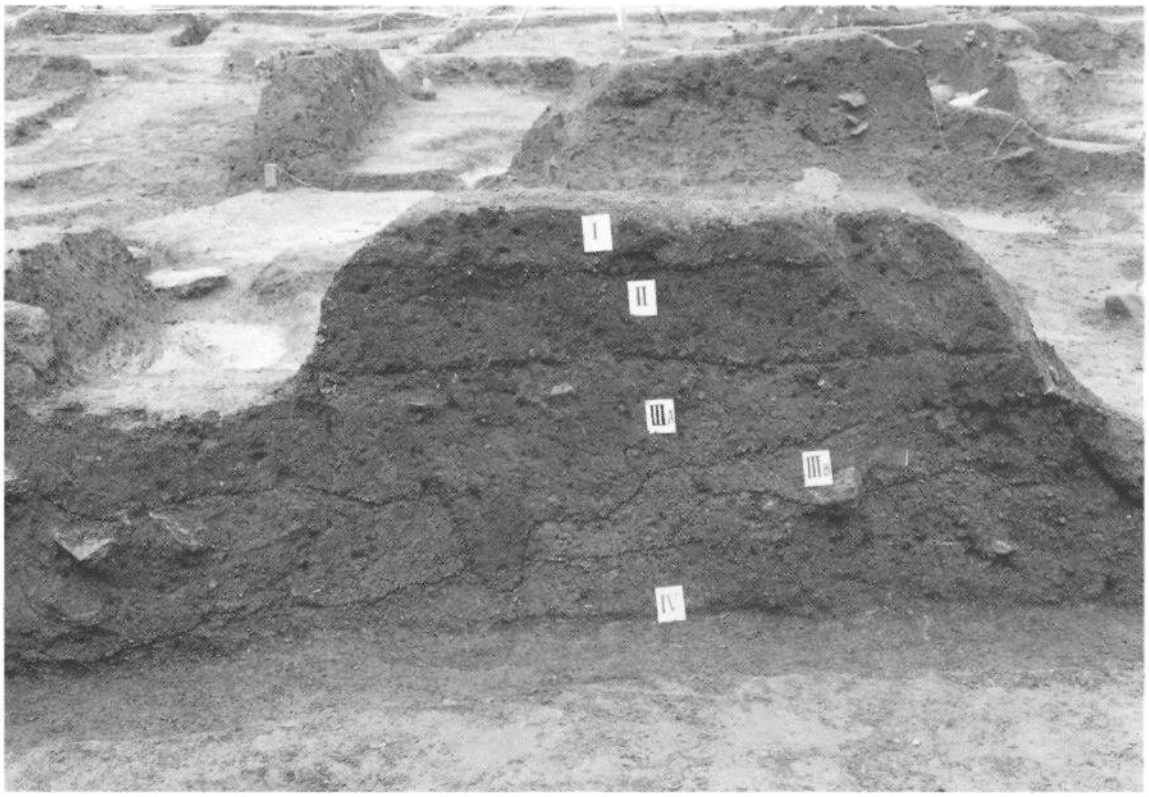
18）中間「治部ノ上遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　32』福岡県教育委員会　1994

PLATES

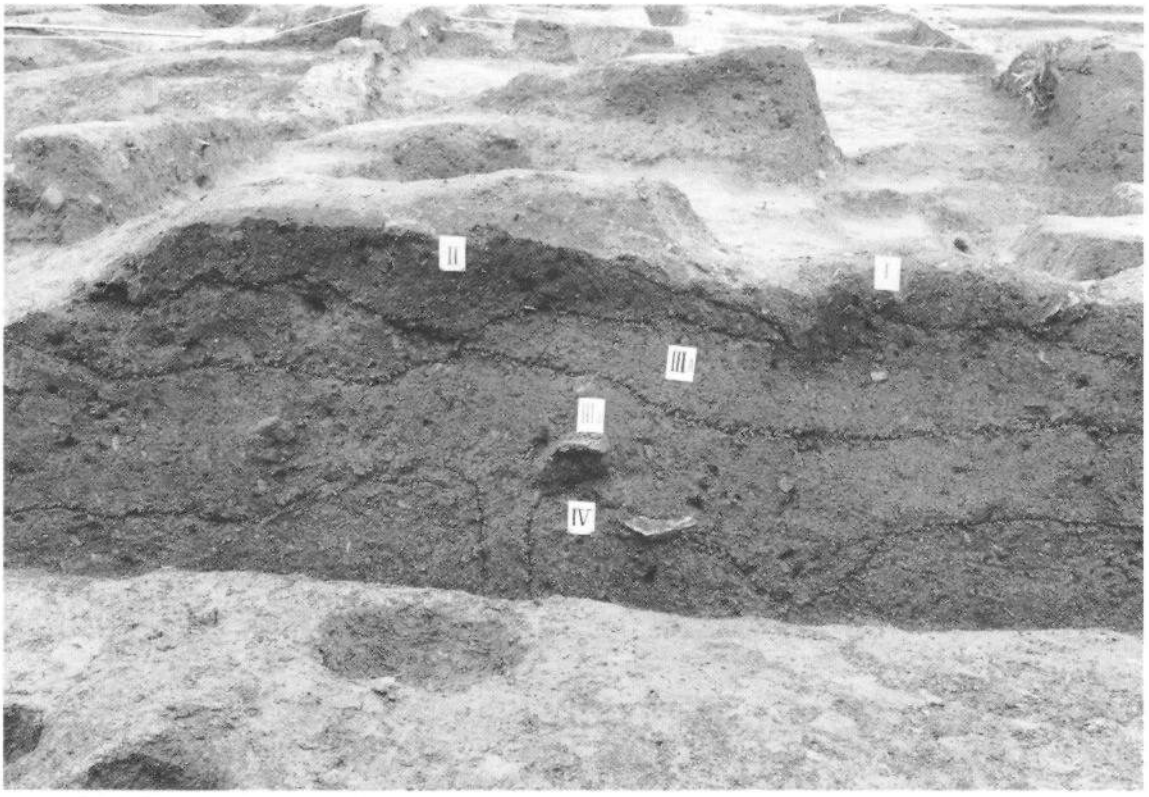
(1) 柿原Ⅰ縄文遺跡全景（南から）



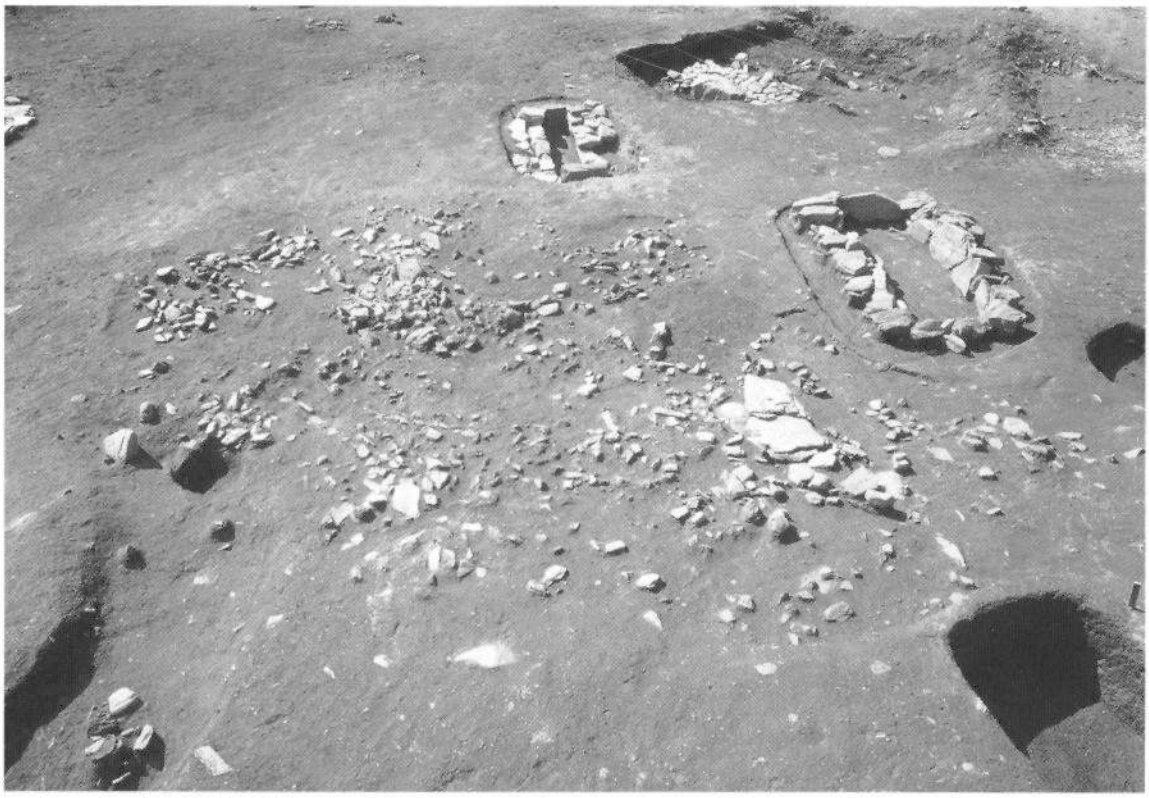
(2) 柿原Ⅰ縄文遺跡全景（東から）



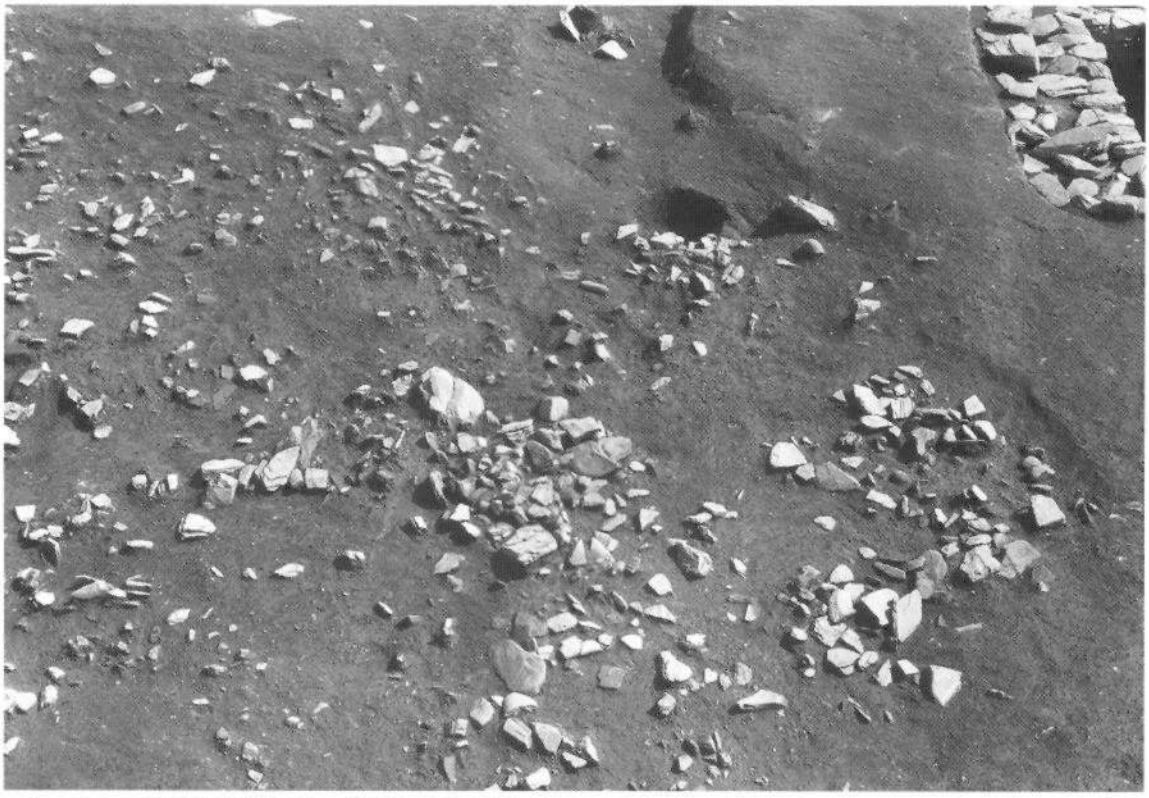
(1) 基本土層（C10グリッド北壁）



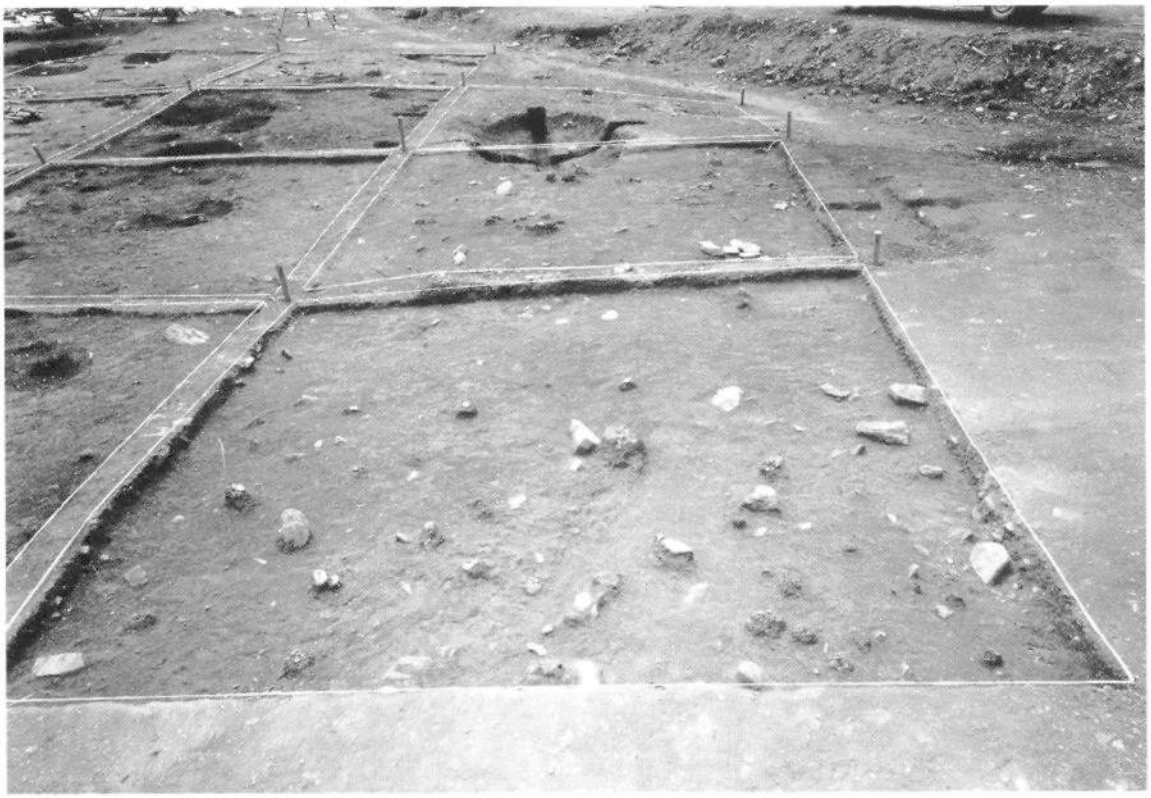
(2) 基本土層（D10グリッド北壁）



(1)　ＳＸ１集石遺構（東から）



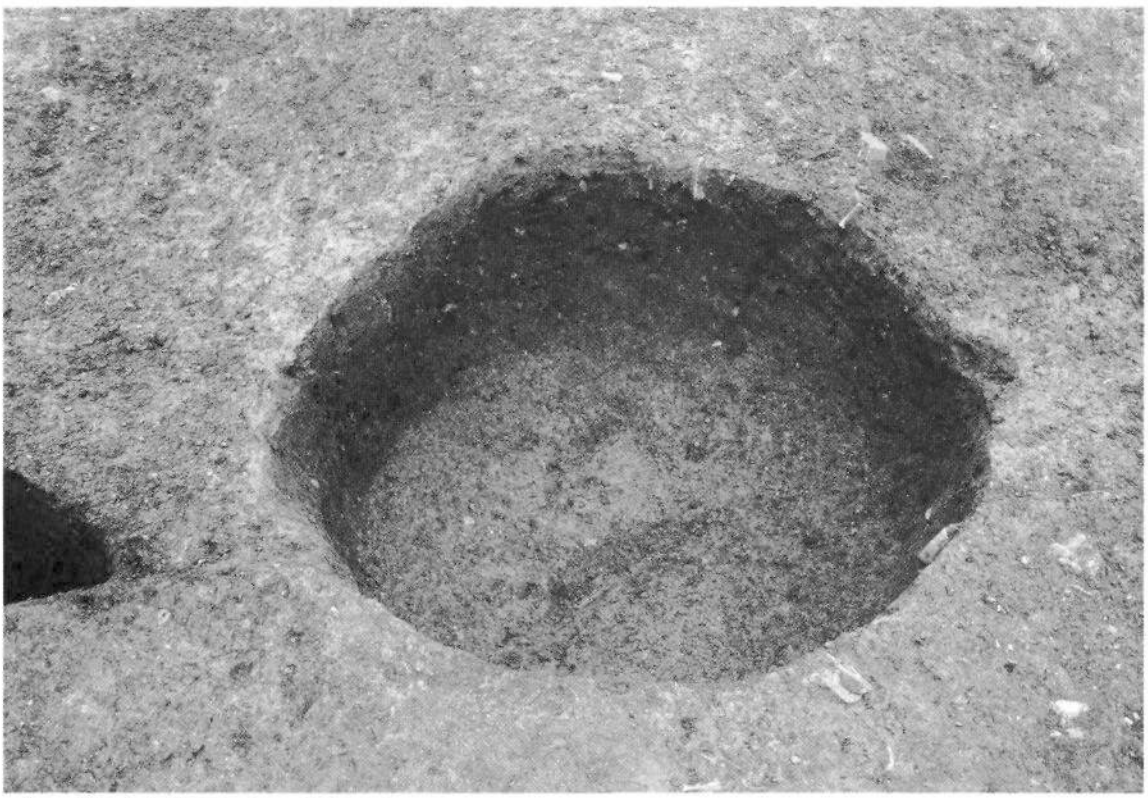
(2)　ＳＸ１集石遺構集石炉１・２付近（西から）



(1) B 2～C 2 グリッド遺物出土状況（東から）

(2) 黄色土土壙D 9－P 4（南東から）

(1) 黄色土土壙
D 3 - P 6
(南西から)



(2) 黄色土土壙E10 - P 1 (南から)

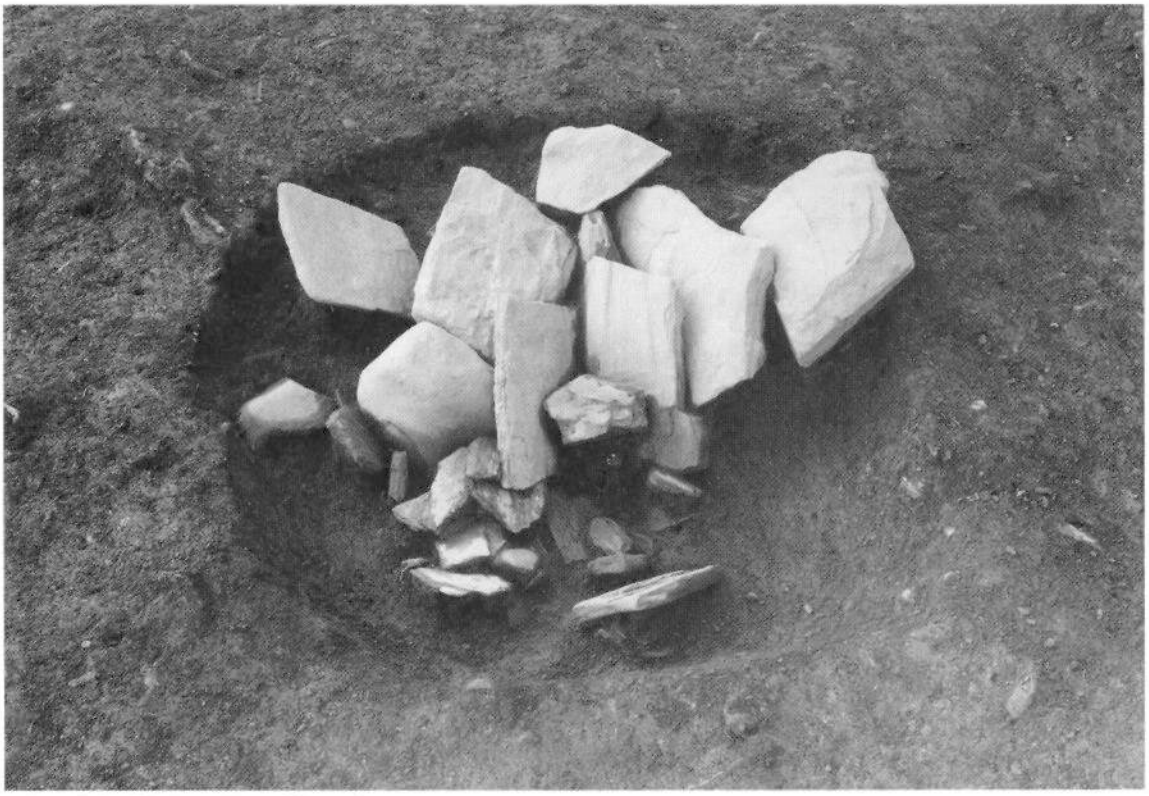
(1) 黄色土土壙Ｅ４－Ｐ３（北から）

(2) 第１号縄文住居跡（東から）

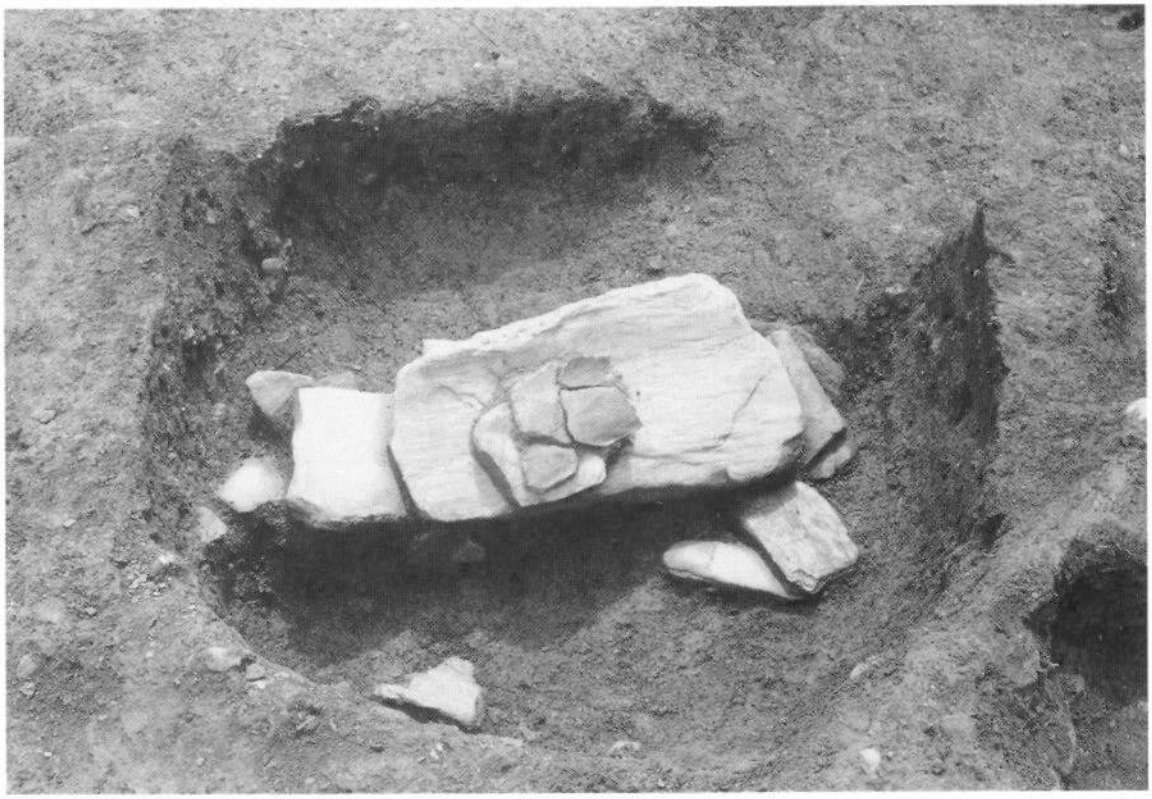
(1) 第2号縄文住居跡（東から）

(2) 第3号縄文住居跡（東から）

(1) 第４号縄文住居跡（南西から）



(2) 晩期土壙Ｆ５－Ｐ１（東から）

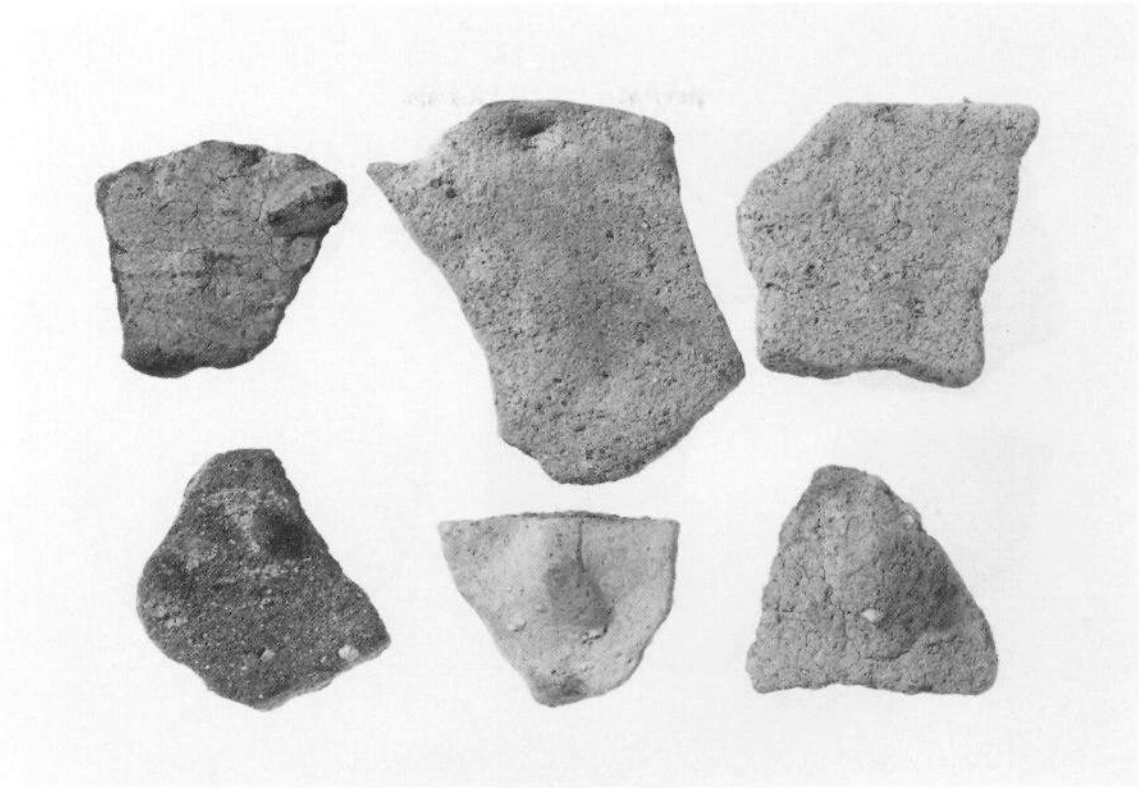


(1) 晩期土壙D 5 - P 4 (北西から)

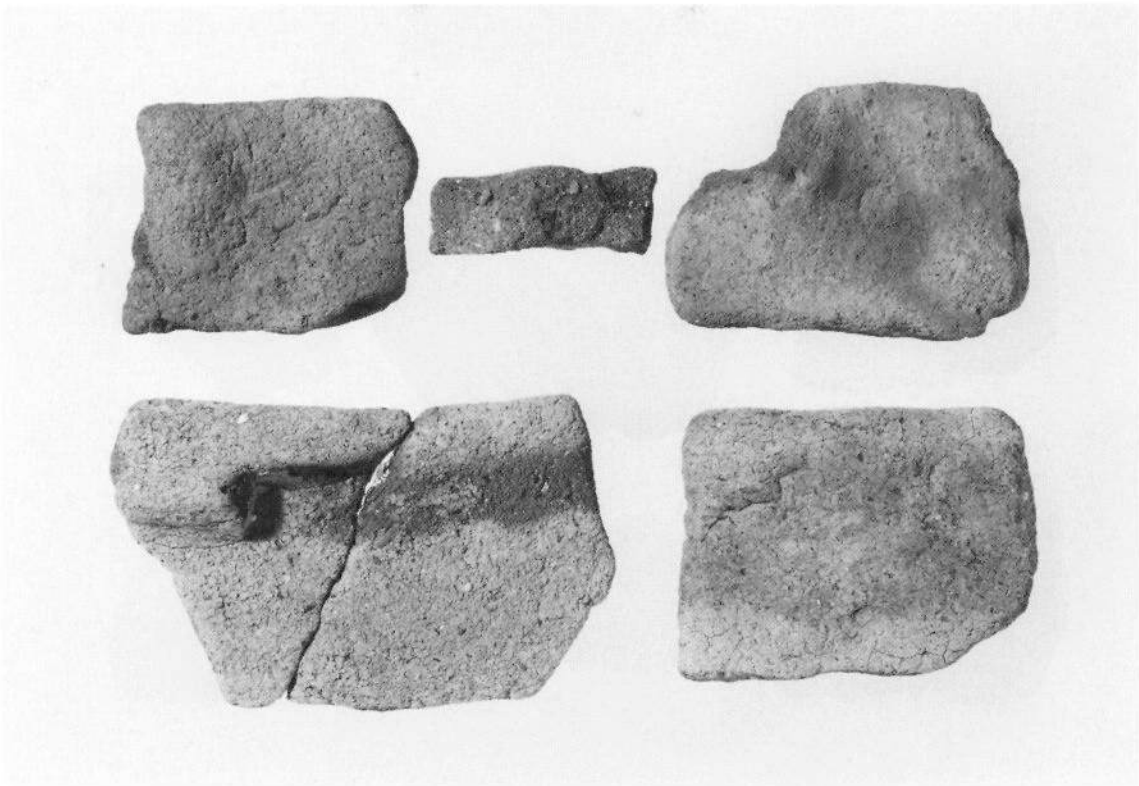
(2) 晩期土壙D 6 - P 1 (東から)

(1) 縄文グリッド調査状況（北東側，南から）

(2) 縄文グリッド調査状況（南半部，東から）



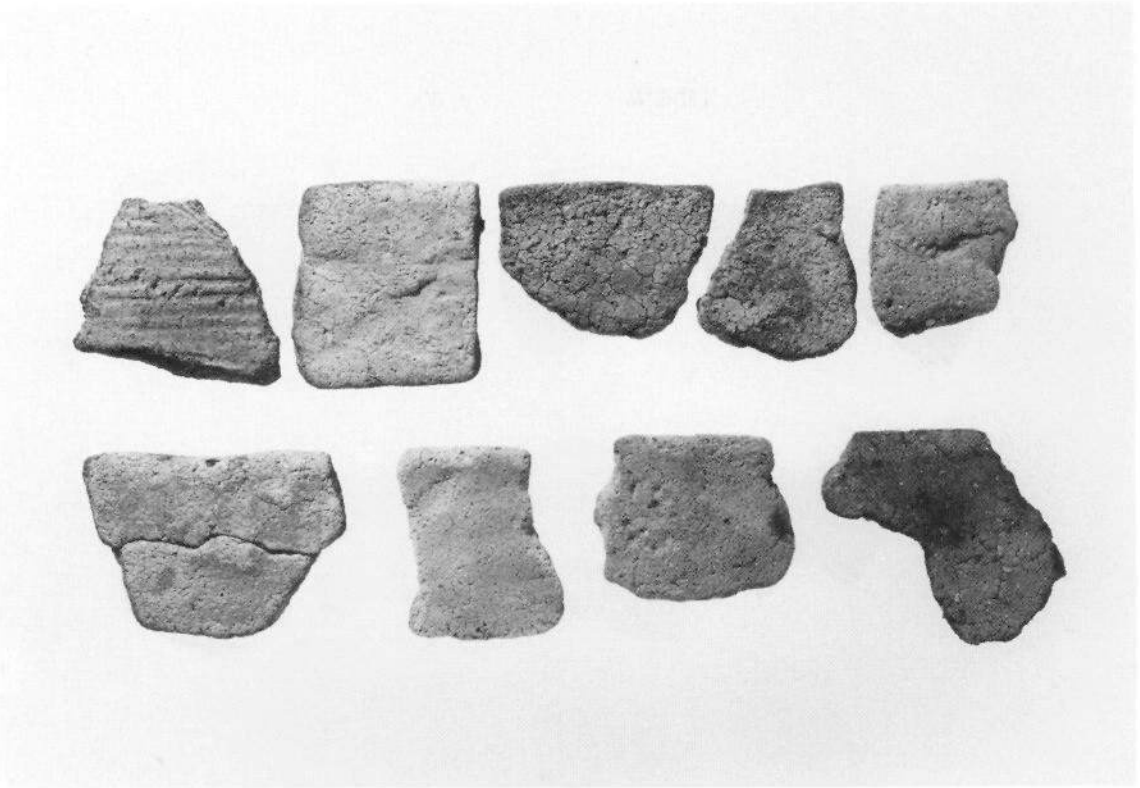
(1)　刺突文土器，こぶ文土器



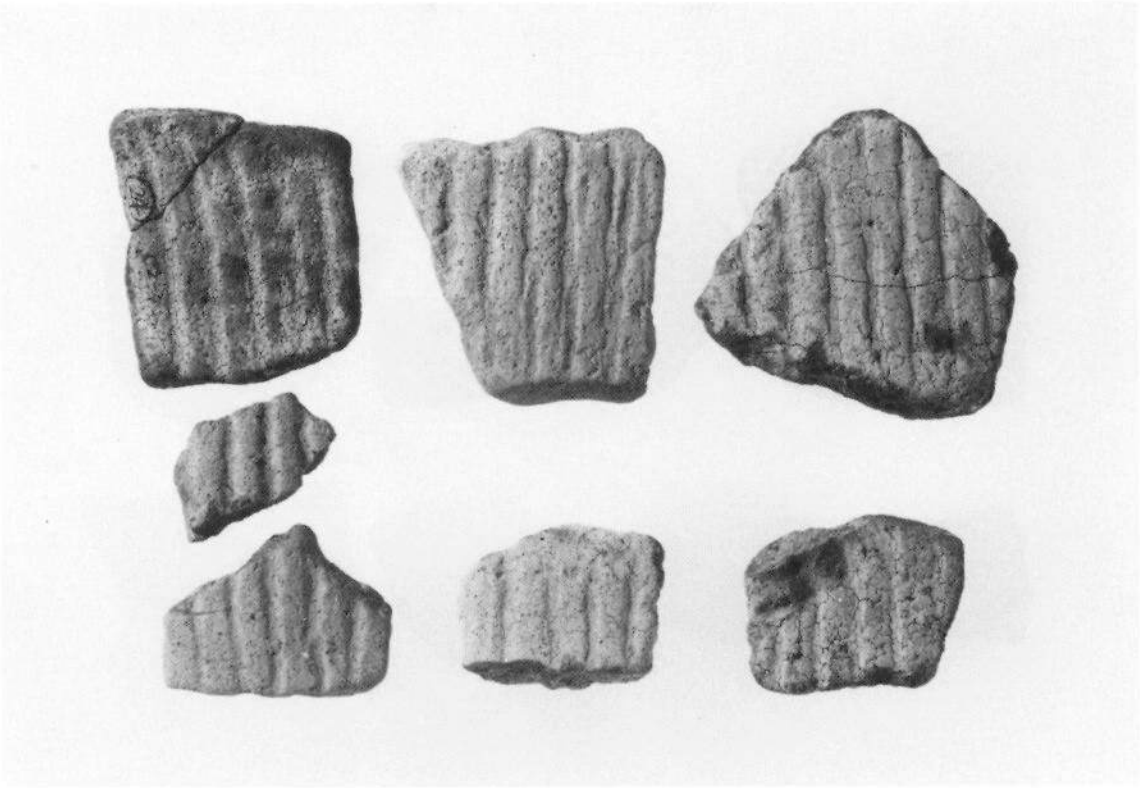
(2)　こぶ文土器，凸帯文土器

(1) 厚手無文土器

(2) 厚手無文土器

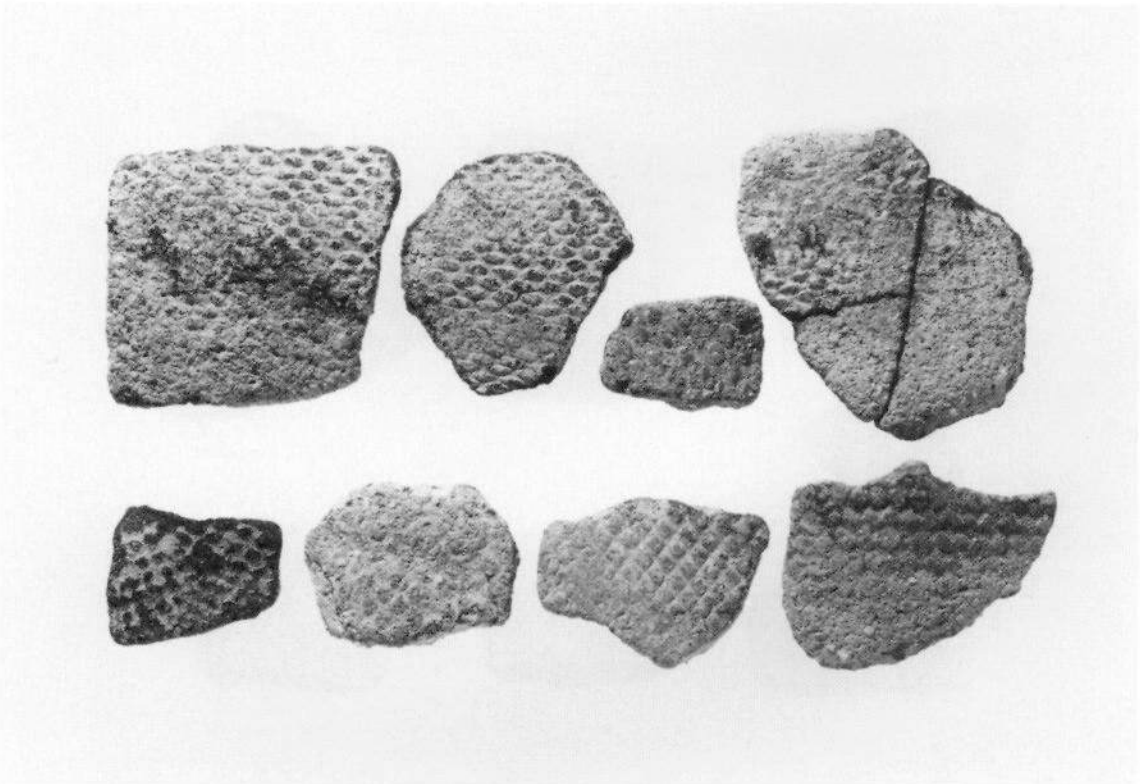


(1) 条痕文土器，厚手無文土器

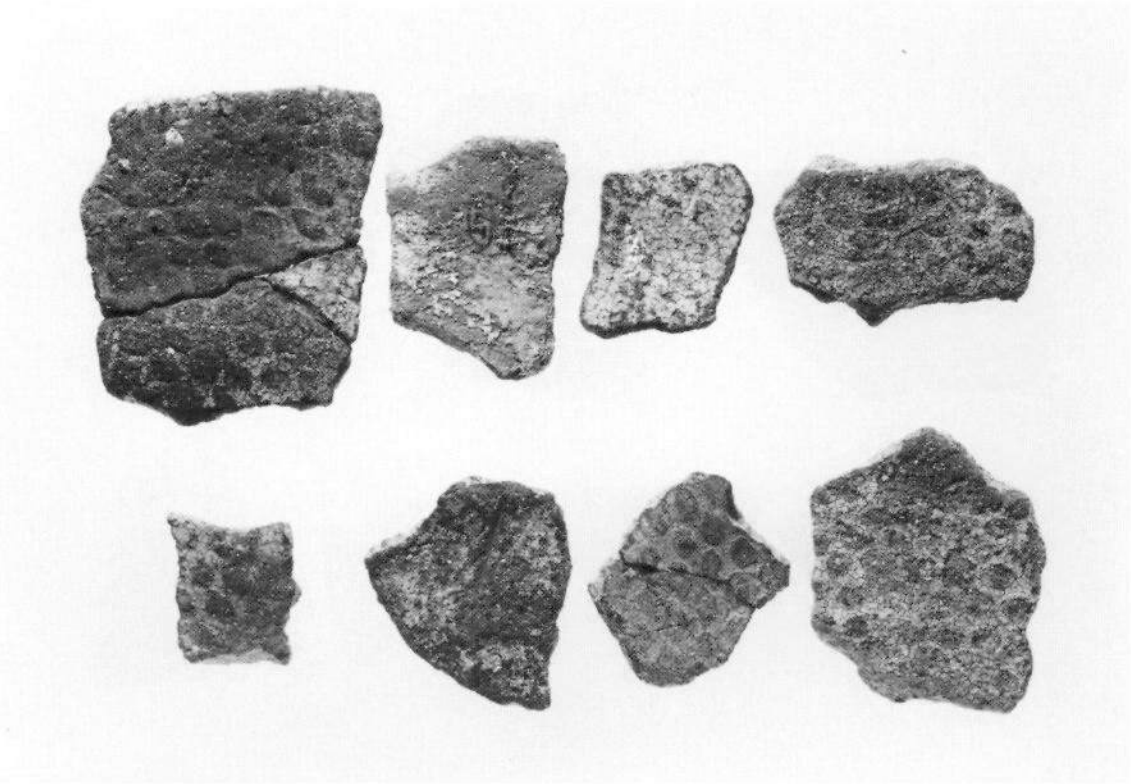


(2) 外面凹線文土器

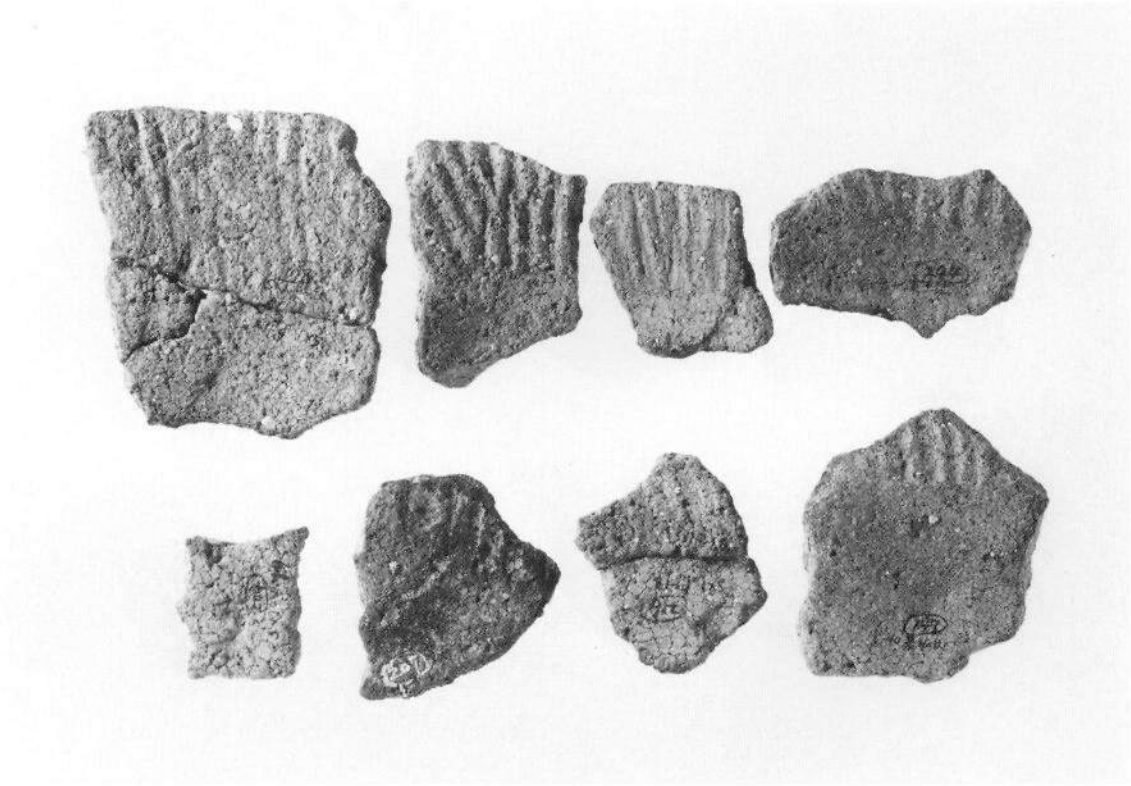
(1)　楕円形押型文土器



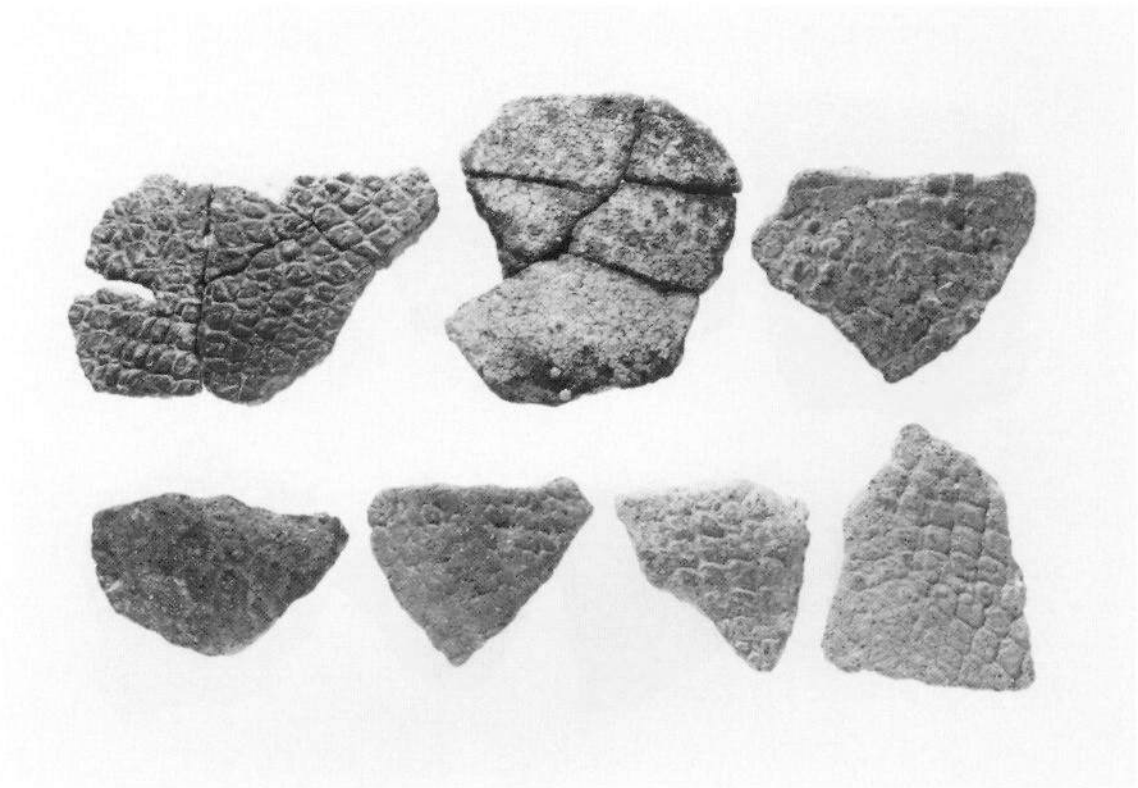
(2)　楕円形押型文土器



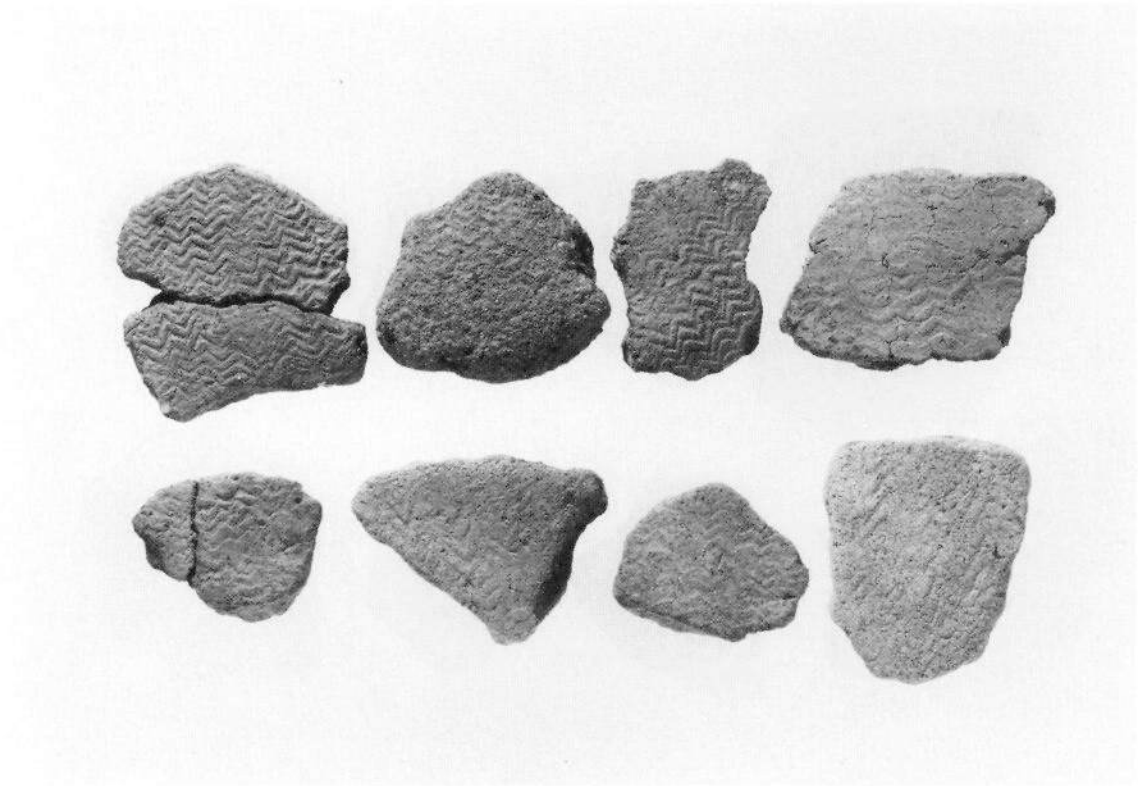
(1)　押型文土器 4 類



(2)　同上裏面

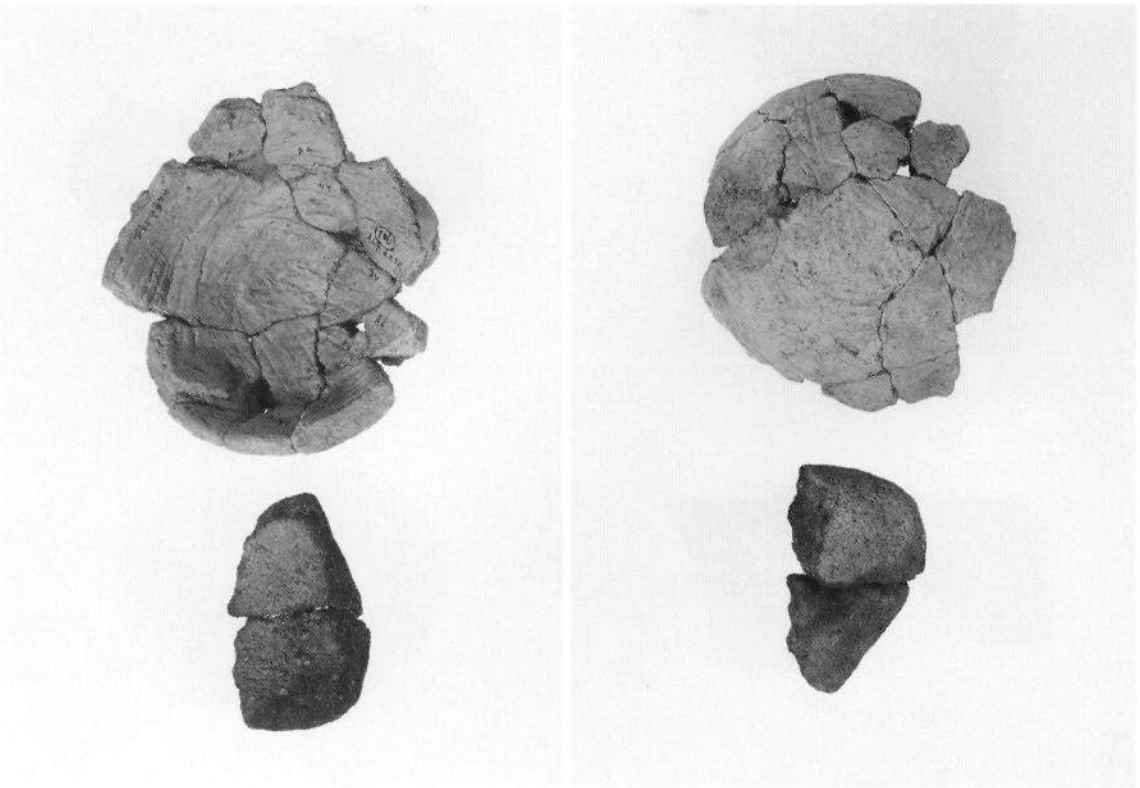


(1)　楕円形押型文土器

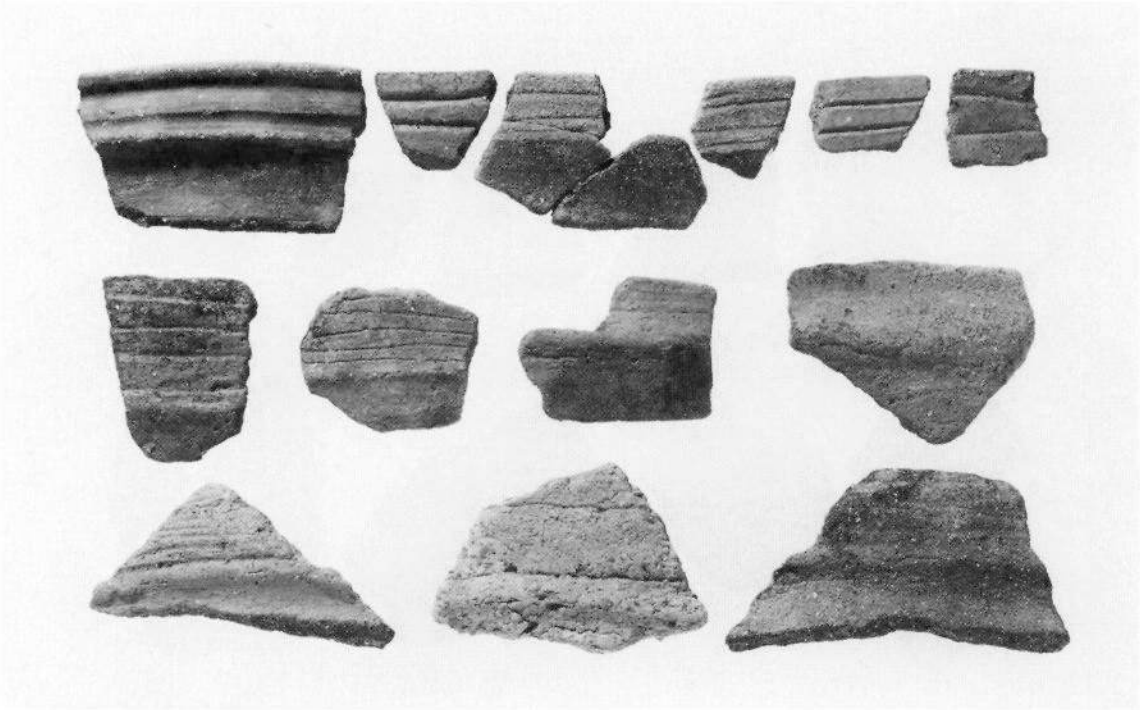


(2)　山形押型文土器

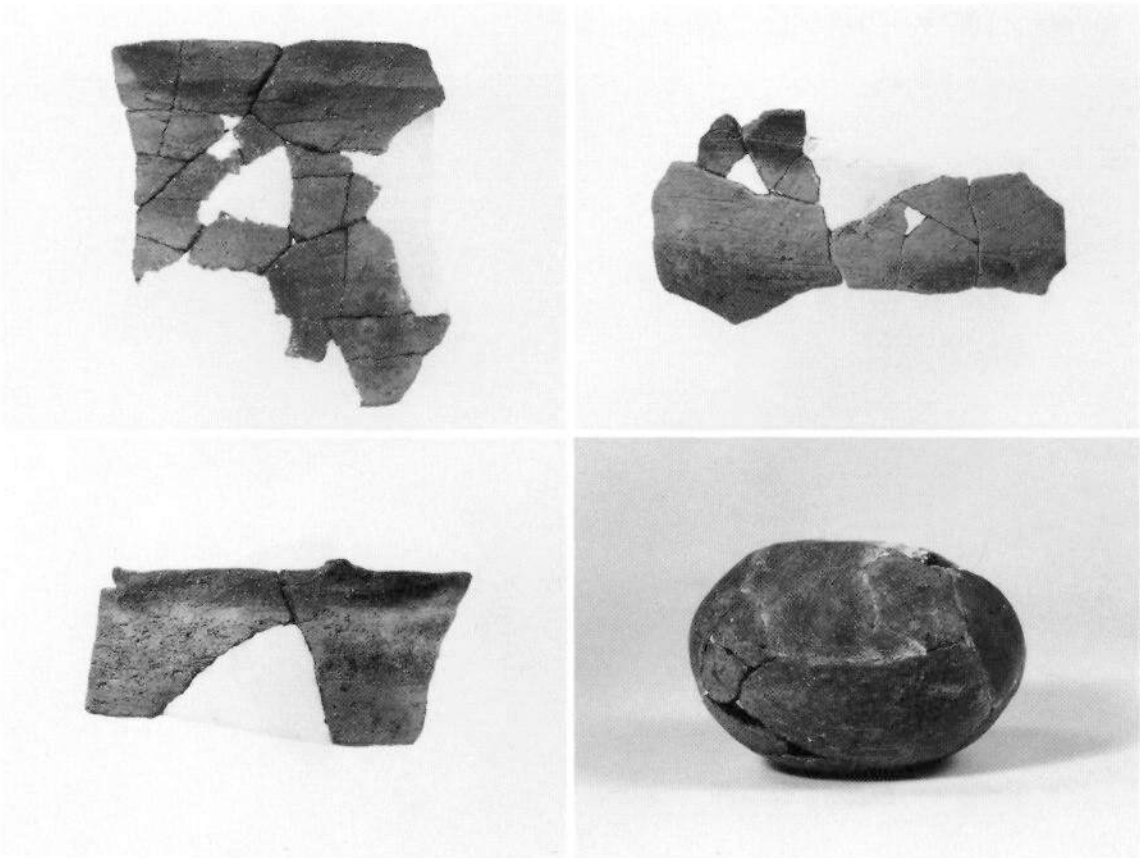
(1) 撚糸文土器，格子目押型文土器，山形押型文土器



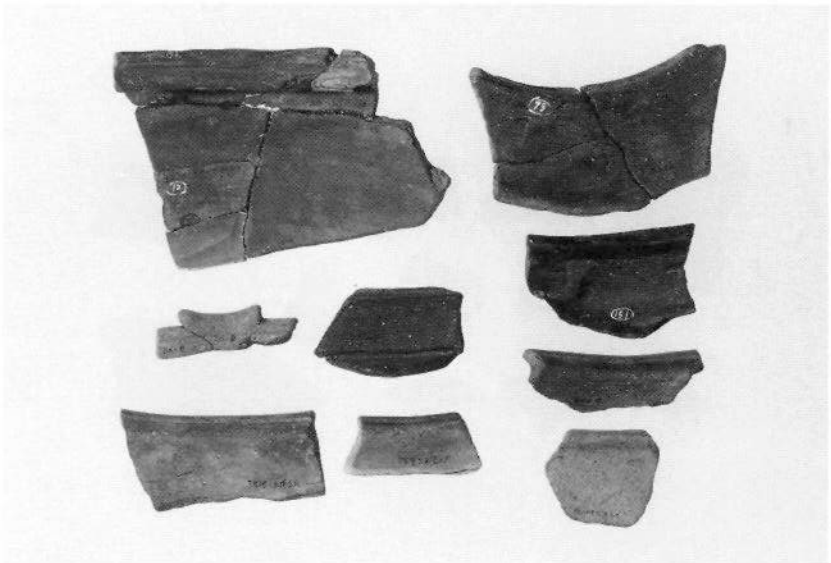
(2) 無文尖底，条痕文土器底部（上：内面，下：外面）



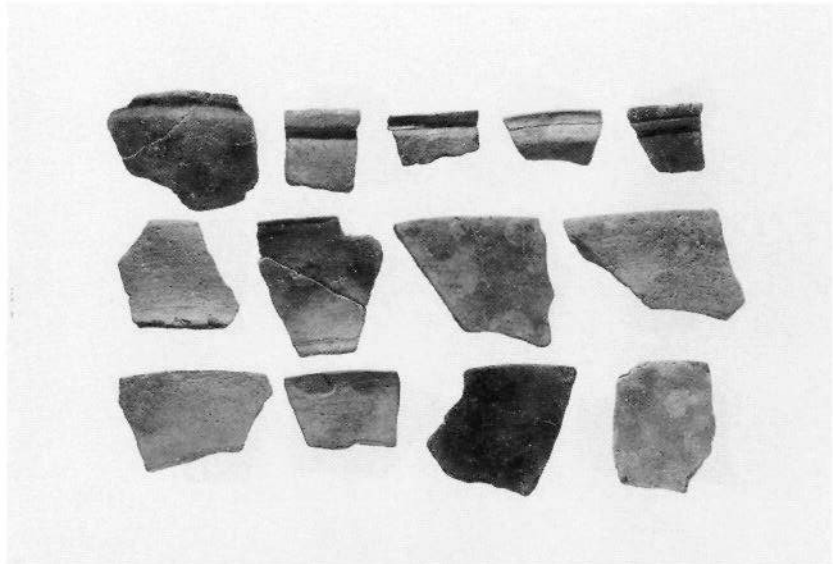
(1) 晩期前葉浅鉢・深鉢

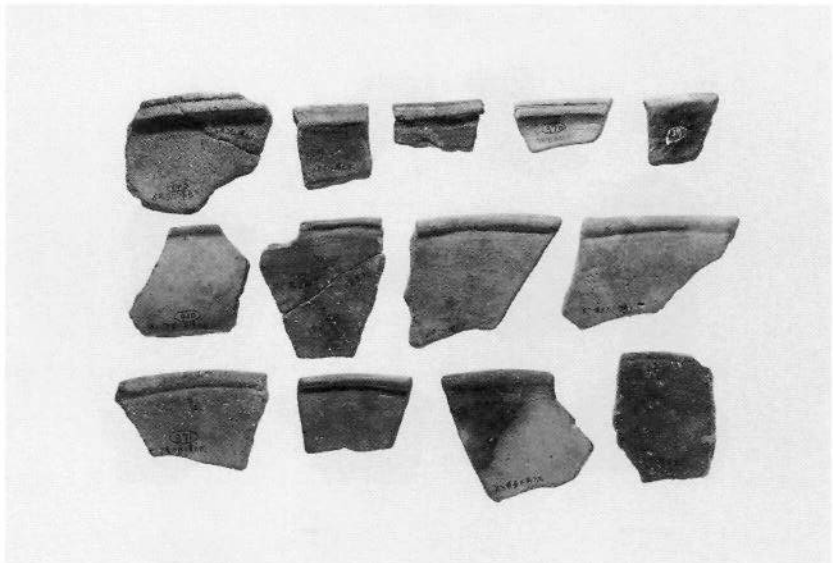


(2) 晩期精製深鉢，粗製深鉢，小壺

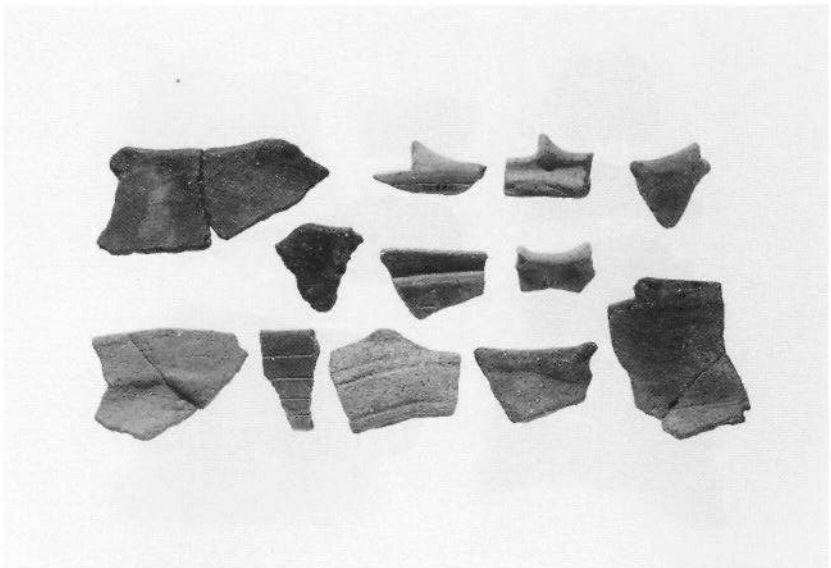


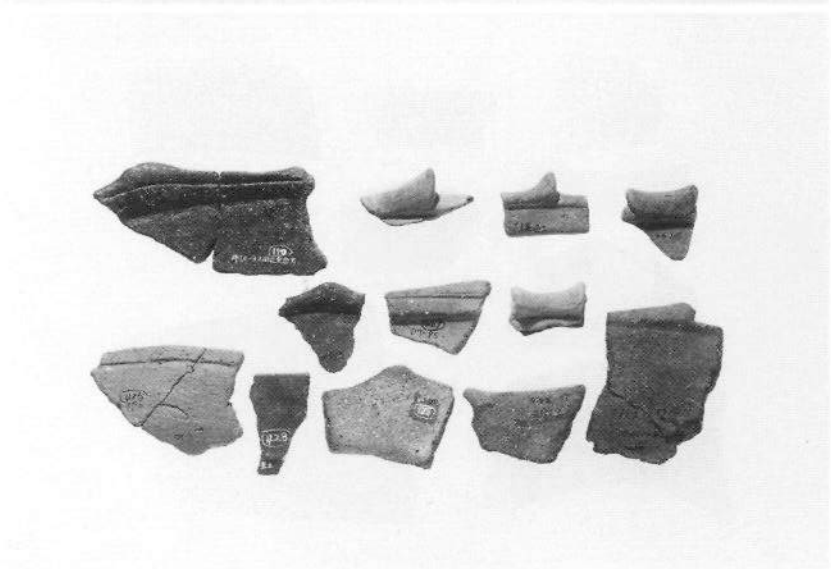
(2)　上：晩期精製浅鉢（外面）　　下：同（内面）



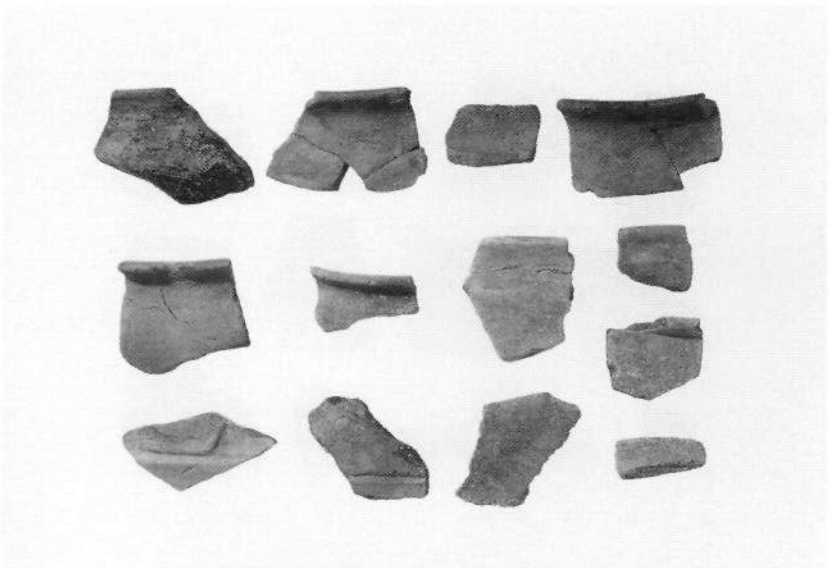


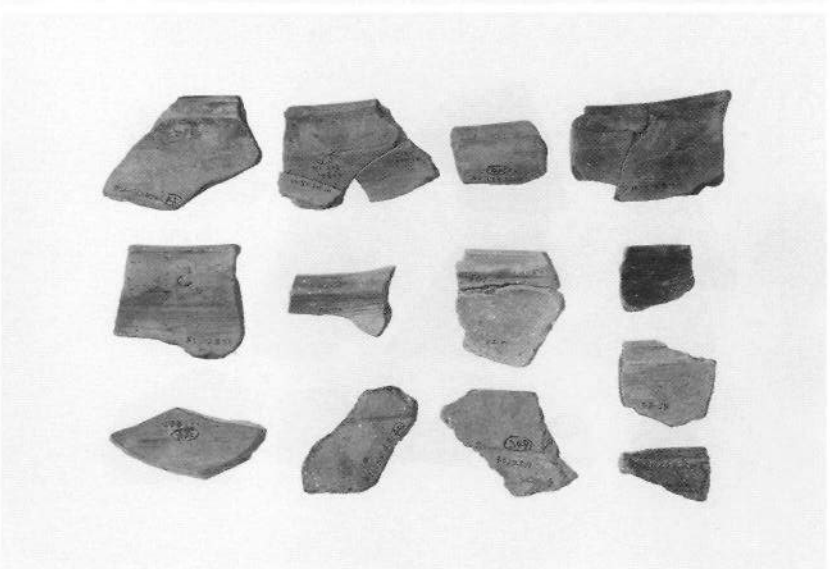
(1)　上：晩期精浅鉢（外面）　　下：同（内面）



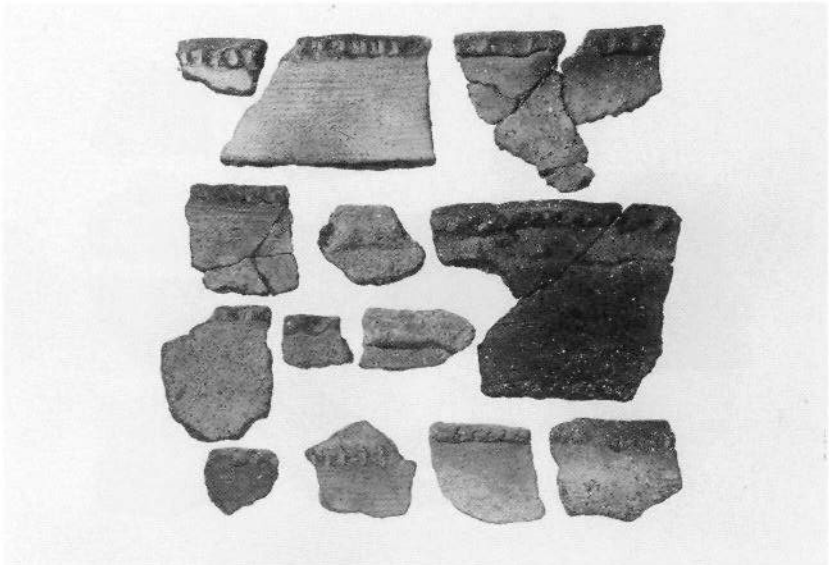


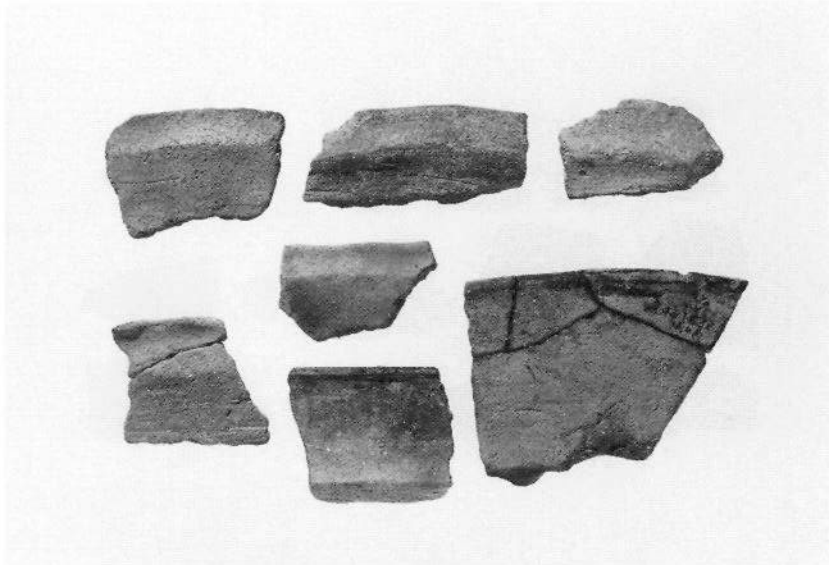
(2)　上：晩期精製浅鉢（外面）　　下：同（内面）

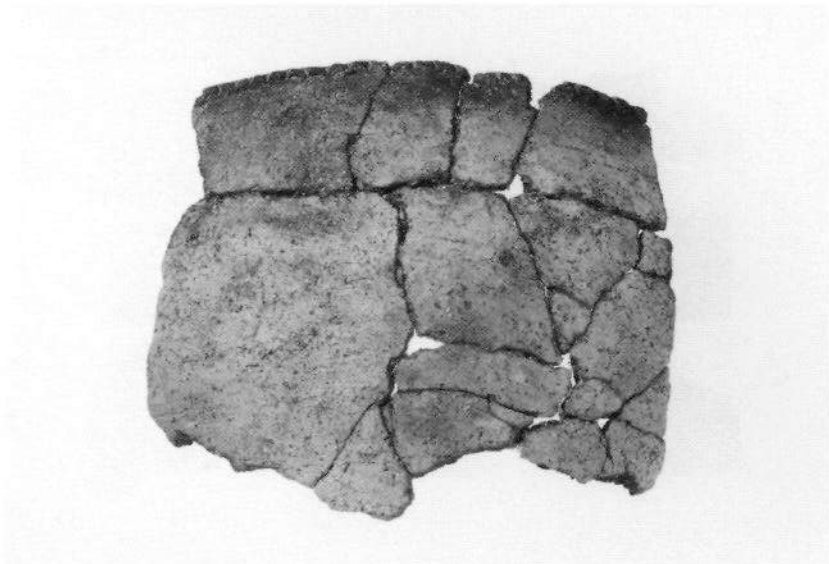


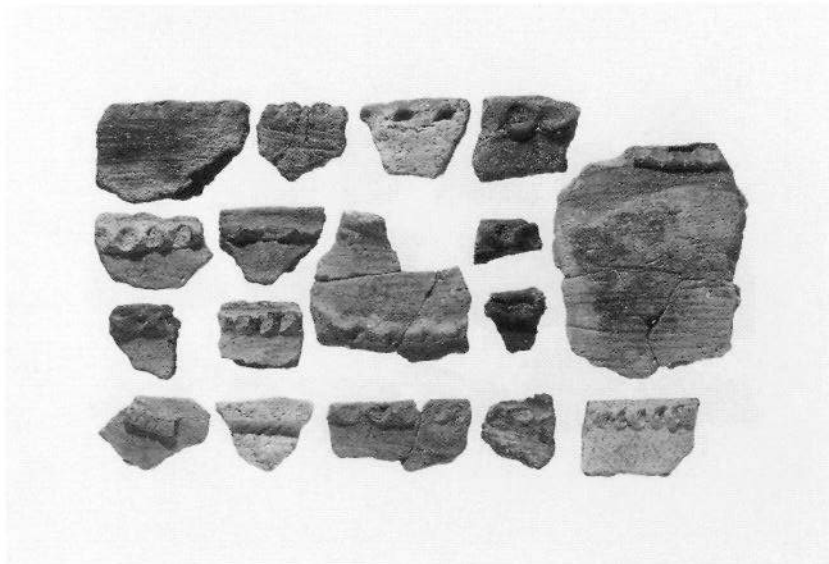


(1)　上：晩期精製浅鉢（外面）　　下：同（内面）



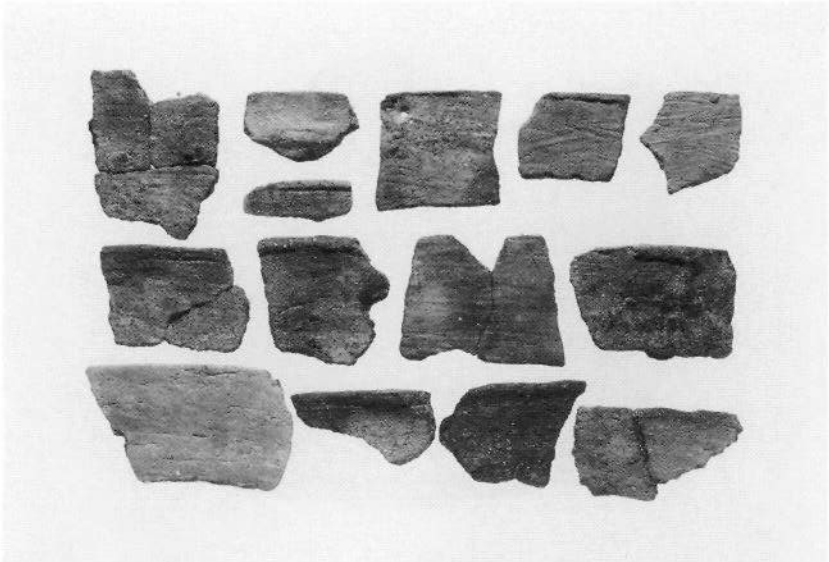


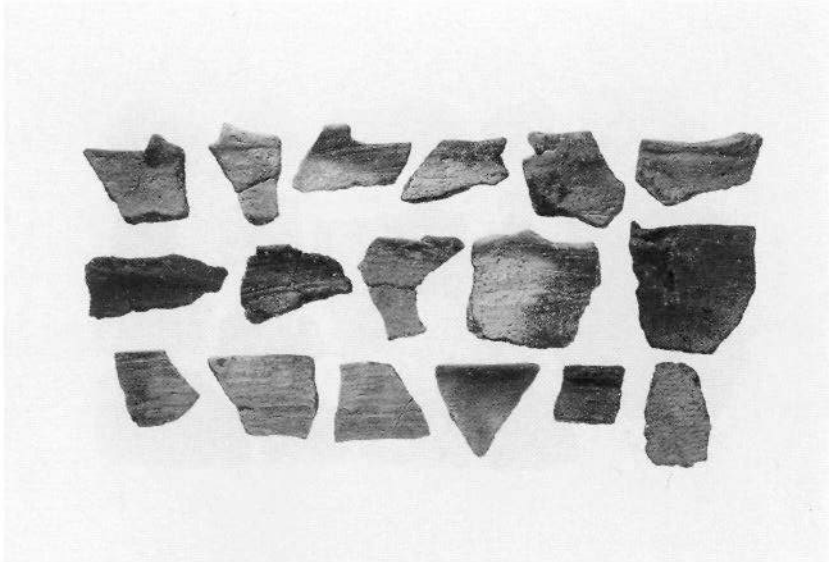


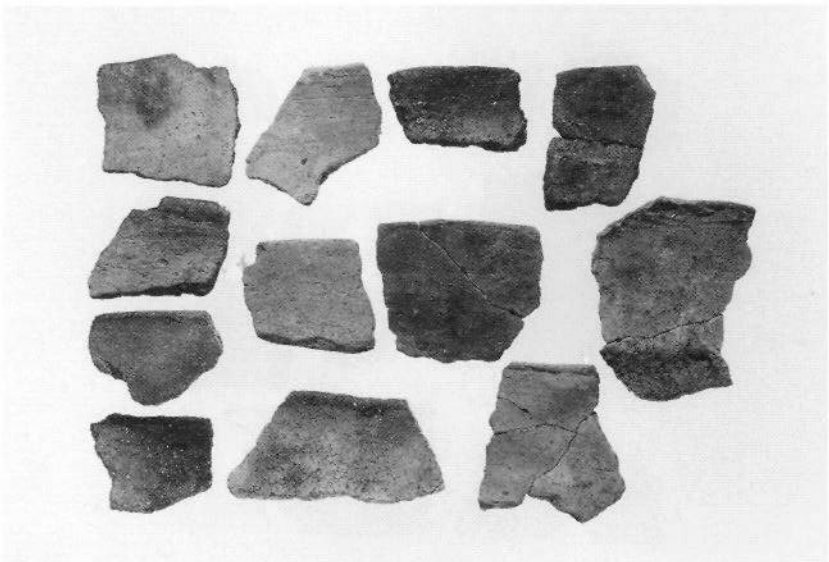


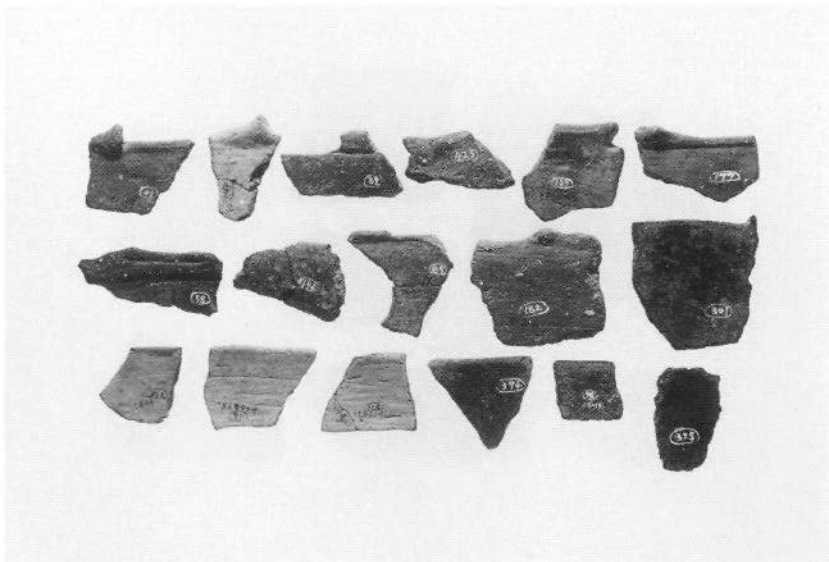
(2)　上：刻目凸帯文土器　　下：D 8 出土刻目凸帯文土器

(1)　上：高杯・鉢　　下：刻目凸帯文土器



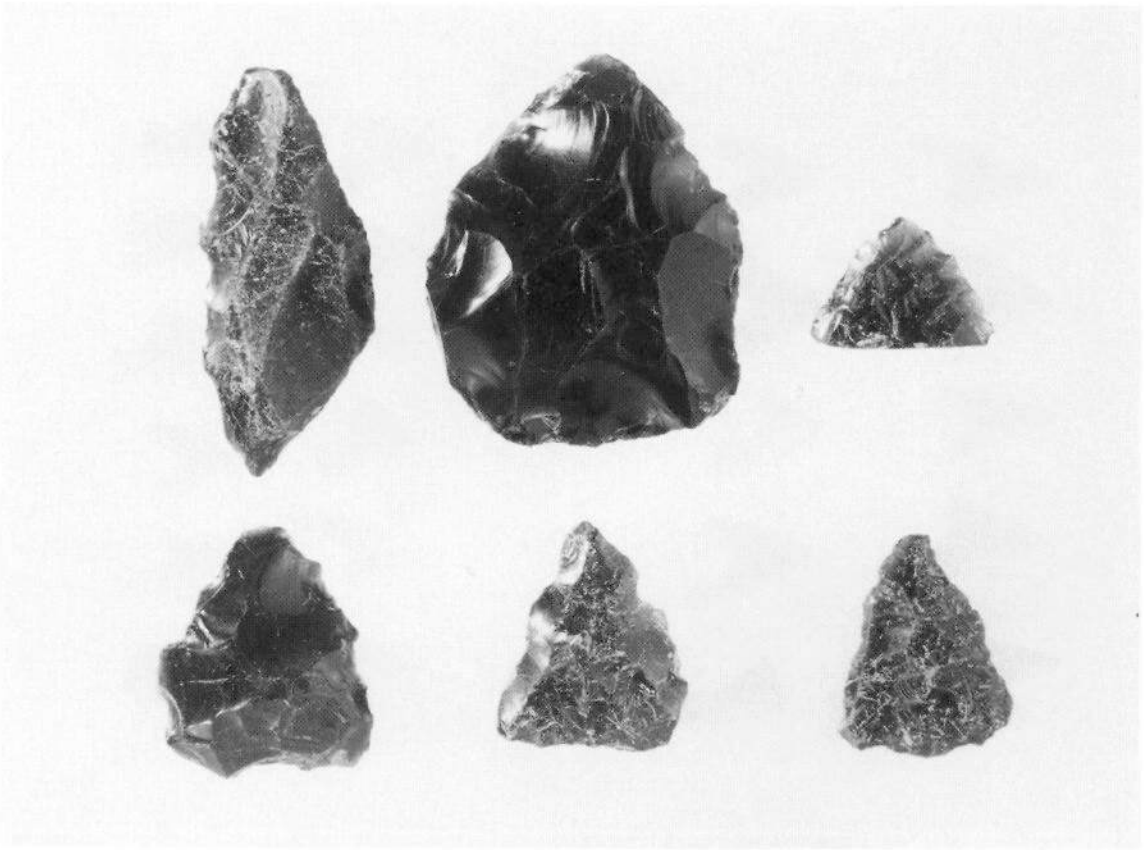




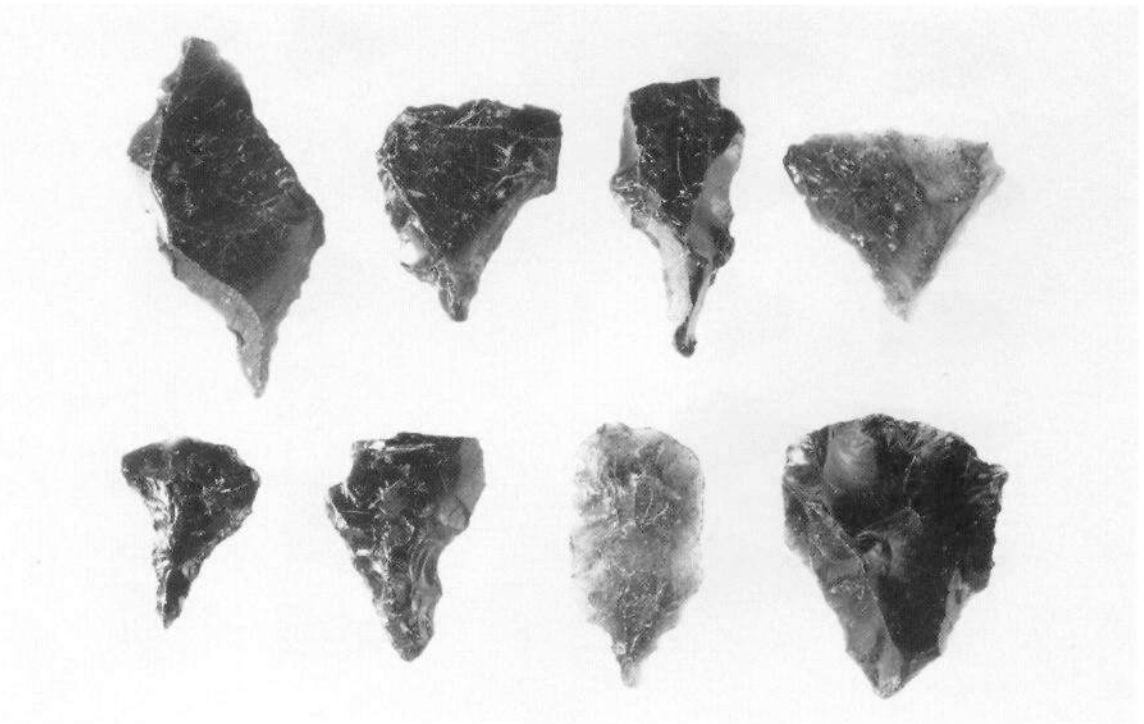


(2)　上：粗製深鉢　　下：粗製深鉢

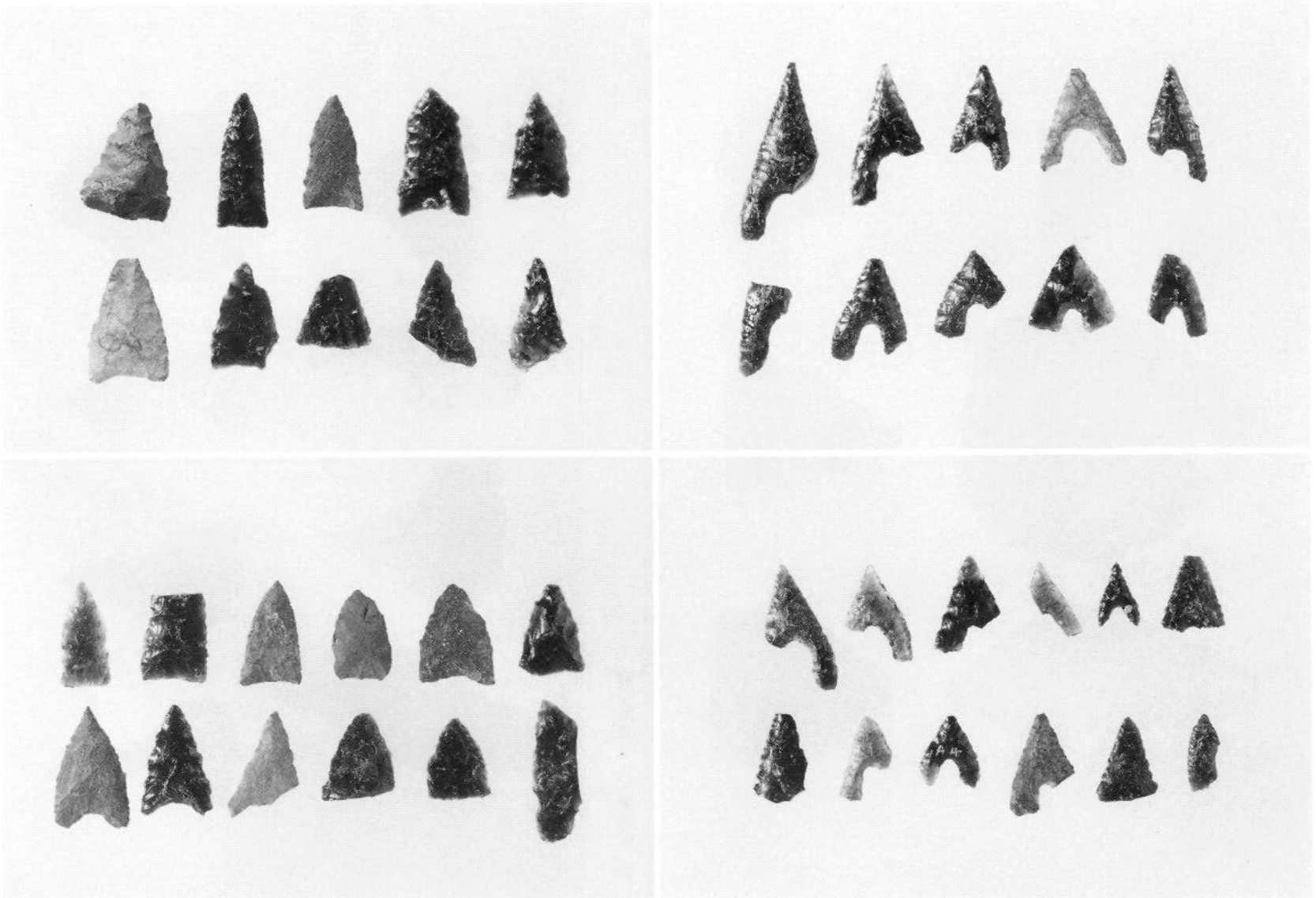
(1)　上：粗製深鉢（外面）　　下：同（内面）



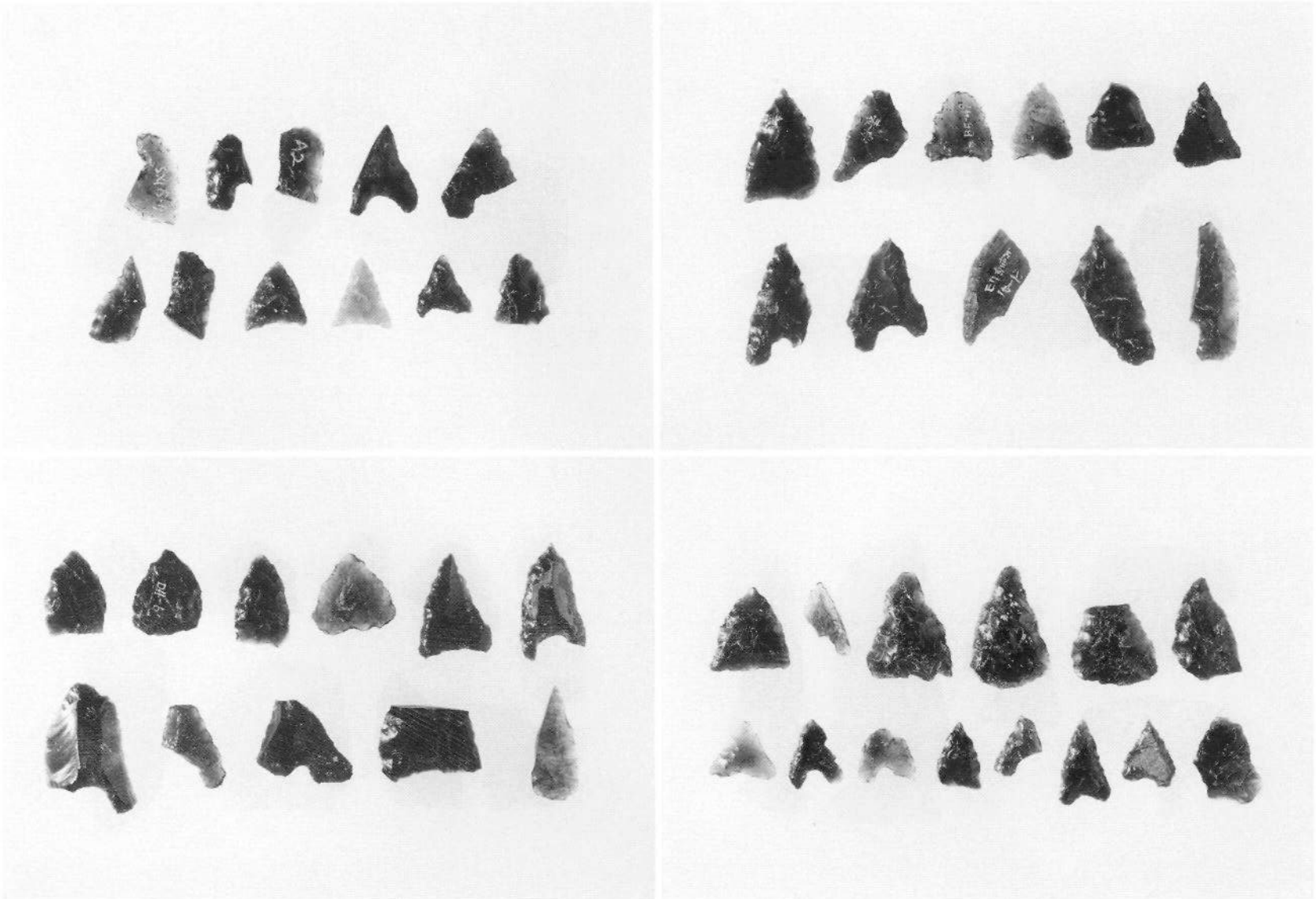
(1) 尖頭器・尖頭器状石器



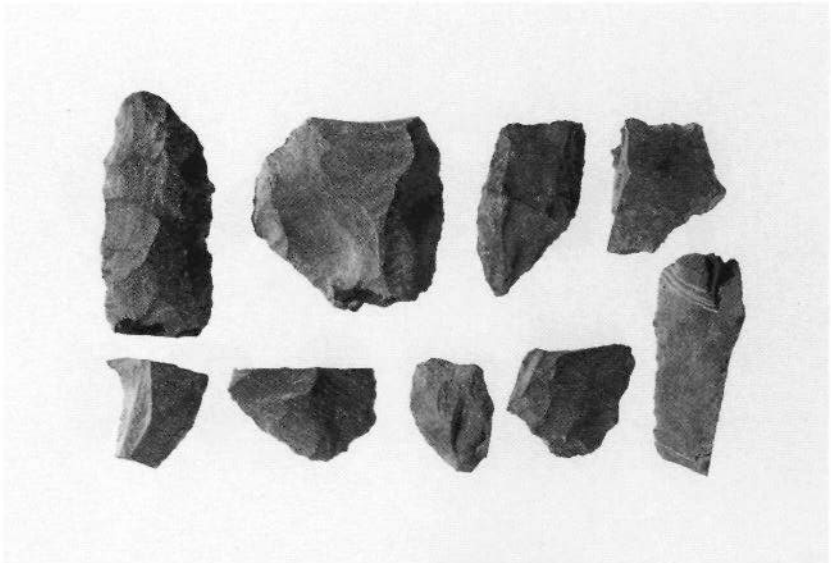
(2) 打製石錐

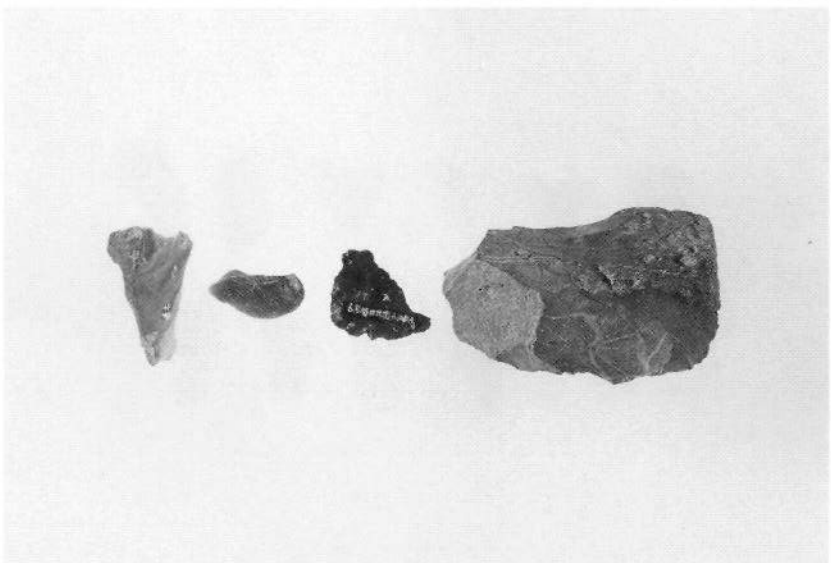


打製石鏃

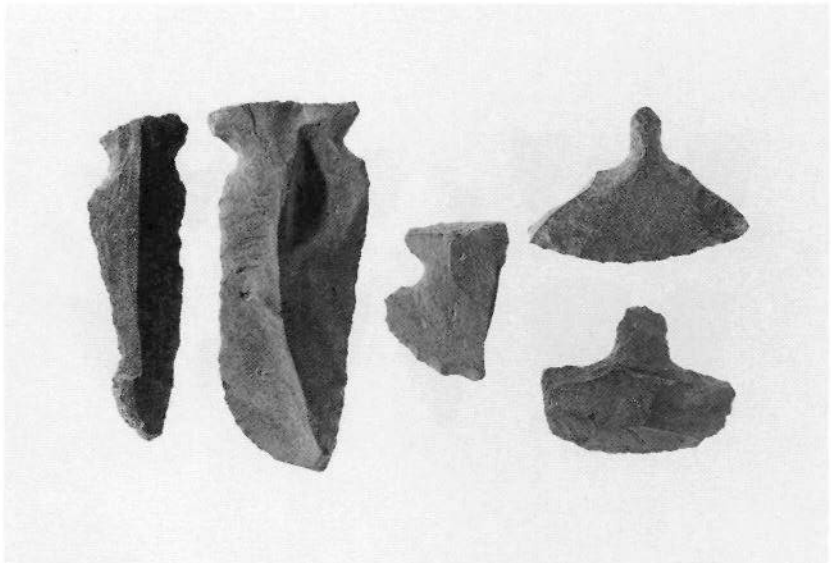


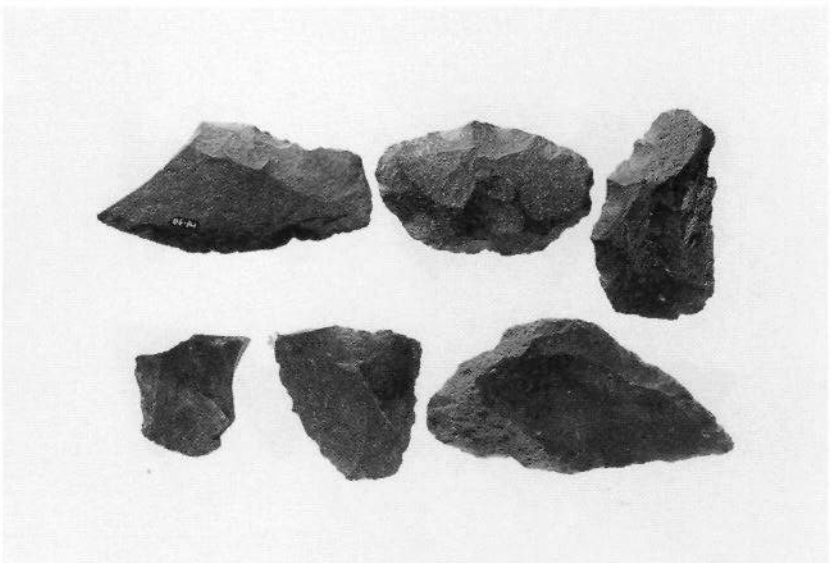
打製石鏃





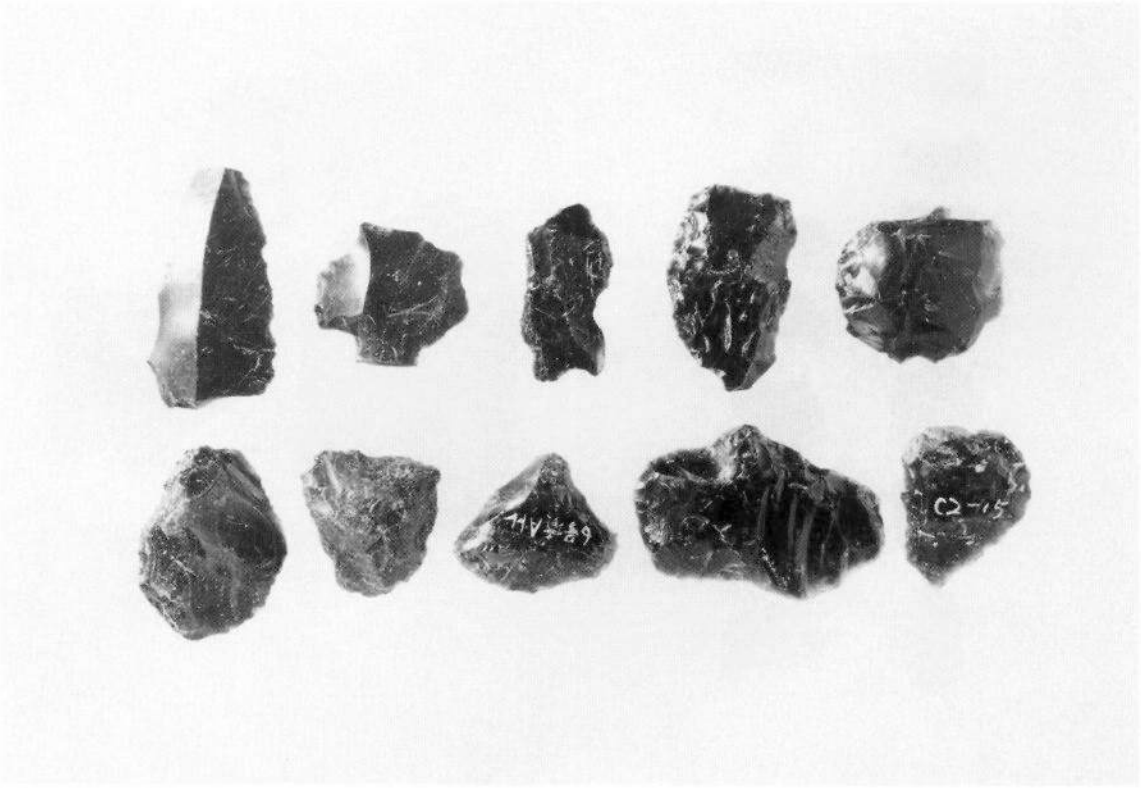
(2) 上：安山岩スクレイパー　　下：スクレイパー類



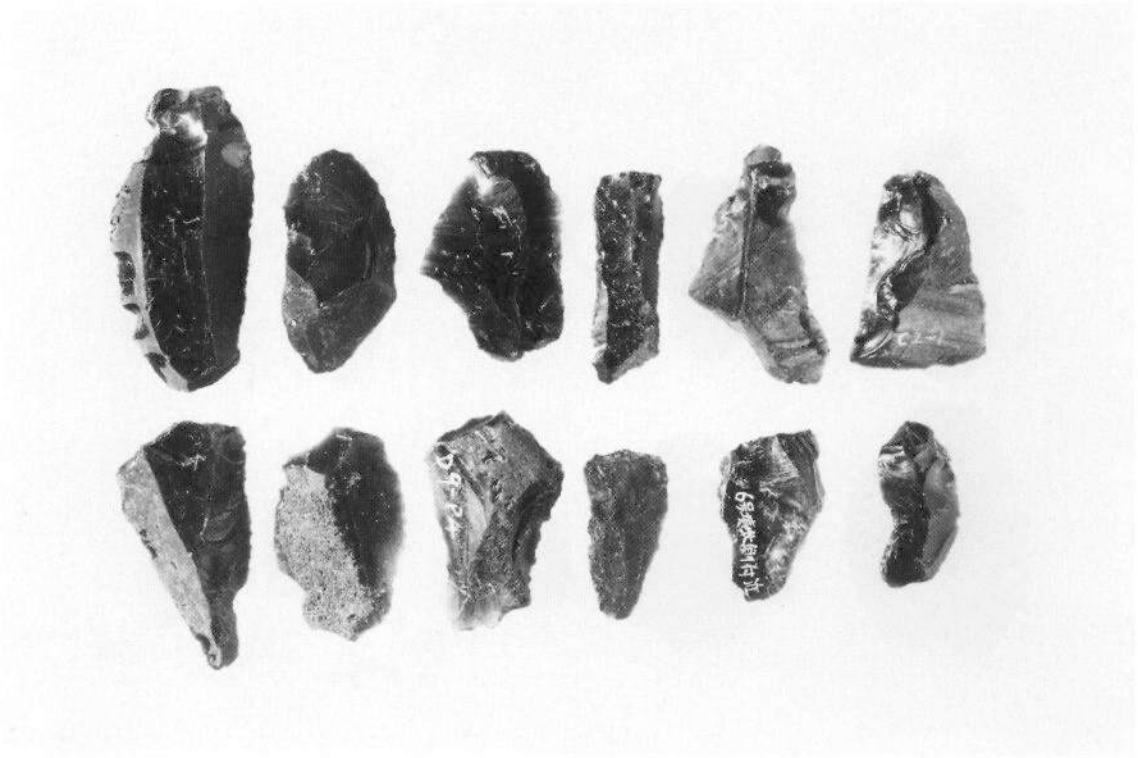


(1) 上：石匙　　下：安山岩スクレイパー

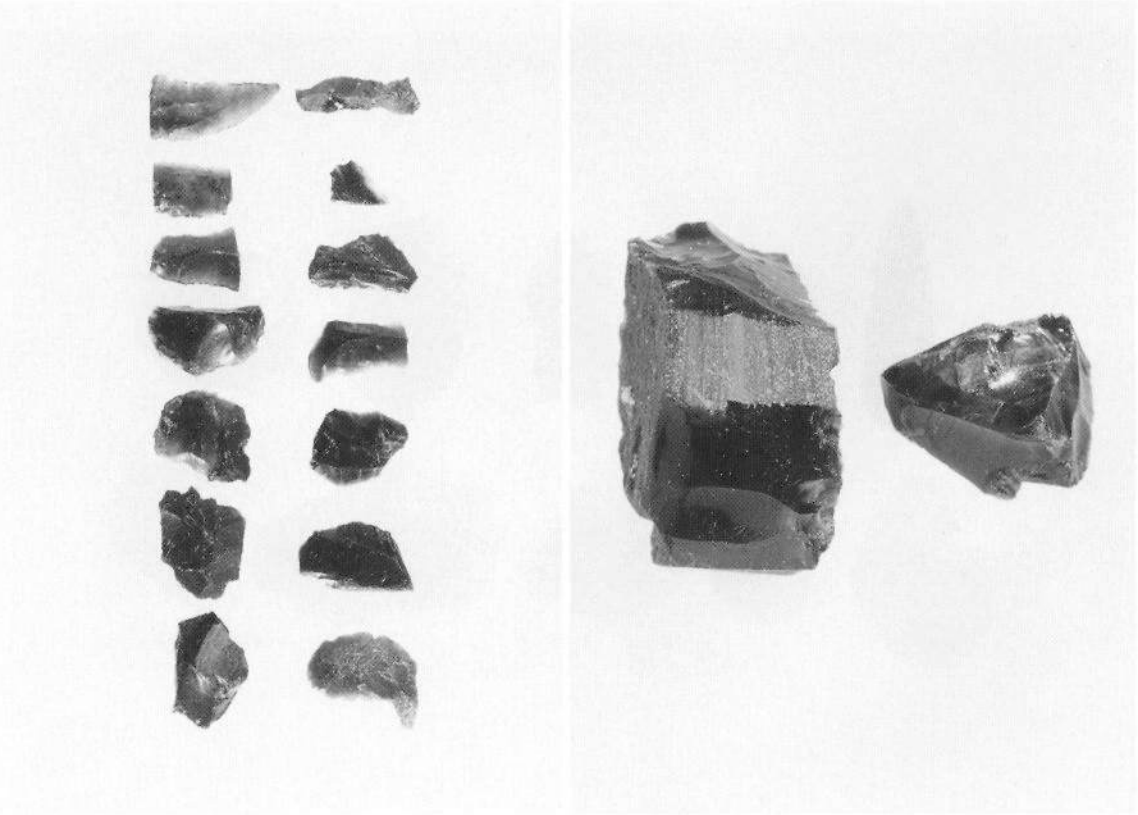
(1)　黒曜石製小型スクレイパー類



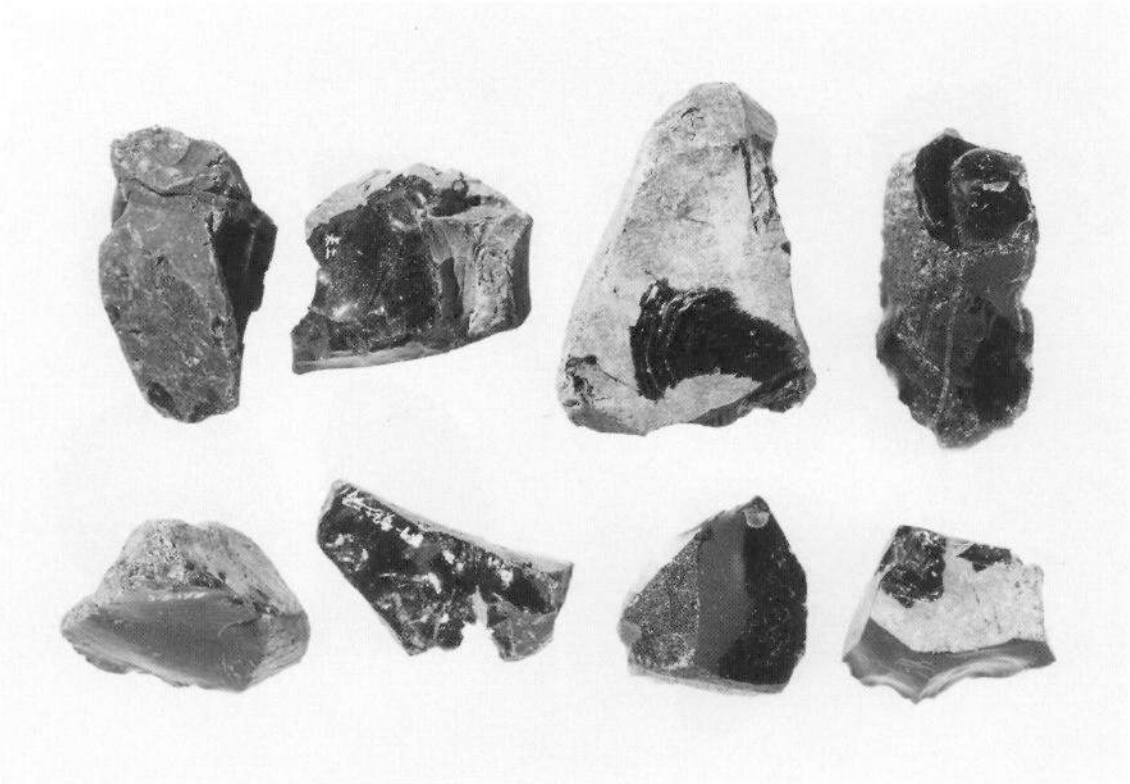
(2)　黒曜石製つまみ形石器・小型スクレイパー



(1)　黒曜石使用剥片

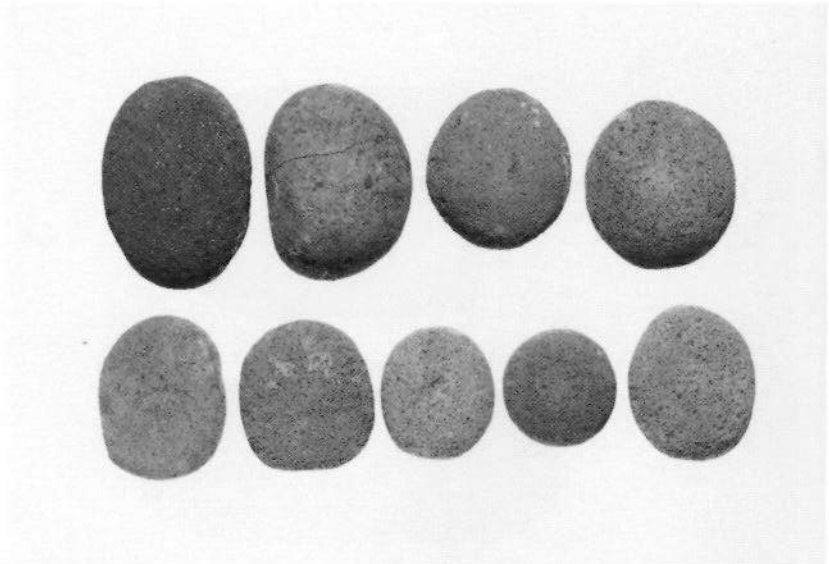


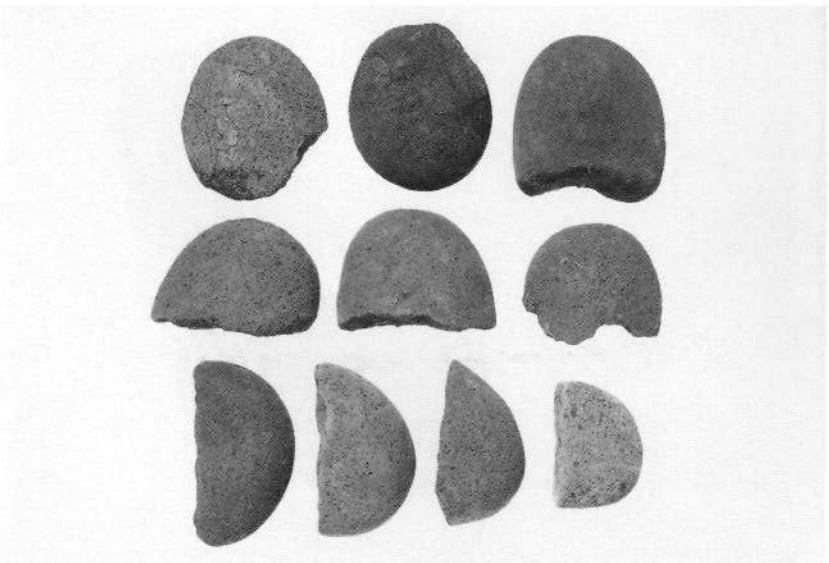
(2)　上：黒曜石使用剥片　　下：黒曜石石核



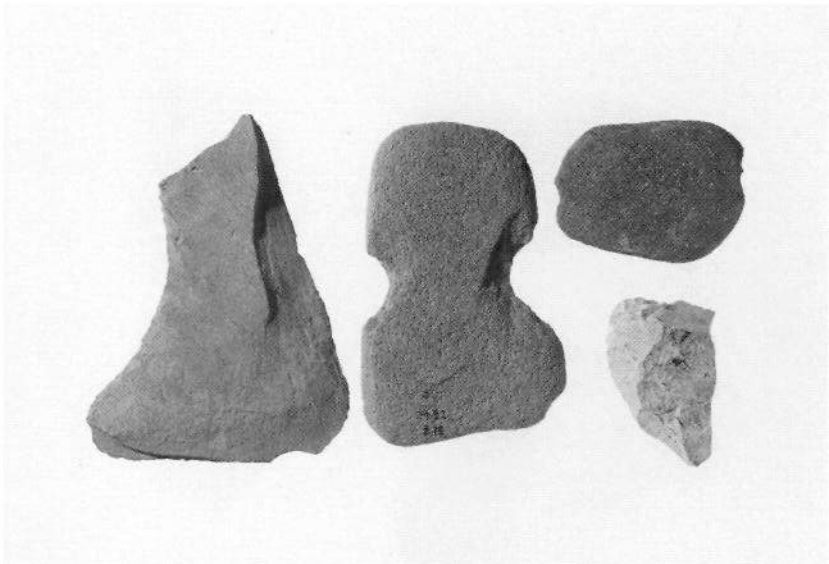
(1) 黒曜石原石

(2) 縄文時代磨製石斧・扁平打製石斧

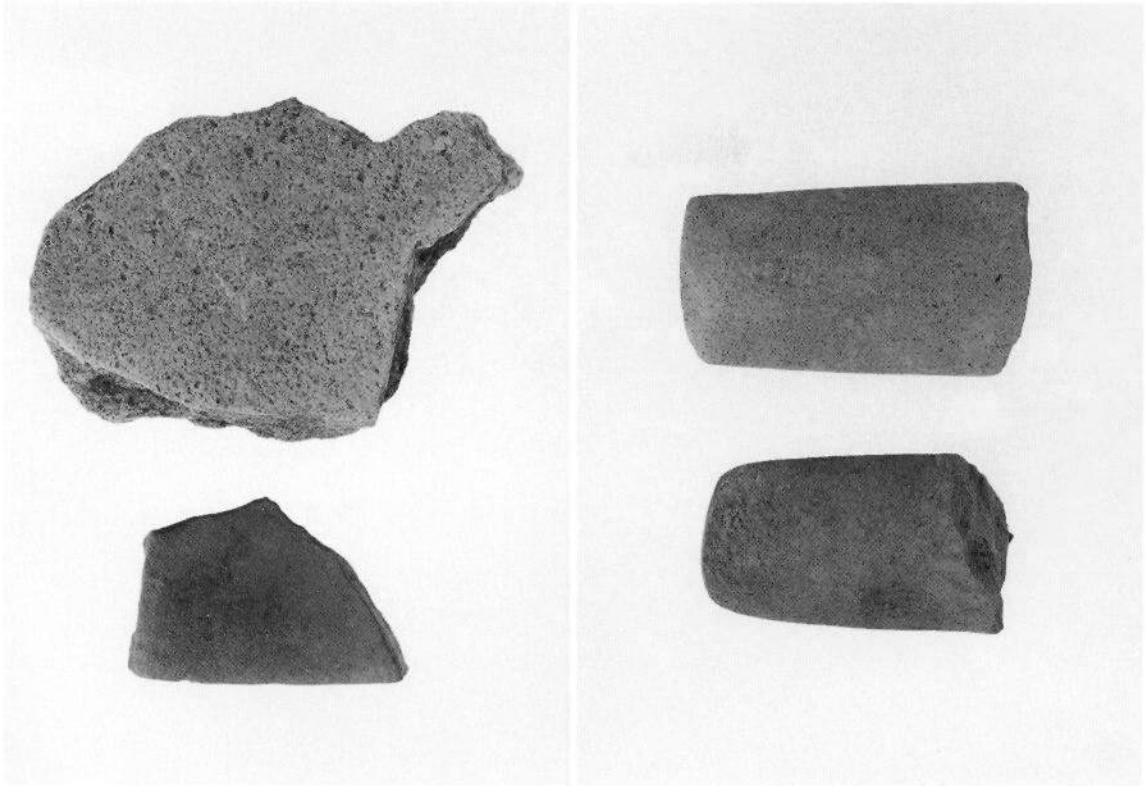




(2) 上：磨石，凹石　　下：磨石



(1) 上：大型スクレイパー，石錘　　下：磨石，球礫



(1)　上：砥石，石皿　　下：弥生時代磨製石斧

(2)　北東隅付近調査状況（東から）

(1) 北半部調査状況（北東から）

(2) 谷底にたたずむ柿原1縄文遺跡（西側尾根上から）

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく 37
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—37—
副書名	甘木市所在　柿原Ⅰ縄文遺跡
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	37
編著者名	中間研志
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812　福岡県福岡市博多区東公園7番7号　　TEL 092—641—2903
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
柿原Ⅰ縄文 （かきばるあいじょうもん）	福岡県甘木市 （ふくおかけんあまぎし） 大字柿原字 （おおあざかきばるあざ） 若山 （わかやま）			33°25′7″	130°41′27″	昭和58年 8月～10月	1,200m²	九州横断 自動車道 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柿原Ⅰ縄文	散布地 集落	縄文早期 縄文晩期 弥生前 ～中期	集石炉　2 土壙　7 竪穴住居跡　4 土壙　5	押型文土器，無文土器 こぶ文土器，石器類 晩期黒川式土器 石器類 弥生土器，磨製石斧	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 6	登録番号 5

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

―37―

平成７年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　株式会社昭和堂印刷

福岡市博多区榎田２―２―52